一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書Ⅱ

大坂上道遺跡Ⅱ
猿額遺跡Ⅱ

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書Ⅱ

大坂上道遺跡Ⅱ
猿額遺跡Ⅱ

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

「一般国道49号揚川改良」は、東蒲原郡阿賀町津川から同町白川に至る全長7.5kmの道路です。一般国道49号は太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路で、磐越自動車道を補完するとともに、国道49号沿線市町村と新潟市を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしています。

このうち阿賀町清川から同町谷花地区に至る区間は、急峻な岩盤斜面が阿賀野川に迫り、通行規制区間に指定されています。これまで様々な対策工事を実施してきましたが、抜本的な対策は困難であり、道路管理にも限界があることから、阿賀野川の左岸を通る別ルートを建設し、危険を回避することになりました。

本書は、「一般国道49号揚川改良」の建設に伴って実施した阿賀町大字西に所在する大坂上道遺跡と猿額遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査の結果、大坂上道遺跡では縄文時代中期初頭から前葉と平安時代の遺構・遺物が検出されました。縄文時代中期初頭から前葉には、この地点が墓域として利用されたことを窺わせる土坑が見つかりました。また、平安時代の住居や建物跡の発見は、昨年度の上野東遺跡に続くものであり、付近から出土した石鈴（巡方）は、阿賀町初の発見例となります。猿額遺跡では、縄文時代前期の遺構・遺物が鹿瀬軽石質砂層に覆われた状態で検出されました。調査の結果、縄文時代前期末葉期の生活の痕跡がそのままの姿で発見されました。

発掘調査で得られたこれらの資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多大なご協力とご理解をいただきました阿賀町教育委員会、並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで格別なご配慮をいただきました国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所・同津川出張所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成20年3月

新潟県教育委員会

教育長　武藤　克己

例　　言

1　本報告書は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字大坂上道西1,827番地ほかに所在する大坂上道遺跡、同じく大字西字猿額中丸1,849番地ほかに所在する猿額遺跡の発掘調査記録である。

2　この調査は、一般国道49号揚川改良の建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。

3　埋文事業団は掘削作業等を株式会社帆苅組に委託して発掘調査を実施した。

4　出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含む観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は県教委に問い合わせ願いたい。

5　遺物の註記は、大坂上道遺跡の略記号「06大サカ」、猿額遺跡の略記号「06サルビ」に出土地点、遺構名、層位等を併記した。

6　今回発掘調査した遺跡は、磐越自動車道の建設に関わり平成4・5年度に発掘調査した大坂上道遺跡・猿額遺跡の範囲拡大と判断されている。同一遺跡・同一名称が原則であるが、本書の記述において区別する必要がある場合には、磐越自動車道建設に関わる大坂上道遺跡・猿額遺跡を「大坂上道遺跡［滝沢ほか1995］」「猿額遺跡［滝沢ほか1995］」と記載した。

7　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

8　本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文・観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。

9　本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また引用文献は、著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

10　観察表は縄文土器、縄文時代の土製品、石器について掲載し、遺構および大坂上道遺跡の古代以降の遺物については省略した。

11　自然科学分析（リン・カルシウム分析）はパリノ・サーヴェイ株式会社に、放射性炭素年代測定は株式会社加速器分析研究所に委託して行い、提出原稿（第Ⅲ章5節・6節、第Ⅳ章5節）は、了解を得て編集した。

12　石器、石製品、礫の石材鑑定は、埋文事業団加藤学が行った。

13　遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セピアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿し印刷した。遺物写真撮影（剥片石器を除く）は、デジタルカメラ（ニコンD70S・ニコンD100）で撮影し、遺構写真とともに、CD化して編集した。剥片石器の写真撮影は、株式会社セピアスに委託した。なお、図版作成・編集作業にあたり、委託業者に提出した資料は、以下のとおりである。

本文・挿図・観察表　：Word形式・Excel形式のデータ、トレース原図、貼り込み版下
遺構図面図版　：DXF形式・PDF形式の測量データ、手取り原図、レイアウト図、文字データ
遺物図面図版　：個別トレース図、拓影、レイアウト図
写真図版　：デジタルデータ、レイアウト図

14　本書の執筆は、寺崎裕助（埋文事業団　調査課長代理）及び佐藤友子（同　班長）の指導のもと、桐原雅史（同主任調査員）、齊藤準（同　嘱託員）、村上章久（株式会社帆苅組埋蔵文化財調査課　調査員）、真壁鈴子（同　補助員）があたり、編集は桐原雅史が担当した。執筆分担は、齊藤準：第Ⅲ章4節A～C・7節A2）・第Ⅳ章4節A～B・6節A、村上章久：第Ⅲ章4節D・E・7節A3）、・第Ⅳ章4節C・6節B、真壁鈴子：第Ⅲ章3節・7節A1）で、これ以外は桐原雅史である。

15　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。

ここに記して厚くお礼を申し上げる。（敬称略　五十音順）

阿部　昭典　　阿部　泰之　　今村　啓爾　　遠藤　佐　　長田　友也　　斉藤　弘道　　佐藤　雅一
菅谷　通保　　清水　克彦　　須原　拓　　高濱　信行　　田中　耕作　　谷藤　保彦　　長沢　展生
中島　栄一　　早瀬　亮介　　古沢　妥史　　前山　精明　　松永　篤知　　山本　暉久　　綿田　弘実

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の経過 …… 2
A　確認調査 …… 2
B　本発掘調査 …… 3

3　調査体制 …… 5
A　確認調査 …… 5
B　本発掘調査 …… 5

4　整理の経過と体制 …… 6

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置 …… 7

2　地理的環境 …… 7

3　鹿瀬軽石質砂層の堆積について …… 8

4　歴史的環境 …… 9

第Ⅲ章　大坂上道遺跡

1　調査の概要 …… 12
A　遺跡の現況と微地形 …… 12
B　グリッドの設定 …… 12

2　基本層序 …… 13

3　遺　　構 …… 14
A　概　　要 …… 14
B　遺構各説 …… 14

4　遺　　物 …… 19
A　概　　要 …… 19
B　縄文土器 …… 19
C　土　製　品 …… 28
D　石　　器 …… 29
E　石　製　品 …… 34
F　古代以降の遺物 …… 36

5　自然科学分析（リン・カルシウム分析） …… 38

6　放射性炭素年代測定 …… 41

7　ま　と　め …… 43

第Ⅳ章　猿額遺跡

1　調査の概要 …… 48
A　遺跡の現況と微地形 …… 48
B　グリッドの設定 …… 48
2　基本層序 …… 50
3　遺　　構 …… 51
A　概　　要 …… 51
B　遺構各説 …… 51
4　遺　　物 …… 55
A　概　　要 …… 55
B　縄文土器 …… 55
C　石　　器 …… 59
5　放射性炭素年代測定 …… 64
6　ま　と　め …… 66

≪要　　約≫ …… 73

≪引用文献≫ …… 74

≪観　察　表≫ …… 77

挿図目次

第1図　一般国道49号揚川改良予定路線図……1
第2図　大坂上遺跡トレンチ配置図 ……2
第3図　猿額遺跡トレンチ配置図……3
第4図　段丘面模式図 ……7
第5図　沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置図 ……8
第6図　大坂上遺跡・猿額遺跡及び周辺の遺跡地図 ……11

大坂上遺遺跡

第7図　大坂上遺遺跡　グリッド設定図 ……12
第8図　小グリッド模式図 ……13
第9図　大坂上遺遺跡の基本層序 ……13
第10図　土器の計測基準及び部位名称……20
第11図　大坂上遺遺跡西区上層出土土器分布図 ……20
第12図　器形分類図 ……21
第13図　大坂上遺遺跡東区上層出土土器分布図 ……21
第14図　大坂上遺遺跡西区石器出土分布図 ……33
第15図　大坂上遺遺跡東区石器出土分布図 ……35
第16図　SK15土器出土状況図 ……43
第17図　県内石鍾出土遺跡位置図及び一覧 ……47

猿額遺跡

第18図　猿額遺跡　グリッド設定図 ……48
第19図　猿額遺跡の基本層序 ……49
第20図　猿額遺跡縄文土器下層（Ⅳ層直下・Ⅴa層）出土分布図 ……56
第21図　猿額遺跡縄文土器下層（Ⅴ層）出土分布図 ……56
第22図　器形分類図 ……57
第23図　猿額遺跡下層（Ⅳ層直下）石器出土分布図 ……61
第24図　新潟県の金魚鉢形土器出土遺跡 ……67
第25図　猿額遺跡下層（Ⅳ層直下）石器出土状況図 ……69
第26図　猿額遺跡旧石器出土分布図 ……70

表 目 次

第 1 表　周辺の主要遺跡一覧 ……10
大坂上道遺跡
第 2 表　大坂上道遺跡　器種別石器出土数 ……29
第 3 表　大坂上道遺跡　土壌理化学分析結果……39
第 4 表　大坂上道遺跡　放射性炭素年代測定結果
……42
猿額遺跡
第 5 表　猿額遺跡　器種別石器出土数……60
第 6 表　猿額遺跡　放射性炭素年代測定結果……65

図 版 目 次

［大坂上道遺跡図面図版］
図版 1　大坂上道遺跡・猿額遺跡の調査範囲と周辺の地形
図版 2　大坂上道遺跡遺構配置図
図版 3　大坂上道遺跡遺構配置図西区（上層）
図版 4　大坂上道遺跡遺構配置図西区（下層）
図版 5　大坂上道遺跡遺構個別図（1）西区（上層）
図版 6　大坂上道遺跡遺構個別図（2）西区（上層）
図版 7　大坂上道遺跡遺構個別図（3）西区（上層）
図版 8　大坂上道遺跡遺構個別図（4）西区（上層・下層）
図版 9　大坂上道遺跡遺構配置図東区（上層）
図版 10　大坂上道遺跡遺構配置図東区（下層）
図版 11　大坂上道遺跡遺構個別図（5）東区（上層）
図版 12　大坂上道遺跡遺構個別図（6）東区（上層・下層）
図版 13　大坂上道遺跡縄文土器（1）
図版 14　大坂上道遺跡縄文土器（2）
図版 15　大坂上道遺跡縄文土器（3）
図版 16　大坂上道遺跡縄文土器（4）
図版 17　大坂上道遺跡縄文土器（5）
図版 18　大坂上道遺跡縄文土器（6）
図版 19　大坂上道遺跡縄文土器（7）
図版 20　大坂上道遺跡縄文土器（8）
図版 21　大坂上道遺跡縄文土器（9）・土製品（1）
図版 22　大坂上道遺跡土製品（2）・古代以降の遺物
図版 23　大坂上道遺跡石器（1）西区（上層）
図版 24　大坂上道遺跡石器（2）西区（上層）
図版 25　大坂上道遺跡石器（3）西区（上層）
図版 26　大坂上道遺跡石器（4）西区（上層）
図版 27　大坂上道遺跡石器（5）西区（上層）
図版 28　大坂上道遺跡石器（6）・石製品　西区（上層・下層）
図版 29　大坂上道遺跡石器（7）　西区（下層）・東区（上層・下層）
［猿額遺跡図面図版］
図版 30　猿額遺跡遺構配置図
図版 31　猿額遺跡遺構配置図上層
図版 32　猿額遺跡遺構配置図下層
図版 33　猿額遺跡遺構配置図下層（Ⅳ層直下）
図版 34　猿額遺跡遺構配置図下層（Ⅴ層）
図版 35　猿額遺跡遺構個別図（1）上層・下層（Ⅳ層直下）
図版 36　猿額遺跡遺構個別図（2）下層（Ⅳ層直下）
図版 37　猿額遺跡遺構個別図（3）下層（Ⅳ層直下・Ⅴ層）
図版 38　猿額遺跡遺構個別図（4）下層（Ⅴ層）
図版 39　猿額遺跡縄文土器（1）
図版 40　猿額遺跡縄文土器（2）
図版 41　猿額遺跡石器（1）上層・下層（Ⅳ層直下）
図版 42　猿額遺跡石器（2）下層（Ⅳ層直下）
図版 43　猿額遺跡石器（3）下層（Ⅳ層直下）
図版 44　猿額遺跡石器（4）下層（Ⅴ層）
図版 45　猿額遺跡石器（5）下層（Ⅴ層）
図版 46　猿額遺跡旧石器　下層（Ⅳ層直下・Ⅴ層）
［大坂上道遺跡写真図版］
図版 47　大坂上道遺跡遠景
図版 48　大坂上道遺跡西区上層完掘、西区上層出土土器
図版 49　大坂上道遺跡西区上層遺構：SK15
図版 50　大坂上道遺跡西区基本層序・上層遺構（1）
図版 51　大坂上道遺跡西区上層遺構（2）
図版 52　大坂上道遺跡西区上層遺構（3）
図版 53　大坂上道遺跡西区上層遺構（4）下層遺構
図版 54　大坂上道遺跡東区上層完掘・基本層序・上層遺構（1）
図版 55　大坂上道遺跡東区上層遺構（2）・下層遺構
図版 56　大坂上道遺跡縄文土器（1）
図版 57　大坂上道遺跡縄文土器（2）
図版 58　大坂上道遺跡縄文土器（3）

図版59　大坂上道遺跡縄文土器（4）
図版60　大坂上道遺跡縄文土器（5）
図版61　大坂上道遺跡縄文土器（6）・縄文時代の土製品・古代以降の遺物
図版62　大坂上道遺跡石器（1）西区（上層）
図版63　大坂上道遺跡石器（2）西区（上層）
図版64　大坂上道遺跡石器（3）西区（上層）
図版65　大坂上道遺跡石器（4）西区（上層）
図版66　大坂上道遺跡石器（5）・石製品西区（上層・下層）
図版67　大坂上道遺跡石器（6）西区（下層）・東区（上層・下層）

［猿額遺跡写真図版］

図版68　猿額遺跡近景
図版69　猿額遺跡完掘・土器集中1001・下層（Ⅳ層直下）出土土器・下層出土石器・下層出土旧石器
図版70　猿額遺跡基本層序・上層遺構
図版71　猿額遺跡下層（Ⅳ層直下）遺構（1）
図版72　猿額遺跡下層（Ⅳ層直下）遺構（2）・下層（Ⅴ層）遺構（1）
図版73　猿額遺跡下層（Ⅴ層）遺構（2）
図版74　猿額遺跡下層（Ⅴ層）遺構（3）
図版75　猿額遺跡下層（Ⅴ層）遺構（4）
図版76　猿額遺跡縄文土器
図版77　猿額遺跡石器（1）上層、下層（Ⅳ層直下）
図版78　猿額遺跡石器（2）下層（Ⅳ層直下）
図版79　猿額遺跡石器（3）下層（Ⅳ層直下）
図版80　猿額遺跡石器（4）下層（Ⅴ層）
図版81　猿額遺跡旧石器時代の石器

第Ⅰ章　序　　説

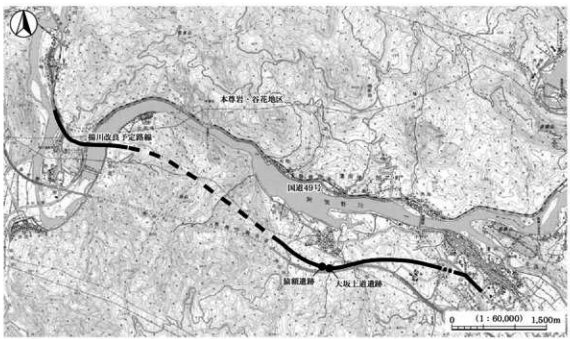
1　調査に至る経緯

「一般国道49号揚川改良（揚川道路）事業」は、阿賀町津川から同町白川に至る全長7.5kmの道路である。一般国道49号は、太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路であり、磐越自動車道を補完するとともに、沿線市町村と新潟市を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしている。このうち、阿賀町清川から同町本尊岩・谷花地区に至る区間は、急峻な岩盤斜面が阿賀野川に迫っており、この渓谷裾部に沿ってJR磐越西線と国道49号が併走している。したがって、国道の線形が悪く、幅員も狭いことに加え、度重なる土砂災害・岩石崩壊及び雪崩の危険に晒され、通行規制区間（連続雨量150mm）に指定されている。

このため国土交通省は落石防止擁壁の設置、岩接着、岩塊除去などの対策工事を実施し、また落石探知センサー・テレビカメラの設置、斜面パトロール点検などの監視体制の強化に努めてきた。しかし、同ルートでの抜本的な対策は困難であり、このような道路管理にも限界があることから、対岸の阿賀野川左岸を通る別線ルートを建設し、危険を回避することとした。

昭和53（1978）年に同事業が事業化され、昭和63年12月には現ルートを２車線に拡幅し供用した。さらに平成12（2000）年度に工事用道路の建設、平成13年に道路用地の確保等に着手した。

これに対応し、阿賀町大字西地区の揚川改良ルート内での遺跡の存在や埋蔵状況を把握するための試掘調査を平成15年度から実施した。試掘調査対象地点は、その範囲の南側の斜面上部に、磐越自動車道建設に関わり本発掘調査が実施された大坂上遺跡・猿頬遺跡が存在し、周知化されていたことから、それ



第１図　一般国道49号揚川改良予定路線図
（国土地理院「津川」1:50,000原図 平成11年発行）

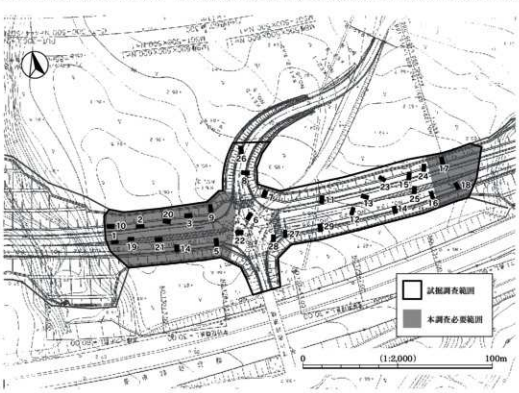
ぞれ大坂上道遺跡隣接地・猿額遺跡隣接地と呼称された。大坂上道遺跡隣接地の確認調査は平成15年7・9月及び平成18年4月、猿額遺跡隣接地の確認調査は平成15年9月、平成17年5月に行った。この結果、両隣接地から縄文時代の遺物が検出され、道路建設に先立って本調査が必要との判断が下された。

両隣接地を含む地区は、平成18年度に工事着工となったことから、同年4月の雪消えと同時に本調査を実施することになった。

2　調査の経過

A 確認調査

大坂上道遺跡　　未買取地を除く面積7,110m^{2}を対象に、平成15年7月1日～4日までの4日間、9月16日・17日の2日間、計6日間行った。現況は山林であったが、立木伐採後のため、重機（バックホー）および人力を併用し調査を行った。第2図のように対象地に29か所のトレンチを設定し、掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査の結果、トレンチ1～5、10、16～21、24で遺物が出土し、特に、トレンチ1ではその周辺の表採を含め22点の土器、10点の剥片石器を、トレンチ2では35点の土器、11点の剥片石器、1点の磨製石斧が出土した。遺物の出土層位は鹿瀬軽石質砂層（基本層序Ⅳ層）より上位で、遺物は縄文時代中期初頭～前葉の土器が中心である。調査対象地周辺の山林は1m以下の間隔で杉を密植しており、根による土層の撹乱が顕著であるため、遺構確認面（前述の鹿瀬軽石質砂層）の状況は良好でなく、明確な遺構は確認されなかった。一方、トレンチ6～8、11～15、23、25～29では遺物が出土せず、その分布状況をまとめると、沢に面した縁辺部によっていることが特徴としてあげられる。この結果、調査対象範囲の東端1,010m^2、西端1,950m^{2}の合計2,960m^{2}を本調査必要範囲とした。遺跡の名称は、立地状況・内容の類似性から、前述の大坂上道遺跡［滝沢ほか1995］の範囲拡

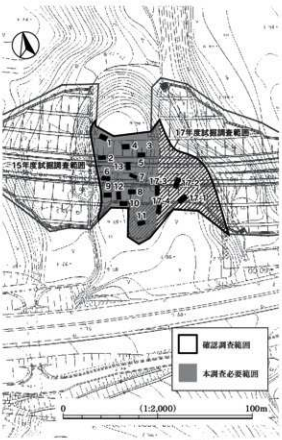


第2図　大坂上道遺跡トレンチ配置図（数字はトレンチ番号、アミは本発掘調査範囲）

大と判断し、同遺跡名を使用した。

猿額遺跡　面積2,765m^{2}を対象に平成15年9月4日・5日、17日～19日までの5日間及び平成17年5月26日の1日、計6日間行った。現況は山林であったが、立木伐採後のため、重機（バックホー）および人力を併用し調査を行った。第3図のように平成15年度は13か所、平成17年度は4か所[1]、合計17か所のトレンチを設定し、掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査の結果、トレンチ4で鹿瀬軽石質砂層（基本層序Ⅳ）を遺構確認面とする土坑1基を検出した。その他のトレンチでは17－3で黒褐色土（基本層序Ⅱ）から遺物が出土した以外、上層の遺構・遺物は検出されなかった。トレンチ1～3、5、10、11、12で鹿瀬軽石質砂層直下の黒褐色土（基本層序Ⅴ：下層）上面から縄文時代前期の遺物が出土した。特にトレンチ11では沢の堆積土から縄文時代前期の遺物が出土し、沢の斜面部にも遺物が崩落している可能性がうかがえた。

この結果、平成15年度試掘対象範囲1,500m^{2}の上下層計3,000m^{2}に平成17年度試掘対象範囲のうちの180m^{2}を加えた合計3,180m^{2}を本調査必要範囲とした。遺跡の名称は立地状況・内容の類似性から、前述の猿額遺跡［滝沢ほか1995］の範囲拡大と判断し、同遺跡名を使用した。



第3図　猿額遺跡トレンチ位置図

B　本発掘調査

大坂上道遺跡と猿額遺跡を含む道路予定地は、既に建設工事が発注されていた。3月28日の現地状況確認では、大坂上道遺跡プレハブ建設予定地に置かれた木材チップの除去が、猿額遺跡では工事用道路及び土捨て場の設置等が懸案になると予想された。そのため、発掘調査開始にむけ国土交通省新潟国道事務所津川出張所と協議していくと共に、調査は大坂上道遺跡から行うこととした。以下、調査日誌から抄録する。

大坂上道遺跡

4月27日　調査を開始する。西区西縁からバックホーで表土を除去し、その後東区に移った。
5月　7日　西区西縁から包含層を掘削する。以後、東側へ掘り進める。
6月　1日　西区西縁から遺構精査に着手する。土坑、竪穴状遺構、ピット、焼土遺構、性格不明遺構を確認し、各遺構の調査に入る。

1）本文および插図における平成17年度調査試掘トレンチ番号は17－1…のように記載する。

6月 2日　0V18グリッドのSK15を甕被葬の墓坑と判断し、調査に入る。
6月19日　高所作業車を使用して西区上層完掘写真を撮影し、その後、遺跡・遺構の測量に入る。東区の東縁から人力による包含層掘削に着手する。
6月21日　東区包含層掘削と並行して、西区下層調査に着手する。0W18グリッドは、上層遺構再確認のため人力による筋掘り、以外はバックホーにより鹿瀬軽石質砂層および下層を掘削し、遺構・遺物を確認した場合には、人力により範囲を拡大して調査する方針で作業を進めた。
6月22日　0V21グリッドで搬入礫を、0W18・0X18グリッドで石器が出土したため、人力による掘削を行った。これらのか所以外に遺構・遺物は確認されなかった。
6月28日　0V21グリッドを精査し、SK1001～SK1003を検出し、調査に入る。
7月10日　東区0Y2グリッドから出土した遺物が石錘（逗方）であることが確認され、阿賀町初の出土事例となった。
7月14日　西区の調査が終了する。
調査面積、上層1,615m^2、下層474m^2。
7月18日　東区を精査し、土坑、竪穴住居、ピット、自然流路を検出し、各遺構の調査に入る。
7月26日　0Z3グリッドのピット群（P58・P59・P61～64）を住居（SB2）と考え、調査に入る。
7月31日　遺構測量の一部を残し上層遺構を掘りあげる。東区上層完掘写真を撮影する。
8月 1日　下層調査に着手する。上層調査中に集石1004を検出していたため、0Y・0Z1～2グリッドは人力で、以外はバックホーで間層・下層を掘削する。遺物・遺構を確認した場合には西区同様の方針で作業を進める。
8月 7日　集石1004以外の遺構は検出できず、その調査に入る。
8月11日　東区下層の遺構・地形測量が終了し、現地調査を終了する。
調査面積　東区：上層763m^2、下層231m^2。大坂上道遺跡合計：上層2,378m^2、下層705m^2。

猿額遺跡

8月 8日　調査範囲の確認のため、刈払いを行う。伐採木が多数あることが判明する。
9月 5日　バックホーで遺跡東側の谷部分から表土除去を開始する。谷部分はベルトを残し地山まで掘削し、遺構・遺物を確認した時点で人力掘削により調査する方針で作業を進める。
9月12日　発掘作業を開始する。土層確認しながら北側より上層を掘削する。
9月29日　0U9・0T9グリッドを精査し、ピット検出し、各遺構の調査に入る。
10月10日　上層の遺構を掘りあげ、ローリングタワーにて上層の全景写真を撮影する。
10月11日　バックホーで上下層の間層となる鹿瀬軽石質砂層の掘削を開始する。
10月16日　下層調査に着手する。下層の遺物は、下層直上の遺物、下層内の遺物に区別して番号を付し、測量して取り上げる方針で作業を進める。
10月26日　下層直上の地形測量を行うと共に、遺構精査に着手する。土坑、焼土、焼土・炭化物集中、炭化物集中、集石、遺物集中域を検出し、各遺構の調査に入る。下層直上遺構が希薄な東西ベルト南側から下層を掘削する。
11月 1日　東西ベルト南側の下層遺構精査を開始する。土坑、ピット群、焼土・炭化物集中を検出し、各遺構の調査を開始する。

11月11日　調査現地にて調査成果を一般公開する。大坂上道遺跡は遺物・遺構写真の展示を行う。見学者60名。

11月23日　ラジコンヘリコプターにて、下層の全景写真を撮影する。

12月　1日　現地調査を終了する。機材、記録類を梱包・搬出し、現地から引き上げる。

調査面積：上層1,680m^2、下層1,680m^2

3　調査体制

A　確認調査

【15年度】

調査期間　大坂上道遺跡：平成15年7月1日～7月4日、9月16日・17日

猿　額　遺　跡：平成15年9月4日・5日、17日～19日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越穣一）

調査受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理	総　　括	黒井　幸一（事務局長）
	管　　理	長谷川二三夫（総務課長）
	庶　　務	高野　正司（　同　班長）
調　　査	調査総括	藤巻　正信（調査課長）
	調査指導	山本　　肇（　同　課長代理）
	調査担当	尾崎　高宏（　同　班長）
	調査職員	田中　一穂（　同　嘱託員）

【17年度】

調査期間　猿額遺跡：平成17年5月26日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

調査受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理	総　　括	波多　俊二（事務局長）
	管　　理	長谷川二三夫（総務課長）
	庶　　務	長谷川　靖（　同　班長）
調　　査	調査総括	藤巻　正信（調査課長）
	調査指導	寺崎　裕助（　同　課長代理）
	調査担当	滝沢　規朗（　同　班長）
	調査職員	斉藤　　準（　同　嘱託員）

B　本発掘調査

調査期間　大坂上道遺跡：平成18年4月27日～8月11日

猿　額　遺　跡：平成18年8月21日～12月1日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

調査受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理	総　　括	波多　俊二（事務局長）
	管　　理	斎藤　　栄（総務課長）
	庶　　務	長谷川　靖（　同　班長）
調　　査	調査総括	藤巻　正信（調査課長）
	調査指導	寺崎　裕助（　同　課長代理）
	調査担当	佐藤　友子（　同　班長） 寺崎　裕助（　同　課長代理　9月～10月）
	調査職員	桐原　雅史（　同　主任調査員）
	支援組織	株式会社帆苅組
	現場代理人	今井　良男（株式会社帆苅組埋蔵文化財調査課　主任）
	調　査　員	村上　章久（株式会社帆苅組埋蔵文化財調査課　調査員） 高田　賢治（　同　調査員）

4　整理の経過と体制

大坂上道遺跡の図面・写真の整理、出土遺物の水洗・注記、接合・復元、実測・拓本および猿額遺跡の出土遺物の水洗・注記は本発掘調査と並行して行った。

12月から支援業者の事務所で、両遺跡の本格的な整理を実施した。整理作業の主な流れは下記のようになり、両遺跡を並行して行った。

大坂上道遺跡

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
図面整理										
水洗・注記										
接合・復元										
実測・拓本										
トレース										
図版作成										
原稿										
編集・校正										

猿額遺跡

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
図面整理										
水洗・注記										
接合・復元										
実測・拓本										
トレース										
図版作成										
遺物写真撮影										
原稿										
編集・校正										

整理期間　大坂上道遺跡：平成18年8月1日～平成19年3月31日

猿　額　遺　跡：平成18年12月4日～平成19年3月31日

整理主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

整理受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理	総　　括	波多　俊二（事務局長）
	管　　理	斎藤　　栄（総務課長）
	庶　　務	長谷川　靖（　同　班長）
整　　理	整理総括	藤巻　正信（調査課長）
	整理指導	寺崎　裕助（　同　課長代理）
	整理担当	佐藤　友子（　同　班長）
	整理職員	桐原　雅史（　同　主任調査員） 斉藤　　準（　同　嘱託員）
	支援組織	株式会社帆苅組
	調　査　員	村上　章久（株式会社帆苅組埋蔵文化財調査課　調査員）
	補　助　員	真壁鈴子・釣巻奈美子・大蔵明美・佐藤直美・高橋イツ子・田中加代子 （以上、株式会社帆苅組埋蔵文化財調査課）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

今回報告する大坂上道遺跡、猿額遺跡の周辺の遺跡としては、揚川改良の工事に伴い昨年度発掘調査を実施した上野東遺跡・現明嶽遺跡、磐越自動車道の建設に伴い発掘調査を実施した大坂上道遺跡（1992・1993年調査）［滝沢ほか1995］・猿額遺跡（1992・1993年調査）［滝沢ほか1995］・中棚遺跡［滝沢ほか1995］、及び北野遺跡［髙橋ほか2003・2005］などがある。特に上野東遺跡は、今回調査した大坂上道遺跡・猿額遺跡から約400m西の段丘上に近接して所在する。したがって本報告の第Ⅱ章遺跡の位置と環境については『一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書Ⅰ 上野東遺跡 現明嶽遺跡』「第Ⅱ章 遺跡の位置と環境」［髙橋ほか2006］を引用し、本文・插図・表を一部改変・加筆して記載する。

1　遺跡の位置

大坂上道遺跡、猿額遺跡は阿賀町に位置する。阿賀町は、東蒲原郡の津川町、三川村、上川村、鹿瀬町の4町村が平成17年4月1日に合併してできた町である。

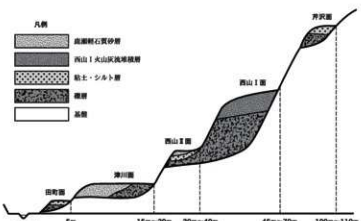
阿賀町は、新潟県の東部に位置し、県都新潟市から東へ磐越自動車道で約35分、一般国道49号では約60分で町の中心部に到達する距離にあり、町の東側は福島県の県境と接している。

町の中央を阿賀野川とその支流の常浪川が流れ、その沿岸の段丘を中心に開けた山間地域である。中心部は比較的平坦だが、周辺は急峻な山岳地帯に囲まれており、北に大きく飯豊山塊が広がり、北西には越後山脈が南北に走っている。総面積952.88km^{2}で、新潟県面積の約6.8％を占める。総世帯数5,306世帯、総人口15,169人である（平成18年3月31日現在、同町H.Pから）。

2　地理的環境

東蒲原郡を含む本県の東部山間部は、朝日山地、飯豊山地、越後山脈、三国山脈などからなる標高2,000m級の高地が主で、この山間部をぬうように、流長約210km、流域面積約7,710km^{2}の阿賀野川が西流し、多くの支流と共に大小の沖積平野を形成している。

大坂上道遺跡、猿額遺跡は津川盆地西縁の阿賀野川左岸に形成された河岸段丘上にある。両遺跡は沢を挟み約70m離れて対峙する。阿賀野川から約650m南、常浪川と阿賀野川との合流地点からは約2km西に位置している。この地域の河岸段丘を形成した阿賀野川との比高差は両遺跡とも38～43m程である。



第4図　段丘面模式図（植柴ほか1976を一部改変）

遺跡付近の段丘は、阿賀野川河床からの比高や段丘堆積物から５面に区分される［二宮 1973］。大坂上道遺跡、猿額遺跡は共に上から３段目の西山Ⅱ段丘面に位置する。段丘面の表層は、いずれも軟質の凝灰岩をはじめとした角礫を多く含む礫層で、層厚は4m 前後である。基盤層は凝灰岩からなる新第三期層である［新潟 1983］。

3　鹿瀬軽石質砂層の堆積について

大坂上道遺跡の縄文時代中期初頭～前葉を主とする包含層（上層）と猿額遺跡の縄文時代前期後葉～末葉の遺物包含層（下層）との間層としてサラサラの黄褐色あるいは黄色の砂質土が堆積していた。この堆積土は基本層序Ⅳ層に該当する。既存の遺跡では上野東遺跡（標高94.0m）で確認されている。

大坂上道遺跡および猿額遺跡の下層の遺物包含層を埋没させたこの砂質土は、福島県大沼郡金山町の沼沢火山の噴出物と考えられる。しかし、通常、火山灰は偏西風の影響から主に火口の東側に飛ばされるため、北西に位置するこれらの遺跡には降灰しにくかったのではないかと考えられることから、噴火に伴う直接的な堆積ではない。

従来同火山灰層は「鹿瀬軽石質砂層」［稲葉ほか 1976］、「沼沢浮石質砂層」［只見川第四紀研究グループ 1966a］などと呼称されていた。本書では同火山灰層が降下火山灰ではなく二次堆積によることを明確に表現したく、「鹿瀬軽石質砂層」に統一して記述する。

鹿瀬軽石質砂層の只見川、阿賀野川による二次堆積の経緯は以下のように考えられている。

① 沼沢火山の噴火によって噴出した大量の軽石・火山灰が、只見川・阿賀野川に沿って流下し、その過程で阿賀野川の谷を埋積させ、堰の役割を果たすことで一時的なダム湖を形成した。

② ダム湖は火山灰で混濁した流水で満たされ段丘面を浸したが、水流は穏やかでそれまでの地表面を流出させなかった。

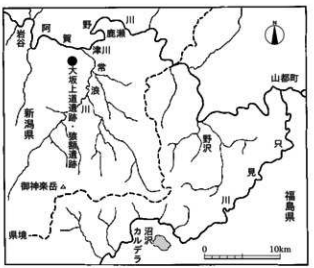
③ ダム湖を満たした湖水に含まれた微細な火山灰が、湖底に沈積することで水平層理の砂質土層が形成される。

④ ダム湖の水が引き、砂質土層が地表面となる。さらに、火山灰流下の過程で幾度となくこの過程が繰り返され、鹿瀬軽石質砂層が形成された［稲葉ほか 1976］。

このように阿賀野川を流下した火山灰の一部は段丘上に砂質土層を形成した。さらに、下流まで流下したものは河口まで到達し、新潟砂丘の形成にも関与することから［坂井 1981］、砂丘形成過程の鍵層として一般的に認識さていれる。

この堰は、鹿瀬軽石質砂層の分布と地形から岩谷より下流の峡谷部でせき止めが起ったと推測［稲葉ほか 1976］されている。

鹿瀬軽石質砂層の堆積年代は、層中から検出された炭化自然木片の放射性炭素年代



第５図　沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置図
（稲葉ほか 1976 を一部改変）

測定法によって得られた値から、4950±100年B.P、5030±100年B.P頃と推定される［只見川第四紀研究グループ1966b］。また、今回調査した猿額遺跡から縄文時代前期末葉の大木6式期の土器が出土しているが、この土器の直上に鹿瀬軽石質砂層が堆積していることから、土器が存在した時期と鹿瀬軽石質砂層が堆積した時期はきわめて近いものであると考える。その他、鹿瀬軽石質砂層に埋没した遺跡としては前述の猿額遺跡 北野遺跡　上野東遺跡・現明嶽遺跡などがあげられる。猿額遺跡では鹿瀬軽石質砂層により埋没した土坑から大木6式期の土器が出土しており、その上層の包含層からも大木6式期の土器が出土している［滝沢ほか1995］。北野遺跡・上野東遺跡・現明嶽遺跡でも鹿瀬軽石質砂層の直下から大木6式古段階の土器が出土している［髙橋ほか2003・2005、髙橋ほか2006］。

また、降下火山灰層（一次堆積層）が確認されている会津高田町鹿島遺跡［丹野・本間1991］、同町下谷ヶ池平B・C遺跡［芳賀・藤谷1986］、同町青宮西遺跡［芳賀ほか1984・1990］、磐梯町と猪苗代町にまたがる法正尻遺跡でも火山灰層直下から大木6式期の土器が出土している［松本ほか1991］。以上の例から沼沢火山が噴火活動を開始したのは大木6式古段階で、その後の二次堆積もほぼ同時代に始まったことが推測できる［髙橋ほか2005、髙橋ほか2006］。

一方、火山活動の終了に関しては明確にし得ないものの、噴火活動の開始から二次堆積の終了までが大木6式期内の比較的短い期間で完結したと考えられ［髙橋ほか2005］、今回発掘調査した大坂上遺跡上層の縄文時代中期初頭～前葉以降、二次堆積で埋没した段丘上でも人間の生活が再開し得たものと考えることができよう。

4　歴史的環境

阿賀町の遺跡分布状況を見ると、その多くは阿賀野川及びその支流によって形成された河岸段丘上に位置している。また、山間部には洞窟遺跡や岩陰遺跡が点在する。

1950年代から60年代にかけて、中村孝三郎らによる小瀬ヶ沢洞窟遺跡（52）・室谷洞窟（57）の発掘調査は、縄文時代草創期の設定という縄文時代の時期区分に画期を与えるものであった。1990年代に入ると、磐越自動車道の建設、常波川ダムの開発に伴って遺跡調査が行われ、旧石器時代から平安時代まで幅広い時代の遺跡が相次いで報告されてきた。さらに、一般国道49号揚川改良事業に伴う調査で、新たな調査成果が期待されている。以下、今回の調査に関連する旧石器時代、縄文時代前期・中期・晩期、古代・中世を中心に概観する。

旧石器時代

これまで、旧石器時代の報告は、1968年に石器が採取された角神A遺跡（6）のみであった。しかし、磐越自動車道建設に伴う発掘調査で、上ノ平遺跡（3）と吉ヶ沢遺跡（2）からナイフ形石器・彫刻刀形石器などの旧石器が検出された。両遺跡とも約15,000年前と13,000年前との二期に大別され、出土した彫刻刀形石器は神山型を基本とする、いわゆる杉久保石器群の範疇に含まれる［沢田ほか1994・2004］。

縄文時代

前　期　磐越自動車道の建設に伴い調査された北野遺跡（41）・猿額遺跡（22）・中棚遺跡（21）および揚川改良の建設に伴い調査された上野東遺跡（20）・現明嶽遺跡（18）などが前期の遺跡として挙げられる。今回調査を行った両遺跡で確認された鹿瀬軽石質砂層は、中棚遺跡を除く前述の遺跡で認められているが、特に上野東遺跡では標高94mの地点で同砂層が確認され、その上限を更新した。また猿額遺跡で

は、前期後葉～末葉の大木５・６式期の土器がまとまって出土した。県内では類例が少なく、阿賀町の歴史を考える上で重要な報告となった［滝沢ほか1995］。

北野遺跡の下層は、鹿瀬軽石質砂層によって覆われていたために前期後葉～末葉の住居跡が良好な状態で保存されていた。竪穴住居の周堤を含め、同砂層に覆われる直前の遺跡・地形が調査報告された［髙橋ほか2003・2005］。

中　期　中期に入ると遺跡数は急激に増加し、原遺跡（14）、古志王遺跡（29）、角嶋岩陰遺跡（15）、磐越自動車道の建設に関わる中棚遺跡・猿額遺跡・大坂上道遺跡（23）・北野遺跡、長者屋敷遺跡（10）、角上遺跡Ｂ（7）、角上遺跡Ｃ（8）、角上遺跡Ｄ（9）、キンカ杉遺跡（43）、大屋敷遺跡（44）、狐窪遺跡（49）、粟瀬Ｂ遺跡（53）などが挙げられる。

中棚遺跡は、検出された遺構・遺物から前期末葉から中期初頭を中心とした遺跡であることが判明した。土器に比して石器が多く、土坑から同一母岩と思われる頁岩の剥片が出土している。石器の製作工程を考える上で注目されている［滝沢ほか1995］。

大坂上道遺跡の出土遺物のうち、中期の土器は北陸系の影響が強いもののほか、関東地方の影響が強いものもある程度確認されている。このような傾向は、県内各地では報告されていない［滝沢ほか1995］。

晩　期　晩期の遺跡も中期・後期と複合しているものが多い。堂田遺跡（1）、長者屋敷遺跡、古志王遺跡などがそれにあたる。それ以外では揚城遺跡（51）が挙げられる。揚城遺跡は、室谷川右岸に北面する丘陵地に位置し、晩期のものと推定される完形の深鉢形土器が出土している［本間ほか1962］。人ヶ谷岩陰遺跡（46）も晩期の遺跡として報告されている。1985年から翌年にかけて新潟大学によって発掘調査され、晩期終末の変形工字文を主文様とする土器が出土した［小野ほか1986］。

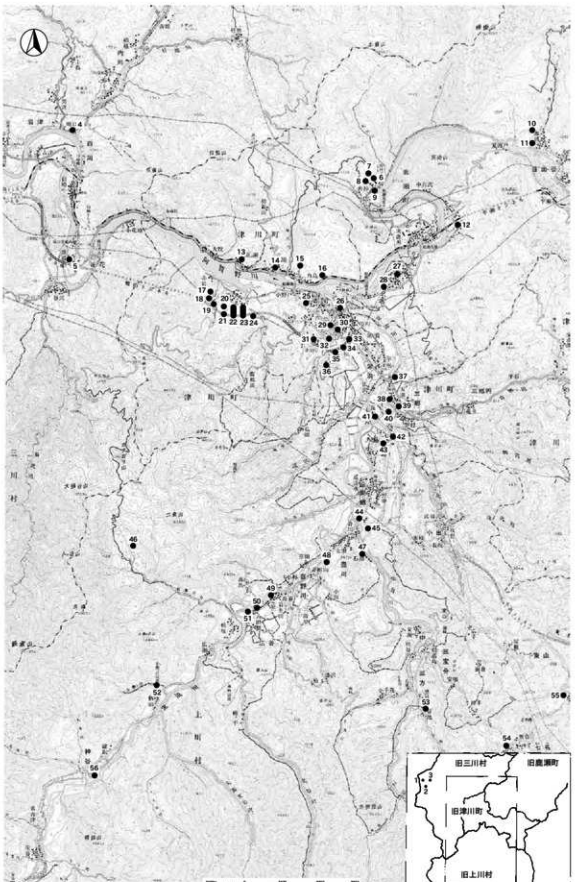
平安時代・中世

この時代になると極端に遺跡数は減少するなか、大坂上道遺跡では平安時代の須恵器・土師器・黒色土器が少量であるが検出された。このうち会津大戸窯産の須恵器が数点確認されている。大戸窯産の須恵器が確認されたのは県内では初例である［滝沢ほか1995］。また、上野東遺跡から平安時代の住居が検出された。今回の調査で、大坂上道遺跡から平安時代の住居・掘立柱建物を検出し、近接する遺物包含層から腰帯石銙（巡方）１点が出土した。腰帯石銙の出土はこの地域では初例である。

北野遺跡上層から中世の建物跡・溝、近世の墓などが検出されているが、当地域では遺跡の数が少ない。県指定史跡となっている津川城跡は、1252（建長４）年に藤倉盛弘により、阿賀野川と常波川の合流点に位置する麒麟山に築かれた山城である。特に会津藩にとって、1627（寛永４）年に江戸幕府の命により取り壊されるまで、越後・会津国境の重要な拠点であった。

No.	遺跡名	時　期	No.	遺跡名	時　期	No.	遺跡名	時　期
1	堂田	縄文（中・後・晩期）	20	上野東	縄文（前・後・晩期）、平安	39	天満	縄文
2	吉ヶ沢	旧石器、縄文（前期）	21	中棚	縄文（前・中期）	40	植田	縄文（中・後・晩期）
3	上ノ平	旧石器、縄文（前・後期）、平安	22	猿額	縄文（草創・前・中期）	41	北野	縄文（早～後期）、平安、中世、近世
4	若宮洞窟	縄文（晩期）、弥生	23	大坂上道	縄文（中・後期）、平安	42	七堀道下	縄文（中・後・晩期）
5	牧ノ沢	縄文（後・晩期）	24	今井野	縄文	43	キンカ杉	縄文（中期）
6	角神Ａ	旧石器	25	小野戸	平安	44	大屋敷	縄文（中・後・晩期）
7	角神Ｂ	縄文	26	上鉄砲町	縄文（中・後期）	45	関後	縄文
8	角神Ｃ	縄文	27	大鹿瀬	縄文（中・後期）	46	人ヶ谷岩陰	縄文（晩期）、弥生
9	角神Ｄ	縄文（中期）	28	麒麟山東方	縄文	47	石畑	縄文
10	長者屋敷	縄文（中・後・晩期）、平安	29	古志王	縄文（中・晩期）	48	山口	縄文
11	中貝	縄文（中期）	30	金鉢清水	縄文	49	狐窪	縄文（中・後・晩期）
12	深戸	縄文（中・後期）	31	上ノ山	縄文・平安	50	八田蟹	縄文
13	太子堂	縄文（後期）	32	羽黒林	縄文	51	揚城	縄文（晩期）
14	原	縄文（中・後・晩期）、弥生	33	中島	縄文	52	小瀬ヶ沢洞窟	縄文（草創・早期）
15	角嶋岩陰	縄文（中・後・晩期）、平安	34	奥田	縄文	53	粟瀬Ｂ	縄文（中・後期）
16	角嶋山	縄文（後期）	35	大舟	縄文	54	谷地	縄文（中・後期）
17	赤岩	縄文（中・後・晩期）	36	エンマ坂	旧石器	55	中山	縄文
18	駒明嶽	縄文（前・後期）	37	古天神	縄文（後・晩期）	56	大谷原	縄文（早・前・中期）
19	上野	縄文（前・後期）	38	高瀬	縄文、奈良、平安	57	室谷洞窟	縄文（草創～晩期）、弥生、平安

第１表　周辺の主要遺跡一覧



第６図　大坂上遺遺跡・猿額遺跡及び周辺の遺跡地図
（国土地理院発行　平成11年「津川」「野沢」平成9年「御神楽岳」平成元年「大日岳」1:50,000原図）

第Ⅲ章　大坂上道遺跡

1　調査の概要

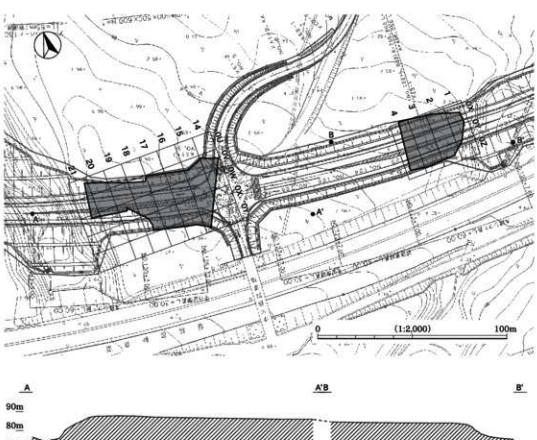
A　遺跡の現況と微地形

大坂上道遺跡は津川盆地の西縁にあたり、阿賀野川左岸の段丘上に所在する。現在、遺跡付近の段丘は東を西ノ沢川に、西は赤岩川に区切られ、長さ1.0kmを測る。この間は開析の結果、5つの山谷となる。本遺跡が所在する段丘も東西の両側が小谷で開析され、奥行き350～400mを測る扇状の段丘面が南から北に向かって広がっている。したがって、南側は徐々に標高を高めながらも段丘が続き、北側は下位の段丘と長さ約250mの段丘崖で区切られる。調査地の標高は83～88mであり、南西から北東に緩やかに傾斜する。

本遺跡の位置する段丘面は、戦後の一時期、開墾により畑地として利用され、昭和30年代以降は杉の植林に切り替わったといわれる。そのため、調査前は密植された杉林で覆われていた。

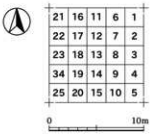
B　グリッドの設定

調査区は、前述のとおり周知の大坂上道遺跡［滝沢ほか1995］の範囲拡大であると判断された。そのた



第7図　大坂上道遺跡グリッド設定図（アミは本発掘調査範囲）

め、大坂上道遺跡のグリッドをもとに、北側に拡大する形で10m方眼の大グリッドを設定した。グリッドの基線は、磐越自動車道の道路法線センター杭に基づいている。STANo.543（X＝186734.327、Y＝82114.826）とSTANo.544（X＝186719.896、Y＝82015.823）を結ぶラインを基線X軸、これに直交するラインを基線Y軸とし、これに基づいてグリッドを設定した。おおよそX軸は東西方向、Y軸は南北方向であるため、X軸に平行するラインを東西ライン、Y軸に平行するラインを南北ラインとした。大グリッドの呼称は、東西ラインでは北から南にむけ算用数字の0とアルファベット大文字のU～Zを組み合わせ、南北ラインでは東から西にむけて算用数字で区分した。両者の組み合わせにより「0Z3」「0V18」のように表示した。



第8図　小グリッド模式図

また、大グリッドの中を2m方眼の小グリッドで区分した。小グリッドには1～25の番号を付し、北東隅を1、南西隅を25となるよう配列した。グリッドは、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、「0Z3－13」「0V18－20」のように表記した。

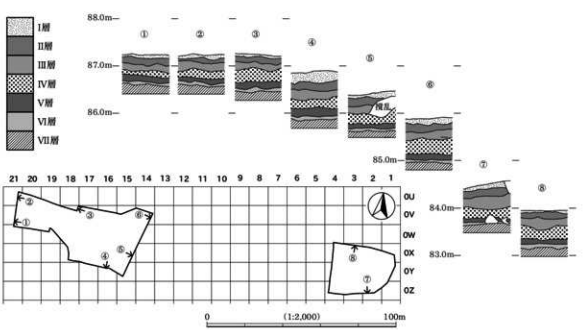
2　基本層序

既述のように本遺跡は阿賀野川左岸の段丘上の平坦地に位置するものの、阿賀野川に向かって南西から北東に緩やかに傾斜する。調査区内はどの地点においても基本層序はほぼ同じであるが、段丘縁部を除き、標高が高くなると鹿瀬軽石質砂層が薄くなり、低くなると厚く堆積する傾向にある。

以下、基本層序Ⅰ～Ⅶ層まで説明する。

Ⅰ層：表土。層厚5～15cmの黒褐色土（10YR2/3）。粘性・しまりともになし。草木根が多く、上層は未分解腐植土となる。

Ⅱ層：層厚5～15cmの暗褐色土（10YR3/4）。粘性はややあるがしまりはない。縄文時代中期以降の遺



第9図　大坂上道遺跡の基本層序

物包含層である。

Ⅲ層：層厚15～25cm、にぶい黄褐色から黄褐色の砂質土（10YR5/4～5/6）。粘性・しまりともになし。Ⅳ層への漸移層である。

Ⅳ層：層厚15～40cm、黄褐色から黄色の砂質土（10YR6/6～2.5Y8/8）。鹿瀬軽石質砂層。福島県金山町沼沢火山に起源を持つ火山灰の二次堆積層。約5,000年前の堆積（第Ⅱ章3参照）とされている。粘性ないが、しまりはある。西区では、標高が高く、かつ、崖際に近づく第19グリッド列より西側は薄く堆積し、標高が低くなる第18グリッド列より東側は厚く堆積する。東区では、崖際の第1グリッド列にむかって堆積が薄くなる。

Ⅴ層：層厚10～15cm、褐灰色から黒褐色の粘土（10YR5/1～2.5Y3/1）。粘性・しまりともにあり。北側にむかって黒味が強くなる。縄文時代前期の遺物包含層であるものの、遺物は少ない。

Ⅵ層：層厚5～10cm、にぶい黄褐色から灰黄色の粘土（10YR5/3～2.5Y6/2）。粘性・しまりともにある。Ⅶ層への漸移層で、2～3cmの小礫を含む。

Ⅶ層：地山。淡黄色から黄色の粘土（2.5Y8/4～8/8）。粘性・しまりともにある。5cm程の風化礫を含む。

大坂上遺跡および猿額遺跡の基本層序は、前回の大坂上遺跡・猿額遺跡［滝沢ほか1995］の層序とほぼ同じである。ただ、Ⅵ層を漸移層、Ⅶ層を地山層とした点にのみ違いがある。

3 遺　構

A 概　要

大坂上遺跡の調査区は西区と東区に分かれ、さらに鹿瀬軽石質砂層（基本層序Ⅳ層）を挟み上層と下層に区別される。上層では縄文時代中期初頭～前葉及び平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）、下層では縄文時代前期末葉以前の遺構・遺物を検出した。遺構の総数は、上層では掘立柱建物（略号SB）2棟・竪穴住居（略号SI）1軒・土坑（略号SK）29基・焼土4基・性格不明遺構（略号SX）2基・ピット（略号P）2基・溝（略号SD）10条（畝状小溝4条・自然流路6条）、下層では性格不明遺構3基・集石遺構1基である。

遺構番号の表記は、遺構種類毎の番号ではなく調査の過程において確認順につけた一連の番号である。掘立柱建物に関しては、別途に番号を付している。なお上層の遺構と下層の遺構を区別するため、下層の遺構については1001からの一連の番号とした。遺構の形態は、平面形態・断面形態共に和泉A遺跡の遺構形態分類に拠った［荒川・加藤1999］。以下、地区・層別に概要を記述する。

B 遺構各説

1）西区上層の遺構

西区上層では、掘立柱建物1棟・土坑23基・焼土4基・性格不明遺構2基・ピット2基・畝状小溝4条・自然流路4条を検出した。うち土坑10基（SK1～10）・畝状小溝4条（SD11～14）は、縄文土器片（3）が出土したSK3を含め、覆土から近世以降の遺構と判断し記述を省略した。遺構の時期は、遺構内出土遺物・覆土・検出層位・周辺出土土器などから縄文時代中期初頭～前葉と推定し、該当しないものはその旨記述した。

掘立柱建物

SB1（図版3・7・53）　0X18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。2間×2間の建物で、長軸

3.3m（P42－P48）、短軸2.25m（P46－P48）、長軸方向はN－8°－Wでほぼ南北を向く。炉跡の検出はない。柱穴は9基検出し、径25～30cm、深さ15～18cmである。周辺では縄文土器の出土が多いが、P40付近で珠洲焼の擂鉢片（225）も出土している。柱穴からの出土土器はなく、時期は不明である。

土　坑

SK15（図版3・5・49）　0V18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は隅丸長方形、断面形は台形状で、長径192cm、短径116cm、深さ24cmである。長軸はほぼ正確に南北を向く。南端で深鉢が2点（1・2）、覆土表面を覆うように出土した。別個体の大型破片が互い違いに並び、人為的な配置と思われる。北東隅では大型の石皿（68）が確認面で出土した。遺物の出土状況から甕被葬の墓坑と推定し、覆土のリン・カルシウム分析を実施したが、有効な結果は得られなかった（第Ⅲ章5参照）。覆土は4層に分けた。1～3層は微量の炭化物粒を含む。土器下の覆土から剥片類1点、チップ1点が出土した。

SK17（図版3・5・50）　0W19グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。東側は調査区外で平面形を欠くが、楕円形と推測する。長径推定110cm、短径90cm、深さ21cm、断面形は台形状である。覆土は2層に分けた。確認面で礫が5点、円形に並んだ状態で出土し、1点は被熱している。他に石鏃未製品1点（2）、チップ2点が出土した。

SK22（図版3・5・50）　0W18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状で、長径79cm、短径62cm、深さ18cmである。覆土は2層に分けた。共に小さな礫を多量に含む。

SK23（図版3・5・50）　0W18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状で、長径66cm、短径52cm、深さ22cmである。覆土は5層に分けた。

SK24（図版3・5・50）　0W18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は台形状で、長径76cm、短径68cm、深さ24cmである。覆土は単層で、Ⅳ層土を多量に含んでいる。

SK25（図版3・5・50）　0W18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は弧状で、長径114cm、短径100cm、深さ19cmである。覆土は単層で、炭化物を多量に含む。縄文土器（4）が出土した。

SK26（図版3・6・51）　0W18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。西側を欠くが平面形は円形とし、長径推定120cm、短径推定110cm、深さ16cm、断面形は台形状である。覆土は3層に分けた。底面で径30cm、厚さ3cmの円形の焼土層を検出した。板状礫が2点出土し、1点は焼土層直上に横位で、もう一点は直立した状態であった。

SK29（図版3・6・51）　0W18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は台形状で、長径112cm、短径104cm、深さ54cmである。覆土は7層に分けた。

SK32（図版3・6・51）　0V18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は半円状で、長径48cm、短径46cm、深さ19cmである。覆土は2層に分けた。共にⅣ層土を多量に含む。

SK33（図版3・6・51）　0V16グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は台形状で、長径70cm、短径67cm、深さ38cmである。覆土は4層に分けた。2層以外は炭化物粒を少量含む。

SK34（図版3・6）　0V17グリッドのⅣ層上面で検出した。北側を大きく欠くが平面形は円形と考え、長径推定90cm、短径推定75cm、深さ30cm、断面形は半円状である。覆土は3層に分けた。

SK35（図版3・6・51）　0V16グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は

台形状で、長径64cm、短径57cm、深さ31cmである。覆土は2層に分けけた。1層は炭化物粒を少量含む。

SK49（図版3・6・52）　0X18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。西側は調査区外で平面形を欠くが楕円形と推測する。長径不明、短径80cm、深さ24cm、断面形は台形状である。覆土は4層に分けた。3層にはⅣ層土がブロック状に多量に含まれる。3層から縄文土器（5・6）、チップ3点が出土した。

焼　土

焼土16（図版3・6・52）　0V19グリッドに位置し、Ⅳ上層上面で検出した。平面形は楕円形で、長径286cm、短径198cm、厚さ16cmである。焼土のみの単層で、Ⅳ層土を多量に含んでいる。

焼土28（図版3・6・52）　0V16グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は楕円形で、長径134cm、短径96cm、厚さ9cmである。焼土のみの単層で、黒色土ブロックを多量に含む。

焼土31（図版3・6・52）　0W18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は不整な楕円形で、長径136cm、短径98cm、厚さ6cmである。焼土のみの単層である。

焼土36（図版3・7・52）　0W17グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は楕円形で、長径88cm、短径70cm、厚さ10cmである。焼土のみの単層である。

性格不明遺構

SX18（図版3・7・52）　0V19・20グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は不整な楕円形で、長径190cm、短径112cm、深さ40cmである。断面形は台形状で、東側は浅くテラス状となる。覆土は6層に分けた。この内、1層では炭化物粒が多量に含まれていた。深鉢（17・18）を含め、縄文土器片が出土した。石器は、不定形石器1点（6）、敲磨石類2点（50・51）、剥離片類2点が出土した。出土土器から、ほかの縄文時代の遺構よりやや新しい可能性がある。

SX37（図版3・7・53）　0V17グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形で、長径376cm、短径348cm、深さ28cmである。断面形は弧状で、底面はやや凸凹がある。形状から竪穴住居の可能性も考えたが、炉跡や柱穴は検出できなかった。覆土は5層に分けられ、2～5層ではⅣ層土が多量に含まれる。また、すべての層において微量～少量の炭化物粒が含まれていた。中央底面付近から深鉢（19）がまとまって出土し、ほかの縄文土器片（20・21）も出土している。

ピ　ッ　ト

ピットはP27とP66の2基を検出した。P66はP27とほぼ同じ覆土であり、遺物の出土はなく、ここでは記載を省略する。

P27（図版3・7・53）　0V19グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。西側を欠くが平面形は円形で、径約30cm、深さ29cm、断面形はU字状である。覆土は単層で、縄文土器が出土している。

自然流路

自然流路はいずれもⅢ層を掘り込み、底面はⅣ層の鹿瀬軽石質砂層土を押し流しⅤ～Ⅶ層にまで達する。よって縄文時代中期初頭～前葉以降に形成されたと考える。以下自然流路をSDとし記述する。

SD19（図版3・8・53）　0V15～0Y17グリッドに位置し、蛇行しながら北東－南西方向に延びる。幅約5.4m、深さ40～60cmである。覆土は6層に分けた。ほとんどの層で炭化物粒が見られる。縄文土器（7～14）、石錐1点（3）、不定形石器2点（7・8）、剥片類6点が出土した。

SD20（図版3・8）　0X14～0Y16グリッドに位置し、SD19と平行して延びる。幅約5.6m、深さ

約50cmである。覆土は4層に分けた。どの層も炭化物粒を少量含む。縄文土器（15）が出土した。

SD21（図版3・8）　0Y15グリッドに位置し、SD20に隣接して平行に延びる。幅約3.6m、深さ27cmである。覆土は3層に分けた。どの層も炭化物粒を微量ないし少量含む。

SD30（図版3・8・53）　0W16グリッドに位置し、SD19と繋がる。幅約1.8m、深さ34cmである。覆土は3層に分けた。どの層も炭化物粒を極微量ないし少量含んでいる。縄文土器（16）が出土した。

2）西区下層の遺構

西区下層では、性格不明遺構を3基検出した。この3基は隣接し、いずれも確認面で礫が出土しており、覆土もほぼ同一である。このことから同一時期の類似の遺構である可能性が高い。遺構の中から土器は出土していないが、検出層位から縄文時代前期末葉以前と推測する。

性格不明遺構

SX1001（図版4・8・53）　0V20・21グリッドに位置し、V層で検出した。平面形は円形、断面形は台形状で、長径53cm、短径48cm、深さ13cmである。覆土は単層で、炭化物粒を少量含む。確認面で敲磨石類1点（81）と数点の礫が、覆土内からチップ5点が出土した。

SX1002（図版4・8・53）　0V20グリッドに位置し、V層で検出した。平面形は円形、断面形は浅い台形状で、長径62cm、短径53cm、深さ7cmである。覆土は単層で、炭化物粒を微量に含む。確認面で礫3点、覆土内からチップ2点が出土した。

SX1003（図版4・8・53）　0V21グリッドに位置し、V層で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状で、長径74cm、短径59cm、深さ6cmである。覆土は単層である。確認面で礫1点が出土した。

3）東区上層の遺構

東区上層では、掘立柱建物1棟、竪穴住居1軒、土坑6基、自然流路2条を検出した。うちSB2・SI55・SK52は、出土土器から平安時代9世紀後半～10世紀初頭の所属と推定する。他の遺構は、遺構内出土土器・覆土・検出層位などから縄文時代中期初頭～前葉に所属すると推定し、該当しないものはその旨記述した。

掘立柱建物

SB2（図版9・12・55）　0Z3グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。桁行2間（6.04m）×梁行1間（2.84m）の側柱建物で、面積は約17.15m^{2}である。長軸方向はN－45°－Eで正確に北東－南西を向く。炉跡の検出はない。柱穴は径36～52cm、深さ10cm前後で6基検出した。柱穴からは、P61・64で土師器無台椀（207・208）、P58・59・64で土師器甕片（209・210）が出土した。P58出土の甕片（209）はSI55出土のものと接合した。覆土も含わせて考えるとSB2とSI55は同時期の遺構の可能性がある。

竪穴住居

SI55（図版9・12・55）　0Z3・4グリットのⅣ層上面で検出した。大部分が調査区外にあり規模の詳細は不明だが、検出部分から平面形は方形と考えた。遺構の北西隅の部分では、柱穴と推測する径約20cmのピット1基を検出した。また、半分以上が調査区外だが、検出部分で径55cm、深さ32cm程の土坑1基を検出した。この土坑の覆土には炭化物粒が多量に含まれる。覆土は、遺構内土坑も含めて11層に分けられる。遺物は、平安時代の土師器甕（209）、椀（211）、無台椀（212）、内黒椀、小甕（213）、

褒（214～216）・長甕（217・218）が出土している。また掲載遺物以外にも、1層で土師器椀片・小甕片・甕片、6層で内黒椀片・小甕片・甕片、覆土内で椀片・内黒椀片・小甕片・甕片・長甕片が出土した。

土　　坑

SK50（図版9・11・54）　0X2グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。円形で長径82cm、短径72cm、深さ10cm、断面形は浅い台形状である。覆土は単層で、炭化物粒とⅣ層土を多量に含む。剥片類1点、チップ3点、礫1点が出土している。

SK51（図版9・11・54）　0X2グリッドのⅣ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は浅い台形状で、長径116cm、短径83cm、深さ15cmである。覆土は2層に分けた。1層は炭化物を多量に含む。

SK52（図版9・11）　0Z3グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は弧状で、径94cm、深さ22cmである。覆土は4層に分けた。2層から平安時代の土師器椀片、内黒椀片、甕片、長甕片（219）が出土した。

SK54（図版9・11・54）　0Y2グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は不整な楕円形、断面形は弧状で、長径266cm、短径206cm、深さ16cmである。覆土は単層で、炭化物粒・焼土粒を多量に含む。

SK57（図版9・11・54）　0Y4・0Z4グリッドに位置し、自然流路であるSD56の底面（Ⅴ層）で検出した。平面形は円形、断面形は台形状で、長径101cm、短径88cm、深さ24cmである。覆土は5層に分けた。遺物は出土せず、覆土からも時期の推定は難しい。

SK60（図版9・11・54）　0Y4グリッドに位置し、SK57と同じくSD56の底面（Ⅴ層）で検出した。西側は調査区外で平面形を欠くが、円形か楕円形と思われる。長径不明、短径65cm、深さ16cm、断面形は台形状である。覆土は3層に分けられ、1層は炭化物粒を多量に含む。遺物は出土せず、覆土からも時期の推定は難しい。

自然流路

自然流路は2条検出した。西区と同様、Ⅲ層から落ち込み、Ⅳ層の鹿瀬軽石質砂層土を押し流し、底面はⅤ～Ⅶ層に達する。よって西区の流路跡と同じく縄文時代中期初頭以降に形成されたと考える。

SD53（図版9・11・55）　0X1～0Y2グリッドにかけて、蛇行しながら北東－南西方向に延びる。Ⅲ層で検出した。幅約3.2m、深さ36cmである。覆土は3層に分けた。2層は炭化物粒を多量に含む。

SD56（図版9・11）　0W～0Z4グリッド間を南北に延びる。Ⅳ層上面で検出した。幅約7.4m、深さ40cmである。底面でSK57、SK60を検出したが関連は不明である。覆土は3層に分けた。1層は炭化物粒を多量に含む。縄文土器（174）、石皿1点が出土した。

4）東区下層の遺構

集石遺構

集石1004（図版10・12・55）　0Z1グリッドに位置し、Ⅴ層で検出した。集石範囲は138×127cm程で、礫下に厚さ8cmの覆土がある。被熱した礫が含まれるが数は少ない。覆土は単層で、炭化物が含まれるが少量である。チップが15点出土している。時期を推定できる遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代前期末葉以前の遺構と考える。

4 遺　　物

A 概　　要

大坂上道遺跡の遺物は鹿瀬軽石質砂層を挟んだ上下層から出土している。出土した総数は縄文土器約68kg、土製品15点、石器・石製品842点、古代以降の土器1.56kg、古代以降の石製品1点である。その内訳は西区で縄文土器約64kg、土製品15点、石器689点、石製品2点、古代以降の土器1点、東区で縄文土器約4kg、石器153点、古代以降の土器1.56kg、古代以降の石製品1点である。

縄文土器は西区・東区共に下層からは出土せず、上層のみからの出土である。上層の主体となる土器は縄文時代中期初頭～前葉に所属し、他の時期は断片的である。石器の西区・東区上層の所属時期は出土地点、層位が土器と同様な出土傾向を示すことから縄文時代中期初頭～前葉となろう。下層は土器が出土していないため詳細は不明だが、出土層位から縄文時代前期末葉以前と推定する。出土分布状況は「B縄文土器」、「D石器」で詳述するが、縄文土器と石器ではほぼ同様の出土傾向がみられた。以下縄文土器、土製品、石器、石製品、古代以降の土器、古代以降の石製品の順に説明する。

B 縄文土器

主体となる土器群は鹿瀬軽石質砂層よりも上層から出土しており、この層は基本層序のⅡ～Ⅲ層にあたる。出土分布状況は第11・13図に示した。西区では0V・0W16～17グリット周辺、SK15（0V18－15・20グリット）、0W18グリット周辺の遺構や緩やかな傾斜地から多く出土している（第11図）。東区は西側の0Y・0Z・0X3～4グリットで集中している（第13図）。これは前回の調査の出土状況［滝沢ほか1995］を反映しているようである。ほとんどが縄文時代中期初頭～前葉の過渡的時期に比定できる。

1）資料の提示

本遺跡は時期的なまとまりがあるとはいえ検出した遺構は少ない。そのため、遺構から出土したものは、比較的細片のものまで図化・掲載した。包含層出土土器は中期初頭～前葉の過渡的な様相を示しているため、文様帯・主文様が判別できるものや類例の少ないものを中心に図化・掲載した。資料の提示は実測図・写真・観察表で行い、「(3) 土器各説」で詳述した。

観察表の記載項目

No.　実測図と写真図版の遺物番号に一致する。

遺構名・出土地点　遺構出土のものは遺構名を、包含層出土のものは小グリット名までを記入した。

層　位　遺構出土のものは覆土内の出土層位を記入した。包含層のものは出土した基本層序を記入した。

地　区　大坂上道遺跡では東区と西区に分けて調査していることから地区名を記載した。

文　様　「2）分類」で文様分類した記号を記入する。

器種・器形　深鉢形土器は「深鉢」浅鉢形土器は「浅鉢」とし、以下の記述もこのように記入する。器形は「2）分類」で器形分類した記号を記入する。

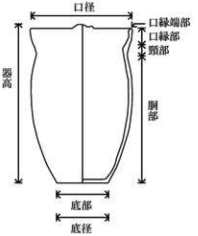
残存部位・残存率　破片資料は、第10図の部位名称を参考に残存部位を記入し、その残存率を分数で記入した。

計測値　第10図の計測基準に従った口縁部径（以下「口径」とする）、底部径（以下底径とする）、器高を

cm 単位で記入した。復元実測での計測値は括弧で示した。

縄文原体　施文した縄文の原体記号［山内 1979］の後に施文方向を矢印で示した。記述方法として横位は「→」、縦位は「↓」、斜位は「↘」とした。施文方向は右左、上下、右上下、左上下のどの位置からの施文にかかわらず、あくまで横位、縦位、斜位のみを表現し、不明なものは記入していない。撚糸文の場合は「撚糸」の後に軸に巻きつけている原体を記入した。ただし、軸に対して右巻きか左巻きかについては記入していない。器面上に表れる縄目文様は原体記号に続けて括弧で羽状、結束羽状、木目状、網目状等を書き加えた。

色　調　『新版標準土色帖 1998 年度版』［農林水産省農林水産技術事務局 1998］を参考に記入した。

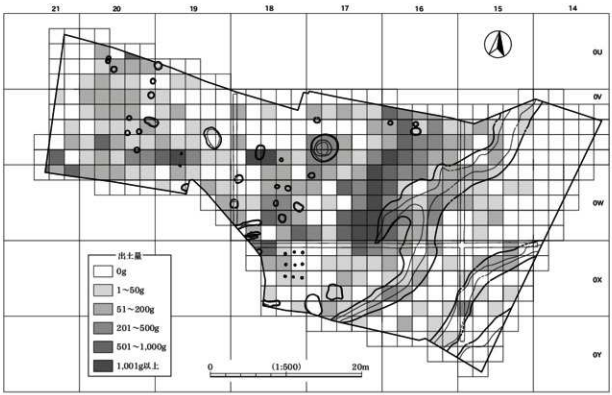


第 10 図　土器の計測基準及び部位名称

付着物（内/外）　内面と外面に付着したものを内面／外面とし記入した。

混和材　胎土中に含まれる鉱物や岩片等で、肉眼観察で特徴的に含まれているものを記入した。

時　期　わかる範囲でおおよその時期を記載した。



第 11 図　大坂上遺遺跡　西区上層出土土器分布図

2）分　　類

この地域は、越後と会津の境に位置する。そのため、今までに発掘された縄文土器の様相は複雑なものとなっている。本遺跡においてもその例からもれず、型式を特定し難い。故に本報告では系統性や地域性を重視して分類を行った。

本遺跡では縄文時代中期初頭～前葉に属するものが大半で、これ以外の時期のものはほとんどない。所属時期を考慮し次の３群に分ける。第Ⅰ群土器は縄文時代中期初頭～前葉に所属するもの、第Ⅱ群土器は縄文時代後期中葉に所属するもの、第Ⅲ群土器は縄文時代晩期後葉に所属するものである。なお、主体となる第Ⅰ群土器については系統ごとに大別し、さらに文様で細分した。文様分類は文様帯及び各文様を考慮した。

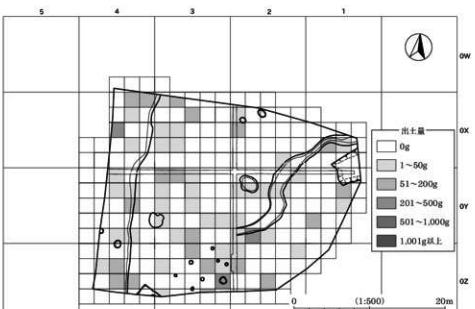
第Ⅰ群土器　縄文時代中期初頭～前葉に所属するもの。

器形分類（第12図）

中期初頭～前葉は深鉢が主体である。器形分類は文様分類とは別に全体のプロポーションが明らかなものを以下のように行った。

A器形　頸部が括れ、口縁部が内湾するもの。
B器形　頸部が括れ、口縁部が外反するもの。
C器形　頸部から口縁へと外反するもの。
D器形　底部から口縁部へと外傾するもの。
E器形　口縁部がキャリパー状に内湾し、胴部から底部へと括れるもの。
F器形　底部から緩やかに立ち上がり、口縁が内湾気味となるもの。

第12図　器形分類図



第13図　大坂上道遺跡　東区上層出土土器分布図

文様分類

第1類　北陸地方の新保・新崎式類似土器あるいは新保・新崎式の影響を受けているもの。口縁部や頸部は半隆起線や爪形文により横位に区画され、その中に蓮華文・縦の半隆起線等を施す。胴部は半隆起線や沈線を垂下させるなど縦方向の文様を配する土器。

A種　口縁部～頸部にかけて数条の半隆起線で横位に区画するもの。

A1種（7・22～24・26～31ほか）　地文の縄文を残しているもの。これは阿賀野市萩野遺跡のE3類［亀井ほか1994］に類似している。

A2種（8・32）　口縁部に縄文をもたないもの。文様構成はA1種と類似する。

A3種（33～35）　口縁に縄文を持ち、口縁部下半を無文にするもの。

B種（36・40・42～50ほか）　口縁部の横位区画内に蓮華文をもつもの。本遺跡はすべて三角陰刻法による蓮華文である。

B1種（36～40）　口縁部下半や胴部に半隆起線で文様を描き、区画内に格子目文を充填させる。器形はE器形である。石川県鹿島郡中能都町徳前C遺跡の6群9類［平野・西野1983］、富山県砺波市厳照寺遺跡で厳照寺Ⅱ式（厳照寺遺跡報告書第13図3）とされているもの［神保1977］に類例がある。

B2種（40・42）　口縁部下半に縄文をもつもの。

B3種（43～47）　口縁部下半を無文にするもの。

C種（51）　口縁に軌軸文を施すもの。

D種（52～59・176）　口縁に縦の半隆起線や沈線を施すもの。

D1種（52・53）　口縁部下半に縄文を残すもの。これは阿賀野市萩野遺跡第Ⅰ群E1類［亀井ほか1994］に類例がある。

D2種（54～59・176）　口縁部下半を無文にするもの。萩野遺跡第Ⅰ群D1類に類例がある。

E種（60～62）　口縁に半隆起線を巡らせ、口縁部下半に沈線を縦に施すもの。

F種（63～66）　口縁に格子目文をもつもの。

G種（68）　半隆起線で区画した内に格子目文を充填するもの。

H種（69・70）　縦方向の沈線を施すもの。

I種（25・71～76）　胴部に木目状撚糸文を施すもの。

J種（79・80・178）　新保・新崎式系土器と目されるが、破片のため詳細が不明なもの。

第2類　東関東の五領ヶ台式［今村1985］に類似、あるいは影響を受けている土器。

A種（1～3・9・16・81～91）　口縁部や頸部に交互刺突列を施しているもの。阿賀野市萩野遺跡の第Ⅰ群H類［亀井ほか1994］・福島県会津坂下町勝負沢遺跡の第5群3類［古川1986］に類似している。

A1種（1・2他）　口縁に渦巻状の1単位の突起をもち、口端に刻みを施し口縁部中位と頸部に数条の交互刺突列を巡らせ、胴部に交互刺突列や沈線が垂下するもの。

A2種（83他）　頸部に交互刺突列を巡らせ、胴部に縄文を施文するもの。

A3種（3・9・84・85）　口縁に刻み目もしくは縦の短沈線をもち、直下に交互刺突列を巡らすもの。

A4種（16・86～90）　口縁部に交互刺突列を巡らせるもの。

A5種（91）　口縁に縄文を施すもの。

B種（92）　口縁に縦位の撚糸側面圧痕を配し、頸部は刺突列が巡り、胴部にも垂下させる。口縁の撚

糸側面圧痕を除けば、文様構成は第Ⅰ群２類A1種に類似している。

C種（93）　口縁に刻みを加えた隆帯をもち、橋状気味の突起をもつもの。東関東の五領ヶ台Ⅰａ・Ⅰｂ式［今村1985］に類例が認められることから、本類のなかでも古いほうと考えられる。

D種（17・94）　口縁部に押引き状の沈線を巡らせ、胴部の隆帯にも同様の沈線を沿わせて逆三角状の文様を描くもの。

E種（95～102）　胴部の沈線や隆帯及び交互刺突列に刺突を沿わせるもの。

E1種（95～98）　沈線に刺突を沿わせるもの。

E2種（99～101）　垂下する隆帯に刺突を沿わせるもの。

E3種（102）　交互刺突列に刺突を沿わせるもの。

F種（103～106）　口縁部や胴部の隆帯上に縄文を施すもの。福島県会津坂下町勝負沢遺跡第10群［古川1986］に類似すると考えられる。

G種（20・107・108）　口縁に刻みや縦の短沈線をもち、沈線を数条巡らせるもの。

H種（109・110）　無文地に隆帯で文様を描くもの。

I種（111～113）　五領ヶ台式系土器と目されるが、破片のため詳細が不明なもの。

第３類　東北地方南部～関東地方北東部にかけての五領ヶ台式並行期に見受けられる土器で、一部が大木7a式に比定されている［興野1996、早瀬・菅野・須藤2006］。非装飾的な土器がほとんどである。口縁が肥厚するものとしないものに２分できる。

A種（114～121・179・180）　口縁が肥厚するもの。大木7a式［興野1996、早瀬・菅野・須藤2006］や千葉県香取市白井雷貝塚［西村1951・1954、上守1995］に類例がある。

A1種（114・179・180）　全面に縄文を施すもの。

A2種（115～118）　口縁が無文で、胴部に縄文を施すもの。さらに、原体により a 斜行縄文（115）・b 撚糸文（116）・c 結節縄文（117・118）に細分した。

A3種（119・120）　口縁に縄文を施し、胴部が無文のもの。

A4種（121）　無文のもの。

B種（19・122・123）　口縁が肥厚しないもの。

B1種（19・122）　口端に撚糸側面圧痕を縦位に施し、その直下にも同様の圧痕を横位に巡らせるもの。

B2種（123）　口縁に撚糸側面圧痕を縦・横に施しているもの。

第４類（77・78・124～137・164～165・181～183）　系統不明の土器を一括した。

第５類　縄文のみを施文するもので、以下のように細分類する。

A種（5・6・10・11・138～148・174・184～186）　斜行縄文。

B種（149～151）　撚糸文。

C種（152～153）　結束羽状縄文。

D種（154～155）　結節縄文。

第６類（4・12～15・21・156～163・187～189）　無文のもの。

第Ⅱ群土器（190・191）　縄文時代後期中葉に所属するもの。

第Ⅲ群土器（166～173）　縄文時代晩期後葉に所属するもの。

3）土器各説

分類や観察表で触れていない部分について記載した。西区遺構、西区包含層、東区遺構、東区包含層出土土器の順でおこなった。

a　西区遺構出土土器（図版13・14・56・57）

SK3出土土器（3）

口縁に縦の短沈線を施し、口縁部中位に交互刺突列と棒状刺突列を巡らせている。

SK15出土土器（1・2）

1・2は共に1単位の渦巻状の突起をもち、口縁に刻みを加え、口縁部中位に交互刺突を巡らせる。両者は頸部以下に違いがみられる。1は頸部に一対のボタン状突起を4か所もち、そこから沈線を垂下させる。地文はLRの縄文を施している。2は頸部に交互刺突により描出された長楕円区画を4単位配すと推測される。その区画内には梯子状の沈線を鋸歯状に施し、その間に棒状刺突を充填させる。楕円区画の端部は橋状気味の突起となっている。胴部は交互刺突列や沈線を口縁の突起下から垂下している。地文は横位の結節縄文で大木6式色が伺える。加えて、両者は胴部中位まで沈線や交互刺突列を垂下させ、それを挟むようにB字状の沈線を沿わせたりしている。このことから、1・2はほぼ同じ文様構成に加え、この土坑から重なって出土したことから、同一時期のものと考える。

SK25出土土器（4）

底部に敷物圧痕のような痕跡が見られるが、どのような敷物なのかは判別できない。

SD19出土土器（7～14）

7は口縁部に縦の棒状の隆帯が2つ並び、それらが口縁から突出して双冠状になっている。頸部は2条の半隆起線が巡り、口縁の貼付文下で垂下するような変化をみせている。8は口縁に逆「L」の字状の突起を持ち、口縁部中位と頸部に半隆起線を巡らせている。胴部は半隆起線で逆U字状の文様を描く。地文は縄文RLだが口縁部には縄文をもたない。縄文を意図的に磨り消したのかは判断できない。9は口縁をやや肥厚させ、平行沈線を巡らせている。口縁部の上位は沈線を挟んで縦の短沈線を2段にわたって施し、口縁部の下位は沈線の下に交互刺突を巡らせる。13・14は器厚が同じで、縦方向のナデを施していることからおそらく同一個体であろう。

SD20出土土器（15）

口縁部に輪積み痕のようなものを観察できる。

SD30出土土器（16）

口縁は無文で口縁部中位に沈線と交互刺突列を巡らせている。

SX18出土土器（17・18）

17は口縁端部に縦の刻みを施し、口縁は3条の押し引き状の沈線を巡らせている。胴部は隆帯で施文した逆三角形状の文様をもち、隆帯に押し引き状の沈線を沿わせる。押し引き状の沈線は東関東の五領ヶ台式直後に発達し［今村1975］、阿玉台式にも見られることから、本遺跡の中でも新しいものと考える。18は隆帯が底部近くまで垂下し、隆帯の両側に沈線を沿わせる。

SX37出土土器（19～21）

19は口縁に指でつまみ上げたような突起を1つもっている。口縁端部と口縁部の境には縄文Lを縦に

押捺し、口縁直下にも同様の原体を横に押捺する。また、頸部付近にも縄文Lを横に押捺する突起をもち、それを口縁の突起下とその背面に配置する。地文は縄文Lを横位に施すことから口縁端部や口縁直下、そして突起に施された圧痕と同一原体であろう。20は口縁に沿うように刻み状の縦の短沈線を施し、その下にも沈線を沿わせる。頸部には沈線が横走する。内面にも、口縁に沿う沈線が確認できる。

b　西区包含層出土土器（図版15～21・57～60）

第Ⅰ群土器　縄文時代中期初頭～前葉に所属するもの。

第1類（22～80）　北陸地方の新保・新崎式類似土器あるいは新保・新崎式の影響を受けているもの。22は口縁に縄文Lを縦位に施文した棒状隆帯を縦に配し、半隆起線を口縁部中位と頸部に巡らせ、縦の棒状貼付文下から胴部に垂下させている。萩野遺跡［亀井ほか1994］にも同様の文様構成と棒状隆帯もつものがある。23は頸部に渦巻状の突起を貼付している。その突起下から「U」字状の沈線を描いている。24は口縁と頸部は半隆起線と爪形文を巡らせる。胴部は半隆起線を垂下させ、途中に菱形状の半隆起線文をもつ。26は口縁部中位と頸部に半隆起線を巡らせ、胴部はB字文と考えられる半隆起線文を垂下させる。27は口縁部中位に半隆起線を巡らせ、中位から垂下する。29は波状口縁で器厚はやや厚手になる。頸部は上下からつまんだような突起を貼付後に半隆起線を巡らせ、頸部下は半隆起線を垂下させている。32は口縁を「入」字状とし、口縁と口縁部下半を無文にし、胴部にB字状の半隆起線を垂下させる。33は口縁部下半を縦に区切る。

36～39は深鉢でE器形になる。36と37、38と39はそれぞれ同一個体だと考えられる。36は口縁部下半に半隆起線で渦巻状の文様を描き頸部に半隆起線で区画する。37は胴部上半で、厳照寺遺跡の厳照寺Ⅱ式（厳照寺遺跡報告書第13図3）［神保1977］に近い文様と考える。38・39はB字状文を垂下させ、中に格子目文を充填している。口縁部をもたず蓮華文は認められないが、36と同様な器形と似た文様からⅠ群1類B1種に分類した。40・41は同一個体とみられ、頸部に半隆起線間に軌軸文のような文様を施す。胴部は半隆起線で縦や横に区画する。42は頸部に「し」の字状の突起をもち、頸部に半隆起線を巡らせ、突起下に垂下させる。文様構成がわかるものは少ない。43は口縁に半隆起線を巡らせ、口縁部下半に垂下させる。頸部は2条の爪形文を挟むように半隆起線を施し、縄文LRを縦に施文する「し」の字状の貼付文をもち、胴部は半隆起線でB字状に区画する。44は半隆起線が口縁部中位から頸部に向かって垂下する。47は口縁に「へ」の字状の突起をもち、蓮華文風の刺突を施す。胴部は口縁突起下に爪形刺突を施す隆帯を貼付し、沈線を巡らせている。48は口縁に渦巻状の突起をもち、蓮華文を巡らせる。頸部は2条の半隆起線の間に縦の沈線を施している。50の蓮華文は花弁内に細沈線をもたない。

51は口縁に三角状の突起をもち、口縁に軌軸文を巡らせている。頸部を無文にし、以下は縄文Lを施す。無文と地縄文の間には1条の爪形文を挟むように上下に各1条の半隆起線を巡らせ、突起を貼付して沈線が胴部中位まで垂下する。文様構成は第Ⅰ群第1類A1・2種と変わらないが、頸部の文様帯の幅が広い。53は地縄文に半裁竹管で半隆起線を描く際、地縄文が完全に摩り潰せなかった部分がある。54は口縁に幅の狭い縦の半隆起線を施している。頸部は23と類似した渦巻状の突起を配し、縦の半隆起線を巡らせている。胴部は半隆起線で縦に区画している。55は頸部に縦の沈線を巡らせたのち、指で上下からつまんだような突起を貼付している。56は波状口縁になる。口縁は縦の棒状隆帯を貼付し、頸部は押し引きの爪形文というより瘤状になるものを巡らす。57は口縁部下半が縄文を磨り消して無文帯となる。頸部は半隆起線で円形の文様を描き、爪形文と半隆起線を巡らせている。

60は波状口縁の波頂部を双冠状にし、口縁に半隆起線を沿わせ、以下に縦の細沈線を施している。62は口縁に縦に細い集合沈線を施した後、玉抱き三叉状の文様を陰刻する。頸部以下は半隆起線で区画し、区画内に格子目文を充填している。63～65は口縁が「入」字状に突出する。63は口縁から隆帯が垂下し、頸部の突起から下位に向かってクランク状に曲がる。64は口縁端部に沈線で玉抱き三叉状の文様を描く。66は口縁に渦巻状の突起をもち、区画内に格子目文を充填する。裏面は楕円形の区画をもち、区画内に格子目文をもつ。67は口縁部中位から口縁部上半と口縁部下半を縦に区切り、縄文を施文した隆帯を貼付する。68は口縁部中位と頸部に爪形文と半隆起線を巡らせ、頸部にボタン状の貼付文をもつ。胴部は半隆起線で縦や横に区画し、区画内に格子目文を充填する。

69・70は同一の器厚と同様の平行沈線を使用していることから、おそらく同一個体であろう。69は横や縦に沈線を施し、B字状文が斜めに走る。70は沈線を横に短めに描き、格子目状にする部分がある。71・72は爪形文、73は半隆起線が巡る。79は沈線と爪形文が巡る。80は口縁に2条の半隆起線が巡る。

第2類（81～113）　東関東の五領ヶ台式［今村1985］に類似、あるいは影響を受けている土器。

81は頸部片で、貼付文が剥離した部分から推定するに、2に見られるような橋状気味の把手が付けられていたのであろう。文様は刻みをもつ隆帯・沈線・交互刺突列を横に巡らせ、沈線・交互刺突列を縦に施している。これらのことからA1種になると考える。82は口縁に縄文LRを横位に、胴部では縦位に施文し、口縁部中位は竹管の背面でなでたような無文帯をもち、頸部に交互刺突と押し引き状の沈線を巡らせる。83は波状口縁になる。口縁に刻みをもち、口縁部下位には沈線を、頸部には交互刺突列を巡らせる。84は「入」字状の口縁になる。口縁には刻みを施し、頸部に沈線と交互刺突列を巡らせ、棒状刺突を加える。さらに、「へ」の字状の隆帯を貼り付ける。裏面は口縁に棒状刺突を沿わせている。地文は横位の結節縄文である。85は口縁に刻みをもち、口縁中位に沈線と交互刺突列を巡らせる。86・87は沈線と交互刺突列を巡らせる。88は半隆起線と交互刺突列を巡らせる。89は口縁に交互刺突列に小さい爪形文を沿わせながら巡らせ、胴部にも垂下させる。90は交互刺突列に刺突列を沿わせ垂下する。91は口縁部中位に刻みをもつ隆帯を横と斜に施し、それらに沿うように交互刺突列や沈線を沿わせている。

92は口縁に縄文Lを縦に圧痕し、その後に棒状隆帯を貼付する。頸部は平行沈線間に刺突列を施すが、交互刺突列にはならない。胴部にも刺突列と沈線を垂下させる。93は口縁に突起をもつようだが欠損している。口縁に刻みを加えた隆帯を沿わせ、波頂下に橋状に似た突起をもち、隆帯と沈線を巡らせる。内面には玉抱き三叉状の陰刻がある。94と17は隆帯・沈線・縄文などから同一個体かもしれない。96・97は沈線のほかに楕円区画内に沈線を施している。98は区画する沈線が交互刺突状になる。99～101は色調が近似し、同様の縄文原体と短隆帯をもつことから同一個体の可能性がある。102は交互刺突列を巡らせ、胴部に向かって垂下させ、押し引き状の沈線を沿わせている。103は口縁部片で縦に棒状の隆帯を貼り付ける。104は2本の隆帯を巡らせる。105は口縁の2条の隆帯間に竹管の背面でなでたような無文帯をもつ。隆帯上には縄文Lを横位に施す。胴部には縄文Lを縦位に施すとともに、部分的には斜位にも施す。106は頸部に縄文LRを施す。隆帯も巡らせているが途切れるか所がある。

109は屈曲下に棒状の隆帯を貼り付ける。110は水鳥のような獣面把手をもち、口縁から垂下するように棒状の隆帯を貼り付けている。類例としては見附市山崎A遺跡等［佐藤ほか1991］で出土している。111は波状口縁で口縁に沈線を沿わせ、半隆起線を縦に施す。112は口端に刻みをもち、渦巻状の沈線で文様を描き、沈線区画内には短沈線を充填する。113は口縁部上半に縄文RLを横位に施し、2条の沈線を巡らせる。口縁部下半以下は縄文RLを縦位に施し、沈線で逆「U」字状の文様を描く。

第3類（114～123）東北地方南部～関東地方北東部にかけての五領ヶ台式並行期に見受けられる土器。

114は口縁に縄文Lを縦位、肥厚下には横位に押捺し、胴部は縄文Lを縦位に施している。115は胴部に縄文Lを縦位に間隔をあけて施している。116は胴部に撚糸Lを施し、表される縄目文様は木目状になる可能性がある。117・118は胴部に結節縄文の結節部のみを縦位に施している。119は縄文LRを横位に巡らせている。120は口縁に縄文Lを押捺しているが、撚糸Lを回転させている可能性も考えられる。122は口縁端部に縄文LRを縦位に押捺し、直下にも縄文LRを横位に押捺している。123は口縁部に縄文LRを横位に3条押捺し、その後同様の原体を縦位に3条押捺している。

第4類（77・78・124～137・164・165）　系統不明の土器を一括した。

77は口縁が「入」字状になる。第Ⅰ群1類G種の63～65の口縁に類似している。78は形状、大きさ、厚さから、おそらく8のような突起になると考えられる。124は口縁に渦巻状の沈線をもち、頸部には波状の平行沈線文を平行沈線で挟んだものを巡らせ、それを胴部にも垂下させる。地文は縄のようなものが確認できるが磨り消されており判読できなかった。125は頸部に隆帯を巡らせ、隆帯上に縄の刺突が2か所ある。126・127は屈曲部に指頭圧痕のような刺突を加える隆帯を巡らせ、地文に結節縄文の結節部を強調したものを横位に施している。128は括れた部分に2個一対のボタン状の突起をもつ。129は屈曲部に突起をもつ。130は口縁に沈線を沿わせ、数条の沈線を垂下させる。131は三角状に陰刻し、それに沿うように刺突列を施している。132は口縁と頸部に2列1組の刺突列を巡らせ、口縁から胴部に刺突列が垂下する。133は口縁部下半で棒状刺突列を2～3列巡らせている。134は3条の半隆起線が斜めに走る。地文は縄のようなものが観察できるが、磨り消されており判読できない。135は細い沈線を波状に何条も施している。器厚が薄いことなどから、ミニチュア土器の可能性もある。136は口縁を双冠状にし、頸部に円形の突起をもつ。地文は縄を施しているようだが判読できない。137・164・165はほかの時期の可能性もある。137は胴部に櫛歯状沈線を縦に施し、底部に網代痕をもつ。164は口縁内面に弧状の沈線を施す突起をもつ。165は「入」字状の口縁になる。

第5類（138～155）　全面縄文を施すもの

142は口縁に縄文LRを横位に、胴部は縦位に施している。148は底部がやや上げ底気味になり、スダレ状圧痕をもつ。151も底部にスダレ状圧痕をもつ。154・155は同様の胎土・色調に加え、結節縄文を縦位に施していることからおそらく同一個体である。

第6類（156～163）　全面無文になるもの。

156は台付土器である。器形は口縁がやや内湾気味に立ち上がり、脚部は接地面をやや厚めにつくる。163は底部にスダレ状圧痕をもつ。

第Ⅲ群土器（166～173）　縄文時代晩期後葉に所属するもの。

166・167と168～170と171～173は同一個体で166・167は口縁に3条の沈線を巡らせ、内面にも1条の沈線を巡らせている。171～173は櫛歯状沈線を縦位にやや交差させるように施している。

c　東区遺構出土土器（図版21・60）

SD56出土土器（174）

174は口縁に縄文Lを横位に、胴部は縦位に施している。

d　東区包含層出土土器（図版21・60・61）

第Ⅰ群土器　縄文時代中期初頭～前葉に所属するもの。

第1類（175～178）　北陸地方の新保・新崎式類似土器あるいは新保・新崎式の影響を受けているもの。

177は隆帯を巡らせ途中から垂下する。178は隆起線で逆U字状に区画し、区画内は横に沈線を配し、区画外には半隆起線を横に施している。

第3類（179・180）　東北地方南部～関東地方北東部にかけての五領ヶ台式並行期に見受けられる土器。

179は縄文RLを横位に施すとともに、部分的には縦位にも施している。180は縄文LRを横位に施している。

第4類（181～183）　系統不明の土器を一括した。

181は口縁に沈線を加える棒状隆帯を貼付し、沈線を巡らせそのまま棒状隆帯下に垂下する。地文は縄文LRを口縁は横位に、胴部は縦位に施している。182は口縁に細い縦の半隆起線を密に施す。183は指頭圧痕のような刺突を加える隆帯を巡らせたものである。

第5類（184～188）　縄文のみのもの

184は胎土内に土器片とみられるものを混入している（写真図版61－185）。

第Ⅱ群土器（190・191）　縄文時代後期中葉の土器

190・191は同一個体である。外面は無文で内面に3条の沈線を2列巡らせることから加曾利B式期の浅鉢であろう。

C 土 製 品（図版21・22・61）

土　　偶（192）

1点のみの出土である。遺構に伴わず、グリット0W18－16から出土している。0V18－18・19で検出したSK15付近からの出土であるが、関連は指摘できない。形態は板状になり、残存部位は胴部と腕部のみである。左腕部は胴部から10cmぐらい離れたところから出土した。文様は腹部側面に3条の沈線をもち、腹部正面に一条の沈線を垂下する。所属時期は本遺跡の主体となる土器や周辺から出土した土器から中期初頭～前葉に位置付けられるだろう。

土器片円板（193～206）

土器片利用の研削具［藤巻1989］といわれているもので、土器片を転用し周縁調整に打欠、使用痕として研磨痕が認められるものである。総数14点出土し、14点すべてを図示した。

城之腰遺跡［藤巻1991］を参考に、平面形はA群を円形・B群を多角形・C群を四角形・D群を三角形・E群を不明に分類した。さらに、断面形として1類は斜めのもの・2類は平坦のもの・3類は凸状のもの・4類は凹状のものに分類した。複数の断面形をもつ場合。たとえば、斜めのものと平坦のものがあれば1＋2類のように表記した。使用状況とし北野遺跡［高橋ほか2005］の分類に従い、周縁打ち欠きや研磨痕の状態により細分した。a種は周縁を打ち欠いただけのもので研磨痕が認められないもの。b種は周縁の一部（約50％未満）に研磨痕が認められるもの。c種は周縁断面の大部分（約50％以上）に研磨痕が認められるもの。d種は分類不可のもので、破損品、破片のため周縁状況が分類できないものとした。

平面形はA類とC類が多く、使用状況は平面形で比較するとA類ではb種が多く。B・C・D類ではc種が多い。断面の形状は1類と2類が多く使用状況断面形のみで見ると1類はb種とc種がありc種が多い。2類はa種とb種とc種があり、b種とc種が多くみられた。

各個体別の文様について見てみると195は渦巻状の隆帯を貼り付け、隆帯上に格子目文を施す。198

は平行沈線間に刺突を施している。201は沈線が横走する。202は口縁部片で突起をもつが欠損している。203は沈線と刺突列を施す。206は底部片で網代痕をもつ。

多くは深鉢の破片を利用したものと推定され、利用部位は口縁部が1点、胴部片が8点、底部片もしくは底部片と思われるものは5点である。北野遺跡では底部片転用のものが認められず［髙橋ほか2005］、城之腰遺跡でも2点のみ［藤巻1991］の出土である。それに比して本遺跡は出土点数が少ない割に底部片が5点と多く使用されている。

D 石　　器

出土した石器の総数は842点で、石器は鹿瀬軽石質砂層を挟んだ上下の層から出土した。その内訳は、上層619点（西区567点、東区52点）、下層223点（西区122点、東区101点）である。各地区の出土状況は以下のとおりである。

西区上層は、遺構の集中する0V・0Wグリッド周辺から自然流路SD19・30までの間に多く分布する。SD19・30から東側は段丘の低位となり、分布が希薄となる。石鏃、石錐、不定形石器、筌状石器、打製石斧、磨製石斧、敲磨石類、石皿、砥石、石鏃未製品、石核、石製品、板状石器が出土した。所属時期は出土地点、層位が土器と同様な出土傾向を示すことから、縄文時代中期初頭～前葉と推定する。下層は、遺構が確認された0V20・21グリッド周辺で少量出土した。不定形石器、敲磨石類、石核が出土している。時期は土器が出土していないため詳細は不明であるが、鹿瀬軽石質砂層の下位であることから縄文時代前期以前と推定する。

東区上層は、主に0Xから0Z2グリッドより東側で少量出土した。不定形石器、磨製石斧、敲磨石類、石核が出土している。時期は出土地点、層位が土器と同様な出土傾向を示すことから、縄文時代中期初頭から前葉と推定する。下層は、0Y・0Z2グリッド周辺で少量出土した。筌状石器、敲磨石類、石核が出土した。時期は土器が出土していないため詳細は不明であるが、鹿瀬軽石質砂層の下位であることから縄文時代前期以前と推定する。

1）資料の提示と記述の方法

資料の提示は各地区・各層の器種・分類の標準的なものを中心に抽出し、実測図・写真を載せて、本文・観察表で記述した。観察表は個々の石器の諸属性を記入し、記載項目のうち、遺物No.、出土地点・遺構名、層位は土器に準じる。分類は基本的に「北野遺跡（上層）」［髙橋ほか2005］を参考にし、これに

西区上層

	石鏃	石錐	不定形石器	筌状石器	打製石斧	磨製石斧	敲磨石類	石皿	砥石	石鏃未製品	未成品	石核	石製品	板状石器	剥片類	合計
遺構内出土	0	1	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	22	28
遺構外出土	1	1	102	7	1	7	36	0	13	1	1	11	2	1	355	539
合　計	1	2	106	7	1	7	36	1	13	1	1	11	2	1	377	567

西区下層

	不定形石器	敲磨石類	石核	剥片類	合計
遺構内出土	0	1	0	7	8
遺構外出土	4	18	4	88	114
合　計	4	19	4	95	122

東区上層

	不定形石器	磨製石斧	敲磨石類	石核	未成品	剥片類	合計
遺構内出土	0	0	0	0	0	9	9
遺構外出土	4	4	1	6	1	27	43
合　計	4	4	1	6	1	36	52

東区下層

	筌状石器	敲磨石類	石核	剥片類	合計
遺構内出土	0	0	0	15	15
遺構外出土	1	1	1	83	86
合　計	1	1	1	98	101

第2表　大坂上道遺跡　器種別石器出土数

当てはまらないものは、別に項目を立てた。また、細分類のうち明確に当てはまらないものは、新たに分類した。敲磨石類については、使用痕のバリエーションを加味して、上野東遺跡・現明嶽遺跡［髙橋ほか2006］を参考に分類した。計測値は長さ、幅、厚さ、重量を記入した。石材は石質名を記入した。遺存状態は定形石器など、完形品が一定の形を示すものについて記入した。その他は各器種で必要と思われる項目を記入した。

2）分　　類

石　　鏃

尖頭部・側縁部・基部が作出され、左右がほぼ対称のものを石鏃とした。基部の形状を基準に円基鏃（A類）、凹基無茎鏃（B類）、尖基鏃（C類）に分類した。

石鏃未製品

小型の剥片に二次調整が施され、尖頭状の端部を形成するもので、石鏃の未製品と考えられるもの。不定形石器とは大きさ、厚さ、使用痕の有無で区別される。

石　　錐

剥片の一部または前面に二次調整を加え、錐部を作出した石器である。錐部とつまみ部の境が不明瞭で緩やかに広がるもの（A類）のうち、長さに対し、幅の比率が小さいもの（A1類）、長さに対し、幅の比率が大きいもの（A2類）、素材の端部を錐部とし、錐部が無加工あるいは二次調整があってもごく一部に限られるもの（B類）が出土した。

不定形石器

剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次加工や使用痕が認められる不定形な石器である。刃部形状の違いにより細分した。連続的な押圧剥離により滑らかな刃部をもつもの。片面調整のため、刃部断面形は片刃となる。スクレイパー、掻器と呼称されていたものに相当する（A類）。両面に連続または連続状の剥離による刃部をもつもの。両面調整のため刃部断面形は両刃となる。刃部の側面観がジグザグ状となるものもある（B類）。抉入状の刃部をもつもの。抉入石器、ノッチと呼称されていたものに相当する（C類）。素材の端部に連続または連続状の剥離による刃部をもつもの。エンドスクレイパー・掻器と呼称されていたものに相当する（D類）。不連続な剥離による刃部をもつもの（E類）、連続する微細剥離が縁辺の1/2に満たないもの（F類）。刃部の二次加工が認められないものの、使用の結果と思われる刃こぼれ状の微細剥離・磨耗・光沢などの使用痕が認められるもの（G類）。

箆状石器

中～大型の扁平礫や剥片の両側縁に二次調整を加え、斧形に仕上げた石器である。刃部幅が広く基部幅が狭いもので、刃部から基部への側縁が外湾状・直線状のもの（A類）、刃部幅が基部幅とほぼ同じくなる短冊形で、刃部幅と基部幅がともに広く、太身のもの（B類）が出土した。それぞれ大型・小型品が出土している。

打製石斧

扁平礫あるいは大型の剥片を素材とし、剥離調整を施して斧形に仕上げた石器である。刃部は基本的に両刃となる。

磨製石斧

敲打・研磨により斧状に仕上げた石器である。基部幅や刃部から基部へのすぼまり方、基部の平面形・

断面形、基端の平面形から細分した。また、基部が遺存しないものは側面と正裏面の稜の状態により細分した。今回の調査では、基部幅が広いもの（A類）のうち、基部平面形が台形状を呈し、基部の縦位断面形が台形状・「コ」の字状、基端の平面形は長方形となる（A1類）、基部平面形が跳ら箱状・隅丸方形状を呈し、基部の縦位断面形は隅丸方形状、基端の平面形は隅丸方形状となる（A2類）、基端が半円状または弧状を呈し、基部の縦位断面形は半円状・尖頭状、基端の平面形がせまい線状となる（A3類）、基部幅が狭く撥形を呈するもの（B類）が出土した。基部が遺存しないものは、いずれも側面と正裏面の稜が不明瞭で、断面形が楕円形・長楕円形を呈する（C類）が出土した。

敲磨石類

片手ないし両手で把持できる大きさの礫の表面に、調整や使用の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められる石器である。正裏面の磨痕・敲打痕、側縁の磨痕・敲打痕の組み合わせで以下のように細分した。正裏面のいずれかに磨痕が認められるもの（A類）。正裏面のいずれかに磨痕と敲打痕が認められるもの（B類）。正裏面のいずれかと側縁のいずれかに磨痕が認められるもの（C1類）。正裏面のいずれかに磨痕、側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの（C2類）。正裏面のいずれかに磨痕、側縁のいずれかに磨痕、端部に敲打痕が認められるもの（C3類）。正裏面のいずれかに敲打痕、側縁のいずれかに磨痕、端部に敲打痕が認められるもの（C4類）。正裏面のいずれかに磨痕と敲打痕が認められ、側縁のいずれかに磨痕が認められるもの（D1類）。正裏面のいずれかに磨痕と敲打痕が認められ、側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの（D2類）。正裏面のいずれかに敲打痕が認められるもの（E類）。正裏面のいずれかに敲打痕が認められ、側縁のいずれかに磨痕が認められるもの（F1類）。正裏面のいずれかに敲打痕が認められ、側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの（F2類）。側縁のいずれかに磨痕が認められるもの（G1類）。側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの（G2類）。側縁のいずれかに磨痕が認められ、端部に敲打痕が認められるもの（G3類）。

石　　皿

大型で扁平な礫の正裏面に使用の結果と推定される磨面や敲打が認められるもの。砥石とは使用面の状態で区別される。元屋敷遺跡（上段）［滝沢ほか2002］を参考に、使用面に擦痕が明瞭に認められるものを砥石、擦痕が不明瞭で磨面が滑らかな平面をなすものを石皿とした。今回の調査では、素材獲得時の礫をそのまま使用した無加工石皿が出土した。

砥　　石

礫の表面に使用による磨面（砥面）が認められるもので、砥面の種類により細分した。今回の調査では面状・帯状砥面のものが出土した。

石　　核

剥片剥離作業をなんらかの理由により断念した残核及び剥片剥離作業後の残核である。

板状石器（円盤状石器）

板状石器は「扁平礫や板状の剥片を素材とし、裏面から正面への急角度の片面加工が施され、裏面が平板状の石器」［髙橋ほか1992］とされる。北野遺跡（上層）［髙橋ほか2005］では、この他、両面調整のものや、周縁を敲打・研磨したものも出土している。今回の調査では研磨がほぼ全周するものが出土している。

未 成 品

二次加工が認められる石器のうち，器種の特定できないものを一括した。

3）各　説

西区上層（図版23～28・62～66）

石　鏃（1）

B類が1点出土した。右側縁が内傾気味に調整され、やや左右非対称に仕上がっている。表裏面中央にはアスファルトが付着する。

石鏃未製品（2）

1点出土した。左側縁および右側縁の一部に剥離調整が施される。

石　錐（3・4）

2点出土した。3はA2類で、錐部に摩耗が認められる。4はB類で、錐部が摩耗し、裏面は光沢を帯びている。

不定形石器（5～34）

A類21点、B類4点、C類2点、D類7点、E類37点、F類11点、G類24点の計106点が出土した。5～12はA類である。5は右側縁および下縁に剥離調整が施され、刃部が鋭利に仕上がっている。6～11は厚みのある縦長剥片を素材とするもので、6・8・9・11は右側縁、7・10は左側縁に刃部加工が施される。12の刃部は摩耗している。13はB類で、剥離調整を施し、打瘤を除去している。刃部は使用の結果と考えられる刃潰れが観察される。15はC類で、両側縁に挟入する刃部を作出している。18～23はD類で、18・19・21は弧状、20・22・23は尖頭状に刃部が作出されている。28はF類で、厚みのある剥片を素材とし、右側縁に微細剥離が連続する。29はE類で、縦長剥片の正裏面に不連続な剥離が観察される。33はG類で、刃部が摩耗し、刃部表裏面に光沢が認められる。34はA類で、礫面を大きく残す剥片の周縁に剥離調整が施され、急角度の刃部が作出されている。

箆状石器（35～38・40～42）

7点出土した。35は裏面両側縁に剥離調整が施されるものの、刃部が作出されていない。38・40は素材の端部に刃部加工が施されず、礫面を残している。いずれも未成品と考えられる。36・37はB類である。36は器面の左側半分を欠損するもので、刃部先端は磨耗している。37は正裏面からの剥離調整により、急角度の刃部が作出されている。裏面上端は剥離調整が施され、つまみ状を呈することから、石匙の可能性もある。41・42はA類である。41は初期の段階で剥離されたと思われる大型の剥離面が認められ、この鋭利な縁辺を刃部としている。42の刃部には摩耗痕が観察される。

打製石斧（39）

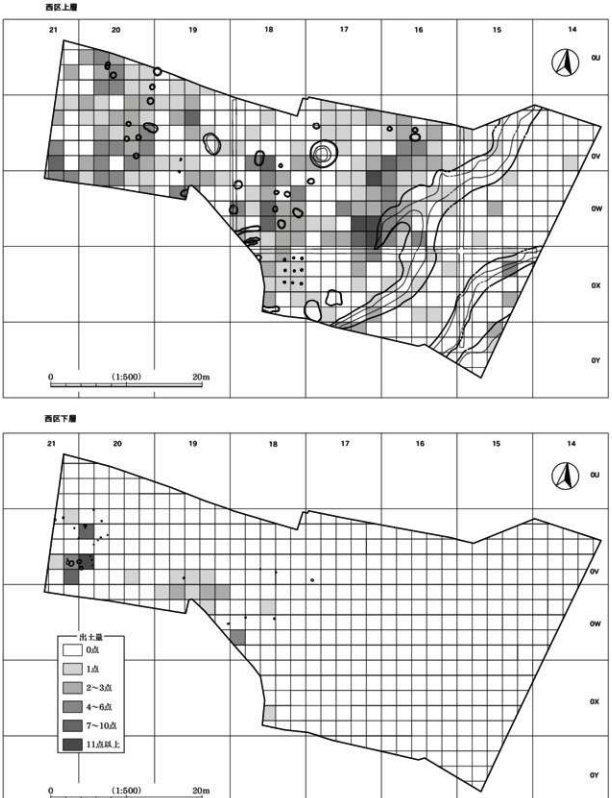
1点出土した。平面形が撥形となるもので、刃部は正裏面からの剥離が施され両刃となる。

磨製石斧（43～48）

7点出土した。43～47はA1類で、いずれも刃部を欠損する。正裏面と側縁の間に明瞭な稜を作り、断面は隅丸長方形を呈する。47の右側縁には擦り切り痕が観察される。48はC類で、正裏面と側縁の間の稜が弱く、断面は長楕円形を呈する。

敲磨石類（49～62）

A類12点、B類1点、C1類12点、D1類2点、E類2点、F2類1点、G1類5点、G2類1点の計36点が出土した。51はB類で、表裏面に浅い敲打痕が観察される。52・54はC1類である。52は表裏面に線状痕が観察される。54は両側縁に幅広の磨痕が認められる。56は上半部を欠損する。56およびE



第14図　大坂上道遺跡　西区石器出土分布図

類の58は表裏面に敲打痕が認められ、いずれも表面の敲打痕が深い。59はF2類で、敲打痕は浅い。D1類の60およびG1類の61は側縁中央の狭い範囲に磨痕が観察される。

石　　皿（68）

SK15から1点出土した。板状礫の平坦面を使用しており、中央部付近には弱い線状の擦痕が認められる。

砥　　石（63～67）

13点出土した。いずれも明瞭な擦痕が観察される。63～65は線状痕が規則的に並び、器面調整の研磨痕とも捉えられるため、石製品の可能性も考慮しておきたい。67は大型礫に線状痕が認められるものである。砥面の縁には滑らかな平面をなす磨面が観察される。石皿を転用したものと考えられる。

石　　核（69～71）

11点出土した。69・70は剥離作業が進んだもので、多方面からの剥離痕が観察される。71は拳大の扁平礫を素材とする。作業面は表裏の2面に設定され、周縁から剥離作業が行われている。

板状石器（円盤状石器）（72）

1点出土した。全面が研磨による成形が施され、周縁は敲打調整した後に研磨されている。

未 成 品（75）

1点出土した。縦長剥片の両側縁に二次加工が施されるもので、平面形は三脚状を呈する。

西区下層（図版28・29・66・67）

不定形石器（76～78）

A類2点、D類1点、G類1点の計4点出土した。76はA類で、素材の側縁に刃部調整が施される。77はD類で、端部に刃部調整が施される。78はG類で、右側縁に刃こぼれ状の微細剥離が観察される。

敲磨石類（79～83）

A類5点、E類3点、C1類1点、C3類1点、G1類6点、G3類1点の計17点出土した。81はE類で、表裏面に敲打痕が認められるが、いずれも浅い。82はC3類で、側縁に磨痕の他、端部に敲打痕が観察される。83はG1類で、右側縁に狭長な磨面が認められる。

石　　核（84）

4点出土した。84は剥離作業が進んだもので、頻繁に打面転移を繰り返し、剥離作業が行われている。

東区上層（図版29・67）

不定形石器（85～87）

A類2点、G類3点の計5点出土した。85はA類で、打瘤を除去し、刃部加工を施している。86・87はG類である。86は右側縁、87は両側縁に刃こぼれ状の微細剥離が観察される。

磨製石斧（88～90）

A1類1点、A2類1点、A3類1点、B類1点の計4点出土した。B類は細片のため図示していない。いずれも刃部を欠損する。

敲磨石類（91）

D2類1点出土した。表裏面、側面の全てに敲打痕が観察される。

石　　核（92・93）

6点出土した。いずれも打面転移を頻繁に繰り返し、剥片剥離作業がおこなわれている。

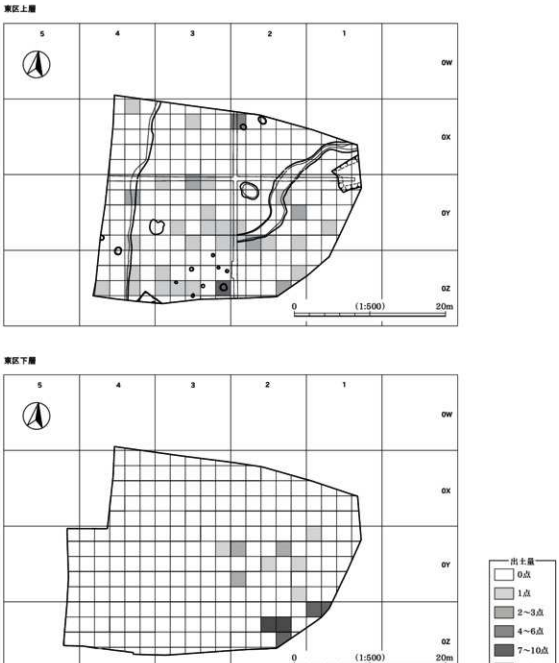
東区下層（図版29・67）

箆状石器（94）

A類が1点出土した。縁辺の半周以上に剥離調整が施されるもので、刃部平面形は弧状を呈する。

E 石 製 品（図版28・66）

西区上層から2点出土した。72は三角形岩板としたもので、器面は削り・研磨により成形され、三角



第15図　大坂上道遺跡　東区石器出土分布図

形状に仕上がっている。頂点部分は亀頭状を呈する。73は不明石製品で、形状はお猪口に類似する。外面は削り、内面は削り・研磨によって成形される。

F　古代以降の遺物（図版22・61）

試掘調査では西区21トレンチの上層の包含層から須恵器甕胴部片1点が出土しているが、本調査では、東区の南側を中心に平安時代の遺構・遺物を検出した。遺物には須恵器・土師器の他、腰帯石銙（巡方）1点がある。また、西区では中世の珠洲焼片1点が出土した。

1）古代の土器（207～224）

土器は土師器中心に出土し、須恵器は前述の試掘トレンチ出土の須恵器とあわせ3点のみである。全体で1,600g出土し、須恵器40g、土師器1,560gである。土師器の出土分布は、東区南側のSB2・SI55・SK52にほぼ重なることから、これらの遺構に伴う可能性がある。また、大坂上遺跡［滝沢ほか1995］の出土状況とも符合することから、土器の時期は9世紀後半～10世紀初頭のものと推測する。同時期の土器は、本遺跡から500m西に存在する上野東遺跡からも出土している［髙橋ほか2006］。
今回出土した土師器小甕・甕・長甕の外側の色調が、浅黄橙を主体とする白味が強いものと橙～にぶい黄橙を主体とする赤味が強いものに大別できる。

遺構出土土器（207～219）

SB2

207は、P61の1層から出土した土師器無台椀である。法量は口径15.1cm、底径5.8cm、器高5.4cmである。器形は内湾気味に立ち上がり、口縁端部をわずかに外に引きだしている。体部外面低位部に2段階の回転ヘラケズリが施されている。底部外面にある直線状の線はヘラ記号の可能性がある。外面は浅黄色を呈し、内面は黒色処理されている。胎土は緻密である。内外面にロクロナデを行い、内面に丁寧なミガキを施している。底部は回転糸切りで切り離され、回転方向は右である。208は、P64の2層から出土した土師器無台椀底部片である。底径4.8cmである。外面はにぶい黄橙色、内面は黒色処理され褐灰色を呈する。胎土は緻密である。底部は回転糸切りで切り離され、回転方向は右である。外面低位部にヘラケズリが施されている。この調整は手持ちで反時計回りに回しながら削っている。209は、P58の覆土から出土した土師器長甕底部片で、SI55出土の底部片と接合した。底径5.0cmである。外面は橙色、内面は褐灰色を呈する。胎土はやや粗雑である。外面が平行線文叩き、体部内面にハケ目が施されている。底部は平坦で調整を施さず、このような調整は会津に類例が見られる。210は、P59の1層から出土した土師器長甕体部片である。外面は橙色、内面はにぶい褐色を呈する。胎土はやや粗雑である。内面に無文の当て具をあて、外面に平行線文叩きを施している。

SI55

211は土師器椀口縁部片である。法量は口径13.8cmである。外面は浅黄色を呈し、内面は黒色処理されている。胎土は緻密である。内外面にロクロナデを行い、内面に丁寧なミガキを施している。212は土師器無台椀底部片である。法量は、底部6.4cmである。外面は淡黄色、内面が浅黄色を呈する。胎土は緻密である。内外面にロクロナデを行い、内面に丁寧なミガキを施している。底部切り離しは回転糸切りで、この遺物のみ回転方向が左回転となっている。213は土師器小甕口縁～体部片である。法量は口

径14.8cmを測ったが、口縁部残存率はわずかであり口径は推定値である。器形は体部から口縁部にかけて外反させている。内外面とも浅黄橙色を呈する。胎土は緻密である。内外面ともロクロナデで整形している。214は、6層から出土した土師器甕口縁部片である。法量は口径19.2cmである。器形は口縁部を外傾させている。内外面とも橙色を呈する。胎土はやや粗雑である。内外面ともロクロナデで整形している。215は、土師器甕口縁部片である。法量は口径18.2cmである。外面は浅黄橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。胎土はやや粗雑である。内外面ともロクロナデで整形している。体部外面にスス・オコゲが付着している。216は、土師器甕底部片である。法量は底径8.6cmである。内外面ともにぶい橙色を呈する。胎土はやや粗雑である。内面はロクロナデであるが、外面は不明である。底部切り離しは回転糸切りであるが、回転方向は不明である。217は、土師器長甕体部片である。内外面とも橙色を呈する。胎土は緻密である。外面に平行線文叩きが格子状に施され、内面は無文の当具と推測する。218は、6層出土の土師器長甕体部片である。外面は褐灰色、内面がにぶい橙色を呈する。胎土はやや粗雑である。外面に平行線文叩き、内面の一部にハケ目が施されている。

SK52

219は、土師器長甕体部片である。内外面とも橙色を呈する。胎土はやや粗雑である。外面は平行線文叩きが施され、内面は無文の当具と推測する。形状から体部下半部と推測する。

包含層出土土器（220～224）

220は、0Y3－24グリッドⅡ層から出土した須恵器甕体部片である。内外面ともに灰白色を呈する。胎土はセメント状で粒子密度が高く会津大戸窯産の可能性が高い。外面は平行線文叩きが施され、内面に同心円文当て具痕があると推測するが摩耗が顕著で判然としない。221は須恵器長頸瓶体部片である。出土地点は不明である。外面は暗灰黄色、内面は黄灰色を呈する。内外面ともロクロナデで整形されている。胎土は緻密であるが、産地は不明である。形状から体部上半部と推測する。外面に自然釉が付着している。222は、0Z2－2および0Z3－7グリッドⅡ層から出土した土師器椀口縁部片である。法量は口径16.4cmである。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。胎土はやや粗雑である。内面が黒色処理されていた可能性もあるが、器面の摩耗が顕著で判別が困難である。223は、0Z3－7グリッドⅡ層から出土した土師器無台椀底部片である。法量は底径5.2cmである。外面はにぶい黄橙色で、内面は黒色処理されている。胎土は緻密である。内外面ともにロクロナデ行い、内面はミガキが施されている。底部は回転糸切りで切り離され、回転方向は右である。224は、0Z3－12グリッドⅡ層から出土した土師器小甕底部片である。法量は底径5.8cmである。内外面ともにぶい黄橙色を呈する。胎土は緻密である。底部は回転糸切りで切り離され、回転方向は右である。器面の摩耗が顕著である。

2）古代の石製品（226）

腰帯の石銙（巡方）1点が出土した。226は掘立柱建物SB2に近接する0Y2－22グリッド包含層から出土したもので、高さ3.05cm、幅3.34cm、厚さ0.52cm、重さ12.0gである。素材は蛇紋岩で、色調は緑灰色から暗緑色を呈する。表面および側面はよく研磨されているが、裏面は研磨による調整が施されていない。四隅及び中央の5か所に帯に固定するための貫通孔がある。本県の22遺跡から出土した石銙（丸鞆であれ巡方であれ）の装着技法は潜り孔による縫いつけが主体であり、貫通孔を穿たれた腰帯石銙の出土事例は胎内市中倉遺跡出土の丸鞆［藤巻2004］と本例の2例あるにすぎない。腰帯石銙の出土は、

阿賀町が位置する東蒲原郡では初例である。

3）中世の土器（225）

前述のように、中世の珠洲焼片1点が西区包含層から出土している。225は、珠洲焼片口鉢口縁部片である。口縁端部に櫛目による波状文が施されている。内外面とも灰色を呈する。胎土は緻密である。体部は欠失しているが、口縁形状および口縁の角度から片口鉢と判断した。出土地点で、SB1を検出しているが関連は不明である。口縁形態がわずかな甲盛りをみせる水平口縁であり、口縁端部に波状文を施すことから吉岡の編年の第Ⅳ期（13世紀後葉～14世紀中葉）に相当すると推測する［吉岡1994］。

5　自然科学分析（リン・カルシウム分析）

はじめに

新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字大坂上道西1,827番地ほかに所在する大坂上道遺跡は、阿賀野川左岸の段丘面（西山Ⅱ面）上に立地している。発掘調査の結果、調査区内には約5,000年前の沼沢火山の噴火による降下軽石の2次堆積層である鹿瀬軽石質砂層が認められ、その上・下位層から遺構・遺物が検出されている。東・西2か所の調査区のうち、東区では、上層からは主として平安時代の遺構・遺物が確認され、下層からは縄文時代前期以前の遺構・遺物が確認されている。一方、西区では、上層からは縄文時代中期初頭の遺構・遺物が確認され、下層からは東区と同様に縄文時代前期以前の遺構・遺物が確認されている。

本報告では、西区の上層より検出されたSK15が墓坑であるか検証するための判断材料を得ることを目的として、土壌理化学分析（リン・カルシウム分析）を行う。

A　試料の所見

試料は、SK15覆土から採取された土壌試料4点、比較対照試料として本遺跡の基本土層から採取された土壌試料3点の計7点である。以下に、各試料の概要を記す。

SK15

調査所見によれば、SK15は西区上層から検出されており、平面形は、南北を長軸方向とし長径約190cmを測る楕円形を呈する土坑とされる。覆土は、上部より明褐色土（1層）、灰黄褐色土（2層）、黄褐色土（3層）、黄褐色土（4層）に分層されている。本遺構内からは、南側から土器片のまとまりの端を重ねつつ市松模様状に並べた状態で2個体の土器が出土し、北側からは板状を呈する石皿が出土した。このことは、土坑の用途として屍被葬の墓坑である可能性が想定される。

試料は、土坑南側の一括土器直下（1層）及び土坑の中央部（2～4層）を対象として、各土層より1点の計4点が採取されている。

基本土層

本遺跡の基本土層は、調査所見によれば、下位より淡黄色～黄色粘土（Ⅶ層）、にぶい黄褐色～灰黄色粘土（Ⅵ層）、褐灰色～黒褐色粘土（Ⅴ層）、鹿瀬軽石質砂層（Ⅳ層）、にぶい黄褐色～黄褐色砂質土（Ⅲ層）、暗褐色土（Ⅱ層）、表土（1層）と分層されている。

試料は、前述したSK15が検出された西区OV18グリッド内の基本土層を対象に、鹿瀬軽石質砂層（Ⅳ

層)、にぶい黄褐色～黄褐色土（Ⅲ層)、暗褐色土（Ⅱ層）の各土層より計３点が採取されている。

本分析では、以上の計７試料を対象に土壌理化学分析（リン、カルシウム）分析を行う。

B 分析方法

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法，カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法でそれぞれ行う［土壌標準分析・測定法委員会編1986]。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

遺構・地点名	層位	採取日	土性	土色	P_2O_5(mg/g)	CaO (mg/g)
SK15	1層	20060621	SCL	10YR3/4　暗褐	1.04	1.31
	2層	20060621	SCL	2.5Y5/6　黄褐	0.64	1.44
	3層	20060621	SCL	2.5Y5/6　黄褐	0.85	1.51
	4層	20060621	SCL	2.5Y5/6　黄褐	0.76	1.84
基本土層（0V18グリッド）	Ⅱ層	20060621	SCL	10YR2/2　黒褐	1.98	1.91
	Ⅲ層	20060621	SCL	2.5Y4/6　オリーブ褐	0.93	0.67
	Ⅳ層	20060621	SCL	2.5Y5/6　黄褐	0.80	0.69

1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修　1967）による
2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編　1984）の野外土性による
SCL…砂質埴壌土（粘土15－25%、シルト0－20%、砂５－85%）

第３表　大坂上道遺跡　土壌理化学分析結果

C 結　　果

結果を第３表に示す。SK15覆土では、１層がやや腐植が集積した色調を示すほかは、いずれも黄褐色を呈する土壌である。リン酸含量は２～４層で0.64～0.85P_2O_5mg/gであるのに対し、１層では1.04P_2O_5mg/gとやや高い傾向にある。カルシウム含量については、1.31～1.84CaOmg/gと層位間での差はほとんど認められない。

一方、基本土層では、Ⅱ層は黒褐色、Ⅲ～Ⅳ層はオリーブ褐から黄褐色を呈する土壌である。リン酸含量は、Ⅱ層は1.98P2O5mg/gとやや高く、Ⅲ～Ⅳ層は0.80～0.93P2O5mg/gである。カルシウム含量は、Ⅱ層は1.91CaOmg/gとやや高く、Ⅲ～Ⅳ層では0.67～0.69CaOmg/gである。

D 考　　察

SK15覆土のリン酸含量は、２～４層で0.64～0.85P_2O_5mg/gであるのに対し、１層では1.04P_2O_5mg/gとやや高い傾向を示した。１層においてややリン酸が多い特徴を示す要因としては、土色等の所見から腐植集積量の多少に起因したものと考えられる。これに対し、基本土層のリン酸含量は、黒褐色を呈するⅡ層で1.98P_2O_5mg/gとやや高く、オリーブ褐から黄褐色を呈するⅢ～Ⅳ層では0.80～0.93P_2O_5mg/gを示した。一方、カルシウム含量は、SK15では1.31～1.84CaOmg/gと差異はほとん

ど認められず、基本土層ではⅡ層は1.91CaOmg/gとやや高いが、Ⅲ・Ⅳ層では0.67～0.69CaOmg/g程度であった。したがって、SK15と基本土層におけるリン酸・カルシウム含量は、遺構覆土内における大きな変化、遺構覆土と基本土層間における有意差を指摘するに至らない。

なお、土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例［Bowen1983；Bolt・Bruggenwert1980；川崎ほか1991；天野ほか1991など］があるが、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P2O5mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土などの既耕地では5.5P2O5mg/g［川崎ほか1991］という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0P2O5mg/gを越える事例が確認されている。

今回調査対象とされたSK15覆土では、リン酸含量はいずれも天然賦存量の範疇に入る値を示しており、比較対照とした基本土層との比較においても、リン酸が富化されたと判断される明瞭な差が認められなかった。このことから、SK15覆土内におけるリン酸の富化を示唆することはできない。カルシウム含量については、土壌の母材の由来により変動が大きいが、本分析で得られた含量は自然状態の範囲内であるといえる。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信　1991　「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」『中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量』　農林水産省農林水産技術会議事務局　p.28-36

Bowen,H.J.M.　1979　Environmental Cemistry of Elements.［浅見輝男・茅野充男（訳）1983環境無機化学－元素の循環と生化学－.博友社297p］

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.　1976　SOIL CHEMISTRY.［岩田進午・三輪睿太郎・井上陸弘・陽捷行（訳）1980　『土壌の化学』学会出版センター　p.309］

土壌標準分析・測定法委員会編　1986　『土壌標準分析・測定法』　博友社　p.354

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久　1991　「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」『九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量』　農林水産省農林水産技術会議事務局　p.23-27

農林省農林水産技術会議事務局監修　1967　『新版標準土色帖』

ペドロジスト懇談会編　1984　『土壌調査ハンドブック』　博友社　p.156

6　放射線炭素年代測定

はじめに

大坂上道遺跡は、新潟県阿賀町大字西字大坂上道西大坂上道西1,827番地ほかに所在し、阿賀野川左岸の段丘面（西山Ⅱ面）上に立地し標高83～88mを測る。発掘調査の結果、縄文時代および平安時代の遺構と遺物が検出された。本報告では、本遺跡の遺構の年代と地層の堆積年代の総合性を確認し、遺構の構築年代及び土器編年の基礎資料とするため、自然科学的手法を用いて検討する。

A　対象試料

測定対象試料は、15号土坑（SK15）の埋土1から出土した1号土器に付着した炭化物（IAAA-62339）と2号土器に付着した炭化物（IAAA-62340）である。

B　算出方法

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

2）BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は、次のように算出した。

　複数回の測定値について、χ^2検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ 13Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ 13Cの値を用いることもある。

　δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

5）14C年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では、IntCal04データベース［Reimer et al 2004］を用い、OxCalv3.10較正プログラム［Bronk Ramsey1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001］を使用した。

C　結　　果

15号土坑（SK15）の埋土1から出土した1号土器に付着した炭化物（IAAA-62339）の^{14}C年代は、4490±40yrBPであり、暦年較正年代（1σ）が3340BC～3210BC（44.6%）・3190BC～3150BC（12.2%）・3130BC～3090BC（11.4%）である。2号土器に付着した炭化物（IAAA-62340）の^{14}C年代は、4380±40yrBPであり、暦年較正年代が3080BC～3070BC（1.8%）・3030BC～2920BC（66.4%）である。ともに縄文時代中期前半に相当する。層序や出土遺物からの予想年代とも整合的であり、妥当な年代と考えられる。

遺構名	試料名	試料形態	BP年代および炭素の同位体比					Code No.
SK15	1号土器	炭化物	Libby Age（yrBP）	:	4,490	±	40	IAAA-62339
			δ ^{13}C（‰）、（加速器）	=	−24.79	±	0.57	
			Δ ^{14}C（‰）	=	−427.9	±	2.5	
			pMC（%）	=	57.21	±	0.25	
	δ ^{13}C の補正無し		δ ^{14}C（‰）	=	−427.7	±	2.4	
			pMC（%）	=	57.23	±	0.24	
			Age（yrBP）	:	4,480	±	30	
	2号土器	炭化物	Libby Age（yrBP）	:	4,380	±	40	IAAA-62340
			δ ^{13}C（‰）、（加速器）	=	−27.36	±	0.61	
			Δ ^{14}C（‰）	=	−420.5	±	2.6	
			pMC（%）	=	57.95	±	0.26	
	δ ^{13}C の補正無し		δ ^{14}C（‰）	=	−423.3	±	2.4	
			pMC（%）	=	57.67	±	0.24	
			Age（yrBP）	:	4,420	±	30	

第４表　大坂上道遺跡　放射性炭素年代測定結果

参考文献

Stuiver,M.and Polash,H.A.（1977）Discussion:Reporting of 14C data.Radiocarbon,19:355-363

Bronk Ramsey C.（1995） Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon, 37（2）425-430

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43（2A）355-363

Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger（2001） 'Wiggle Matching' radiocarbon dates , Radiocarbon, 43（2A）381-389

Reimer et al.（2004）IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon 46, 1029-1058

7 ま と め

本遺跡では、縄文時代の遺構・遺物、古代以降の遺構・遺物が検出された。ここでは、調査で得られた成果をもとに若干の考察を行い、まとめとする。

A　縄文時代の遺構・遺物と遺跡の性格

1）縄文時代の遺構について

遺跡の性格について

大坂上道遺跡では、上層から縄文時代中期初頭～前葉、下層から縄文時代前期以前の遺構・遺物が検出されている。上層遺構の検出位置は、調査区中央付近の0W18グリッド内とその周辺に集中している。この地点は、調査区東側の自然流路よりも0.8～1m程標高が高く、自然流路に向かって極めてなだらかに下る傾斜地となっている。洪水を予測して少しでも高いところに遺構を形成したのであろう。上・下層ともに遺構の数は少なく、住居もはっきりと確認されないことから、集落の中心部分からは外れているといえる。大坂上道遺跡［滝沢ほか1995］の調査結果と合わせて見ても、集落の中心はもう少し離れたところに存在すると思われる。

大坂上道遺跡の遺構で注目されるものはSK15である。遺物の出土位置や出土状況から、甕被葬の墓坑と考えられる遺構である。SK15が墓坑であるならば、石皿5点を遺構確認面に並べたSK17や立石が認められるSK26も墓標を伴った墓の可能性が出てくる。さらに付近の土坑も含め、この地点を墓域と考えることもできよう。しかし人骨が出土したわけではなく、積極的に墓域とする確証はないことから、現段階ではその可能性を指摘するに留める。

SK15について

甕被葬は「遺骸を埋葬するに際して、その頭部などに甕の完形品やその破片をのせたり被したりするもの」［斎藤1992］と定義されている。この定義によればSK15は、遺体の頭部の位置を思わせる出土位置と、それを覆い隠すような土器の出土状況から、甕被葬に伴う墓坑の可能性が高いといえよう。土器の出土状況は、本遺跡ではほかに類を見ないものである（第16図）。2個体それぞれの大破片のまとまりが、外面を上にし、端と端を重ねつつ市松模様状に並べられている。甕被葬の事例に限らず、このような出土状況の類例は今のところ見出せない。また出土土器のうち、1個体（図版13－2）は胴部中位～下位の半分と底部を欠い、もう一個体（図版13－1）は胴部下位が欠損する。甕被葬墓とされる事例は土器の胴下半部あるいは底部の欠損率の高い傾向が指摘されており［山本2003］、この事実もSK15が甕被葬墓である可能性を高めているといえよう。さらに墓であるという確証を得たく、覆土のウォーターフローテーションを行ったが骨片は確認できなかった。また土器下および土坑中央部の覆土のリン・カルシウム分析を試みたが、有効な結果は得られなかった。

第16図　SK15土器出土状況図

SK15では、北東隅から大型の石皿（68）が出土している。甕被葬にこだわらず、土器2個体と石皿が

セットで出土する事例は、縄文時代中期土壙の土器2個体の共伴例を検討した山口の論文［山口1999］にある。福島県いわき市大畑貝塚4号人骨［馬目1975］では、浅い不整形の土坑に、人骨に伴い系統の異なる完形土器2個体と石皿が出土している。この例は人骨に伴って出土した点で非常に有力な例となろう。また、群馬県渋川市半田南原遺跡292号土坑［大塚ほか1994］では人骨の出土はないが、浅い土坑にやはり異系統の深鉢2個体と大型の自然礫が出土している［山口1999］。深鉢は共に口縁を南、底部を北に向け横位に潰れた状態で出土した。これは、SK15において長軸がほぼ正確に南北に向くことに通じるといえよう。

前述の山口は、上記の2例をふまえて「東北地方南部の例から、北関東地方北西部一群馬県域の2個体を共伴する土壙例を墓壙とするには早計の趣もある」［山口1999］としながらも、「異系統の土器2個体が伴出した墓壙を至準的な例として置き、2個体が共伴する土壙のうち、石皿や大型自然石を見る例を極めて近い性格を有する土壙として位置付けられないだろうか」［山口1999］と述べている。SK15では遺構出土の土器は同系統のものであり、その点で異系統の土器2個体が出土した先の2例とは異なる。しかし、土器の出土状況や出土位置を踏まえて考えれば、SK15も大畑貝塚の人骨出土遺構に「極めて近い性格を有する土壙」といえよう。甕被葬の特徴を充分に有すること、人骨出土の墓壙に近い形態を持つことから、SK15は甕被葬の墓壙である可能性が高いと考える。

2）大坂上道遺跡出土の縄文時代中期初頭から前葉の土器について

本遺跡からは第Ⅰ群第1類土器とした北陸地方の新保・新崎式類似土器あるいは新保・新崎式の影響を受けているもの、第Ⅰ群第2類土器とした東関東の五領ヶ台式［今村1985］に類似、あるいは影響を受けているものが出土している。これらを軸に編年的位置付けを考えたい。

第1類については北陸（石川・富山県）編年［小島1974・1975、神保1977、加藤1988・1995］があり、それらと対比しながら組まれた寺崎［寺崎1995］、前山［前山・小野1994］、佐藤［佐藤1991・1997］等による新潟県の編年がある。第2類の東関東の五領ヶ台式土器については今村の論考［今村1985］が詳しく、これを参考に検討した。

まず、第2類の土器について考えてみる。本遺跡の土器はおそらく東関東の五領ヶ台Ⅱ式から五領ヶ台式直後型式並行期に位置づけられるだろう。五領ヶ台Ⅱ式系土器のなかでも古い様相のもの（93）と新しい様相のもの（17）が出土していることから2～3段階の変遷を予想できる。

第1類の編年的位置付けに関しては新保式から新崎式の様相をもつことから、代表的な遺跡で比較する。前述の3者［寺崎1995、前山・小野1994、佐藤1991・1997］は、新保式の新しいものとして豊原遺跡Ⅵ群、新崎式の古いものとして大沢遺跡ⅢA期を上げており、これらを基準に考えていく。佐藤編年では豊原遺跡Ⅵ群をⅡ期に、大沢遺跡ⅢA期をⅢ期とし北陸編年の新保第Ⅲ～Ⅳ段階、新崎Ⅰ段階［加藤1997］に並行させている。本遺跡の土器は豊原遺跡Ⅵ群のように三角陰刻技法の蓮華文や横位無文帯をもつこと、大沢遺跡ⅢA期のように爪形文や格子目文をもつものがあることから、中間的な様相がみられる。このことから本遺跡は新保式から新崎式の過渡的時期が主体であろう。

本遺跡の土器は前述のようにおおまかな時期はつかめるが、阿賀野川以北に中期初頭の遺跡が少ないこと、越後と会津の境に位置し地域性をとらえ難いことなどから、細かな変遷を把握することは困難である。ゆえに、個体毎の時期には触れない。

今回は佐藤の中越地方の編年［佐藤1997］としているものを主に参考にした。しかし、本遺跡の土器

と整合しない部分もある。中期初頭から前葉の遺跡は阿賀野川以北では朝日村下ゾリ遺跡［和田1990］・阿賀野市萩野遺跡［亀井ほか1994］・新発田市二タ子沢A遺跡［田中・鈴木ほか2003］等があるが、まだまだ少ない。加えて、本遺跡の第1群第2類A1種の土器はほかの報告書に類例を見出せなかった。しかし、この土器は北陸系の土器に見られる器形と文様構成をもちながら東関東の五領ヶ台式土器に使用されている交互刺突文を多用して文様を描いている。この土器は遺跡で3個体の出土がある。しっかりとした文様構成や器形をもつことから、断定はし得ないが地域的（阿賀野川流域）に分布する型式もしくは系統をもつ土器の可能性がある。今後、資料の増加を待って下越の中期初頭～前葉の編年（特に阿賀野川以北を考慮した編年）を整備する必要があると考える。

本遺跡の土器を時期あるいは地域的に近い遺跡と比較すると前回調査の大坂上道遺跡［滝沢ほか1995］では阿玉台式土器が出土していることなどから、同時期からやや新しい時期を含んでいると考える。阿賀野市萩野遺跡［亀井・鈴木1994］でも北陸系の土器が多く出土している。本遺跡と比較すると時期的にはやや古いものから同時期のものを含んでいると推測する。

3）石　　器

上層の石器は鹿瀬軽石質砂層の上層であるⅡ・Ⅲ層から出土し、分布は遺構、土器の出土状況と一致する。時期は、これらとの関係から縄文時代中期初頭～前葉に属すると考えた。下層の石器はⅤ層から出土し、遺構付近に散在する。所属時期は、層位から縄文時代前期以前に属すると思われるが、先述したとおり土器が出土していないため詳細は不明である。

器種構成は、上層で不定形石器（53％）、敲磨石類（18％）で、工作、加工、調理具の類が主体を占める。このほか、筒状石器、打製石斧、磨製石斧、砥石が一定量存在する。下層においても同様な傾向を示し、出土点数は少ないものの、不定形石器、敲磨石類で構成される。

石材は、上・下層ともに流紋岩、凝灰岩、頁岩、安山岩、花崗岩などが主に用いられ、遺跡周辺で採取できる石材を選択している。上層の剥片石器は流紋岩・凝灰岩（71％）、礫石器は凝灰岩・安山岩・花崗岩（72％）が主体を占める。また、特定の器種では遺跡周辺で採取できない石材が用いられ、磨製石斧は蛇紋岩が多用される。

殆どが包含層からの出土で、遺構からの出土は少ない。上層では、不定形石器、敲磨石類が主体であること、磨製石斧の刃部が欠損するものが多く存在することから、伐採、加工等の作業が推測される。しかし、大半が包含層からの出土であるため、その詳細は不明である。

下層は、炭化物の集積範囲（SX1001～1003）に敲磨石類が伴って出土している。このようなセット関係は猿額遺跡Ⅳ層直下面においても確認した（第Ⅳ章6節）。SX1001～1003については土壌を採取し、フローテーションをおこなったが、種子等の植物遺体は検出されなかった。したがって、その性格は不明な部分も多い。しかし、遺構周辺では敲磨石A類（26％）、G1類（36.8％）が主体を占めることから、「磨り」を主体とした作業が推測できる。また、遺構・遺物が、調査区の西側0V20・21グリッドの狭い範囲に出土すること、出土量が少ないことを考慮すると、短期間、或は一時的に利用された場であったと考える。

本遺跡では上述の通り、上・下層でその性格が異なると考えられたが、石器組成は共通する。石器組成については鈴木氏の論考［鈴木1999］がある。本遺跡の所在する阿賀町津川は、阿賀北を中心とする地域圏（ブロック2）に含まれる。この地域は縄文時代の各時期を通して「磨石類を中心に調理具優位の地

域」であり、本遺跡の石器群も同様の傾向を示すものであるといえよう。

B 平安時代の遺構・遺物と遺跡の性格

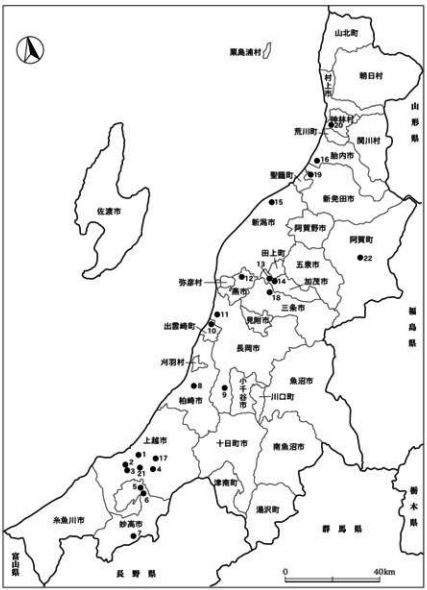
平安時代の遺構・遺物は、SB2、竪穴住居と推定されるSI55、SK52とこれに伴う少量の土師器および腰帯石銙（巡方）である。時期は、出土遺物から9世紀後半～10世紀初頭と推定される。同時期の遺跡として、東蒲原郡内では本遺跡から500m西に存在する阿賀町上野東遺跡［髙橋ほか2006］、同町大坂上道遺跡［滝沢ほか1995］、同町北野遺跡上層［髙橋ほか2005］がある。いずれも遺構が少ないか特定できず、遺物も大坂上道遺跡［滝沢ほか1995］でややまとまるものの多くはない。このように9世紀後半～10世紀にかけての時期で、山地や丘陵上に立地し、遺構や遺物がそれほど多く認められない遺跡として、県内の他地域では新発田市坂ノ上C遺跡［渡邊2001］、糸魚川市原山遺跡［寺崎ほか1988］、上越市横引遺跡［小池ほか1996］、同市柳平遺跡［小池ほか1996］、妙高市大堀遺跡［土橋ほか1996］、同市中ノ沢遺跡［土橋ほか1997］、同市関川谷内B遺跡［小池ほか1998］、同市東浦遺跡［髙橋保2006］などの類例をあげることができる。

本遺跡と阿賀町上野東遺跡［髙橋ほか2006］を比較すると、立地条件は、既述したように（第Ⅲ章1節A参照）津川盆地西縁の阿賀野川左岸段丘上の平坦面（西山Ⅱ面）にあり、遺構は東縁から検出されている。検出した遺構は、本遺跡が掘立柱建物1棟・竪穴住居1軒・土坑1基であるのに対し、阿賀町上野東遺跡［髙橋ほか2006］は竪穴住居1軒である。出土した遺物は、本遺跡では土師器を主体に出土しているが、前回調査の阿賀町大坂上道遺跡［滝沢ほか1995］の出土遺物を加えると須恵器・土師器が出土していることになり、この点でも上野東遺跡［髙橋ほか2006］と共通である。これらのことから、両遺跡は極めて近い性格を持つと推測できる。

前述したとおり、本遺跡で検出した建物跡や住居跡は、前回の調査範囲［滝沢ほか1995］をふくめ掘立柱建物1棟・竪穴住居1軒のみである。遺跡の立地・遺構の検出状況から本遺跡の性格は、段丘上の平坦面の縁辺に単独ないしは少数の建物・住居が散在する「離れ国分」［中山1976］、あるいは広い台地上の縁辺部に占地するものの斜面部にかけて建物や住居を構築しない形態を持つ農業民の小規模集落［橋口1985］に近似するといえよう。

9世紀後半から10世紀前半は律令体制から王朝国家体制へ変質する時期である［坂井1999］。この時期は、旧来の集落が解体し新規の集落の成立が活発になり、平地に散在する集落の形成と山地・丘陵への進出が指摘されている［坂井1999］。前述の上野東遺跡や本遺跡の平安時代の遺構・遺物は、このような流れの中に位置付けられるものと考える。いずれにしても、東蒲原郡内の平安時代における調査例の蓄積が今後の課題となろう。

本遺跡では腰帯石銙（巡方）が出土している。県内では22遺跡から巡方13点、丸鞆19点、鉈尾1点が出土している［藤巻2004］（第17図）。本遺跡の腰帯石銙（巡方）は建物や住居から北東方向へ約15m外れた遺物包含層から出土している。このことから、腰帯石銙（巡方）が掘立柱建物や竪穴住居を構築した人々の所有であるか否かは確定し得ない。しかし、本遺跡の腰帯石銙（巡方）は阿賀町で初めての出土例であり、本遺跡を特徴づける遺物であることは確かである。



番号	遺跡名	市町村名（旧市町村名）	遠方	丸鏡	鉇尾	備　考	番号	遺跡名	市町村名（旧市町村名）	遠方	丸鏡	鉇尾	備　考
1	宮野	上越市		1			12	江添E	燕市（吉田町）		1		
2	新田畑	上越市	1				13	鬼倉	加茂市		1		
3	四ツ屋	上越市	1	5		丸鏡のうち2点垂孔有り	14	馬越	加茂市		1		
4	高津	上越市	1				15	山木戸	新潟市	1		1	
5	杉明	妙高市（新井市）	1				16	中倉	中条町		2		丸鏡のうち1点は貫穴
6	宮ノ本	妙高市（新井市）	1			垂孔	17	越中田	上越市（三和村）		1		垂孔
7	関川谷内B	妙高市（妙高高原町）	1	3		遠方は細片種別不明1点	18	合屋	三条市		1		
8	小峯	柏崎市	1				19	王子山	新発田市（紫雲寺町）	1			
9	猿先	長岡市（小国町）	1				20	西部	神林村		1		
10	寺前	出雲崎町	1				21	狐宮	上越市		2		
11	八幡林	長岡市（和島村）	1				22	大坂上道	阿賀町（津川町）	1			5つの貫穴

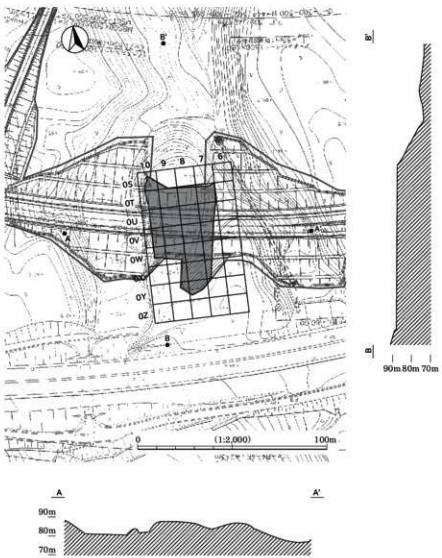
第17図　県内石鉇出土遺跡位置図及び一覧（［藤巻2004］資料から作成）

第Ⅳ章　猿額遺跡

1　調査の概要

A　遺跡の現況と微地形

本遺跡は、大坂上道遺跡の西方約100mに位置する。ともに津川盆地の西縁にあり、阿賀野川左岸の段丘上に所在する。現在、遺跡付近の段丘は東を西ノ沢川に、西は赤岩川に区切られ、この間は開析の結果5つの小谷となる。本遺跡が所在する段丘は南側を除く三方を小谷で区画され、東側の小谷を隔て大坂上道遺跡が所在する段丘に隣接する。奥行き170m、長さ40～70mの小さな段丘面が南から北へ伸び、その先端部は2股にわかれ、長さ20～30mの小さな尾根を形成している。本遺跡は、西側の尾根が東へ沢状に落ち窪む所に立地する。調査地の標高は83～88mである。



第18図　猿額遺跡　グリッド設定図（アミは本発掘調査範囲）

遺跡付近の段丘面は、かつて広葉樹に覆われ、炭焼きや畑地等に利用されていたが、昭和30年代以降、杉の植林が行われてきた。しかし、本遺跡の立地する段丘は、杉林が一部あるものの広葉樹中心の自然林で覆われていた。

B　グリッドの設定

確認調査の結果、今回の調査区は、既述のとおり周知の猿額遺跡［滝沢ほか1995］の範囲拡大であると判断された。そのため、猿額遺跡［滝沢ほか1995］のグリッドを基本に、北側に拡大する形で10m方眼の大グリッドを設定した。グリッドの基線は、磐越自動車道の道路法線センター杭に基づいている。STANo.545（X＝186715.408、Y＝81916.056）とSTANo.546（X＝186720.908、Y＝81816.207）を結ぶラインを基線X軸、これに直交するラインを基線Y軸とし、これに基づいてグリッドを設定した。おおよそX軸は東西方向、Y軸は南北方向であるため、X軸に平行するラインを東西ライン、Y軸に平行するラインを南北ラインとした。大グリッドの表示は、東西ラインでは北から南にむけ算用数字の0とアルファベット大文字のS～Wを組み合わせ、南北ラインでは東から西にむけて算用数字で区分して、これを組み合わせた。

また、大グリッドの中を2m方眼の小グリッドで区分した。小グリッドの表示は、前章の大坂上道遺跡と同じく、北東隅を基点に1～25の算数字を付した（第8図参照）。グリッドは、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、「0U9－24」のように表記した。

2　基本層序

既述のとおり本遺跡は大坂上道遺跡の西方約100mに位置し、同じ段丘面（西山Ⅱ面）上に立地することから、基本層序は大坂上道遺跡とほぼ同じである。しかし、今回の調査範囲内では、南から北へ緩やかに傾斜する尾根状の段丘平坦面と沢状の窪地があることから、地点により土層の厚薄が見られる。特に、鹿瀬軽石質砂層（基本層序Ⅳ層）の堆積に著しい違いが見られた。

以下、基本層序Ⅰ～Ⅶ層までを説明する。

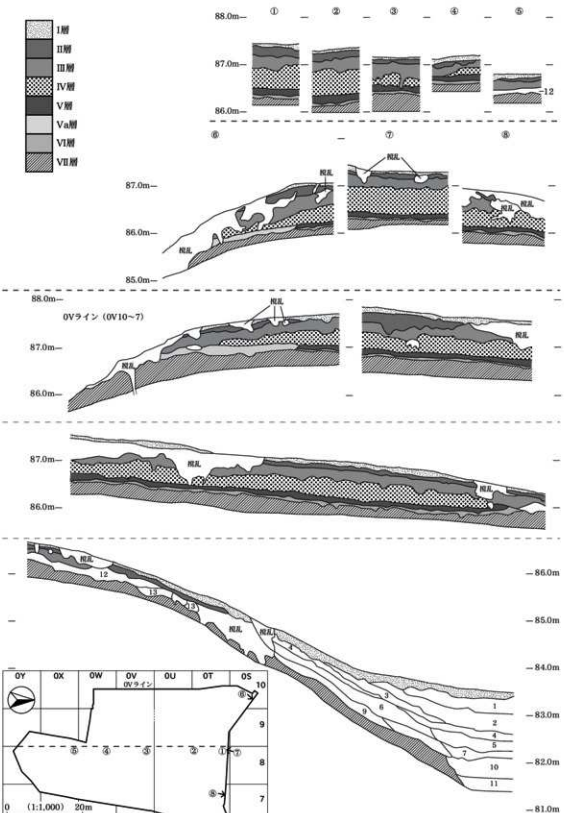
Ⅰ　層：表土。層厚5～15cmの黒褐色土（10YR2/3）である。　草木根が多く、上層は未分解腐植土となる。粘性・しまりともにない。沢状の窪地では15～25cmほど堆積する。

Ⅱ　層：層厚0～15cmの暗褐色土（10YR3/4）である。粘性はややあるが、しまりはない。縄文時代中期以降の遺物包含層であるものの、遺物は少ない。

Ⅲ　層：層厚0～35cm、にぶい黄褐色から黄褐色の砂質土（10YR5/4～5/6）。粘性・しまりともにない。Ⅳ層への漸移層である。

Ⅳ　層：層厚0～55cm、黄褐色から黄色の砂質土（10YR6/6～2.5Y8/8）。鹿瀬軽石質砂層。福島県金山町沼沢火山に起源を持つ火山灰の二次堆積層。約5,000年前の堆積とされている。粘性はないが、しまりはある。尾根状の段丘平坦面では、北側の0Tグリッド列付近で厚く堆積し、南側へ向かうほど薄く堆積する。崖部や沢状窪地およびその斜面部では堆積していない。

Ⅴ　層：層厚0～15cm、褐灰色から黒褐色の粘土（10YR5/1～2.5Y3/1）。粘性・しまりともにある。旧石器、縄文時代前期の遺物包含層で、上面から縄文時代前期末葉の遺物が出土している。0V8・9グリッド、0W8・9グリッド、0X9グリッドの平坦面では黒味が強くなる。



第19図　猿頬遺跡の基本層序

Ｖａ層：Ｖ層とⅦ層の混じり土。第10グリッド列の斜面肩部に堆積する。
Ⅵ　層：層厚５～10cm、にぶい黄褐色から灰黄色の粘土(10YR5/3～2.5Y6/2)。粘性・しまりともにある。Ⅶ層への漸移層で、２～３cmの小礫を含む。
Ⅶ　層：地山。淡黄色から黄色の年度(2.5Y8/4～8/8)。粘性・しまりともにある。5cm程の風化礫を含む。

なお、大坂上遺跡群・前回調査を行った大坂上遺跡、猿額遺跡［滝沢ほか1995］との基本層序の対応関係は、「第Ⅲ章大坂上遺跡２基本層序」のとおりである。

3　遺　　構

A　概　　要

猿額遺跡は、鹿瀬軽石質砂層（基本層序Ⅳ層）を挟み上層と下層に区別される。上層（基本層序Ⅱ層）では縄文時代中期初頭～前葉以降、下層（基本層序Ⅴ層）では縄文時代前期末葉以前の遺構・遺物を検出した。遺構の総数は、上層ではピット２基、下層では土坑６基、ピット98基、焼土４基、焼土・炭化物集中１基、炭化物集中７基、集石土坑１基、土器集中地点２か所、遺物集中域１か所である。上層の遺構はⅣ層上面で、下層の遺構のうち、焼土４基、焼土・炭化物集中１基、炭化物集中６基、集石土坑１基、土器集中地点１か所は下層（基本層序Ⅴ層）上面で、遺物集中域１か所はＶａ層上面で、これ以外の下層遺構はⅥ層上面で検出した。本報告では、下層（基本層序Ⅴ層）及びＶａ層上面で検出した遺構を、これ以外の下層の遺構と区別し、Ⅳ層直下の遺構として別項をたてて記述する。

下層遺構は、Ⅳ層直下の遺構が0Uグリッド列から北側に集中しているのに対し、下層の遺構は0Uグリッド列から南側で、そのほとんどを検出した。Ⅳ層直下の遺構は、出土遺物から縄文時代前期末葉の所産と推測する。

なお、遺構名の略号および遺構番号は大坂上遺跡に準ずる。

B　遺構各説（図版31～38、69～75）

1）上層の遺構

上層の遺構は、ピット２基のほか、風倒木痕２か所を検出した。風倒木痕から遺物は出土せず、記述を省略した。遺構構築の時期は、検出層位・覆土・周辺出土土器から縄文時代中期以降と推測する。遺構・遺物の出土状況から人間の活動痕跡は希薄であり、詳細は不明である。

ピ　ット

P1（図版31・35・70）　0U9グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形で、径約53cm、深さ約35cm、断面形は台形状である。覆土は４層に分けた。１層から４点の礫、４層から25点の小礫および石英質の剥片が出土している。

P4（図版31・35・70）　0T9グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は円形で、径約40cm、深さ約36cm、断面形は箱状で、東側の一部はテラス状になっている。覆土は単層で、炭化物を多量に含む。遺物は出土していない。

2）Ⅳ層直下の遺構

Ⅳ層直下の遺構は、前述のとおり、焼土４基、焼土・炭化物集中１基、炭化物集中６基、集石土坑１基、

土器集中地点1か所、遺物集中域1か所である。これらの遺構は、沼沢火山の噴出物の二次堆積層である鹿瀬軽石質砂層直下のV層及びVa層上面で検出したものであり、検出状況から同時期の所産と判断できる。遺構構築の時期は、遺構内出土土器・周辺出土土器から縄文時代前期末葉であり、後述する放射性炭素年代測定の結果とも整合性がとれている。また、Ⅳ層直下の遺構は集石土坑1015、炭化物集中1014を除きOS～OTグリッド列に集中しており、中には調査区外に続くものもあることから、本遺跡北側の段丘先端部へと遺跡が展開していく可能性がある。

焼　土

焼土1003（図版32・33・35・71）　OT9グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径325cm、短径147～165cm、深さ6cmである。覆土は3層に分けた。1層にはⅣ層土がブロック状に混じる。遺物は、3層から縄文土器2点、不定形石器1点（13）、剥片1点、砥石1点（40）が出土している。

焼土1004（図版32・33・35・71）　OT9グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長径59cm、短径42cm、深さ9cmである。覆土は2層に分けた。1層は著しく被熱している。遺物は、遺構確認面から縄文土器1点、礫1点が出土している。

焼土1011（図版32・33・35）　OS9グリッドに位置する。北側は調査区外へ伸び、西側も試掘確認トレンチ1によって欠いているため全容は不明であるが、平面形は隅丸長方形と推測する。実測した範囲内において、長径112cm、短径100cm、深さ10cmである。覆土は2層に分けた。遺物は、1層から縄文土器1点、不定形石器1点（18）、剥片1点、2層から石鏃1点（7）が出土している。

焼土1012（図版32・33・35）　OS9グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、径113cm、深さ4cmである。覆土は単層である。遺物は、縄文土器1点、剥片1点が出土している。

焼土・炭化物集中

焼土・炭化物集中1006（図版32・33・35・71）　OT8～9グリッドに位置する。平面形は方形で、径278cm、深さ5cmである。覆土は2層に分けた。東側に位置する1層は焼土である。遺物は、2層から縄文土器1点（5）、磨製石斧1点（24）、剥片1点が出土している。

炭化物集中

炭化物集中1005（図版32・33・35・71）　OT9グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。長径175cm、短径82cm、深さ13cmである。覆土は2層に分けた。遺構の南西縁部に炭化物集中地点を持つ。遺物は、出土していない。

炭化物集中1007（図版32・33・36・71）　OT8グリッドに位置する。平面形は円形で、径290cm、深さ5cmである。覆土は単層である。遺物は、確認面で径約33cmの礫1点、1層から縄文土器3点（6）、剥片2点が出土している。

炭化物集中1008（図版32・33・36・71）　OT8グリッドに位置し、炭化物集中1007の北東に隣接して検出した。平面形は楕円形で、長径240cm、短径155cm、深さ10cmである。覆土は3層に分けた。遺構中央に長径96cm、短径68cmの楕円形の炭化物集中地点（覆土2）を持つ。その上に被熱・炭化した少礫を多量に含む覆土1が南西方向に流れるように堆積している。遺物は、1層から縄文土器3点、2層から筒状石器1点（22）、敲磨石類2点（27）、3層から縄文土器3点（7）、敲磨石類1点（29）、剥片2点、径37cmの礫が出土している。

炭化物集中1009（図版32・33・36・71）　OT8グリッドに位置する。北東側が調査区外に伸びるため全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると推測する。実測した範囲内において、長径245cm、

短径119cm、深さ5cmである。覆土は2層に分けた。中央部に炭化物集中地点を持つ。遺物は、2層から剥片1点が出土している。

炭化物集中1014（図版32・33・36）　0V9グリッドに位置する。平面形は不整形で、長径334cm、短径171～236cm、深さ6cmである。覆土は単層である。遺物は、剥片が4点出土している。

炭化物集中1025（図版32・33・36）　0S9グリッドに位置する。北東側が調査区外へ伸びるため全容は不明であるが、平面形は隅丸方形ないし隅丸長方形と推測する。断面形は台形状で、実測した範囲において、径124cm、深さ10cmである。覆土は単層である。遺物は、縄文土器16点（8・9）が出土している。

土器集中地点

土器集中地点を1か所検出した。明確な掘り形が確認できなかったため、土器集中地点とした。

土器集中地点1001（図版32・33・36・69）　0T9－20グリッドに位置する。北側3mに焼土1003が隣接する。遺物は、29×36cmの範囲に集中し、いわゆる金魚鉢形土器（4）を横位の状態で検出した。時期は、出土土器から大木6式期新段階［松田2006］に所属する。

遺物集中域

遺物集中域を1か所検出した。本遺跡では、上層・下層を含め、本例のように崖際の比較的狭い範囲に遺物が集中することはなく、捨て場の可能性がある。

遺物集中域1002（図版32・33・36・71）　0T10－6～8・11～13グリッドに位置し、調査範囲の北西側の崖際で検出した。遺物は、縄文土器80点（16・22・30）、不定形石器4点（20）、礫器1点（26）、敲磨石類1点、剥片19点、石皿1点、台石1点（37）が出土している。

集石土坑

集石土坑1015（図版32・33・37・72）　0U9グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形状に掘り込まれ、径160cm、深さ11cmである。覆土は単層で、下位には径約10～30cmの比較的大きな礫が、その上に径約3～10cmの少礫が敷き詰められている。礫の一部には被熱しているものもある。遺物は、径約30cmの台石1点（38）が出土している。

3）下層（Ⅴ層）の遺構

下層（Ⅴ層）の遺構は、土坑6基、ピット98基、炭化物集中1基、土器集中地点1か所である。これらの遺構はⅥ層上面で検出した。0U9グリッドで検出した土坑2基を除き、0V～0W9・10グリッドに位置している。特にピット群は南に伸びる可能性がある。遺構の時期は、検出層位、遺構内出土土器、周囲の下層内出土土器から縄文時代前期末葉以前と推定したが、下層（Ⅴ層）内出土土器が少なく、明確でない。

土　　坑

SK1010（図版32・34・37・72）　0U9グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出したが、覆土から下層遺構と判断した。平面形は円形、断面形は台形状を呈し、径98cm、深さ32cmである。覆土は6層に分けた。遺物は、6層から径5cmの礫1点、5層から径約22cmの台石1点（68）と緑色凝灰岩の板状礫が出土している。

SK1026（図版32・34・37・72）　0U9グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈し、長径128cm、短径92cm、深さ13cmである。覆土は2層に分けた。遺物は確認面で剥片1点が出土している。

SK1027（図版32・34・37・72・74）　0V9グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。北側を欠くが、平面形は円形と推定し、径推定80cm、深さ20cm、断面形は台形状である。覆土は3層に分けた。底面から径30cmの礫1点が出土している。

SK1039（図版32・34・37・74・75）　0W9～10グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状で、長径58cm、短径45cm、深さ5cmである。覆土は単層で、遺物は出土していない。

SK1044（図版32・34・37・73・74・75）　0W9グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は半円状、長径88cm、短径60cm、深さ20cmである。覆土は2層に分けた。遺物は出土していない。遺構東側でP1044により切られている。

SK1113（図版32・34・37・74）　0V9グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状であるが、西側は袋状に掘り込まれている。長径77cm、短径50cm、深さ43cmである。覆土は5層に分けた。遺物は出土していない。

炭化物集中

炭化物集中1096（図版32・34・37・73・74）　0V9グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。平面形は、北西から北東へL形の軸をもつ不正形、断面形は弧状、長径85cm、短径79cm、深さ10cmである。覆土は3層に分けた。3層は径約30cmの円形の焼土部、1層は炭化粒を多量に含みL形に広がる。遺物は出土していない。

土器集中地点

土器集中地点を1か所検出した。明確な掘り形が確認できなかったため、土器集中地点とした。高低差約7cmの範囲で土器片が集中していた。

土器集中地点1024（図版32・34・37・38・73）　0W9－22グリッドに位置している。90×74cmの範囲内に、約50点の土器片が出土した。土器は、前期前葉の土器（31・32）、前期末葉以前の土器（29）、前期末葉の土器（30）である。前期末葉の土器は、遺物集中域1002（Ⅳ層直下の遺構）出土の土器と接合した。

ピット群

下層から98基のピットを検出した。検出地点からⅠ・Ⅱの2群に分けて概説し、個々のピットについては特段の事由がある場合を除き、記述を省略した。それぞれのピット群周囲の包含層から縄文土器や石器が出土している。しかし、掘り形や硬化面、炉跡は検出できず、覆土も明確な違いが無いことから、住居の可能性はあるもののその範囲を特定することは難しく、図版の破線は推定である。ピット群は、検出状況から南側へ伸びる可能性がある。

ピットⅠ群（図版32・34・38・74）　0V9～10グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。ピット1107～1112、ピット1114～1119、ピット1121～1122の14基により構成される。平面形は円形から楕円形、断面形は台形状で、径約20～40cm、深さ約4～18cmである。覆土は単層で、遺物は出土していない。北東3mの地点SK1027、北1mの地点でSK1113、南東1.4mの地点で炭化物集中1096を検出している。

ピットⅡ群（図版32・34・38・73・74・75）　0V9～10グリッド南側から0W9～10グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。ピット1016～1023、ピット1029～1038、ピット1040～1043、ピット1045～1084、ピット1086～1095、ピット1097～1106、ピット1120、ピット1124の84基

により構成される。平面形は円形ないし楕円形、断面形は台形状、径16～60cm、深さ12～26cmである。覆土は単層あるいは2層に分れ、ピット1035から不定形石器1点（53）、ピット1075から剥片1点が出土している。

4　遺　　物

A　概　　要

猿頬遺跡の遺物は大坂上道と同様に鹿瀬軽石質砂層を挟んだ上下層から出土している。出土した遺物の総数は全体で縄文土器約11.1kg、石器678点である。層位別では上層が縄文土器約0.3kg、石器43点で、下層が縄文土器10.8kg、石器635点である。下層のうちⅣ層直下・Ⅴａ層から出土したものは縄文土器7.7kg、石器314点で、Ⅴ層内から出土したものは縄文土器3.1kg、石器321点である。

Ⅳ層直下の主体となる土器は縄文時代前期末葉に所属する。そして石器の所属時期は縄文時代末葉と推定する。Ⅴ層内の主体となる土器は縄文時代前期前葉に所属する。石器の所属時期も縄文時代前期前葉と推定する。このほかに旧石器時代の遺物も出土している。遺物出土分布状況は「B 縄文土器」「C 石器」で詳述するが、縄文土器と石器はほぼ同様の出土傾向がみられた。以下縄文土器、石器の順に説明する。

B　縄 文 土 器

鹿瀬軽石質砂層の上層の土器は北側中央（0U8・9、0T8・9グリッド）周辺にまばらに出土し、0V9－14グリッドから最も多く出土している。下層の土器の出土分布状況は第20図・第21図のようになる。Ⅳ層直下・Ⅴａ層では北西側0T9～10グリットに集中している（第20図）。Ⅴ層内では南側の0V9～10・0W9～10の遺構に重なるように出土したが、遺構認識後のその覆土からは出土しなかった（第21図）。

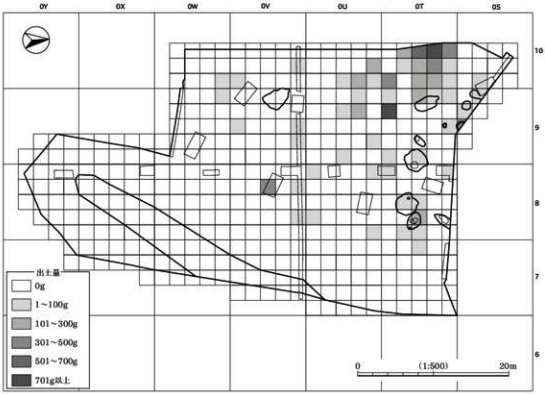
1）資料の提示

本遺跡は前述の大坂上道遺跡と同じく、検出した遺構が少ないため、遺構から出土したものは、比較的細片のものまで図化・掲載した。包含層出土土器は前期前葉、前期後葉～末葉である。文様が判別できるものや類例の少ないものを中心に図化・掲載した。資料の提示は実測図・写真・観察表で行い、「3）土器各説」で詳述した。なお、観察表の記載項目の説明については第Ⅲ章B1を参照されたい。

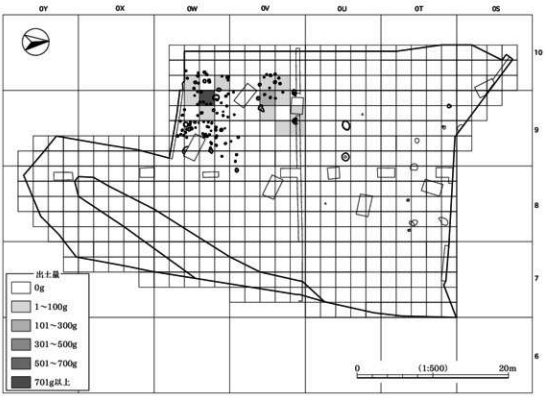
2）分　　類

本遺跡も大坂上道遺跡と同じく越後と会津の境に位置することから、今までに発掘された縄文土器の様相は複雑なものとなっている。本類においてもその例から外れず、特定の型式が抽出しにくい。

本遺跡は縄文時代前期末葉に属す土器が主体的に出土している。これ以外の時期は少量である。第Ⅰ群土器は縄文時代前期前葉に所属するもの。第Ⅱ群土器は縄文時代前期末葉に所属するもの。第Ⅲ群土器は縄文時代前期末葉以前で、時期の不明なもの。第Ⅳ群土器は縄文時代中期初頭以後で時期の不明なものである。周辺で調査された上野東遺跡・現明嶽遺跡［髙橋ほか2006］、前回調査の大坂上道遺跡［滝沢ほか1995］を参考に系統ごとに大別し、さらに文様で細分した。文様分類は主となる文様や施文原体などを考慮した。



第20図　猿額遺跡　下層（Ⅳ層直下・Ⅴa層）出土分布図



第21図　猿額遺跡　下層（Ⅴ層）出土分布図

第Ⅰ群土器　縄文時代前期前葉に所属するもの。

布目式～新谷段階（新谷遺跡出土4～7類［前山1994a］の土器）の土器である。破片のみの出土なので確実なことは言えないが類例としては、朝日村アチヤ平中・下段遺跡［滝沢ほか1998］・胎内市二軒茶屋遺跡［水沢2003］・胎内市宝塔山（現中倉）遺跡［伊藤・戸根・小野田1980］・新潟市布目遺跡［小熊1994］・新潟市新谷遺跡4～7類土器［前山1994a］がある。繊維を含有する土器は新潟県では前期前葉以降にもみられるが、本遺跡では繊維を含有する幅の狭い羽状縄文土器を本群に含めた。

第1類（33・34）　環付縄文（ループ文）を施文するもの。

全面に環付縄文の環の部分を数段に渡って施文する。新潟県下越地方ではアチヤ平遺跡［滝沢ほか1998］、胎内市宝塔山（現中倉）遺跡［伊藤・戸根・小野田1980］等で出土している。

第2類（10）　羽状縄文を施文するもの。

ほかの時期でも羽状縄文はあるが、繊維を含有し幅の狭い羽状縄文を施文するものをここに含めた。

第Ⅱ群土器　縄文時代前期末葉に所属するもの。

器形分類

主体的に出土している第Ⅱ群土器の深鉢の器形には複数のバリエーションが認められることから、器形分類をおこなった（第22図）。前回調査［滝沢ほか1995］と出土土器の時期が重なることから、同様の器形も出土している。

第22図　器形分類図

A器形　バケツ形を呈するもの。

B器形　胴部が球胴形［今村1985］のもの、もしくは金魚鉢形を呈するものである。口縁部は胴部から屈曲して直立するものと、屈曲して大きく外へ開くものがある。

C器形　胴部がまっすぐ立ちあがり、頸部がやや屈曲し口縁が外反するもの。

文様分類

第1類（11・12）　東関東地方を中心に分布する興津式に類似するもの。

前回調査の第Ⅱ群土器に分類されているもの［滝沢ほか1995］。沈線で文様を描き、櫛歯状刺突を施すもの。

第2類（4・7・13～16・30）　東北地方を中心に分布する大木6式に類似するもの。

前回調査の第Ⅲ群土器に分類されているもの。主体は大木6式になるだろう。

A種（7・13～15）　沈線の側縁に爪形刺突を施したもの。

前回調査の6類、法正尻遺跡の第Ⅱ群－1類－i種［松本1991］に類似する。

B種（4）　爪形刺突をもつ幅5mm程度の隆帯（以下結節浮線文）を横位・斜位に施したもの。

前回調査の4類に分類されているもの。

C種（16・30）　地文以外は沈線文のみで文様が描かれているもの。

前回調査の5類、法正尻遺跡の第Ⅱ群－1種－g種［松本1991］に類似する。

第3類（17～19）　系統不明なもの。

第4類（5・6・8・9・20～26）　縄文のみ施したもの。

第Ⅲ群土器（29）　縄文時代前期末葉以前で時期の不明なもの。

下層から出土していることから縄文時代前期末葉以前のものと考える。主体となる前期末葉もしくは、前期前葉に属するかの判断が難しいもの。

第Ⅳ群土器（1～3）　縄文時代中期初頭以降で時期の不明なもの。

上層から出土していることから縄文時代中期以降のものと考える。

3）土器各説（図版39・40・76）

分類や観察表で触れていない部分について記載する。上層出土、Ⅳ層直下・Ⅴa層遺構出土、Ⅳ層直下・Ⅴa層出土、Ⅴ層遺構出土、Ⅴ層出土の順でおこなった。

上層出土（1～3）

第Ⅳ群土器（1～3）　縄文時代中期初頭以降で時期の不明なもの。

2は撚糸Lを縦に施す。木目状撚糸文になるのかもしれない。3は内外面が研磨されている。後期中葉に見られるような器面である。

下層（Ⅳ層直下・Ⅴa層）遺構出土（4～9）

土器集中地点1001（4）

4は口縁を波状にし、結節浮線文で口縁部の鋸歯状、胴部中位の区画線、胴部上半の円形、弧状、縦の鋸歯状などの文様を描く。類例は現明嶽遺跡［髙橋ほか2006］にもある。

炭化物集中1008（7）

器形はいわゆる金魚鉢形（B器形）になると考える。主となる文様は胴部中位の張り出し部を沈線で区画し、上半に渦巻きや鋸歯状の沈線で文様を描き、沈線の側縁に爪形刺突を施す。地文は横位の結節縄文である。22と同様の地文・胎土で、内面を一部磨いていることも共通することから同一個体の可能性がある。

炭化物集中1025（8・9）

8・9は胎土中に雲母を多く含有し、結束羽状縄文をもつ。

下層（Ⅳ層直下・Ⅴa層）出土（10～28）

第Ⅰ群土器（10）　縄文時代前期前葉に所属するもの。

10は口縁になにかで擦った跡が沈線のように観察できる。

第Ⅱ群土器（11～28）　縄文時代前期末葉に所属するもの。

第1類（11・12）　東関東地方を中心に分布する興津式に類似するもの。

11・12は平行沈線と櫛歯状刺突により文様を描く。本類の土器は前回調査大坂上遺跡［滝沢ほか1995］、現明嶽遺跡［髙橋ほか2006］でも出土している。

第2類（13～16）　東北地方を中心に分布する大木6式に類似するもの。

13は沈線を斜行させ、その側縁にやや深めに爪形刺突を施している。14は沈線を渦巻状に施し、その一部の側縁に爪形刺突を施す。13～15は共に内面を磨いている。16は口縁に突起をもち、口縁部がやや肥厚する。口縁部文様は沈線を斜行、弧状、「H」字状に施し、口縁部の肥厚下に刻み状の沈線を施す。地文は結束羽状縄文の両端を結節し横位に施している。

第3類（17～19）　系統不明なもの。

17は口縁端部に斜めに刻みを入れ、18は爪形刺突を施している。17・18は共に口縁に平行沈線を巡らせている。19は口縁と頸部に刻みを施す隆帯を巡らせ、その隆帯間に幅3mm程度の斜行沈線を施す。21と24に似た胎土である。

第4類（20～26）　縄文のみ施したもの。

22は傾き・地文・胎土・内面を一部研磨していることなどから7と同一個体の可能性がある。27・28は底部で分類はしていない。27は底部に網代痕をもつ。28は丸底気味の底部である。しかし、底部には擦った跡などがみられず、土製品のようにもみえる。

下層（Ⅴ層）**遺構出土**（29～32）

土器集中1024（29～32）

29は波状口縁になり、波頂部と波低部の下に瘤状突起を2個並べ、それを囲むように縄文Lを蕨手状に押捺する。胎土中には土器を砕いたような破片が混入している（図版76－29）。この土器は2とおりの時期が考えられる。①前期初頭：撚糸側面圧痕、繊維を含む脆い胎土、一緒に出土した31・32からすると花積下層式～二ツ木式に考えられる。しかし、類例は見つけられなかった。②前期末葉～中期初頭：類例として豊原遺跡の第12図378があり、第Ⅴ群1期で中期前葉古段階に位置づけられている［前山・小野1994］。寺崎は剣野E古段階とし、新保Ⅰ式に並行させている［寺崎1995］。類例や文様から②の可能性が高いと考えている。さらに②とすると鹿野瀬軽石質砂層の下層から出土していることからこの土器は前期末葉に所属するとも考えたい。豊原遺跡出土のものより系統的に古いものなのか、今後の課題であろう。30は口縁と頸部に沈線を巡らせ、間に短沈線を上下交互に施している。31は羽状縄文を等間隔に施している。32は底部付近の破片で丸底になる可能性がある。

下層（Ⅴ層）**出土**（33・34）

第Ⅰ群土器　縄文時代前期前葉に所属するもの

第1類（33・34）　縄文環付（ループ文）を施文するもの。

33・34は環付縄文の端部を幅狭等間隔に施している。34は縄文Rのループ文と考えるが、摩耗が激しく、縄文RLのループ文の可能性もある。

C　石　　器

出土した石器の総数は678点で、大坂上道遺跡と同様に鹿瀬軽石質砂層を挟んだ上下の層から出土した。その内訳は、上層43点、下層635点（Ⅳ層直下314点、Ⅴ層中321点）である。各層の石器出土状況は以下の通りである。

上層は出土点数が少なく、調査区に散在して分布する。不定形石器、打製石斧、敲磨石類、石核が出土した。時期は出土層位から縄文時代中期以降に所属するが、土器・石器共に出土点数が少ないため、詳細は不明である。

Ⅳ層直下は遺構が集中する0T8・9グリッドから段丘北西斜面0T10グリッドにかけて多く分布し、段丘東側斜面から谷部分にかけては極端に少なくなる。石鏃、石匙、不定形石器、筌状石器、磨製石斧、礫器、敲磨石類、台石、石核が出土した。所属時期は出土地点、層位、土器の出土状況から、縄文時代前期

末葉と推定する。Ⅴ層内で出土した石器は、段丘の平坦部にあたる0Sから0W9グリッドにかけて多く分布し、段丘東西の斜面からの出土は極端に少なくなる。石鏃、石錐、石匙、不定形石器、筌状石器、磨製石斧、敲磨石類、台石、石核が出土した。所属時期は出土地点、層位、土器の出土状況から、縄文時代前期前葉から末葉と推定する。このほか、Ⅴ層からは旧石器時代の遺物が8点出土した。いずれも段丘平坦面から出土し、北側0T9グリッド、南側0V9・10から0W9・10グリッドの2か所に分布する。出土層位はⅣ層直下からⅤ層下位までの間である。ナイフ形石器、掻器、石斧などが出土した。

1）資料の提示と記述の方法

資料の提示、記述の方法については、大坂上遺跡の石器（第Ⅲ章4節D）を参照されたい。

上層

	不定形石器	打製石斧	敲磨石類	石核	剥片類	合計
遺構内出土	0	0	0	0	8	8
遺構外出土	1	1	10	1	22	35
合計	1	1	10	1	30	43

Ⅳ層直下

	石鏃	石匙	不定形石器	筌状石器	磨製石斧	礫器	敲磨石類	石皿	台石	砥石	石核	剥片類	合計
遺構内出土	1	0	2	0	1	0	10	0	1	1	0	53	69
遺構外出土	3	1	34	5	1	1	33	1	1	0	11	154	245
合計	4	1	36	5	2	1	43	1	2	1	11	207	314

Ⅴ層

	石鏃	石錐	石匙	不定形石器	筌状石器	磨製石斧	敲磨石類	台石	石鏃失敗品	未成品	石核	剥片類	旧石器	合計
遺構内出土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	37	0	37
遺構外出土	3	4	1	22	5	1	27	3	3	1	8	198	8	284
合計	3	4	1	22	5	1	27	3	3	1	8	235	8	321

第5表　猿頬遺跡　器種別石器出土数

2）分　　類

石鏃、石錐、不定形石器、筌状石器、磨製石斧、敲磨石類、石皿、砥石、石核の分類は大坂上遺跡と共通する。上記した以外の石器には、石匙、礫器、台石があり、以下で説明を加えた。旧石器時代の石器については各器種の点数が少ないため、「3）各説」の項で説明を加える。

石　　匙

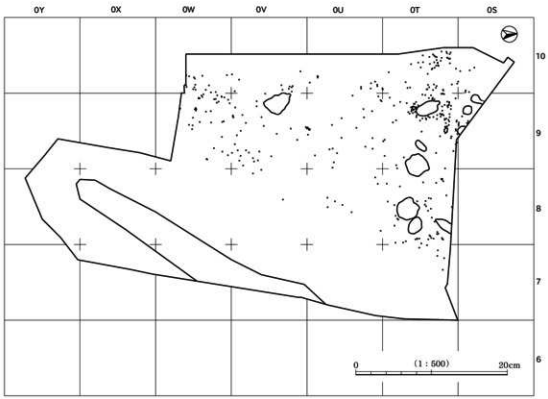
抉りのあるつまみと刃部を有する剥片石器である。つまみ部を上、刃部を下にしたときの刃部の長さと幅の比較、刃部の位置で細分した。今回の調査では、刃部の長さが幅より大きく、刃部が片面調整のもの（A類）、刃部の長さが幅とほぼ同じもの（B類）が出土した。

礫　　器

「礫の一部に打撃を加え、簡単な加工を加えたのみの石器」［鈴木1991］を礫器とした。

台　　石

大型で扁平な礫の正裏面に敲打痕のみが認められるもの。石皿、砥石とは磨面、擦痕の有無により区別した。敲磨石E類とは大きさによって区別し、長さ15cm以下のものを敲磨石E類、それ以上のものを



第23図　猿頬遺跡　下層（Ⅳ層直下）石器出土分布図

台石とした。

3）各　　説（図版41～46、77～81）

上　　層（図版41・77）

不定形石器（1）

A類1点が出土した。裏面縁辺に剥離調整が施される。

打製石斧（4）

1点出土した。楕円形礫を素材とし、両側縁から下縁にかけて剥離調整を施している。

敲磨石類（2・3）

A類1点、C1類4点、G1類4点、G2類1点の計10点出土した。2はG1類で、楕円形礫の側縁に幅広の磨面が認められる。3はG2類で、礫の端部に深い敲打痕が観察される。

下　　層（Ⅳ層直下）（図版41～43・77～79）

石鏃（5～8）

A類1点、B類2点、E類1点の計4点が出土した。6・7はB類である。6は先端部、7は基部側を欠損する。8はC類で、正裏面にはアスファルトと思われる付着物が観察される。

石匙（9）

A類1点が出土した。縦長剥片を素材とするもので、片面調整により刃部が作出されている。

不定形石器（10～18）

A類13点、B類3点、E類11点、F類1点、G類8点の計36点出土した。10はA類で、左側縁に刃

部が作出されるもので、正面は打面側、裏面は末端側から剥離調整される。18はG類である。焼土1011の出土で、右側縁に刃こぼれ状の微細剥離痕が観察される。

箆状石器（19～23）

A類3点、B類2点の計5点出土した。19・21はB類である。19は裏面下端部に摩耗痕が認められる。21は正面からの剥離調整により刃部が作出されている。20・22・23はA類で、正裏面からの剥離調整により刃部が作出されている。

磨製石斧（24・25）

2点出土した。いずれも基端の平面形がせまい線状となるA3類である。25は刃部を欠損する。

礫器（26）

1点出土した。扁平礫の側縁に剥離調整を施し、刃部を作出している。

敲磨石類（27～36）

A類14点、B類1点、C1類11点、C2類4点、C4類1点、D1類1点、D2類1点、E類1点、F1類1点、G1類9点の計43点出土した。27・28はA類である。27は正面、28は正裏面に磨痕が観察される。29はC1類で、正面、側面に磨痕が認められ、この境は明瞭な稜をなす。30はD2類で、表面、側面に弱い敲打痕が付く。33・34・35はG1類で、側面に狭長な磨面が認められる。35は被熱し、裏面は被熱により剥落している。36はC4類で、端部の敲打痕が深い。

石皿（39）

1点出土した。流紋岩製で大型のものである。裏面の平坦面が広く、中央部付近に非常に弱い磨面が観察されるため、石皿とした。石材は本遺跡の剥片石器に多用されるもので、剥片石器の素材として遺跡に搬入された可能性も考えられる。

台石（37・38）

2点出土した。37は正裏面が使用されており、いずれも中央部付近の敲打痕が深くなる。38は正面の平坦面全体に浅く細かな敲打痕が付く。このほか明確な使用痕が認められないもので、長さ26～34cm、幅18～22cmを測る楕円形の扁平礫が41点出土した。石材は花崗岩、砂岩、安山岩があり、花崗岩が主体である。焼土・炭化物集中域およびその付近からも出土しており、これらの遺構との関連も考えられる。

砥石（40）

焼土1003から1点出土した。正裏面に砥面をもつもので、正面の中央部付近に線状痕が付く。

石核（41・42）

11点出土した。41は被熱し、ハゼている。42は3点接合するもので、同一打面から連続して小型剥片が剥取されている。

下　　層（Ⅴ層）（図版44、45・79、80）

石鏃（43～45）

B類3点が出土した。43・44の側縁は緩やかに外湾し、基部の抉り込みは深い。45は二等辺三角形状に成形し、浅い抉り込みを施して基部を作出している。

石匙（46）

B類1点が出土した。素材剥片の末端につまみ部を作出し、右側縁は打瘤を除去して刃部加工を施して

いる。

石錐（47～49）

A1類1点、A2類1点、B類1点、不明1点の計4点出土した。47はA1類、49は錐部欠損のため不明である。正裏面に剥離調整を施し、器面を成形している。48はB類で、裏面の端部に微細剥離を施し、錐部を作出している。

不定形石器（50～53）

A類6点、D類1点、E類3点、F類4点、G類8点の計21点が出土した。50はD類で、急角度の剥離調整により刃部を作出し、刃部平面形は弧状を呈する。52・53はG類で、素材の形状に沿って微細剥離が連続する。

箆状石器（54～58）

A類1点、B類3点、未製品1点の計5点出土した。54・57・58はB類である。54・57は両面調整、58は素材の周縁に剥離調整を施し、刃部を作出している。56はA類で、素材の周縁に剥離調整を施し、刃部を作出している。

磨製石斧（59）

C類1点が出土した。基部側を欠損する。

敲磨石類（60～66）

A類4点、B類3点、C1類3点、C2類3点、D1類1点、F2類2点、G1類6点、G2類4点、G3類1点の計27点が出土した。C2類の60は端部、F2類の61は正裏面・側面に深い敲打痕が認められる。62～64はG1類である。62・63は右側縁、64は両側縁に磨痕が認められる。G2類の65・G3類の66は棒状礫を素材とするもので、65は端部に敲打痕、66は両側縁に磨痕・両端部に敲打痕が観察される。

台石（67～69）

3点出土した。67は周縁を打ち欠いて器面を成形している。67～69はいずれも正面あるいは正裏面の平坦面が荒れていることから台石としたが、明瞭な使用痕が認められないものである。

石核（70・71）

8点出土した。70・71は、いずれも打面転移を頻繁に繰り返し、剥片を剥取している。

旧石器時代の遺物（図版46・81）

本遺跡から出土した旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器、掻器、削器、石斧などがあり、総数は8点である。これらは調査区北、南の2か所に分布し、いずれも段丘平坦面から出土した（第26図）。出土層位はⅤ層で、大半がⅤ層下位である。調査では、石器を確認した時点で範囲を広げて、Ⅶ層の黄褐色ロームまで掘り下げたが、上記以外の石器は出土しなかった。分布をみると、北・南のいずれも石器（トゥール）数点が近接して出土する状況である。さらに南では0V・0W10グリッドで3点、0V・0W9グリッドで2点と点数は少ないが、2つの分布域をもつ。したがって、本遺跡では北で1か所、南で2か所の石器ブロックが形成されている。以下、器種毎に説明を加える。

ナイフ形石器（72）

1点出土した。右側縁は裏面、左側縁は正面に連続する剥離調整が施される。この剥離はナイフ形石器の刃潰し加工と考えておきたいが、浅い角度で連続することから、この部分を刃部とするスクレイパーとも考えられる。

掻器（73～76）

4点出土した。74・75は厚みのある剥片を素材とする。76は左側縁に連続する剥離調整を施し、器面を成形している。

削器（77）

1点出土した。下縁～右側縁に剥離調整が施されるもので、刃部は直線的である。裏面は打瘤を除去して器面を成形している。

微細剥離痕を有する石刃（78）

1点出土した。両側縁に不連続な微細剥離痕が観察される。

石斧（79）

1点出土した。他の縄文時代の石器に比べて風化の度合いが著しいこと、器面にロームが付着し、この度合いが強いことから、縄文時代の石器から除外した。礫を素材とし、片面調整により成形される。

5　放射性炭素年代測定

はじめに

猿頬遺跡は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字猿頬中丸1,849ほかに所在し、阿賀野川左岸の段丘上に立地し、標高82～88mである。既述の大坂上道遺跡とは小谷を挟んで対峙する。発掘調査の結果、本遺跡から焼土、焼土・炭化物集中、炭化物集中、集石土坑などの遺構が検出された。これらの遺構は下層（基本層序Ⅴ層）上面を検出面とする。遺構を覆うⅣ層は、沼沢火山起源の火山灰層の洪水堆積層（「鹿瀬軽石質砂層」と呼称）であり、約5000年前に堆積したと考えられる。本報告では、これら遺構の構築年代と地層の堆積年代の整合性を確認する。

A　対象試料

1006号炭化物集中の埋土1から出土した炭化物（IAAA-62335）、1008号炭化物集中の埋土1から出土した炭化物（IAAA-62336）、1009号炭化物集中の埋土1から出土した炭化物（IAAA-62337）、1025号炭化物集中の埋土1から出土した炭化物（IAAA-62338）、合計4点である。Ⅳ層直下、Ⅴ層上面からは大木6式新段階の土器が出土している。

B　算出方法

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

2）BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は、次のように算出した。

　複数回の測定値について、χ^2検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）$\delta^{13}C$の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される$\delta^{13}C$の値を用いることもある。

　$\delta^{13}C$補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

5）^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ramsey1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

C 測定結果

1006号炭化物集中の埋土1から出土した炭化物（IAAA-62335）が4950±40yrBP，1008号炭化物集中の埋土1から出土した炭化物（IAAA-62336）が4800±40yrBP，1009号炭化物集中の埋土1から出土した炭化物（IAAA-62337）が4890±40yrBP，1025号炭化物集中の埋土1から出土した炭化物（IAAA-62338）が4820±40yrBPの^{14}C年代である。測定年代は近い値であり，縄文時代前期末葉に相当する。暦年較正年代（1σ＝68.2％）では，3770BC～3530BCに含まれる。層序や出土遺物からの予想年代とも整合的であり，妥当な年代と考えられる。

遺構名	資料名	資料形態	BP年代および炭素の同位体比				Code No.
1006号 焼土・炭化物集中	No.1	炭化物	Libby Age（yrBP）	:	4,950	± 40	
			δ ^{13}C（‰）、（加速器）	=	-23.15	± 1	
			Δ ^{14}C（‰）	=	-460.1	± 3	
			pMC（%）	=	53.99	± 0	IAAA-62335
δ ^{13}Cの補正無し			δ ^{14}C（‰）	=	-458	± 2	
			pMC（%）	=	54.2	± 0	
			Age（yrBP）	:	4,920	± 40	
1008号 炭化物集中	No.2	炭化物	Libby Age（yrBP）	:	4,800	± 40	
			δ ^{13}C（‰）、（加速器）	=	-25.89	± 1	
			Δ ^{14}C（‰）	=	-449.9	± 3	
			pMC（%）	=	55.01	± 0	IAAA-62336
δ ^{13}Cの補正無し			δ ^{14}C（‰）	=	-450.9	± 2	
			pMC（%）	=	54.91	± 0	
			Age（yrBP）	:	4,820	± 40	
1009号 炭化物集中	No.3	炭化物	Libby Age（yrBP）	:	4,890	± 40	
			δ ^{13}C（‰）、（加速器）	=	-27.53	± 1	
			Δ ^{14}C（‰）	=	-455.7	± 3	
			pMC（%）	=	54.43	± 0	IAAA-62337
δ ^{13}Cの補正無し			δ ^{14}C（‰）	=	-458.5	± 2	
			pMC（%）	=	54.15	± 0	
			Age（yrBP）	:	4,930	± 40	
1025号 炭化物集中	No.4	炭化物	Libby Age（yrBP）	:	4,820	± 40	
			δ ^{13}C（‰）、（加速器）	=	-28.39	± 1	
			Δ ^{14}C（‰）	=	-451.3	± 3	
			pMC（%）	=	54.87	± 0	IAAA-62338
δ ^{13}Cの補正無し			δ ^{14}C（‰）	=	-455.1	± 2	
			pMC（%）	=	54.49	± 0	
			Age（yrBP）	:	4,880	± 40	

第6表　猿頭遺跡　放射性炭素年代測定結果

参考文献

Bronk Ramsey C.　1995　Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon, 37（2）425-430

Bronk Ramsey C.　2001　Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43（2A）355-363

Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger　2001　'Wiggle Matching' radiocarbon dates , Radiocarbon, 43（2A）381-389

Reimer et al.　2004　IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon 46, 1029-1058

6 ま と め

本遺跡では、旧石器時代の遺物、縄文時代前期前葉・末葉の遺構・遺物、縄文時代中期初頭以降の遺構・遺物が検出された。ここでは、旧石器時代の遺物と鹿瀬軽石質砂層直下の下層すなわち基本層序Ⅴ層の上面を確認面とする縄文時代前期末葉の遺構・遺物を中心に、調査で得られた成果をもとに若干の考察を行い、まとめとする。

A 縄 文 土 器

1）縄文時代前期末葉の土器について

本遺跡からは、東北地方を中心に分布する大木6式に類似する土器（第Ⅱ群第2類）が出土している。これを軸に本遺跡出土土器の編年的位置付けを考えたい。なお、大木6式土器についてはいくつもの論考［今村1985・興野1969a、1969b、1996・松田2003・松本1991］があるが、それらの中から［松田2003］を参考にした。

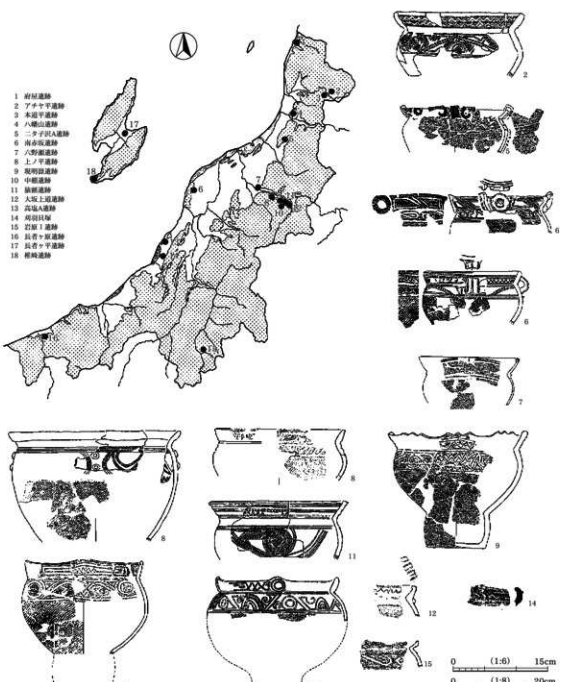
前回の調査［滝沢ほか1995］では、大木6式新段階の土器とその前段階に当たる大木5式土器が出土している。本遺跡近辺で大木5～6式期の土器を出土する遺跡は、上野東遺跡と現明嶽遺跡がある。上野東遺跡は大木5b式土器が主体として出土している［髙橋ほか2006］ことから、大木5式期に位置付けられよう。現明嶽遺跡［髙橋ほか2006］は、結節浮線文や沈線の側縁に爪形刺突を施した土器があることから、大木6式新段階に位置付けられるであろう。

本遺跡から出土した第Ⅱ群第2類A種（図版39・76－7、13～15）およびB種（39・76－4）はB器形になる（第22図参照）。これは、「いわゆる金魚鉢形土器」、「球胴形土器」［今村1985］や「台付鉢形土器」［松田2003］などとも呼ばれている。器形は胴部がふくらみ、胴下半が台付状を呈する。大木6式土器にみられる器形で、山形県飽海郡遊佐町吹浦遺跡を標識とする吹浦式土器［柏倉・江坂ほか1955］の器形として知られている。このような器形の土器は、岩手県・宮城県・山形県・福島県という東北北半の一部や東北南半を中心に分布している［松田2003］。福島県ではこの器形は大木5b式～7a式というように、かなりの時間幅を持って存続すると考えられている［松田2003］。

この土器は新潟県においても出土している（第24図）。出土遺跡は、今のところ越後では北から山北町府屋上山遺跡［新潟県1983］(1)、朝日村アチヤ平遺跡［滝沢ほか1998］(2)、同村本道平遺跡［山崎2000］(3)、神林村八幡山遺跡［田辺1994］(4)、新発田市二タ子沢A遺跡［田中・鈴木2003］(5)、新潟市南赤坂遺跡［前山・相田ほか2002］(6)、阿賀野市六野瀬遺跡［増子1989］(7)、阿賀町上ノ平遺跡［澤田ほか1996］(8)、同町現明嶽遺跡［髙橋ほか2006］(9)、同町中棚遺跡［滝沢ほか1995］(10)、同町猿額遺跡［滝沢ほか1995］(11)、同町大坂上道遺跡［滝沢ほか1995］(12)、柏崎市高塩A遺跡［岡本1987］(13)、同市刈羽貝塚［八幡1958］(14)、湯沢町岩原Ⅰ遺跡［北村1990］(15)、糸魚川市長者ヶ原遺跡［小林ほか1981］(16)の16か所と、佐渡では佐渡市長者ヶ平遺跡［長者ヶ平遺跡調査団1983］(17)と同市椎崎遺跡［新潟県1983］(18)の2か所で計18遺跡である。地域的には阿賀野川以北に多く、阿賀野川以南は海岸平野部中心に点在するにとどまっている。その中で、唯一山間部に当たる湯沢町岩原Ⅰ遺跡（第24図15）から出土しているという事実は縄文時代の交流を考える上で重要である。これは越後・上野（こうずけ）の県境越しに関東方面を視野に入れた場合、注目に値する。

今回は、「いわゆる金魚鉢形土器」の出土が確認できた遺跡を集成し、紹介したにすぎない。しかし、この土器は第24図に示したように多種類の文様が描かれている。今後、その文様を多面的に分析・検討していくことは、新潟県における前期末葉の時期細分や地域性の解明手がかりになると考える。一例をあげれば、第2類A種のような類型は、福島県に独特なものと評価されていることから［松田2003］、当地域と福島県との地域的な関係や土器の並行関係を考えていくうえでひとつの指標となろう。

以上のことから、本遺跡の時期を推測するに、第Ⅱ群第2類A種（図版41・83－7、13～15）のように沈線の側縁に爪形刺突を施したものが認められることや、第Ⅱ群第2類B種（図版41・83－4）のように口



第24図　新潟県の金魚鉢形土器出土遺跡

縁と胴部が幅広で、結節浮線文で文様を描き、余白部に鋸歯状文をもつことなどから大木6式新段階に位置付けられると推定される。このことから本遺跡出土の前期末葉の土器は、大木6式新段階に比定されるものが主体であろう。

B 石　　器

1) 縄文時代

石器は大坂上遺遺跡と同様に、鹿瀬軽石質砂層の上下の層から出土した。上層は遺構・遺物ともに出土数が少なく、詳細は不明な部分が多い。下層のⅣ層直下面では、鹿瀬軽石質砂層を除去した時点で遺構・遺物が確認された。この面は鹿瀬軽石質砂層が厚く堆積するため、遺構・遺物は原位置を保って良好な状態で出土したといえる。所属時期は層位、土器の出土状況から縄文時代前期末葉と推定される。これ以外はV層中で出土し、所属時期は土器の出土状況から縄文時代前期前葉～末葉と推定される。このほか、下層からは旧石器時代の遺物も出土している。器種構成、石材は大坂上遺遺跡と同様の傾向を示し、不定形石器（28％）、敲磨類（34％）などの加工、調理具が主体を占める。石材は、剥片石器で流紋岩・凝灰岩（53％）、礫石器では凝灰岩・安山岩・花崗岩（82％）が多用される。これらの石材は遺跡付近で採取が可能である。以下、Ⅳ層直下面から出土した石器について述べる。

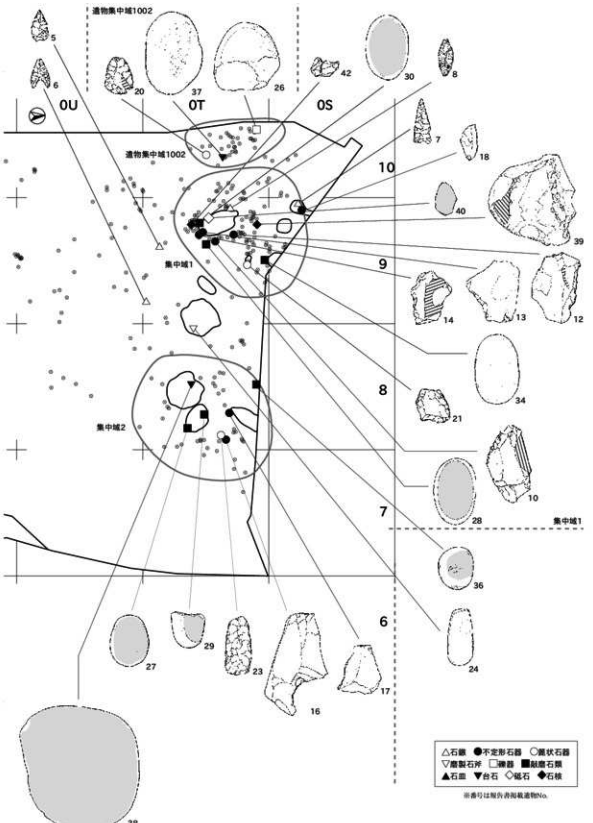
（Ⅳ層直下面の石器）

石器は主に段丘平坦面、北側西斜面で出土しており、遺構やその周辺からの出土が多い。遺構は段丘平坦面で焼土・炭化物集中域、北側西斜面では遺物集中域1002が確認されている。遺物集中域1002に関しては、他の斜面部からの遺物の出土がないことを考慮すると、猪て場としての可能性が考えられる。段丘平坦面の石器の分布は、焼土・炭化物集中域を中心として大きく2か所に分かれる（第25図）。

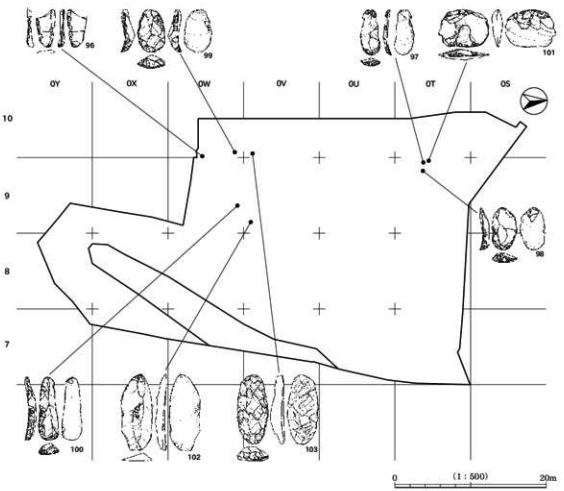
集中域1は段丘平坦面に位置し、焼土1003・1004・1011・1012、炭化物集中域1025付近に分布する。特に焼土1003を中心として、石鏃（3点）、不定形石器（18点）、篦状石器（1点）、敲磨石類（10点）、台石（1点）、砥石（1点）、石核（2点）が出土した。不定形石器、敲磨石類の割合が高い。集中域2は段丘東側の炭化物集中1007～1009付近に分布し、不定形石器（6点）、篦状石器（1点）、敲磨石類（6点）で構成される。

集中域1・2共に、不定形石器、敲磨石類が多く出土し、これらが主な道具と推測される。このほか、集中域1では石鏃、石核が出土している。石鏃にはアスファルトの付着したものもあり、縄文時代前期末葉の事例は県内でも最古の段階に位置づけられよう。石核は剥片剥離作業の進んだ小型品が出土した。しかし、この地点では製作の際に生じる剥片・砕片の集中出土がないことから、大規模な製作跡の可能性は低いといえる。但し、石核に剥片が2点接合する例から小規模な剥片剥離作業は行われていたものと推測する。

Ⅳ層直下面で検出した遺構については、土壌を採取し、フローテーションをおこなったが、種子等の植物遺体は検出されなかった。したがって、その性格は不明な部分が多い。しかし、遺構・遺物の出土状況から、焼土、炭化物集中などの遺構と不定形石器、敲磨石類はセットとして捉えることができ、火の周りで作業が行われていたものと考えられる。また、この地点は住居跡などの遺構が確認されていないことから、作業エリアとしての利用が想定される。



第25図　猿頬遺跡　下層（Ⅳ層直下）石器出土状況図



第26図　猿額遺跡　旧石器出土分布図

2）旧石器時代

旧石器時代の遺物は、縄文時代の調査がほぼ終了し、地山であるⅦ層（黄褐色ローム）上面の精査時に75・76・78の掻器が出土して確認された。この段階で旧石器の可能性があると判断し、範囲を広げてⅦ層を掘り下げた。しかし、黄褐色ロームからの遺物の出土はなかった。ただし、縄文時代の遺物として取り扱っていた72～74・77・79も整理作業段階で旧石器時代とした。遺物は基本的に全点の位置・標高を記録して取り上げており、これ らの遺物についても位置・標高を確認することができた。この結果、旧石器時代の遺物出土層位はⅤ層（Ⅳ層直下面2点、Ⅴ層中6点）で、縄文時代の出土層位と重なることが確認された。

出土した旧石器時代の遺物総数は8点である。器種はナイフ形石器、掻器、石斧などが出土した。本遺跡ではフレイク・チップなどの遺物が集中する石器ブロックは形成されていない。しかし、トゥールが近接する地点が3か所認められ、これらを石器ブロックとして捉えることができる。各ブロックには掻器が伴っており、作業エリアとしての利用も推定される。また、石材は珪質頁岩が主であるが、すべて母岩が異なる。このことから、遺跡内では剥片剥離作業は行われなかったものと考えられる。製作技術では石刃技法が認められ、打面調整、頭部調整などの調整技術をもつ。

編年的位置については、トゥールが8点と数量的に少なく石器組成が明確でないこと、出土層位が縄文時代の遺物出土層位と重なることから、明確な位置づけはできない[1]。本遺跡では、石器が集中してブロックを形成することなく、トゥールのみが出土することに大きな特徴があり、この地点における小規模な活動が想定される。

C　下層（Ⅳ層直下）の遺構と鹿瀬軽石質砂層の堆積

1）下層（Ⅳ層直下）の遺構について

下層は、最大で約60cmの層厚を有する鹿瀬軽石質砂層（基本層序第Ⅳ層）により覆われており、鹿瀬軽石質砂層が堆積する直前の生活面をそのまま残している。下層（基本層序第Ⅴ層）の上面で検出した遺構（以下、Ⅳ層直下の遺構と称す）は、当時の人々の活動の痕跡が良好に残存している。

既述したとおり、今回の調査により検出したⅣ層直下の遺構は、焼土4基、焼土・炭化物集中1基、炭化物集中6基、集石土坑1基、土器集中地点1か所、遺物集中域1か所である。これらの遺構は、0V9グリッドに位置する炭化物集中1014と0U9グリッドに位置する集石土坑1015を除き、遺跡北側の0T～0Sグリッド列に集中している。さらに、焼土1011や炭化物集中1009・1025は調査範囲北側に伸び、調査範囲南側では炭化物集中1014を除き遺構が検出されなかったことから、当時の人々は本遺跡をのせる段丘の平坦面北側を中心に活動していたと推測する。また、焼土は北西側に、焼土・炭化物集中1006を含め炭化物集中は北東側に、5～10mの距離をもって検出している。遺構のまとまりは、人々の活動内容の相違を反映する可能性がある。前項で述べたとおりⅣ層直下の石器の出土分布状況は3か所の集中域が認められ（第25図参照）、縄文土器の出土状況も同様の傾向を持つ（第20図参照）。しかし、縄文土器の出土重量の観点を加味すると、遺物集中域1002と焼土1003を中心とする集中域1からの出土が顕著であるのに対し、炭化物集中が検出された集中域2の縄文土器出土重量は多くない。石器は、集中域1・集中域2とも不定形石器、敲磨石類が多く出土している。このような遺構のまとまり、遺構内および周辺の土器出土の多寡、石器の出土状況に相関があるか否か、現時点では不明である。いずれにせよ、本遺跡のⅣ層直下遺構は住居跡等が検出されておらず、季節的あるいは短期間、火のそばで何らかの作業を行った作業場であると推測する。

2）鹿瀬軽石質砂層の堆積年代について

今回の調査では、Ⅳ層直下の遺構の構築年代を明らかにし、鹿瀬軽石質砂層の堆積年代を推定するため、Ⅳ層直下遺構（焼土・炭化物集中1006、炭化物集中1008・1009・1025）から採取した炭化物について、分析（放射性炭素年代測定）を実施した（第5節参照）。

遺構の構築年代は、焼土・炭化物集中1006が4,950±40yr.B.P.、炭化物集中1008が4,800±40yr.B.P.、炭化物集中1009が4,890±40yr.B.P.、炭化物集中1025が4,820±40yr.B.P.であり、層序や出土遺物からの予想年代とも整合的で妥当な年代とする結果を得た。本遺跡のⅣ層直下の出土土器は、縄文時代前期末葉期の大木6式期新段階に該当すると推測する。また、本遺跡から西に約1.1km に所在

1）ナイフ形石器をもつ石器群では、阿賀野市円山遺跡［土橋2003］、阿賀町角神A遺跡［加藤2006］の段階に位置づけられる可能性があると（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　加藤学氏の指摘を受けた。両遺跡とも東山型ナイフ形石器を伴う石器群で、丸山遺跡は、石器組成から「AT降灰後でも比較的古い時期の石器群」［土橋2003］に位置づけられている。

する現明嶽遺跡で、鹿瀬軽石質砂層直下から出土した土器［髙橋ほか2006］も該期のものと推測でき、鹿瀬軽石質砂層の堆積は、本遺跡におけるⅣ層直下の遺構が構築された時期、すなわち、大木６式期新段階以降となる。

鹿瀬軽石質砂層の堆積年代は、4,950 ± 130y.B.P.、5,030 ± 100y.B.P.とされてきた［只見川第四紀研究グループ1966b］。また、前回調査の猿額遺跡では、鹿瀬軽石質砂層を挟んで大木６式期の土器が出土している［滝沢ほか1995］。同報告書では、鹿瀬軽石質砂層の堆積の開始および完了の時期が大木６式期の範疇と考察している［滝沢ほか1995］。

今回の調査では、鹿瀬軽石質砂層堆積の開始年代が従来よりも多少下がることを示す資料を得られたと考える。さらに、猿額遺跡における前回と今回の調査結果から、鹿瀬軽石質砂層の堆積が大木６式新段階の間というきわめて短い期間であることを示せたと考える。

要　約

大坂上道遺跡

1　大坂上道遺跡は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字大坂上道西1,827番地ほかに所在する。遺跡は阿賀野川左岸の段丘上に立地し、標高は83～88mである。

2　調査は一般国道49号揚川改良事業の建設に伴い、平成18年4月27日～8月11日まで実施した。調査面積は上層2,378m^2、下層705m^{2}である。

3　調査の結果、縄文時代と平安時代の遺構・遺物を検出した。

4　縄文時代の遺構は、前期末葉以前（下層）の性格不明遺構3基、集石1基であり、中期初頭～前葉（上層）の土坑16基、焼土遺構4基、性格不明遺構2基、ピット2基である。上層遺構のうち15号土坑は甕被葬に伴う墓坑と推測され、西区の土坑が集中する地点は墓域の可能性がある。

5　縄文時代の遺物は上層から中期初頭～前葉の土器・土製品・石器・石製品が出土している。土製品は土偶1点と土器片円盤14点が出土した。石器は縄文時代の遺跡で出土する器種が一とおり認められる。石製品は三角形岩盤1点と形状がお猪口に類似する不明石製品1点が出土した。

6　平安時代の遺構は、掘立柱建物1棟、竪穴住居1軒、土坑1基である。遺物は土師器と腰帯、石鈴（巡方）1点が出土した。時期は9世紀後半から10世紀初頭と推定する。腰帯石鈴（巡方）の出土は阿賀町初例である。

猿額遺跡

1　猿額遺跡は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字猿額中丸1,849番地ほかに所在する。遺跡は大坂上道遺跡と同様に阿賀野川左岸の段丘上に立地し、大坂上道遺跡の西方約100mに位置する。標高は83～88mである。

2　調査は一般国道49号揚川改良事業の建設に伴い、平成18年8月21日～12月1日まで実施した。調査面積は上層1,680m^2、下層1,680m^{2}である。

3　調査の結果、上層から縄文時代中期初頭以降のピット2基、下層から縄文時代前期末葉の焼土4基、焼土・炭化物集中1基、炭化物集中6基、集石土坑1基、土器集中地点1か所、遺物集中域1か所および縄文時代前期末葉以前の土坑6基、ピット98基、炭化物集中1基、土器集中地点1か所を検出した。

4　遺物は下層から多く出土した。上層からは縄文時代中期初頭以降の土器、石器がわずかに出土しているが、時期は不明である。鹿瀬軽石質砂層（基本層序第Ⅳ層）直下の下層上面から縄文時代前期末葉の土器・石器が出土し、下層中から縄文時代前期前葉および前期末葉以前の土器・石器が出土している。また、下層中から旧石器時代の石器8点が出土した。

5　本遺跡の下層上面は最大層厚約60cmの鹿瀬軽石質砂層によって覆われていたため、当時の生活面や生活の痕跡が良好に残されていた。

引用・参考文献

伊藤正一・戸根与八郎・小野田政雄　1980　「宝塔山遺跡」『中条町詳細分布調査報告書』　新潟県中条町教育委員会

稲葉　明・木村　広・二宮俊集・稲村裕一　1976　「津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について」『新潟県教育センター研究報告』第９号　新潟県教育センター

今村啓爾　1985　「五領ヶ台式土器の編年－その細分および東北地方との関係を中心に－」『東京大学文学部考古学研究紀要』第４号　東京大学文学部考古学研究室

馬目順一　1975　『大畑貝塚調査報告』　福島県いわき市教育委員会

江森正義ほか 0000　「千葉県香取郡下小野貝塚発掘報告書」『考古学雑誌』第36号　第３号　日本考古学会

大塚昌彦ほか 1994　『半田南原遺跡』　群馬県渋川市教育委員会

小熊博史　1994　「布目遺跡」『巻町史　資料編１　考古』　新潟県巻町

岡本郁栄　1987　「高塩Ａ遺跡」『柏崎市史資料集　考古篇１』　新潟県柏崎市史編さん室

小野　昭ほか 1986　『人ヶ谷岩陰（第一次発掘調査概報）』　新潟県上川村教育委員会

柏倉亮吉・江坂輝彌ほか　1955　『吹浦遺跡』　庄内古文化研究会

加藤　学ほか 1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉Ａ遺跡』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　2006　「角神Ａ遺跡」『東蒲原郡史 資料編１ 原始』　新潟県東蒲原郡史編纂委員会

加藤三千雄　1988　「新保・新崎土器様式」『縄文土器大観』３　小学館

加藤三千雄　1995　「北陸における中期前葉の土器について－新保・新崎式土器」『中期初頭の諸様相』　縄文セミナーの会

上守秀明　1995　「東関東中期初頭の土器群について－千葉県を主として－」『中期初頭の諸様相』　縄文セミナーの会

亀井　功ほか 1994　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第61集 荻野遺跡・官林遺跡』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北村　亮　1990　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第56集 岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡』　新潟県教育委員会

小池義人ほか 1996　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第74集 横引遺跡・龍峰遺跡・柳平遺跡』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人ほか 1998　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第90集 関川谷内遺跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

興野義一　1969a　「大木式土器理解のために（Ⅴ）」『月刊 考古学ジャーナル』No.32　ニューサイエンス社

興野義一　1969b　「大木式土器理解のために（Ⅵ）」『月刊 考古学ジャーナル』No.48　ニューサイエンス社

興野義一　1996　「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画竜点睛』 山内清男没後25年記念論集刊行会

小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年－戦後の研究史と現状－」『大境』第５号　富山県考古学会

小島俊彰　1975　「珠洲郡内浦町松波新保遺跡発掘資料再見」『石川県考古学研究会々誌』第20号　石川県考古学研究会

小林俊彰ほか 1981　『長者ヶ原遺跡範囲確認調査概要』　新潟県糸魚川市教育委員会

斎藤　忠　1992　『日本考古学用語辞典』　学生社

坂井秀弥　1999　「総論」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会

坂井陽一　1981　「新潟砂丘における腐植層と砂丘砂の鉱物組成－新潟砂丘の形成について（その1）」『新潟県立教育センター研究報告』第49号　新潟県教育センター

佐藤雅一ほか 1991　『山崎Ａ遺跡 発掘調査報告書』　新潟県見附市教育委員会

佐藤雅一　1997　「上林遺跡出土土器の編年的研究」『午肥原地区遺跡確認試掘調査報告書』　新潟県津南町教育委員会

佐藤雅一ほか 2000 『道下遺跡』 新潟県津南町教育委員会
澤田 敦ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第73集 上ノ平遺跡C地点』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
神保孝造 1977 『富山県礪波市頼照寺遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
鈴木道之助 1991 『図録 石器入門辞典<縄文>』 柏書房
鈴木俊成 1999 「早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
関 雅之 1972 「鹿瀬町周辺の考古遺跡と遺物」『角神温泉付近の歴史と考古』 角神温泉
高橋 保 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第170集 東浦遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋保雄 1992 「石器類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集 五丁歩遺跡』 新潟県教育委員会
高橋保雄ほか 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第119集 北野遺跡Ⅱ(下層)』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋保雄ほか 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第141集 北野遺跡Ⅱ(上層)』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋保雄ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第160集 上野東遺跡・現明嵐遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗ほか 1995 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第68集 大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗ほか 1998 『朝日村文化財報告書 第14集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ アチヤ平遺跡中・下段)』 新潟県朝日村教育委員会
滝沢規朗ほか 2002 『朝日村文化財報告書 第22集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ 元屋敷遺跡Ⅱ(上段)』 新潟県朝日村教育委員会
只見川第四紀研究グループ 1966a 「只見川・阿賀野川流域の第四系の編年－とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について－」『第四紀総合研究連絡紙』No.8
只見川第四紀研究グループ 1966b 「福島県野沢盆地の浮石砂層の基底部より算出した木材の^{14}C年代－日本の第四紀層の^{14}C年代 ⅩⅩⅥ－」『地球科学』第82号
立木宏明ほか 1996 『朝日村文化財報告書 第11集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ 樽口遺跡』 新潟県朝日村教育委員会
田中一穂 2004 「揚川改良(大坂上道・猿額隣接地遺跡)試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成15年度』 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
田中耕作・齊田美穂子 1999 「アスファルト」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
田中耕作・鈴木暁ほか 2003 『二タ子沢A遺跡 発掘調査報告書』 新潟県新発田市教育委員会
田辺早苗 1994 『八幡山遺跡発掘調査報告書』 新潟県神林村教育委員会
丹野雄明・本間 宏 1991 『福島県文化財調査報告書 第266集 鹿島遺跡・平林B遺跡・権現山下遺跡』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
長者ヶ平遺跡発掘調査団 1983 『長者ヶ平遺跡Ⅲ』 新潟県小木町教育委員会
寺崎裕助ほか 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第50集 原山遺跡・大塚遺跡』 新潟県教育委員会
寺崎裕助 1995 「新潟県における中期初頭の土器－関東・中部高地土器を中心として－」『中期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会
土橋由理子ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第75集 大堀遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
土橋由理子ほか 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第84集 中ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
土橋由理子 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第121集 円山遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

中山古秀　1976　「離れ国分考」『古代』61　早稲田大学考古学会
農林水産省農林水産技術事務局監修　1998　「新版標準土色帖1998年度版」
新潟県　1983　『新潟県下越地域 土地分類基本調査 津川』
新潟県　1983　「府屋上山遺跡」『新潟県史 資料編1』
新潟県　1983　「椎崎遺跡」『新潟県史 資料編1』
西村正衛　1951　「千葉県香取郡神里村白井雷貝塚発掘調査概報」『古代』第3号　早稲田大学考古学会
西村正衛　1954　「千葉県小見川町白井雷貝塚（第二・三次調査）」『学術研究－人文・社会・自然－』第3号　早稲田大学教育学部
二宮俊策　1973　「新潟県東蒲原地方における阿賀野川の河岸段丘について」『新潟県教育センター研究収録』第6集（理科研究編12）　新潟県教育センター
芳賀英一・藤田　誠　1986『福島県文化財調査報告書 第164集 腰巻遺跡・下谷ヶ池平B・C遺跡』 福島県教育委員会
芳賀英一ほか 1984『福島県会津高田町文化財調査報告書 第5集 宵宮西遺跡』 福島県会津高田町教育委員会
芳賀英一ほか 1990『福島県文化財調査報告書 第227集 中宵遺跡・上宵A遺跡・宵宮西遺跡・三十刈遺跡・水上遺跡』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
橋口定志　1985　「平安期における小規模遺跡出現の意義」『物質文化』44　物質文化研究会
早瀬亮介・菅野智則・須藤隆　2006　「東北大学文学部研究科考古学陳列館所蔵大木囲貝塚出土基準－山内清男編年基準資料－」
平野千秋・西野秀和　1983　「鹿島町徳前C遺跡調査報告（IV）」 石川県立埋蔵文化財センター
藤巻正信　1989　「土器片円盤について」『新潟県考古学談話会会報』 第3号　新潟県考古学談話会
藤巻正信　1991　「B土製品」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第29集 城之腰遺跡』 新潟県教育委員会
藤巻正信　2004　「談話会の記録 第179回 県内出土の腰帯石銙」『新潟県考古学談話会会報』第28号　新潟考古学談話会
古川利意　1986『勝負沢遺跡発掘調査報告書』 会津坂下町教育委員会
本間嘉晴ほか 1962『新潟県文化財年報 第四 阿賀－東蒲原郡学術総合調査報告書－』 新潟県教育委員会
前山精明　1994a　「新谷遺跡」『巻町史 資料編1 考古』 新潟県巻町
前山精明　1994b　「大沢遺跡A地区の調査」『巻町史 資料編1 考古』 新潟県巻町
前山精明・小野昭　1994　「豊原遺跡」『巻町史 資料編1 考古』 新潟県巻町
前山精明・相田泰臣　2002　『南赤坂山遺跡』 新潟県巻町教育委員会
増子正三　1989　「安田町六野瀬遺跡の縄文前期の土器」『北越考古学』第2号　北越考古学会
松田光太郎　2003　「大木6式土器の変遷とその地域性」『神奈川考古』39号　神奈川県考古同人会
松本　茂　1991　『福島県文化財調査報告書 第243集 法正尻遺跡』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
水沢幸一　2003　『二軒茶屋遺跡』 新潟県中条町教育委員会
八幡一郎　1958　『刈羽貝塚』 北方文化博物館
山口逸弘　1999　「土壙出土土器の選択性－中期土壙の2個体の共伴例から－」『縄文土器論集一縄文セミナー10周年記念論文集－』 縄文セミナーの会
山崎忠良　2000　「朝日村文化財報告書 第20集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XII　本道平遺跡」 新潟県朝日村教育委員会
山内清男　1979　『日本先史土器の縄文』 先史考古学会
山本暉久　2003　「墓壙内に倒置された土器」『神奈川考古』第39号　神奈川考古同人会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
渡邊美穂子ほか 2001　『新発田市埋蔵文化財調査報告 第23－2 坂ノ沢C遺跡II（平安時代編）』 新潟県新発田市教育委員会
和田寿久　1990　『朝日村文化財調査報告 第5集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書I 下ゾリ遺跡』新潟県朝日村教育委員会

大坂上遺遺跡　縄文土器観察表（1）

No.	出土地点・遺構名	層　位	地区	文様（群－類－種）	器種・器形	残存部位残存率	計測値（cm）	縄文原体	色　調（内／外）	付着物（内／外）	混和剤等	時　期	備　考
1	SK15・0V18-20	覆土2、Ⅲ	西	1－2－A1	深鉢	F	口縁5/6 胴部上半1/1 底部～胴部下半1/2	高：38.6 口：22.2 底：13.6	LR→	浅黄橙／にぶい黄橙	オコゲ／スス	長石	中期初頃～前葉	
2	SK15・0V16-17・18・0W17-1・3	覆土2、Ⅱ	西	1－2－A1	深鉢	A	口縁7/12 胴部上半1/2	高：51.3 口：33.4	LR＋結節→	橙／浅黄橙	オコゲ／スス		中期初頃～前葉	
3	SK3	覆土1	西	1－2－A3			口縁部片			灰褐／褐			中期初頃～前葉	
4	SK25	覆土	西	1－6	深鉢？		底部片	底：16.6		灰黄褐／にぶい黄褐			中期初頃～前葉	
5	SK49	覆土3	西	1－5A	深鉢		胴部片		LR→	にぶい黄褐／褐灰			中期初頃～前葉	6と同一？
6	SK49	覆土3	西	1－5A	深鉢		胴部片		LR→	にぶい橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	5と同一？
7	SD19・0V16-18・19	覆土2、Ⅱ	西	1－1－A1	深鉢	D？	口縁1/3	口：20.4	L→	明赤褐／にぶい黄	／スス		中期初頃～前葉	
8	SD19・0Y17-11	覆土・Ⅱ	西	1－1－A2	深鉢	B	口縁1/2	口：15.6	RL→	にぶい橙／にぶい橙	／スス		中期初頃～前葉	
9	SD19	覆土	西	1－2－A3	深鉢		口縁部片			灰黄褐／褐灰	／スス		中期初頃～前葉	
10	SD19	覆土2	西	1－5A	深鉢		口縁部片		LR→	灰黄褐／にぶい黄褐	／スス		中期初頃～前葉	
11	SD19	覆土2	西	1－5A	深鉢		口縁部片		LR→	にぶい橙／にぶい橙	／スス		中期初頃～前葉	
12	SD19	覆土2	西	1－6	深鉢		口縁部片			にぶい褐／褐	／スス	石英	中期初頃～前葉	
13	SD19（0V16-11）・0V16-9・0W16-24	覆土、Ⅱ	西	1－6	深鉢	D？	口縁1/6	口：13.6		橙／橙	／スス	長石	中期初頃～前葉	14と同一？
14	SD19（0W16-8）・0X15-6	覆土2、Ⅱ	西	1－6	深鉢	D？	胴部片			にぶい橙／にぶい橙	／スス	長石	中期初頃～前葉	13と同一？
15	0V16-23・SD20	Ⅲ・覆土	西	1－6	深鉢	D？	口縁部片			にぶい橙／橙	／スス	石英	中期初頃～前葉	
16	SD30	覆土	西	1－2－A4	深鉢		口縁部片			灰褐／にぶい褐	オコゲ／スス	石英	中期初頃～前葉	
17	SX18	覆土	西	1－2－D	深鉢	D？	口縁13/16	口：22.4	RL↓	にぶい赤褐／にぶい赤褐		石英	中期初頃～前葉	
18	SX18・0V19-23	覆土、Ⅲ	西		深鉢		底部5/9	底：15.0	RL↓	にぶい褐／にぶい褐		石英	中期初頃～前葉	
19	SX37・0V16-20・0V17-25・0V19-19	覆土、Ⅱ、Ⅲ	西	1－3－B1	深鉢	D	口縁3/4 底部3/4	高：26.1 口：20.9 底：10.0	L（圧痕）→L→	にぶい黄橙／赤褐	／スス	小礫	中期初頃～前葉	
20	SX37	覆土	西	1－2－G			口縁部片			灰褐／褐	／スス		中期初頃～前葉	
21	SX37	覆土	西	1－6			口縁部片			にぶい褐／にぶい黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
22	0V21	Ⅱ	西	1－1－A1	深鉢	B	口縁4/9	口：19.0	LR→↓	にぶい褐／にぶい黄橙	／スス	長石	中期初頃～前葉	
23	0W17-5	Ⅱ	西	1－1－A1	深鉢	D	口縁～胴部片		LR→	灰黄褐／にぶい黄褐	／スス	石英	中期初頃～前葉	
24	0V19-15・20・25・0W19-16	Ⅱ、Ⅲ	西	1－1－A1	深鉢	F？	口縁1/36	口：31.8	燃糸L・R（木目状）↓	にぶい黄橙／にぶい黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
25	0V17-15・0V19-15・20	Ⅱ、Ⅲ	西	1－1－1	深鉢		底部2/9	底：16.0	燃糸L・R（木目状）↓	にぶい黄橙／にぶい黄橙	オコゲ／		中期初頃～前葉	
26	0V16-15・0W17-2	Ⅱ、Ⅲ	西	1－1－A1	深鉢	D？	口縁1/4	口：16.4	LR→↓	橙／にぶい橙			中期初頃～前葉	
27	0W18-10	Ⅲ	西	1－1－A1	深鉢		口縁部片		燃糸R？	褐灰／にぶい橙			中期初頃～前葉	
28	0W20-6	Ⅲ	西	1－1－A	深鉢		口縁部片		LR→	褐灰／にぶい黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
29	0W18-13	Ⅱ	西	1－1－A	深鉢		口縁部片		燃糸L	灰黄褐／灰黄褐	／スス		中期初頃～前葉	
30	0X18-11	Ⅲ	西	1－1－A1	深鉢		口縁部片		LR→	褐灰／にぶい黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
31	0W17-5・0X15-12	Ⅱ	西	1－1－A	深鉢		口縁部片		LR→	灰黄褐／にぶい黄橙		石英	中期初頃～前葉	
32	0Y17-11	Ⅱ	西	1－1－A2	深鉢	A	口縁1/9	口：14.6	RL→	にぶい黄橙／にぶい黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
33	0V17-12	Ⅱ	西	1－1－A3	深鉢	A？	口縁部片		LR→	黒褐／にぶい黄褐		海綿	中期初頃～前葉	
34	0V16-6	Ⅱ	西	1－1－A3	深鉢		口縁部片		LR→	にぶい黄褐／灰黄褐	／スス		中期初頃～前葉	
35	0X17-6	Ⅱ	西	1－1－A3	深鉢		口縁部片		LR→	黒褐／にぶい黄褐	／スス		中期初頃～前葉	
36	0V16-8・25	Ⅱ、Ⅲ	西	1－1－B1	深鉢	E	口縁部片3/16	口：24.2		にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	37と同一
37	0W17-2	Ⅱ	西		深鉢	E	胴部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	36と同一
38	0W17-4・5	Ⅱ、Ⅲ	西		深鉢	E	胴部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	39と同一
39	0W17-5	Ⅲ	西		深鉢	E	底部片1/4	底：11.6		にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	38と同一

大坂上道遺跡　縄文土器観察表（2）

No.	出土地点・遺構名	層　位	地区	文様（群－類－種）	器種・器形	残存部位残存率	計測値（cm）	縄文原体	色　調（内／外）	付着物（内／外）	混和剤等	時　期	備　考
40	0V16-12・0W17-2・3	II	西	I－1－B2	深鉢	C？	口縁1/18	口：31.0	LR→	にぶい黄橙／褐			中期初頭～前葉	41と同一
41	0V21-10・0W17-7・15	II	西		深鉢	C？	底部5/12	底：16.6	LR→	にぶい黄橙／にぶい橙			中期初頭～前葉	40と同一
42	0V15-13・0V16-15・22・0W16-11・16・0W17-1・2・0X15-7	II、III	西	I－1－B2	深鉢	D	口縁1/3	口：30.0	LR→	灰黄褐／灰黄褐	／スス	長石	中期初頭～前葉	
43	0W17-1	II	西	I－1－B3	深鉢	A？	口縁1/36	口：19.0	LR→↓	灰黄褐／灰黄褐	／スス	長石	中期初頭～前葉	
44	0W17-1	II	西	I－1－B3	深鉢		口縁部片			褐灰／褐灰			中期初頭～前葉	
45	0W21-1	II	西	I－1－B3	深鉢		口縁部片			にぶい褐／橙	／スス		中期初頭～前葉	
46	0W17-9・10	II	西	I－1－B3	深鉢		口縁部片			褐／にぶい褐	／スス	石英	中期初頭～前葉	
47	0W16-23	II	西	I－1－B3	深鉢		口縁部片			褐灰／灰褐		長石	中期初頭～前葉	
48	0V16-14	II	西	I－1－B3	深鉢		口縁部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙	／スス	石英	中期初頭～前葉	
49	５トレンチ	II	西	I－1－B	深鉢		口縁部片		LR↓	灰黄褐／にぶい黄橙		石英	中期初頭～前葉	
50	0V21-15	II	西	I－1－B	深鉢		口縁部片			浅黄橙／にぶい黄橙	／スス		中期初頭～前葉	
51	0W17-4・5・9・10・25・0W18-5・10	II、III	西	I－1－C	深鉢	B	口縁7/12	口：27.6	L↓	にぶい黄褐／にぶい橙			中期初頭～前葉	
52	0W17-1	II	西	I－1－D1	深鉢		口縁部片		LR＋結節→	浅黄橙／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	
53	0W17-1	II	西	I－1－D1	深鉢		口縁部片		RL→	にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	
54	0W16-21・0W17-1	II	西	I－1－D2	深鉢	C	口縁5/18	口：10.4	RL→	にぶい黄橙／にぶい黄橙	／スス		中期初頭～前葉	
55	0W18-7・12・13	II	西	I－1－D2	深鉢	C？	口縁部片1/6	口：12.0		褐灰／にぶい黄橙	オコゲ／スス	石英	中期初頭～前葉	
56	0W18-8	II	西	I－1－D2	深鉢		口縁部片			浅黄橙／浅黄橙	／スス		中期初頭～前葉	
57	0W20-11	II	西	I－1－D2	深鉢	A？	口縁部片		R→	灰白／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	
58	0W16-23	II	西	I－1－D2	深鉢		口縁部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙		石英	中期初頭～前葉	
59	0W17-15	II	西	I－1－D2	深鉢		口縁部片		LR？	褐灰／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	
60	0W17-9	II	西	I－1－E	深鉢		口縁部片			にぶい黄橙／灰黄褐			中期初頭～前葉	
61	0V21	II	西	I－1－E	深鉢		口縁部片			褐灰／灰黄褐	／スス		中期初頭～前葉	
62	0V17-21	II	西	I－1－E	深鉢	E？	口縁部片			にぶい黄橙／浅黄橙	／スス		中期初頭～前葉	
63	0W17-1	II	西	I－1－F	深鉢		口縁部片			にぶい褐／にぶい褐			中期初頭～前葉	
64	0W21-1	III	西	I－1－F	深鉢		口縁部片			にぶい褐／褐灰	／スス		中期初頭～前葉	
65	0W17-2	II	西	I－1－F	深鉢		口縁部片			にぶい黄橙／浅黄橙	／スス		中期初頭～前葉	
66	0W20-13	II	西	I－1－F	深鉢		口縁部片			灰黄褐／褐灰			中期初頭～前葉	
67	0W17-5	II	西	I－1－A1	深鉢		口縁部片		LR→	にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	
68	0W21-6・表探・試掘2T表探	III	西	I－1－G	深鉢	D	胴部片			橙／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	
69	0W17-1	II	西	I－1－H	深鉢		胴部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	70と同一
70	0W17-3	II	西	I－1－H	深鉢		胴部片			灰黄褐／灰黄褐			中期初頭～前葉	71と同一
71	0W21	II	西	I－1－I	深鉢		胴部片		燃糸R（木目状）	にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	54と同一
72	0W17-8	II	西	I－1－I	深鉢		胴部片		燃糸R（木目状）	浅黄橙／浅黄橙	／スス		中期初頭～前葉	56と同一
73	0V17-22	II	西	I－1－I	深鉢		胴部片		燃糸R（木目状）	にぶい黄橙／橙	／スス		中期初頭～前葉	
74	0V20-9	II	西	I－1－I	深鉢		胴部片		燃糸L（木目状）	灰白／浅黄橙			中期初頭～前葉	
75	0W17-3	II	西	I－1－I	深鉢		胴部片		燃糸R（木目状）	灰黄褐／にぶい黄褐			中期初頭～前葉	
76	0V20-14	II	西	I－1－I	深鉢		胴部片		燃糸R（木目状）	明黄褐／にぶい黄橙		小礫	中期初頭～前葉	
77	0W17-16	III	西	I－4	深鉢	A？	口縁部片		LR→	灰黄褐／にぶい黄褐	オコゲ／スス・炭化物		中期初頭～前葉	
78	0V17-3	II	西	I－4			突起		LR→	にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	
79	0W16-24	II	西	I－1－J	深鉢		口縁部片			褐灰／灰白		長石	中期初頭～前葉	
80	0W17-15	II	西	I－1－J	深鉢		口縁部片			黒褐／黒褐		長石	中期初頭～前葉	
81	0V16-19	II	西	I－2－A1	深鉢	A？	胴部片			黒褐／にぶい黄橙		石英	中期初頭～前葉	

大坂上道遺跡　縄文土器観察表（3）

No.	出土地点・遺構名	層　位	地区	文様 （群－類－種）	器種・器形		残存部位残存率	計測値 （cm）	縄文原体	色　調 （内／外）	付着物 （内／外）	混和 剤等	時　期	備　考
82	0W17-5	Ⅱ	西	Ⅰ－2－A2	深鉢		口縁部片		LR→↓	褐灰／黒	／スス		中期初頃～前葉	
83	0W16-22	Ⅱ	西	Ⅰ－2－A2	深鉢	C	口縁～胴部片 1/16	口:(17cm)	L↓	灰黄褐／にぶい黄褐			中期初頃～前葉	
84	0W17-5	Ⅱ	西	Ⅰ－2－A3	深鉢		口縁～胴部片		LR＋結節→	にぶい褐／にぶい橙	／スス	石英	中期初頃～前葉	
85	0W16-22	Ⅱ	西	Ⅰ－2－A3	深鉢		口縁部片			灰黄褐／黒褐			中期初頃～前葉	
86	0W18-14	Ⅱ	西	Ⅰ－2－A4	深鉢		口縁部片			灰黄褐／にぶい黄褐	／スス	石英	中期初頃～前葉	
87	0W17-15	Ⅱ	西	Ⅰ－2－A4	深鉢		口縁部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙	／スス	石英	中期初頃～前葉	
88	0W17-9	Ⅱ	西	Ⅰ－2－A4	深鉢		胴部片		LR↓	灰黄褐／にぶい黄褐	／スス	石英	中期初頃～前葉	
89	0U20-10・表採	Ⅱ	西	Ⅰ－2－A4	深鉢	D	口縁～胴部片			浅黄橙／褐灰	／スス	石英	中期初頃～前葉	
90	0V20-6	Ⅱ	西	Ⅰ－2－A4	深鉢		胴部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
91	0V20-25	Ⅱ	西	Ⅰ－2－A5	深鉢		口縁部片		RL→?	にぶい黄橙／にぶい黄橙		石英	中期初頃～前葉	
92	0W17-4・5・9・10	Ⅱ	西	Ⅰ－2－B	深鉢	B	口縁7/18	口：16.4	L（圧痕）・L↓	褐灰／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
93	21トレンチ	Ⅱ	西	Ⅰ－2－C	深鉢		口縁部片			にぶい褐／明褐			中期初頃～前葉	
94	0V20-21	Ⅱ	西	Ⅰ－2－D？	深鉢		胴部片		RL↓	褐／黒褐		石英	中期初頃～前葉	21と同一？
95	0U20-8	Ⅱ	西	Ⅰ－2－E1	深鉢		胴部片			黒褐／にぶい褐	／スス	石英	中期初頃～前葉	
96	0U20-8	Ⅱ	西	Ⅰ－2－E1	深鉢		胴部片			明褐／褐灰	オコゲ／		中期初頃～前葉	98と同一
97	0U20-8	Ⅱ	西	Ⅰ－2－E1	深鉢		胴部片			褐灰／褐	／スス		中期初頃～前葉	97と同一
98	0U20-4・8	Ⅱ	西	Ⅰ－2－E1	深鉢		胴部片			にぶい褐／黒褐		長石	中期初頃～前葉	
99	0V20-19	Ⅲ	西	Ⅰ－2－E2	深鉢		胴部片		RL↓	橙／にぶい褐		石英	中期初頃～前葉	100と101同一
100	0V20-19	Ⅲ	西	Ⅰ－2－E2	深鉢		胴部片		RL↓	明褐／褐		石英	中期初頃～前葉	99と101同一
101	0V20-19	Ⅲ	西	Ⅰ－2－E2	深鉢		胴部片		RL↓	橙／黒褐		石英	中期初頃～前葉	99と100同一
102	0W16-3	Ⅱ	西	Ⅰ－2－E3	深鉢		胴部片		LR↓	にぶい黄橙／褐灰			中期初頃～前葉	
103	0W17-8	Ⅱ	西	Ⅰ－2－F	深鉢		口縁部片		LR→	にぶい黄灰／橙			中期初頃～前葉	
104	0W17-10	Ⅱ	西	Ⅰ－2－F	深鉢		胴部片		L→↓	にぶい黄橙／灰黄褐			中期初頃～前葉	
105	0W16-25 0W17-4・5・10	Ⅱ，Ⅲ	西	Ⅰ－2－F	深鉢	D	口縁2/9 底部1/6	口：22.0 底：15.0	L→↓↘	にぶい黄橙／にぶい黄褐			中期初頃～前葉	
106	0W17-9・10・14・15	Ⅱ	西	Ⅰ－2－F	深鉢		胴部片		LR＋結節↓・LR→	灰白／灰白			中期初頃～前葉	
107	0W18-14	Ⅱ	西	Ⅰ－2－G	深鉢		口縁部片			にぶい黄橙／明黄褐	／スス	石英	中期初頃～前葉	
108	0V20-16	Ⅱ	西	Ⅰ－2－G	深鉢		胴部片			橙／橙		石英	中期初頃～前葉	
109	0V17-15	Ⅱ	西	Ⅰ－2－H	深鉢		胴部片			橙／橙		長石	中期初頃～前葉	
110	0W17-6	Ⅲ	西	Ⅰ－2－H			口縁部片			にぶい黄橙／灰黄褐			中期初頃～前葉	
111	0V22	Ⅱ	西	Ⅰ－2－I			口縁部片			褐灰／灰白			中期初頃～前葉	
112	0V17-14	Ⅱ	西	Ⅰ－2－J			口縁部片		燃糸r	にぶいかr1		長石	中期初頃～前葉	
113	0W17-22	Ⅱ	西	Ⅰ－2－J			口縁部片		燃糸L	にぶい黄橙／褐灰	／スス		中期初頃～前葉	
114	0W17-5	Ⅱ	西	Ⅰ－3－A1			口縁部片		L（圧痕）・L↓	にぶい黄橙／にぶい黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
115	0W17-1	Ⅱ	西	Ⅰ－3－A2a	深鉢	D	口縁～胴部1/9	口：27.0	L↓	灰黄褐／褐		石英	中期初頃～前葉	
116	0V20-5	Ⅱ	西	Ⅰ－3－A2b			口縁部片		燃糸L（木目状？）	にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
117	0V16-9	Ⅱ	西	Ⅰ－3－A2c	深鉢？	深鉢？	口縁部片		結節↓	にぶい黄橙／黒褐	／スス		中期初頃～前葉	
118	0W17-2	Ⅱ	西	Ⅰ－3－A2c	深鉢？	深鉢？	口縁部片		L＋結節↓	にぶい黄橙／黒褐	／スス		中期初頃～前葉	
119	0W17-7	Ⅱ	西	Ⅰ－3－A3			口縁部片		LR→	にぶい黄橙／にぶい黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
120	0W21-6・7・11	Ⅱ，Ⅲ	西	Ⅰ－3－A3	深鉢	F	口縁～胴部13/36	口：9.6	L（圧痕）or 燃糸L	にぶい黄橙／にぶい黄橙	／スス	海綿	中期初頃～前葉	
121	0W17-5	Ⅱ	西	Ⅰ－3－A4	深鉢		口縁部片			黒褐／灰黄褐		石英	中期初頃～前葉	
122	0W21	Ⅱ	西	Ⅰ－3－B1			口縁部片		LR（圧痕）・LR→	にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
123	0W17-9	Ⅱ	西	Ⅰ－3－B2			口縁部片		L（圧痕）	にぶい黄橙／にぶい黄橙		石英	中期初頃～前葉	

大坂上遺遺跡　縄文土器観察表（4）

No.	出土地点・遺構名	層　位	地区	文様（群－類－種）	器種・器形		残存部位残存率	計測値（cm）	縄文原体	色　調（内／外）	付着物（内／外）	混和剤等	時　期	備　考
124	0V15-14 0V16-19・25 0W17-1・7 0W18-14	Ⅱ	西	Ⅰ－4	深鉢	F	口縁1/6 底部5/36	口：21.8 底：14.0	L？	灰黄褐／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
125	0U20-8	Ⅱ	西	Ⅰ－4	深鉢	A？	口縁1/12	口：13.6	L→↓	にぶい橙／にぶい橙	オコゲ／		中期初頃～前葉	
126	0W16-22	Ⅱ	西	Ⅰ－4			胴部片		R＋結節？	浅黄橙／浅黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
127	0W17-1	Ⅱ	西	Ⅰ－4			胴部片		R＋結節	にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
128	0W17-9	Ⅱ	西	Ⅰ－4			胴部片			にぶい黄橙／橙		石英	中期初頃～前葉	
129	0V21-10	Ⅱ	西	Ⅰ－4			胴部片		LR→	浅黄橙／浅黄橙		長石	中期初頃～前葉	
130	2トレンチ	Ⅱ	西	Ⅰ－4			口縁部片			浅黄橙／灰白			中期初頃～前葉	
131	0X15-6	Ⅱ	西	Ⅰ－4			胴部片			にぶい黄褐／橙			中期初頃～前葉	
132	0V15-3・0W20-11	Ⅱ	西	Ⅰ－4			口縁部片		L→	灰白／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
133	0W18-15	Ⅱ	西				口縁部片			にぶい黄橙／明黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
134	2トレンチ	Ⅱ	西	Ⅰ－4			胴部片		縄？	灰黄褐／にぶい黄褐			中期初頃～前葉	
135	0W17-6	Ⅱ	西	Ⅰ－4			胴部片		L→	浅黄橙／灰黄褐			中期初頃～前葉	
136	0X17-20	Ⅱ	西	Ⅰ－4			胴部片		縄？	褐灰／灰黄褐			中期初頃～前葉	
137	0V15-15	Ⅱ	西	Ⅰ－4			底部2/9	底：12.0		にぶい黄橙				裏面欠損
138	0W17-5	Ⅱ	西	Ⅰ－5A	深鉢	F？	口縁部21/36	口：20.4	LR→	にぶい黄橙／にぶい橙			中期初頃～前葉	
139	0V16-18・25	Ⅱ	西	Ⅰ－5A	深鉢	F？	口縁1/4	口：14.8	L→↓	にぶい橙／にぶい赤褐			中期初頃～前葉	
140	0W17-5	Ⅱ	西	Ⅰ－5A	深鉢		口縁部片		LR→	にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
141	0W18-8・13・15	Ⅱ	西	Ⅰ－5A	深鉢	F？	口縁～胴部1/9	口：27.8	LR→	にぶい赤褐／灰黄褐	／スス		中期初頃～前葉	
142	0W17-3・12	Ⅱ	西	Ⅰ－5A	深鉢		口縁5/18.胴部片	口：35.0	LR→↓	橙／にぶい黄橙		長石	中期初頃～前葉	
143	0W16-25	Ⅱ	西	Ⅰ－5A	深鉢		口縁部片		L→	にぶい赤褐／にぶい赤褐		石英	中期初頃～前葉	
144	0V16-22	Ⅱ	西	Ⅰ－5A	深鉢		口縁部片		LR→	にぶい黄褐／にぶい黄褐	／スス		中期初頃～前葉	
145	0W17-5	Ⅱ，Ⅲ	西	Ⅰ－5A	深鉢		口縁部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
146	0V20-5	Ⅱ	西	Ⅰ－5A	深鉢		口縁部片		LR→	橙／にぶい橙			中期初頃～前葉	
147	0W17-9	Ⅱ	西	Ⅰ－5A	深鉢		口縁部片		L→	黒褐／黒褐		石英	中期初頃～前葉	
148	0V16-20	Ⅱ	西	Ⅰ－5A	深鉢		底部4/9	底：9.6	LR↓	橙／にぶい黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
149	0W20-16	Ⅱ	西	Ⅰ－5B	深鉢		口縁部片		燃糸r	灰黄褐／黒褐	オコゲ／		中期初頃～前葉	
150	1トレンチ	Ⅱ	西	Ⅰ－5B	深鉢		胴部片		燃糸R（木目状）	にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
151	0V17-5・14	Ⅱ	西	Ⅰ－5B	深鉢		底部5/36	底：20.0	燃り糸R	にぶい橙／褐		石英	中期初頃～前葉	
152	0W16-23	Ⅱ	西	Ⅰ－5C	深鉢		胴部片		結束羽状↓	灰黄褐／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	
153	0X17-1	Ⅲ	西	Ⅰ－5C	深鉢		胴部片		結束羽状↓	灰黄褐／にぶい黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
154	0W21-5	Ⅱ	西	Ⅰ－5D	深鉢		口縁部片		L＋結節↓	黒褐／暗褐		石英	中期初頃～前葉	121と同一
155	0W17-12	Ⅱ	西	Ⅰ－5D	深鉢		胴部片		L＋結節↓	黒褐／暗褐		石英	中期初頃～前葉	120と同一
156	0W17-1	Ⅱ	西	Ⅰ－6	台付き土器		口縁～胴部1/4 底部1	高：10.1 口：10.6 底：6.8		にぶい橙／にぶい橙			中期初頃～前葉	
157	0W19-4	Ⅱ	西	Ⅰ－6	深鉢		口縁部片			灰黄褐／灰黄褐	オコゲ／スス	石英	中期初頃～前葉	
158	0W16-24	Ⅲ	西	Ⅰ－6	深鉢		口縁部片			灰黄褐／にぶい黄褐	／スス		中期初頃～前葉	
159	0W18-13	Ⅲ	西	Ⅰ－6	深鉢		口縁部片			黒褐／褐灰	／スス	石英	中期初頃～前葉	
160	0W17-9	Ⅱ	西	Ⅰ－6	深鉢		口縁部片			浅黄橙／褐灰		石英	中期初頃～前葉	
161	2トレンチ	Ⅱ	西	Ⅰ－6	深鉢		口縁部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙	／スス		中期初頃～前葉	
162	0W17-4	Ⅱ	西	Ⅰ－6	深鉢		口縁部片			褐灰／にぶい黄褐		石英	中期初頃～前葉	
163	0V17-5	Ⅱ	西	Ⅰ－6			底部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頃～前葉	

大坂上遺違跡　縄文土器観察表（5）

No.	出土地点・遺構名	層　位	地区	文様（群一類一種）	器種・器形	残存部位残存率	計測値（cm）	縄文原体	色　調（内／外）	付着物（内／外）	混和剤等	時　期	備　考
164	0W21	II	西	I－4	浅鉢？	口縁～胴部片			にぶい褐／明褐		石英	中期初頭～前葉？	
165	0V21	II	西	I－4	深鉢？	口縁部片			にぶい赤褐／にぶい赤褐　／スス			中期初頭～前葉？	
166	0W19-7	II	西	III		口縁部片			にぶい橙／にぶい橙			晩期後葉	
167	0W19-7	II	西	III		口縁部片			にぶい橙／にぶい橙			晩期後葉	
168	0W17-9	II	西	III		胴部片		燃糸r（網目状）	にぶい黄橙／にぶい黄橙			晩期後葉	
169	0W17-9	II	西	III		胴部片		燃糸r（網目状）	にぶい黄橙／にぶい黄橙			晩期後葉	
170	0W17-15	II	西	III		胴部片		燃糸r（網目状）	にぶい黄橙／にぶい黄橙			晩期後葉	
171	0V16-15	III	西	III		胴部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙			晩期後葉	
172	0X17-8	II	西	III		胴部片			浅黄橙／浅黄橙			晩期後葉	
173	0W16-11	II	西	III		胴部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙			晩期後葉	
174	SD56	覆土	東	I－5A		口縁部片		L↓	にぶい黄橙／にぶい黄橙　／スス		長石	中期初頭～前葉	
175	0X3-22	III	東	I－4	深鉢	口縁部片			黒褐／にぶい褐	オコゲ／スス		中期初頭～前葉	
176	0Y3-12・16	II、III	東	I－1－D2		口縁部片			橙／にぶい橙			中期初頭～前葉	
177	0X3-23	II	東		深鉢？	胴部片		LR？	褐灰／橙			中期初頭～前葉	
178	0Z4-13	II	東	I－1－J	深鉢？	胴部片			橙／橙			中期初頭～前葉	
179	0Z2-13	II	東	I－3－A1	深鉢？	口縁部片		LR↓→	浅黄橙／浅黄橙			中期初頭～前葉	
180	0Z2-13	II	東	I－3－A1	深鉢？	口縁部片		RL↓→ ＼	にぶい黄橙／にぶい黄橙		長石	中期初頭～前葉	
181	0X4-1・13	I、II	東	I－4	深鉢？　D？	口縁～胴部片		LR↓→	にぶい黄橙／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	
182	0X4-14	II	東	I－4	深鉢？	口縁部片			にぶい赤褐／にぶい赤褐		雲母	中期初頭～前葉	
183	0Y1-12	II	東	I－4	深鉢？	口縁部片		LR＋結節↓	黒褐／にぶい褐		石英	中期初頭～前葉	
184	0Y2-20	II	東	I－5A	深鉢？　D？	口縁7/36	口：17.0	L→	にぶい黄橙／にぶい黄橙　オコゲ／スス		七輪片	中期初頭～前葉	
185	0Z3-6	II	東	I－5A	深鉢？	底部1/12	底：14.6		橙／にぶい黄橙			中期初頭～前葉	
186	0X1-19	II	東	I－5A	深鉢？	口縁部片		L→	黒褐／にぶい褐			中期初頭～前葉	
187	0X4-13	II	東	I－6	深鉢？	口縁部片			橙／橙		長石	中期初頭～前葉	
188	0Y2-20	II	東	I－6	深鉢	口縁部片		L？	にぶい黒橙／灰黄橙　／スス			中期初頭～前葉	
189	0Z3-11	II	東	I－6	深鉢？	底部片			にぶい黄橙／にぶい橙			中期初頭～前葉	
190	0Y3-21	II	東	II	深鉢？	胴部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙			後期中葉	
191	0Z4-17	II	東	II	浅鉢？	胴部片			にぶい黄橙／にぶい黄橙			後期中葉	

大坂上遺違跡　土製品観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	地区	器種	分類	使用部位	計測値（cm） 長さ	幅	厚さ	重さ（g）	文様	色調（内／外）	混和材	時期	備考
192	0W18-16	II	西	土鈴			9.5	2.4	62.9	浅線		橙／橙		中期初頭～前葉	頭部・胴部下半から両足を欠く。胴部・左横で二分割する。
193	0W17-9	II	西	土器片円板	A1b	底部？	6.3	5.2	1.1	35.8	無文	橙／にぶい橙		中期初頭～前葉	
194	0V19-25	III	西	土器片円板	A2b	胴部	4.5	3.5	1.1	17		明赤褐色／にぶい赤褐色	石英	中期初頭～前葉	
195	21トレンチ	II	西	土器片円板	A2b	胴部	5	5.2	1.4	39.8	格子目文をもつ降帯・縄？	浅黄橙／にぶい黄橙		中期初頭～前葉	
196	0V15-15	II	西	土器片円板	A2c	胴部	4.4	4.6	1.1	23.2	L＋結節↓	にぶい橙／橙		中期初頭～前葉	
197	0W17-5	II	西	土器片円板	B1c	胴部	4.3	4.3	1	13.9	縄？	にぶい黄橙／にぶい橙		中期初頭～前葉	
198	0W17-6	III	西	土器片円板	B1c	胴部	3.8	4.3	1	14.5	沈線・交互刺突？	橙／にぶい黄橙色	石英	中期初頭～前葉	
199	0W16-19	II	西	土器片円板	C1b	底部？	6.4	4.2	1.1	34.2	無文	明黄褐色／にぶい褐色	石英	中期初頭～前葉	
200	0W18-8	II	西	土器片円板	C1c	胴部	4.9	5.2	1.1	30.8	L＋結節↓	浅黄橙／にぶい黄橙		中期初頭～前葉	
201	0W16-26	III	西	土器片円板	C1c	胴部	5.7	5.1	1.2	34.1	沈線	にぶい黄橙／にぶい黄橙		中期初頭～前葉	
202	0V21	II	西	土器片円板	C2a	口縁部	5.6	4.4	1.4	28.1	燃糸L	灰赤色／にぶい赤褐色		中期初頭～前葉	
203	0X16-19	II	西	土器片円板	D1c	胴部	4.9	5.2	1.2	26.5	沈線・刺突列	にぶい褐色／明褐色		中期初頭～前葉	
204	0W17-5	II	西	土器片円板	E1＋2b	底部	5.8	(4.2)	1.1	29.8	無文	にぶい黄褐色／にぶい黄褐色		中期初頭～前葉	
205	0W17-5	II	西	土器片円板	E2b	底部	7	(4.1)	1	27.8	無文	にぶい黄橙色／にぶい黄褐色		中期初頭～前葉	
206	0V16-2	II	西	土器片円板	E2c	底部	(4.3)	(4.3)	1.5	19.8		にぶい黄橙／にぶい黄橙	石英	中期初頭～前葉	

大坂上道遺跡　石器観察表（1）

西区上層

石鏃観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	遺存状態	備考
1	試掘5Tr風倒木		B	2.0	1.2	0.3	0.6	流紋岩		片足欠	表裏面にアスファルト付着

石鏃未成品観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	備考
2	SK17	覆土	2.6	1.6	0.3	1.1	珪質頁岩		二次調整は一部

石錐観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	錐部断面形	遺存状態	備考
3	SD19	覆土	A2	3.9	3.2	1.1	6.0	珪質凝灰岩		台形	完形	錐部摩耗
4	0W18-3	Ⅱ	B	5.3	2.1	1.1	9.0	メノウ	縦長	三角形	完形	錐部摩耗・裏面先端光沢

不定形石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	二次調整部位	備考
5	不明	Ⅱ	A	4.7	4.6	0.8	14.3	鉄石英		表面両側縁・裏面下縁	
6	SX18	覆土	A	6.4	5.5	1.7	46.0	流紋岩	縦長	左側縁	
7	SD19	覆土	A	5.5	4.6	1.5	26.7	チャート	縦長	左側縁	
8	SD19	2	A	6.7	4.3	2.0	42.9	流紋岩	縦長	右側縁	
9	0W20-2	Ⅱ	A	7.9	3.7	1.6	32.6	鉄石英（部分玉髄質）	縦長	右側縁	
10	0W18-13	Ⅲ	A	11.2	5.3	3.5	142.6	流紋岩	縦長	左側縁	
11	0W18-13	Ⅲ	A	13.4	6.4	2.6	195.3	流紋岩	縦長	右側縁	
12	0W18-6	Ⅱ	A	8.0	8.1	2.7	77.0	凝灰岩	横長	表面左側縁・裏面左～下縁	刃部摩耗
13	0V18-14	Ⅰ	B	5.1	3.2	1.9	23.4	鉄石英	縦長	左側縁	刃部刃潰れ
14	0V16-14		B	8.5	5.1	1.4	45.8	流紋岩	縦長	両側縁	
15	0X15-6	Ⅱ	C	3.2	2.3	0.8	23.0	流紋岩		両側縁	
16	0X16-15	Ⅱ	C	4.7	3.7	1.5	92.1	緑色凝灰岩	縦長	右側縁	
17	0W20-11	Ⅲ	B	7.4	7.6	2.1	3.5	緑色凝灰岩	縦長	左側縁～下縁	
18	0W18-13	Ⅱ	D	2.5	2.5	1.1	5.9	玉髄		下縁	被熱
19	0W18-24	Ⅲ	D	4.4	2.5	0.8	7.6	玉髄	縦長	右側縁～下縁	
20	0U20-19	Ⅱ	D	4.1	2.9	1.1	12.4	玉髄	縦長	下縁	
21	0X18-12	Ⅲ	D	5.7	3.4	0.9	9.5	珪質凝灰岩	縦長	両側縁・下縁	
22	0V20-10	Ⅱ	D	7.7	2.7	1.0	14.9	流紋岩	縦長	両側縁・下縁	
23	0W18-14	Ⅱ	D	8.2	4.3	1.0	28.3	緑色凝灰岩	縦長	両側縁・下縁	
24	0V20-19	Ⅲ	D	7.3	5.5	1.7	60.4	玉髄	縦長	下縁	
25	0V20-6	Ⅱ	F	9.5	3.2	1.0	19.3	緑色凝灰岩	縦長	両側縁	
26	0V19-25	Ⅲ	E	8.7	5.4	2.0	68.3	緑色凝灰岩	縦長	右側縁	
27	0U20-19	Ⅱ	E	5.3	6.1	1.1	22.9	緑色凝灰岩	縦長	左側縁	
28	0W18-8	Ⅱ	F	8.2	7.8	2.7	136.1	凝灰岩	縦長	右側縁	
29	0W21-9	Ⅱ	E	10.9	5.8	1.8	90.9	凝灰岩	縦長	両側縁	
30	0W16-21	Ⅱ	G	9.9	7.5	1.9	115.9	流紋岩	縦長		両側縁に微細剥離有
31	0W18-14	Ⅱ	G	5.5	5.9	1.7	33.2	凝灰岩			下縁に微細剥離有
32	0X18-11	Ⅱ	G	12.6	2.2	0.9	55.8	頁岩	縦長		両側縁に微細剥離有
33	0W21-6	Ⅲ	G	9.9	4.6	2.0	22.2	流紋岩	縦長		左側縁摩滅・刃部表裏面光沢
34	0V17-12	Ⅱ	A	3.9	10.4	5.8	209.1	流紋岩	縦長	両側縁	

箆状石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	刃部断面形	遺存状態	備考
35	0V18-20	Ⅱ		3.7	2.9	1.8	13.6	凝灰岩				未成品
36	0W21	Ⅱ	B	4.5	2.4	1.1	10.7	頁岩		片刃	器面右半分欠損	
37	0W19-11	Ⅱ	B	3.7	3.1	1.2	9.1	流紋岩		片刃	完形	石匙の可能性有り
38	0V16-17	Ⅱ		10.6	5.9	2.6	133.4	流紋岩	縦長			未成品
40	0X16-12	Ⅱ		10.9	6.9	2.2	160.1	硬質砂岩	縦長	片刃		未成品
41	0X16-12	Ⅱ	A	13.2	9.1	5.0	497.3	硬質砂岩	縦長	片刃	完形	
42	0V14-15	Ⅱ	A	14.7	7.9	3.0	344.4	硬質砂岩	縦長	片刃	完形	刃部磨耗

打製石斧観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	刃部断面形	遺存状態	備考
39	0V19-19	Ⅱ	10.8	8.0	2.6	172.6	凝灰岩	縦長	片刃	完形

磨製石斧観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	刃部断面形	遺存状態	備考
43	0W18-5	Ⅱ	A1	7.3	2.9	1.3	41.4	蛇紋岩	両刃	刃部欠	
44	0W18-11	Ⅱ	A1	6.9	3.4	1.7	64.9	蛇紋岩	両刃	刃部欠	
45	0V20-12	Ⅱ	A1	7.5	4.8	1.8	97.0	砂岩	両刃	刃部欠	
46	2Tr	Ⅱ	A1	10.4	5.0	2.8	209.4	蛇紋岩	両刃	刃部欠	
47	0V17-5	Ⅱ	A1	8.9	5.2	3.0	210.0	蛇紋岩		刃部欠	表面右側縁に擦り切り痕
48	0W21-11	Ⅱ	C	8.4	5.7	3.1	196.3	閃緑岩	両刃	基部欠	

敲磨石観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	遺存状態	備考
49	0W18-23	Ⅱ	A	9.4	8.1	3.3	322.0	凝灰岩	完形	裏面に線状痕有り
50	0W18-14	Ⅱ	A	10.2	6.8	3.6	322.0	凝灰岩	完形	表面に線状擦痕有り
51	SX18	覆土	B	13.1	7.1	4.4	488.1	安山岩	完形	
52	0V20-4	Ⅱ	C1	12.4	6.7	5.1	482.7	凝灰岩	1/3欠	表裏に線状痕有り、被熱
53	西区・表採		C1	13.7	7.3	3.7	495.0	安山岩	完形	
54	0W18-4	Ⅱ	C1	12.9	9.0	4.6	924.2	花崗岩	完形	表裏面・両側縁に敲痕
55	0U20	Ⅱ	D1	11.6	8.0	4.2	510.1	凝灰岩	完形	表面に線状の擦痕有り
56	SX18	覆土	D1	10.7	8.1	4.0	347.3	凝灰岩	1/2欠	
57	0X17-1	Ⅱ	E	13.9	9.4	4.8	853.4	凝灰岩	完形	
58	0V20-21	Ⅱ	E	9.5	8.6	5.4	595.3	安山岩	完形	
59	0W17-9	Ⅱ	F2	11.3	7.9	5.4	629.1	安山岩	完形	
60	0V19-15	Ⅱ	D1	14.5	8.5	5.7	919.0	安山岩	完形	
61	4Tr	Ⅱ	G1	11.5	8.2	5.1	638.9	安山岩	完形	
62	0X17-6	Ⅱ	C1	13.6	7.0	3.6	483.3	凝灰岩	完形	両側縁に敲痕

石皿観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量（g）	石材	遺存状態	備考
68	SK15	覆土2	51.6	29.2	5.4	8100.0	凝灰岩	完形	表面中央に弱い線状痕有り

大坂上道遺跡　石器観察表（2）

砥石観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	遺存状態	備考
63	0W17-1	II	7.3	4.9	1.0	24.4	凝灰岩	完形	砥面に線状痕有り
64	0X18-20	II	7.5	6.8	2.0	114.2	凝灰岩	完形	砥面に線状痕有り
65	0W18-17	II	7.5	5.9	3.8	111.3	凝灰岩	完形	砥面に線状痕有り
66	0U21	II	8.8	5.7	1.8	82.4	凝灰岩	ほぼ完形	帯状砥面
67	0V19-4	III	20.2	20.3	6.9	3000.0	礫岩	ほぼ完形	帯状砥面、石皿の転用か？

石核観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
69	0W17-8	II	2.3	4.5	3.4	31.6	鉄石英	
70	0W16-15	II	4.1	6.9	4.1	78.1	凝灰岩	
71	0V20-20	II	8.2	12.6	3.0	287.0	緑色凝灰岩	

板状石器（円盤状石器）観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
72	0Y15-11	II	4.9	4.9	0.9	28.0	凝灰岩	

未成品観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
75	表採		12.9	8.8	3.0	165.5	凝灰岩	

石製品観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
73	0W19-17	II	5.5	5.2	0.5	17.3	凝灰岩	
74	0W18-10	II	4.0	4.7	4.2	47.7	凝灰岩	

西区下層

不定形石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	素材	二次調整部位	備考
76	0V20-22	V	A	6.3	6.2	1.1	29.4	凝灰岩		下縁	
77	0W19-16	V	D	7.7	8.9	2.6	9.7	緑色凝灰岩	縦長	右側縁～下縁	
78	0W18-24	V	G	4.6	3.0	1.1	9.7	流紋岩		裏面左側縁に剥離痕有り	

敲磨石観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	遺存状態	備考
79	0V20	V	A	11.6	9.2	3.2	594.3	安山岩	完形	
80	0V19-10	V	C1	8.9	5.6	3.6	273.4	安山岩	完形	
81	SX1001	確認面	E	13.4	5.7	4.3	430.6	凝灰岩	完形	
82	0V21-5	V	C3	8.9	6.4	4.0	325.1	凝灰岩	完形	
83	0V20	V	G1	13.3	9.4	3.0	541.7	砂岩	完形	

石核観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
84	0W19-6	V	2.6	5.8	3.3	56.9	凝灰岩	

東区上層

不定形石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	素材	二次調整部位	備考
85	0Y3-11	II	A	6.6	5.6	2.1	63.2	流紋岩	縦長	右側縁	
86	0Y2-3	II	G	5.8	3.6	1.1	21.7	流紋岩	縦長		右側縁に微細剥離有り
87	0Y2-20	II	G	5.5	2.7	1.3	14.6	流紋岩	縦長		左側縁に微細剥離有り

磨製石斧観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	刃部断面形	遺存状態	備考
88	0Y1-9	II	A2	12.4	6.2	2.2	244.0	蛇紋岩	両刃	刃部欠	
89	0Y3-8	II	A1	13.1	5.6	3.3	425.3	蛇紋岩	両刃	刃部欠	
90	0X4-6	II	A3	15.4	5.8	2.7	386.2	蛇紋岩		刃部欠	

敲磨石観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	遺存状態	備考
91	0Y3-6	II	D2	11.8	8.8	5.4	667.6	安山岩	完形	

石核観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
92	0Y4-7	II	2.0	3.4	2.1	5.0	流紋岩	被熱
93	0Y3-19	II	7.5	9.3	6.3	447.5	頁岩	

東区下層

箆状石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	素材	刃部断面形	遺存状態	備考
94	0Y3-2	V	A	5.4	4.3	1.5	16.7	流紋岩		片刃	完形	

猿額遺跡　縄文土器観察表

No.	出土地点・遺構名	層　位	分　類 (群－類－種)	器種・器形		残存部位 残存率		計測値 (cm)	文様原体	色　調 (内／外)	付着物 (内／外)	装飾 剥落	時　期	備　考
1	表採		Ⅳ			胴部片			撚糸L	浅黄橙／浅黄橙			中期初頭以降	
2	0V8-6	Ⅱ	Ⅳ			胴部片			撚糸L（木目状？）				中期初頭以降	
3	0W9-12	Ⅱ	Ⅳ			口縁片				灰褐／灰褐		海面	中期初頭以降	内外面研磨
4	土器集中地点1001（No.113）	Ⅳ下	Ⅱ－2－B	深鉢	B				RL→	にぶい黄橙／にぶい黄橙	オコゲ／スス		前期末葉	
5	竪土・屋化物集中1006（No.1）	1	Ⅱ－4	深鉢		胴部片			RL＋LR（羽状）→	にぶい黄橙／にぶい黄橙		雲母	前期末葉	
6	屋化物集中1007（No.1）	1	Ⅱ－4	深鉢		胴部片			RL＋LR（羽状）→	褐灰／褐灰	／スス	石英	前期末葉	
7	屋化物集中1008（No.7,8）	1,2	Ⅱ－2－A	深鉢	B	胴部片			LR＋結節→	にぶい黄橙／にぶい黄橙	オコゲ／スス		前期末葉	内面の一部を研磨、22と同一？
8	屋化物集中1025（No.10）	覆土	Ⅱ－4			胴部片			RL＋LR（結束羽状）→	にぶい赤褐／にぶい赤褐		雲母	前期末葉	
9	屋化物集中1025（No.5～7）	覆土	Ⅱ－4	深鉢		胴部片			RL＋LR（結束羽状）→	にぶい赤褐／にぶい橙		雲母	前期末葉	
10	試掘1OT	Ⅳ下	Ⅰ－2	深鉢		口縁1/6	口：19.0		RL＋LR（羽状）→	灰褐／褐灰		繊維	前期前葉	年報掲載遺物［田中2004］
11	0V10-6（No.164）	Ⅴa	Ⅱ－1	深鉢		胴部片				暗赤褐／にぶい褐			前期末葉	
12	0V9-11（No.3014） 0V9-15（No.133）	Ⅴ（0V9-11） Ⅳ下（0V9-15）	Ⅱ－1			胴部片				暗赤褐／にぶい褐			前期末葉	
13	0T10-7（No.50）	Ⅳ下	Ⅱ－2－A	深鉢？		口縁片				灰褐／灰褐	／スス		前期末葉	内面研磨
14	0V8-6（No.147）	Ⅳ下	Ⅱ－2－A	深鉢？		口縁片				浅黄橙／橙			前期末葉	内面研磨
15	0S8-16（No.135）	Ⅳ下	Ⅱ－2－A	深鉢？		胴部片			LR→	黒褐／にぶい橙	／スス		前期末葉	内面研磨
16	0T10-7（No.33） 0T10-8（No.60） 0T10-12（39,41,44,45,47）	Ⅴa Ⅴa Ⅳ下（0T10-12 No.44,45,47）	Ⅱ－2－A	深鉢	A	口縁1/4	口：22.2		RL＋LR（結束羽状）＋結節→	橙／にぶい黄橙	／スス		前期末葉	内面研磨
17	0S9-20（No.3）	Ⅳ下	Ⅱ－3			口縁片				灰黄褐／灰黄褐			前期末葉	
18	0S9-20（No.141）	Ⅳ下	Ⅱ－3			口縁片				にぶい黄橙／にぶい黄褐			前期末葉	年報掲載遺物［田中2004］
19	試掘2T	Ⅳ下	Ⅱ－3			口縁7/36	口：26.0			浅黄褐／浅黄褐			前期末葉	
20	0T8-18（No.136,137）	Ⅳ下	Ⅱ－4	深鉢		胴部片			L→	浅黄褐／浅黄褐	／スス	海面	前期末葉	
21	試掘2T	Ⅳ下	Ⅱ－4	深鉢		胴部片			L→	浅黄褐／浅黄褐	／スス		前期末葉	
22	0T10-11（No.14） 0T10-12（No.37） 0T10-13（No.55,57） 0U10-6	Ⅴa Ⅴa Ⅴa Ⅴ	Ⅱ－4	深鉢？	B？	胴部片			LR＋結節→	にぶい黄橙／灰黄褐	オコゲ／スス		前期末葉	内面研磨、6と同一？
23	0T10-12（No.42）	Ⅳ下	Ⅱ－4			胴部片			LR→	にぶい赤褐／にぶい赤褐	／スス		前期末葉	
24	0T9-23（No.109）	Ⅳ下	Ⅱ－4			胴部片			撚糸r	にぶい赤褐／褐灰			前期末葉	
25	0T10-11（No.18）	Ⅴa	Ⅱ－4			底部7/36	底：13.0		RL＋LR（羽状）→	にぶい黄褐／にぶい黄褐	オコゲ／スス		前期末葉	
26	0T10-9（No.73） 0T10-13（No.153～156,166） 0T10-14（No.159,160）	Ⅳ下（0T10-9） Ⅴa（0T10-13） Ⅴa（0T10-14）	Ⅱ－4	深鉢？		底部5/9	底：15.0		LR→	にぶい黄橙／にぶい橙	オコゲ／	石英	前期末葉	
27	0U10-2（No.118）	Ⅳ下				底部5/18	底：11.0			にぶい黄褐／にぶい黄褐	／スス		前期末葉	
28	試掘12T	Ⅳ下				底部7 13/36	底：7.6			褐灰／灰褐			前期末葉	内外面研磨
29	土器集中1024	Ⅴ	Ⅲ	深鉢？		口縁片			L（圧痕）	褐灰／灰褐		上面？	前期末葉以前	
30	土器集中1024 0T10-12　No.34	Ⅴ Ⅴ	Ⅱ－2－C	深鉢	C				L→	にぶい黄橙／にぶい黄橙			前期末葉	
31	土器集中1024	Ⅴ	Ⅰ？			胴部片			RL＋LR（羽状）→	にぶい黄橙／灰黄褐		繊維	前期前葉	
32	土器集中1024	Ⅴ	Ⅰ？			胴部片			LR→	にぶい橙／にぶい黄橙		繊維	前期前葉	
33	0W9-12（No.3012）	Ⅴ	Ⅰ－1			胴部片			RL（ループ）	明赤褐／明赤褐		雲母	前期前葉	
34	0W9-23（No.3006）	Ⅴ	Ⅰ－1			胴部片			R（ループ）	明赤褐／明赤褐			前期前葉	

猿額遺跡　石器観察表（1）

上層

不定形石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	二次調整部位	備考
1	0W10-2	III	A	7.4	5.3	1.9	49.1	流紋岩	礫片	右側縁～下縁	

打製石斧観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	刃部断面形	遺存状態	備考
4	0W8-20	II	12.2	6.8	2.3	319.0	砂岩		片刃	完形	

敲磨石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	遺存状態	備考
2	0V10-5	III	G1	12.7	7.8	4.3	611.0	花崗岩	完形	
3	0W10-6	II	G2	6.7	6.6	3.3	207.6	安山岩	完形	

下層（IV層直下）

石器観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物No.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	遺存状態	備考
5	0T9-20	1117	IV下	A	2.5	0.9	0.5	1.4	流紋岩		完形	
6	0T9-5	1120	IV下	B	2.3	1.5	0.4	0.9	凝灰岩		先端部欠	
7	敲1011	1	1	B	3.6	1.4	0.5	2.0	珪質真岩		両足・右側縁欠	
8	0T9-22	1059	IV下	C	3.0	1.2	0.5	1.4	珪質真岩		完形	アスファルト付着

石器観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	遺存状態	備考
9	0V9-18	1175	IV下	A	5.4	2.1	1.0	8.8	珪質真岩	礫片	完形	

不定形石器観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	二次調整部位	備考
10	0T9-8	1095	IV下	A	8.2	4.8	1.3	44.2	黒石英	礫片	右側縁	
11	0W10-3	1182	IV下	A	9.6	4.8	1.6	52.9	凝灰岩	礫片	両側縁	
12	0T9-17	1089	IV下	A	7.5	5.2	2.3	64.8	流紋岩	礫片	右側縁	
13	敲1003	4	3	B	6.6	5.6	2.0	55.0	凝灰岩	礫片	左側縁	
14	0T9-18	1074	IV下	B	5.7	4.4	1.6	32.3	緑色凝灰岩	礫片	左側縁	
15	0V9-11	1173	IV下	E	5.8	5.6	1.6	45.6	緑色凝灰岩	礫片	裏面右側縁	
16	0T9-2	1127	IV下	F	11.3	6.7	2.0	68.0	凝灰岩	礫片	右側縁	
17	0T9-12	1126	IV下	G	5.2	4.6	1.2	19.2	凝灰岩	礫片		左側縁に微細剥離痕
18	敲1011	4	1	G	3.8	1.9	0.6	3.0	凝灰岩			右側縁に微細剥離痕

楔状石器観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	刃部断面形	遺存状態	備考
19	0W9-21	1200	IV下	B	4.3	2.0	1.0	7.3	珪質真岩	片刃	1/2欠	
20	0T10-8	1038	V a	A	3.9	3.0	1.1	10.6	凝灰岩			
21	0T9-11	1113	IV下	B	2.9	3.7	1.3	15.5	凝灰岩	片刃	完形	不定形石器の可能性有り
22	足1008		2	A	5.6	4.9	2.0	47.9	凝灰岩	両刃	完形	
23	0T9-2	1129	IV下	A	9.3	4.3	2.6	100.0	流紋岩	片刃	完形	

磨製石斧観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	刃部断面形	遺存状態	備考
24	敲・足1006	3	2	A3	9.1	4.0	1.9	110.0	緑色凝灰岩	両刃	完形	
25	0V9-18	1174	IV下	A3	12.3	5.7	2.5	275.7	蛇紋岩	両刃	体部完形	刃部欠

敲石観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	遺存状態	備考
26	0T10-11	2126	IV下	10.9	10.4	3.4	442.0	ホルンフェルス	完形	

敲磨石観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	遺存状態	備考
27	足1008	15	2	A	10.9	8.2	3.2	426.5	安山岩	完形	
28	0T9-18	2107	IV下	A	12.6	9.4	5.3	829.1	安山岩	完形	
29	足1008	12	3	C1	7.7	7.4	4.0	283.3	安山岩	1/2欠	被熱
30	0T9-22	2113	IV下	D2	13.8	9.1	5.1	963.1	安山岩	完形	
31	0T8-11	2064	IV下	E	11.6	9.7	3.6	571.0	砂岩	完形	
32	0V9-9	2017	IV下	G1	9.4	8.2	4.5	479.5	安山岩	完形	
33	0W9-18	2036	IV下	G1	18.0	8.2	3.9	592.6	輝緑岩	完形	
34	0T9-17	2108	IV下	G1	14.8	9.4	3.4	769.1	安山岩	完形	
35	0W9-17	2033	IV下	G1	13.3	10.1	4.2	781.9	ホルンフェルス	完形	
36	0W10-1	2026	IV下	C4	9.0	7.4	4.4	329.4	砂岩	完形	

石皿観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	遺存状態	備考
39	0T9-22	1058	IV下	46.4	48.6	10.8	38200.0	流紋岩		

台石観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	遺存状態	備考
37	0T10-7	2133	IV下	21.9	15.1	5.3	2100.0	花崗岩	完形	
38	集(土坑)015		1	29.6	25.6	6.7	7100.0	花崗岩	完形	

敲石観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	遺存状態	備考
40	敲1003	3	3	7.1	4.7	3.1	62.0	凝灰岩	完形	表面中央に敲痕有り

石核観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	備考
41	0V9-15	1174	IV下	3.3	5.8	6.2	59.7	流紋岩	被熱
42	0T9-16	1076	IV下	3.0	4.5	2.4	26.1	流紋岩	3点接合
42-1	0T9-16	1076	IV下	1.7	2.2	0.9	19.3	流紋岩	
42-2	0T9-16	1076	IV下	2.0	2.3	1.4	4.9	流紋岩	
42-3	0T9-16	1076	IV下	2.5	3.6	2.4	1.9	流紋岩	

猿額遺跡　石器観察表（2）

下層（Ⅴ層）

石器観察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	遺存状態	備考
43	0T8-7		V	B	2.3	1.9	0.3	0.9	流紋岩		先端・片足欠	
44	0T9-5		V	B	2.4	1.6	0.4	0.6	流紋岩		先端・片足欠	
45	0S9-20	4058	V	B	3.2	1.7	0.7	1.7	凝灰岩		完形	

石鏃類察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	遺存状態	備考
46	0T7-25		V	B	4.5	3.5	0.9	11.1	珪質頁岩		完形	

石鏃類察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	離部断面形	遺存状態	備考
47	0T8-25		V	A1	4.4	2.1	0.9	6.1	流紋岩		菱形	完形	離部磨耗
48	0T9-10		V	B	3.3	1.3	0.9	2.4	凝灰岩		三角形	完形	
49	0W9-9		V		5.3	4.0	4.0	31.6	メノウ			離部欠損	

不定形石器類察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	素材	二次調整部位	備考
50	0X8			D	6.0	5.2	1.7	46.3	玉髄		縦辺？　右側縁～下縁	
51	0L9-14		V	F	4.3	7.3	1.5	19.7	流紋岩		縦辺　下縁	
52	0W9-9		V	G	7.8	6.4	1.8	44.4	凝灰岩		縦辺	右側縁に微細剥離痕
53	P1035	1		G	4.1	2.3	1.1	5.8	珪岩		縦辺	右側縁に微細剥離痕

微小石器類察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	刃部断面形	遺存状態	備考
54	0V9-20	4013	V	B	4.3	2.9	1.6	8.1	玉髄	両刃	完形	
55	0S9-20	4056	V		6.5	3.1	2.3	32.5	凝灰岩	―	1/2欠	未成品
56	0T9-3	4047	V	A	10.6	5.0	2.2	123.6	珪岩	両刃	完形	
57	0T9-22	4037	V	B	6.0	4.9	1.7	35.2	凝灰岩	片刃	完形	
58	0L9-19	4068	V	B	8.3	4.5	1.8	63.0	凝灰岩	片刃	完形	

磨製石斧類察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	刃部断面形	遺存状態	備考
59	0Y9-3		V	C	7.5	4.5	2.2	98.0	砂岩	両刃	基部欠	

敲磨石器類察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	遺存状態	備考
60	0V10-2	5002	V	C2	10.8	8.1	4.4	697.0	安山岩	完形	
61	0S10-5	5023	V	F2	9.5	7.9	3.4	366.1	安山岩	完形	
62	0T8-11	5093	V	G1	11.3	7.5	3.7	428.3	安山岩	完形	
63	0Y8-21			G1	11.3	8.3	3.4	504.6	砂岩	完形	
64	0U18-21			G1	15.2	9.4	4.9	935.7	安山岩	完形	
65	0V9-15	5021	V	G2	17.1	7.0	4.4	686.5	凝灰岩	完形	
66	0W8-23		V	G3	17.2	6.5	4.9	813.8	凝灰岩	完形	

台石類察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	遺存状態	備考
67	0T9-7	5047	V	21.0	16.8	5.5	2900.0	花崗岩	完形	
68	SX1010	1	S	21.9	20.4	7.8	4900.0	花崗岩	完形	
69	0T9～6	5045	V	28.7	25.2	4.4	6200.0	花崗岩	完形	

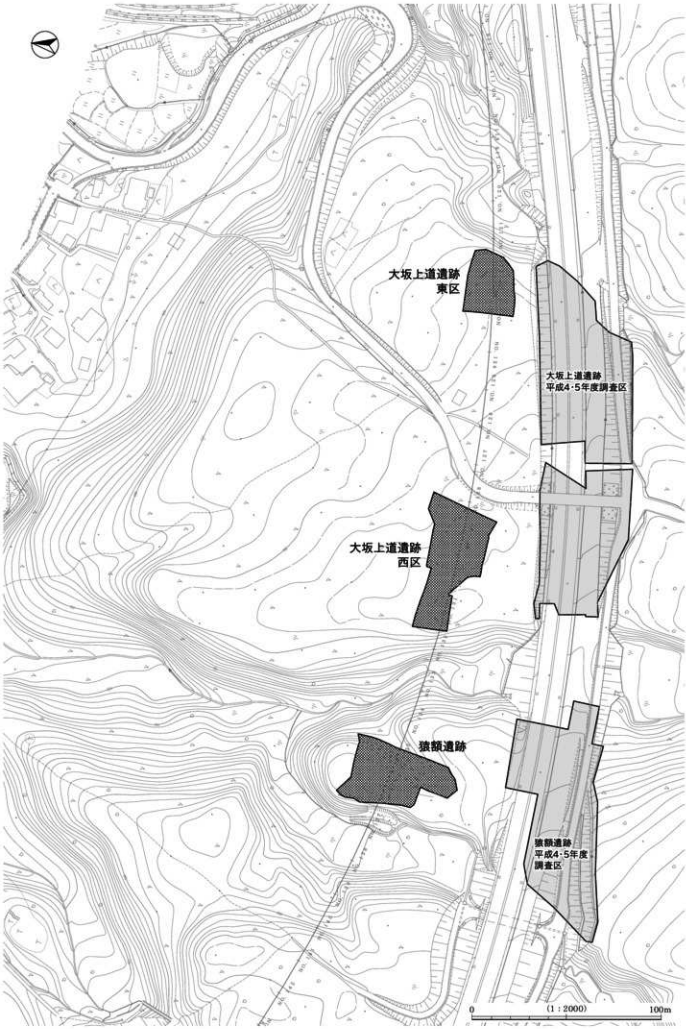
石核類察表

No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	備考
70	0W9-19		V	3.1	4.7	4.4	83.7	流紋岩	
71	0U10-6		V	4.2	5.2	4.4	112.3	メノウ	

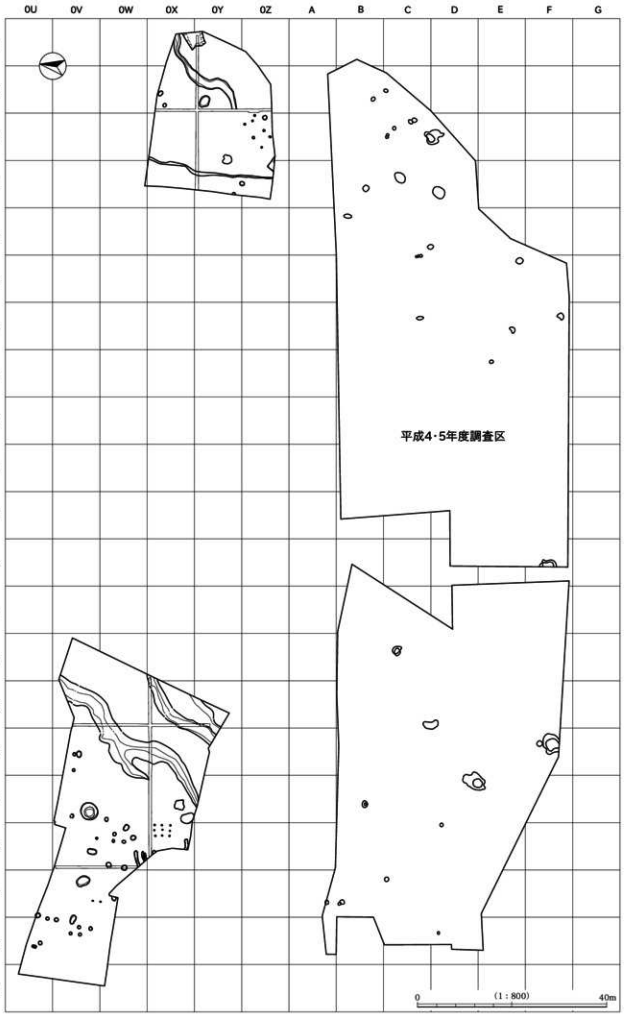
旧石器観察表

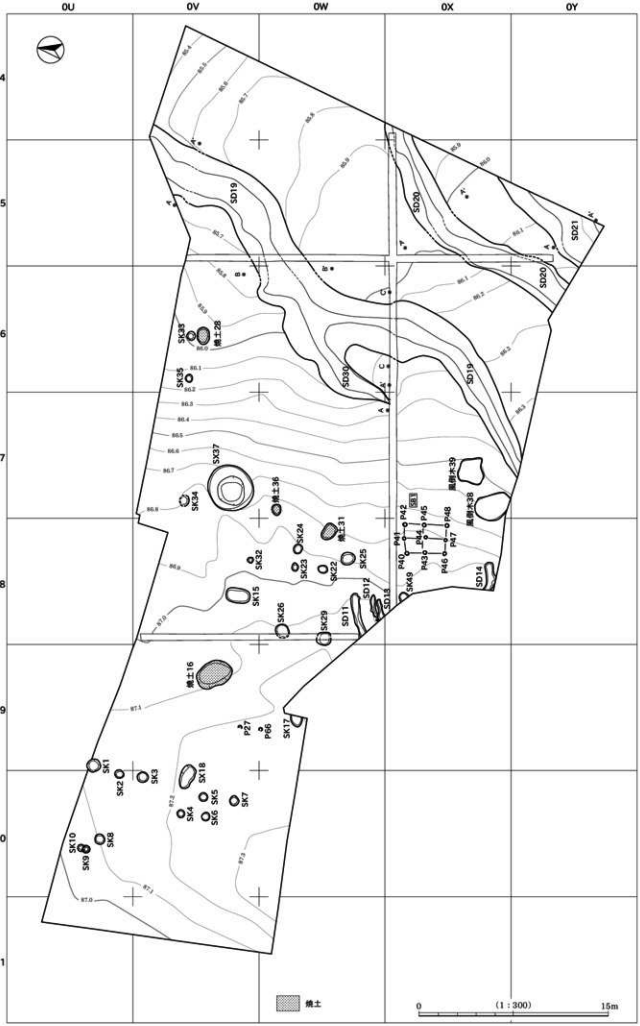
No.	出土地点・遺構名	遺物NO.	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	遺存状態	備考
72	0W9-23	1211	Ⅳ下	6.0	3.1	1.1	9.8	珪質頁岩	2/3	先端部欠、2点接合
73	0T9-24	4034	V	7.2	3.3	1.3	16.0	珪質頁岩	完形	調整調整有り、打面形状は山型
74	0T9-23	4036	V	6.8	4.1	1.5	31.0	珪質頁岩	完形	打面形状は凸状
75	0W10-1	1196	Ⅳ下	6.8	4.4	2.2	49.6	珪質頁岩	完形	
76	0W9-6	4072	V	10.1	3.2	1.8	40.8	珪質頁岩	完形	調整調整有り、打面形状は山型
77	0T9-23	4032	V	6.0	8.1	1.0	66.5	珪質頁岩	完形	
78	0V9-5	4070	V	12.1	5.0	1.7	87.3	珪質頁岩	完形	調整調整有り、打面形状は点状
79	0V10-5	4010	V	11.0	4.9	2.2	133.6	凝灰岩？	完形	風化著しい

図　　版

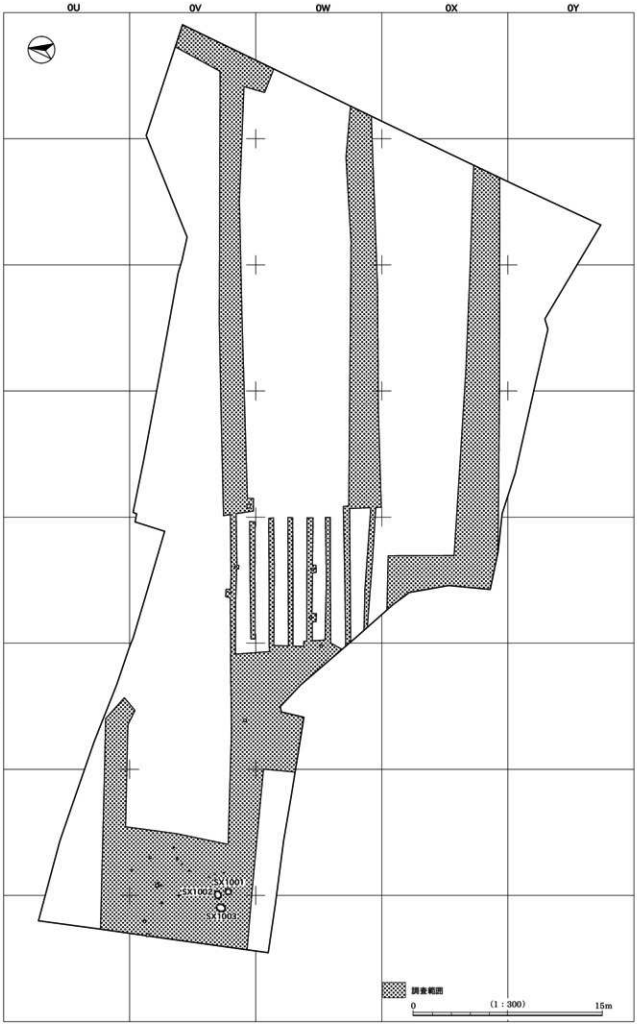

大坂上道遺跡
東区
大坂上道遺跡
平成4・5年度調査区
大坂上道遺跡
西区
猿額遺跡
猿額遺跡
平成4・5年度
調査区
0
(1：2000)
100m

大坂上道遺跡　遺構配置図



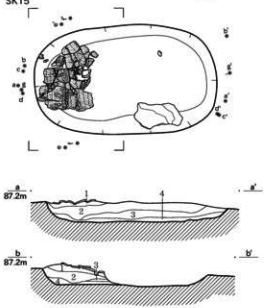

0U
0V
0W
0X
0Y
14
15
16
17
18
19
20
21
SD19
SD20
SD21
SK28
焼土28
SK35
SK37
SK34
焼土36
焼土31
SK24
SK32
SK22
SK25
SK15
SK26
SK29
SD11
SD12
SD13
SD14
SK49
P40
P41
P42
P43
P44
P45
P46
P47
P48
焼土39
焼土38
焼土16
SK17
P65
P67
P66
SK1
SK2
SK3
SK18
SK4
SK5
SK6
SK7
SK10
SK9
SK8
焼土
0
(1：300)
15m

大坂上道遺跡　遺構配置図　西区（下層）



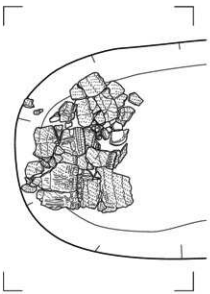
西区（上層）

SK15

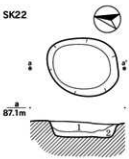


SK15
1　明褐色土　　炭化粒微量含む。粘性なし。しまりなし。
2　灰褐色土　　炭化粒微量含む。粘性なし。しまりなし。
3　にぶい褐色土　炭化粒極微量含む。粘性なし。しまりなし。
4　黄褐色土　　粘性なし。しまりなし。

SK15遺物出土状況図

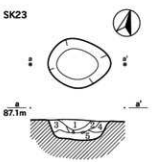


SK22



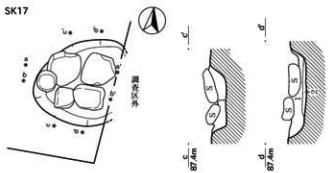
SK22
1　暗褐色土　　φ0.5～1.0cmの礫多量含む。炭化粒含む。
　　粘性なし。しまりあり。
2　褐色土　　φ0.5～1.0cmの礫多量含む。炭化粒含む。
　　粘性あり。しまりあり。

SK23



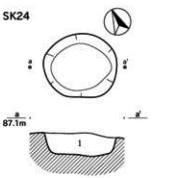
SK23
1　暗褐色土　　炭化粒含む。Ⅳ層土ブロック状に少量含む。
　　粘性なし。しまりなし。
2　黄褐色土　　Ⅳ層土多量含む。黒色土ブロック含む。炭化粒少量含む。
　　粘性なし。しまりなし。
3　褐色土　　Ⅳ層土多量含む。粘性なし。しまりあり。
4　暗褐色土　　炭化粒少量含む。粘性なし。しまりなし。
5　黒褐色土　　φ0.5cm粒度の礫少量含む。粘性あり。しまりなし。

SK17



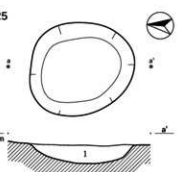
SK17
1　褐色土　　炭化粒少量含む。粘性なし。しまりあり。
2　暗褐色土　　炭化粒少量含む。粘性なし。しまりなし。

SK24



SK24
1　黄褐色土　　Ⅳ層土多量含む。炭化粒少量含む。
　　粘性なし。しまりなし。

SK25

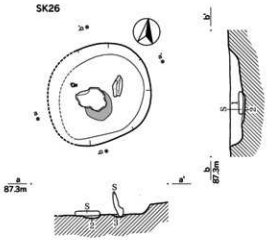


SK25
1　暗褐色土　　炭化物(φ0.1～1.0cm)多量含む。
　　Ⅳ層土少量含む。
　　粘性なし。しまりなし。

0　SK15遺物出土状況図（1：20）　1m

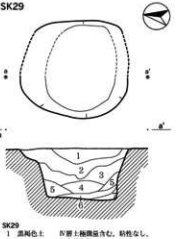
0　その他の遺構（1：40）　2m

SK26



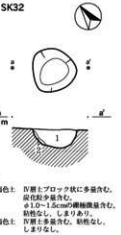
SK26
1　明黄褐色土　Ⅳ層土多量含む、炭化粒少量含む、
　　粘性なし、しまりあり。
2　褐色土　　焼土、炭化粒多量含む、
　　粘性なし、しまりあり。
3　褐色土　　粘性なし、しまりなし。

SK29



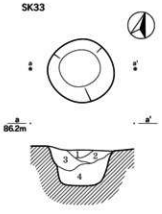
SK29
1　黒褐色土　Ⅳ層土極微量含む、粘性なし、
　　しまりなし。
2　暗褐色土　Ⅳ層土少量含む、炭化粒極微量含む、
　　粘性なし、しまりなし。
3　褐色土　　Ⅳ層土含む、炭化粒・焼土粒少量含む、
　　粘性なし、しまりなし。
4　黄褐色土　黒褐色土ブロック含む、φ0.5～1.0cm
　　程度の礫多量含む、焼土粒少量含む、
　　粘性あり、しまりなし。
5　褐色土　　φ0.5～1.0cm程度の礫少量含む、
　　炭化粒・焼土粒少量含む、粘性あり、
　　しまりなし。
6　明黄褐色土　φ0.5～1.0cm程度の礫少量含む、
　　焼土粒極微量含む、粘性あり、
　　しまりなし。
7　明黄褐色土　焼土粒極微量含む、粘性あり、
　　しまりなし。

SK32



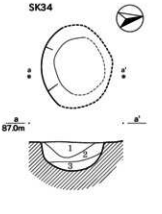
SK32
1　暗褐色土　Ⅳ層土ブロック状に多量含む、
　　炭化粒少量含む、
　　φ1.0～1.5cm程度の礫極微量含む、
　　粘性なし、しまりあり。
2　黄褐色土　Ⅳ層土多量含む、粘性なし、
　　しまりなし。

SK33



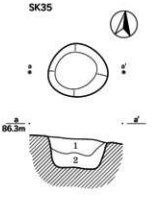
SK33
1　暗褐色土　炭化粒少量含む、
　　粘性なし、しまりなし。
2　褐色土　　粘性なし、しまりなし。
3　暗褐色土　炭化粒微量含む、
　　粘性なし、しまりなし。
4　黒褐色土　炭化粒少量含む、
　　粘性あり、しまりなし。

SK34



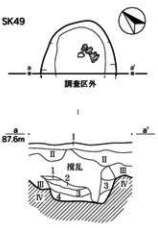
SK34
1　暗褐色土　炭化粒少量含む、粘性なし、
　　しまりあり。
2　褐色土　　炭化粒微量含む、φ0.5～1.0cm
　　程度の礫微量含む、粘性なし、
　　しまりあり。
3　褐色土　　炭化粒微量含む、粘性あり、
　　しまりあり。

SK35



SK35
1　褐色土　　炭化粒少量含む、粘性なし、
　　しまりあり。
2　暗褐色土　粘性あり、しまりなし。

SK49

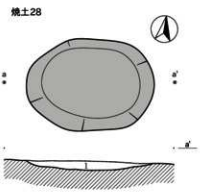


SK49
1　黒褐色土　　粘性あり、しまりあり。
2　暗褐色土　　炭化粒微量含む、粘性あり、
　　しまりあり。
3　にぶい黄褐色土　Ⅳ層土ブロック状に多量含む、
　　炭化粒多量含む、
　　粘性あり、しまりなし。
4　褐色土　　炭化粒少量含む、粘性あり、
　　しまりなし。

焼土16

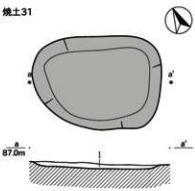
焼土16
1　褐色土　焼土、Ⅳ層土多量含む、黄褐色ブロック
　　多量含む、炭化粒微量含む、
　　粘性なし、しまりなし。

焼土28



焼土28
1　明褐色土　焼土、黒色土ブロック多量含む、粘性なし、
　　しまりなし。

焼土31

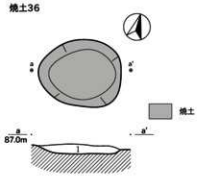


焼土31
1　橙色土　焼土。粘性なし、しまりあり。

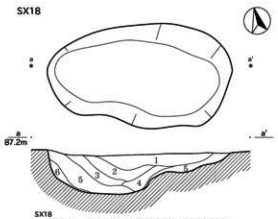
焼土

その他の遺構（1：40）　0　2m

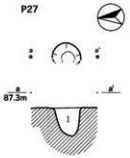
焼土16（1：80）　0　4m



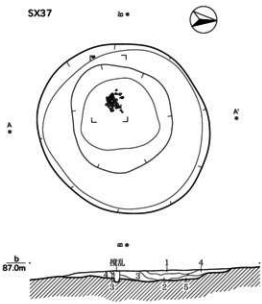
焼土36
1　明褐色土　焼土。粘性なし、しまりあり。

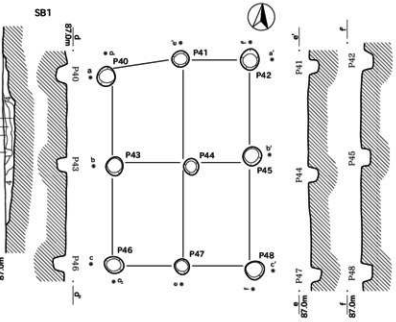


SX18
1　暗褐色土　IV層土ブロック状に多量含む。炭化粒多量含む。粘性なし、しまりなし。
2　黒褐色土　IV層土ブロック状に少量含む。炭化粒少量含む。粘性なし、しまりなし。
3　褐色土　IV層土ブロック状に少量含む。炭化粒少量含む。粘性なし、しまりなし。
4　黒褐色土　IV層土ブロック状に少量含む。炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。
5　黄褐色土　IV層土ブロック状に多量含む。炭化粒少量含む。粘性なし、しまりなし。
6　明黄褐色土　黒褐色土少量含む。炭化粒少量含む。粘性なし、しまりなし。

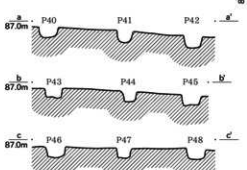


P27
1　暗褐色土　IV層土多量含む。炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。

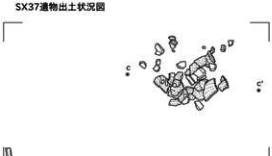


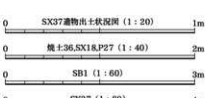


SX37
1　黒褐色土　炭化粒少量含む。IV層土粒状に微量含む。粘性なし、しまりなし。
2　暗褐色土　IV層土粒状に多量含む。炭化粒極微量含む。粘性なし、しまりなし。
3　褐色土　IV層土多量含む。炭化粒微量含む。粘性なし、しまりなし。
4　黄褐色土　IV層土多量含む。炭化粒極微量含む。粘性なし、しまりなし。
5　にぶい黄褐色土　IV層土多量含む。炭化粒極微量含む。粘性なし、しまりなし。

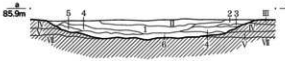


SX37遺物出土状況図

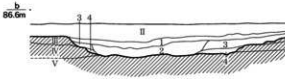




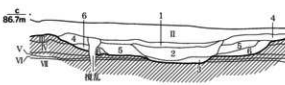
SD19



SD19　a-a'
1　黒褐色土　II層土ブロック状に多量含む、炭化粒少量含む、粘性あり、しまりあり。
2　にぶい黄褐色土　炭化粒多量含む、粘性あり、しまりなし。
3　黄褐色土　炭化物少量含む、粘性あり、しまりなし。
4　暗褐色土　φ0.5～1.0cmの礫多量含む、炭化粒少量含む、粘性あり、しまりあり。
5　褐色土　φ0.5～1.0cmの礫多量含む、炭化粒微量含む、粘性あり、しまりあり。
6　にぶい黄褐色土　φ0.5～2.0cmの礫多量含む、炭化粒少量含む、粘性あり、しまりあり。

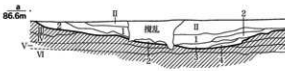


SD19　b-b'
1　黒褐色土　φ0.5～1.0cmの礫少量含む、粘性あり、しまりあり。
2　褐色土　炭化粒少量含む、粘性あり、しまりあり。
3　暗褐色土　炭化粒少量含む、粘性あり、しまりなし。
4　にぶい黄褐色土　炭化粒微量含む、粘性あり、しまりあり。



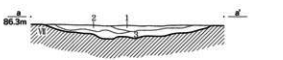
SD19　c-c'
1　黒褐色土　IV層土含む、φ0.5～2.0cmの焼土粒含む、炭化粒少量含む、粘性なし、しまりなし。
2　褐色土　炭化粒含む、焼土粒少量含む、IV層土ブロック状に少量含む、粘性あり、しまりあり。
3　明黄褐色土　φ1.0～5.0cm程度の礫少量含む、粘性あり、しまりあり。
4　黄褐色土　IV層土ブロック状に少量含む、炭化粒極微量含む、粘性あり、しまりなし。
5　黄褐色土　暗褐色土ブロック状に多量含む、炭化粒・焼土粒少量含む、粘性なし、しまりなし。
6　黄褐色土　炭化粒・焼土粒少量含む、粘性なし、しまりなし。

SD20



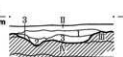
SD20
1　黒褐色土　IV層土ブロック状に少量含む、炭化粒少量含む、粘性なし、しまりなし。
2　暗褐色土　IV層土多量含む、炭化粒少量含む、粘性なし、しまりなし。
3　褐色土　φ0.5～1.0cmの礫多量含む、炭化粒少量含む、粘性なし、しまりあり。
4　にぶい黄褐色土　炭化粒微量含む、粘性なし、しまりあり。

SD21



SD21
1　黒褐色土　IV層土ブロック状に少量含む、炭化粒極微量含む、粘性あり、しまりなし。
2　暗褐色土　黄褐色土ブロック多量含む、炭化粒少量含む、粘性あり、しまりあり。
3　褐色土　黄褐色土ブロック多量含む、炭化粒少量含む、粘性あり、しまりあり。

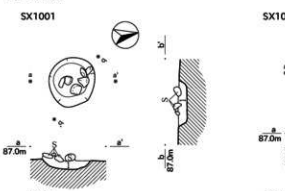
SD30



SD30
1　暗褐色土　II層土ブロック状に多量含む、IV層土ブロック状に少量含む、炭化粒極微量含む、粘性なし、しまりなし。
2　褐色土　IV層土多量含む、炭化粒極微量含む、粘性なし、しまりなし。
3　褐色土　IV層土多量含む、II層土ブロック状に少量含む、炭化粒少量含む、粘性なし、しまりなし。

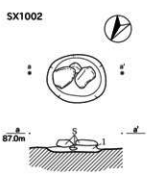
西区（下層）

SX1001



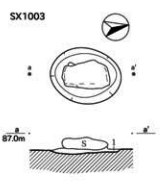
SX1001
1　にぶい黄橙色土　炭化粒少量含む、粘性あり、しまりあり。

SX1002

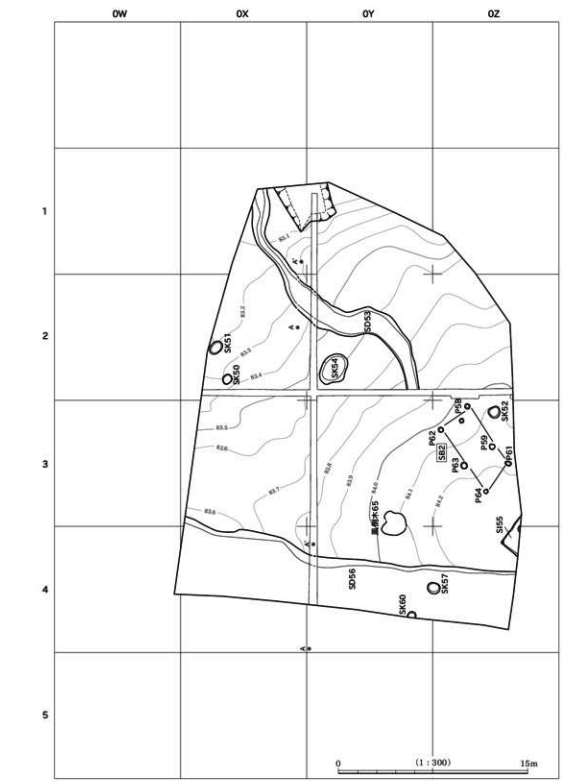


SX1002
1　にぶい黄橙色土　炭化粒微量含む、粘性あり、しまりあり。

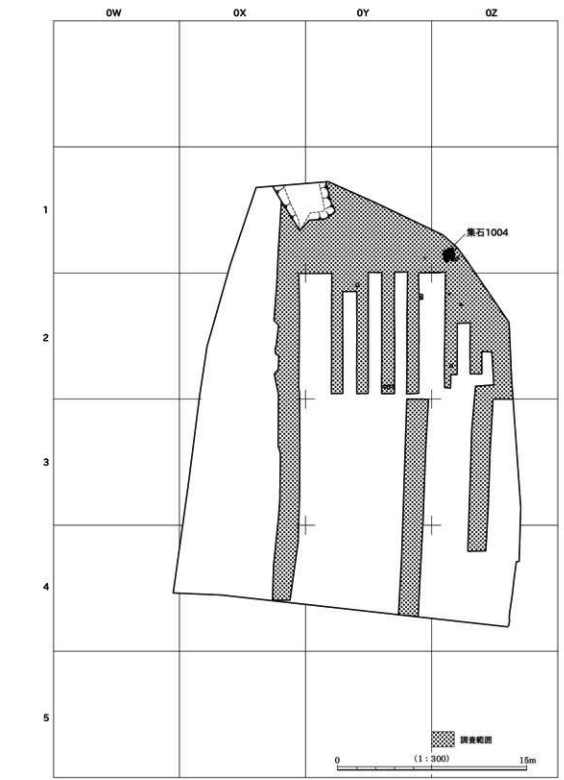
SX1003



SX1003
1　にぶい黄橙色土　炭化粒少量含む、粘性あり、しまりあり。

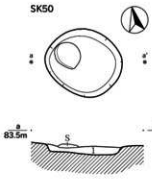

0W
0X
0Y
0Z
1
2
3
4
5
SK51
SK50
SK54
SD53
SK52
P58
P62
SB2
P63
P59
P61
P64
SI55
SD56
SK57
SK60
0
(1：300)
15m

大坂上道遺跡　遺構配置図　東区（下層）



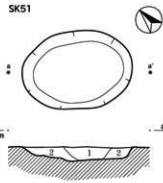
東区（上層）

SK50



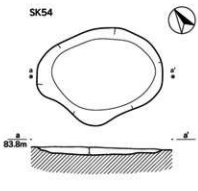
SK50
1　にぶい黄褐色土　Ⅳ層土多量含む、炭化粒多量含む、粘性なし、しまりあり。

SK51



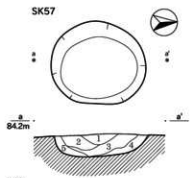
SK51
1　黒褐色土　炭化粒多量含む、Ⅳ層土ブロック状に少量含む、粘性なし、しまりなし。
2　暗褐色土　炭化粒極微量含む、粘性なし、しまりなし。

SK54



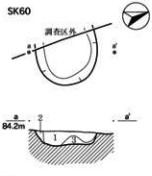
SK54
1　明褐色土　暗褐色土多量含む、炭化粒･焼土粒多量含む、粘性なし、しまりなし。

SK57



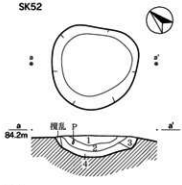
SK57
1　黒褐色土　　炭化粒少量含む、φ1.0cm程度の礫少量含む、粘性あり、しまりなし。
2　にぶい黄褐色土　炭化粒少量含む、粘性あり、しまりあり。
3　暗褐色土　　Ⅳ層土少量含む、炭化粒少量含む、粘性あり、しまりなし。
4　にぶい黄褐色土　5層のⅣをブロック状に多量含む、粘性あり、しまりなし。
5　にぶい黄橙色土　粘性あり、しまりなし。

SK60



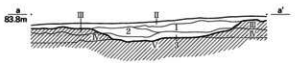
SK60
1　黒褐色土　　炭化粒多量含む、
　　黄褐色土少量含む、
　　粘性あり、しまりなし。
2　明黄褐色土　　粘性あり、しまりあり。
3　にぶい黄橙色土　粘性あり、しまりあり。

SK52



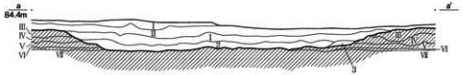
SK52
1　黒褐色土　　炭化粒少量含む、φ1.0cm程度の礫少量含む、粘性あり、しまりなし。
2　にぶい黄褐色土　炭化粒少量含む、粘性あり、しまりなし。
3　暗褐色土　　Ⅳ層土ブロック状に多量含む、炭化粒少量含む、粘性あり、しまりなし。
4　褐色土　　Ⅳ層土ブロック状に少量含む、粘性あり、しまりなし。

SD53



SD53
1　黒褐色土　　黒色土ブロック含む、炭化粒少量含む、粘性あり、しまりなし。
2　褐色土　　黒色土ブロック多量含む、炭化粒多量含む、粘性なし、しまりなし。
3　にぶい黄褐色土　黒褐色土ブロック含む、炭化粒少量含む、粘性なし、しまりなし。

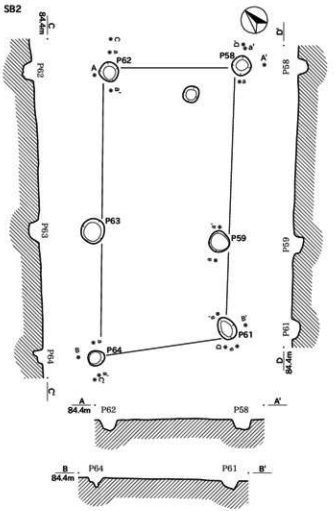
SD56

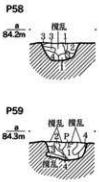


SD56
1　黒褐色土　　炭化粒多量含む、Ⅱ層土ブロック状に含む、粘性あり、しまりなし。
2　にぶい黄褐色土　炭化粒微量含む、粘性あり、しまりなし。
3　黄褐色土　　炭化粒微量含む、粘性あり、しまりややあり。

0　SK50･51･52･57･60（1：40）　2m

0　SK54,SD53･56（1：80）　4m





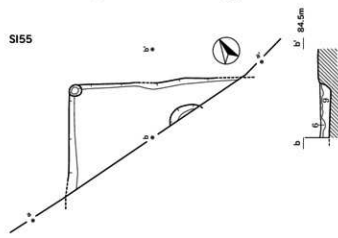
P58
1 黒褐色土　炭化粒少量含む。
　粘性やや有り、しまりなし。
2 黒褐色土　粘性やや有り、しまりなし。
3 暗褐色土　Ⅳ層土多量含む。
　粘性やや有り、しまりなし。
4 にぶい黄褐色土　Ⅳ層土ブロック状に含む。
　粘性あり、しまりなし。

P59
1 暗褐色土　粘性やや有り、しまりなし。
2 にぶい黄褐色土　粘性やや有り、しまりなし。
3 暗褐色土　粘性やや有り、しまりなし。
4 明黄褐色土　粘性なし、しまりあり。

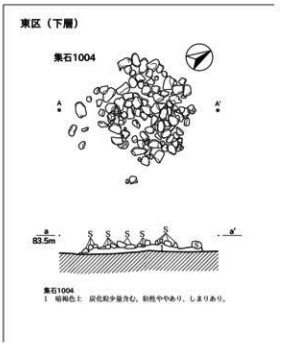
P61
1 黒褐色土　粘性あり、しまりなし。
2 暗褐色土　Ⅳ層土微量含む。
　粘性あり、しまりなし。

P62
1 褐色土　Ⅳ層土ブロック状に含む。
　炭化粒少量含む。
　粘性なし、しまりあり。
2 暗褐色土　炭化物多量含む、Ⅳ層土少量含む。
　粘性なし、しまりあり。

P64
1 暗褐色土　Ⅳ層土少量含む、炭化粒少量含む。
　粘性やや有り、しまりなし。
2 にぶい黄褐色土　Ⅳ層土ブロック状に含む。
　炭化物微量含む、粘性やや有り、
　しまりなし。



SI55
1 黒褐色土　炭化粒・焼土粒微量含む、粘性あり、しまりなし。
2 黄褐色土　炭化粒微量含む、粘性なし、しまりなし。
3 黒褐色土　明褐色土含む、焼土粒少量含む、炭化粒微量含む、
　粘性やや有り、しまりなし。
4 にぶい黄褐色土　炭化粒少量含む、粘性あり、しまりなし。
5 暗褐色土　焼土ブロック多量含む、炭化粒多量含む、
　粘性やや有り、しまりなし。
6 暗褐色土　Ⅳ層土、ブロック状に多量含む、炭化粒多量含む、焼土粒微量含む、
　粘性あり、しまりやや有り。
7 明褐色土　4層の土を含む、焼土粒多量含む、粘性なし、しまりややあり。
8 褐色土　焼土ブロック多量含む、炭化粒多量含む、
　粘性あり、しまりやや有り。
9 にぶい黄褐色土　6層の土を含む、焼土粒多量含む、炭化粒少量含む、
　粘性あり、しまりあり。
10 にぶい黄褐色土　焼土粒少量含む、粘性あり、しまりあり。
11 暗褐色土　Ⅳ層土、ブロック状に多量含む、炭化粒少量含む、
　焼土粒少量含む、粘性あり、しまりなし。



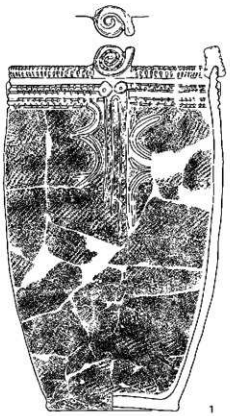
集石1004
1 暗褐色土　炭化粒少量含む、粘性やや有り、しまりあり。

0　SB2ピットセクション図,集石1004（1：40）　2m

0　SI55（1：60）　3m

0　SB2平面図・エレベーション図（1：80）　4m

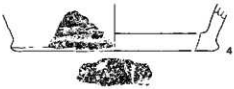
西区遺構出土
SK15（1・2）


1

SK3（3）

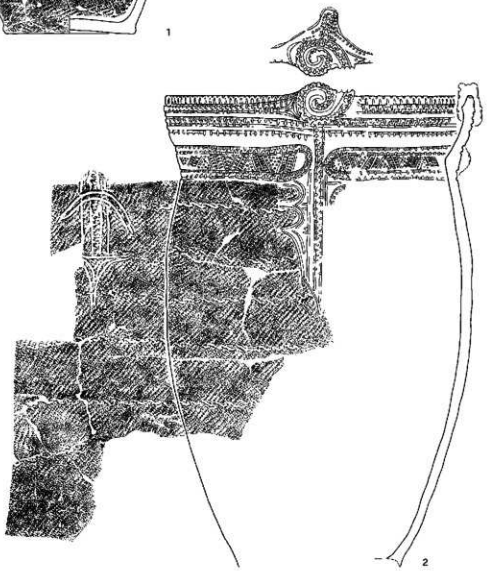
3

SK25（4）


4

SK49（5・6）

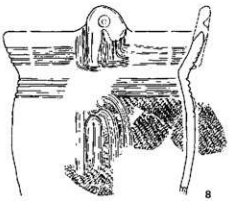
5　6


2

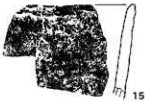
0　(1・2)　20cm　(1:4)

0　(3~6)　15cm　(1:3)

SD19（7～14）

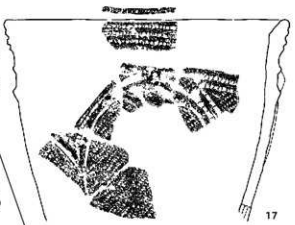


SD20（15）

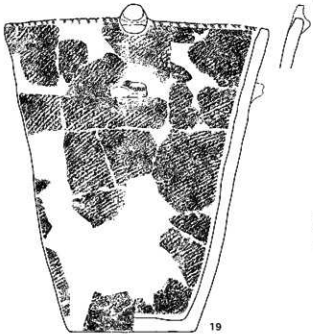


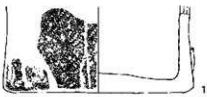
SD30（16）

SX18（17・18）

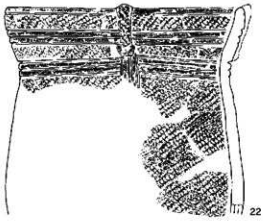


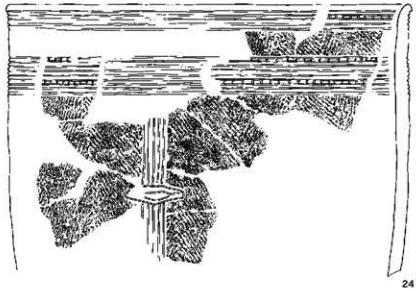
SX37（19～21）



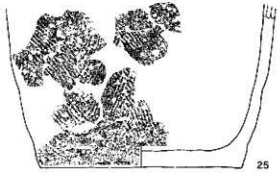


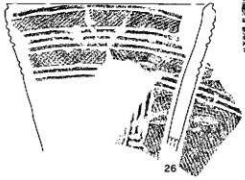
西区包含層出土（22～173）

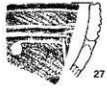

22


24

23

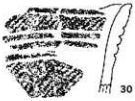

25

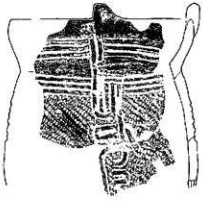

26


27

28

29


30


32

33

34

31

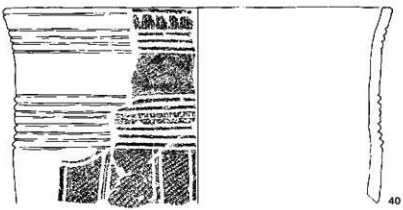
35

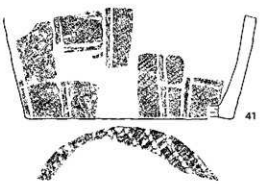
36

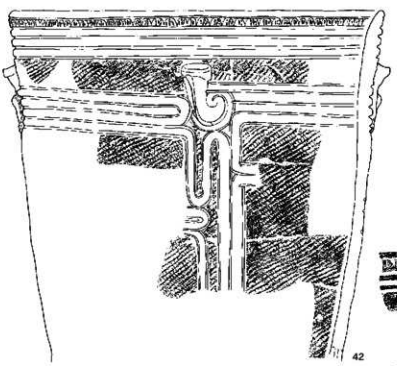
38

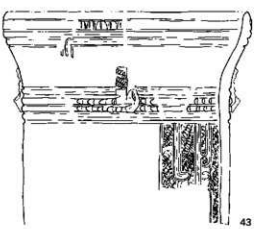
37

39


40


41


42


43

44

45

49

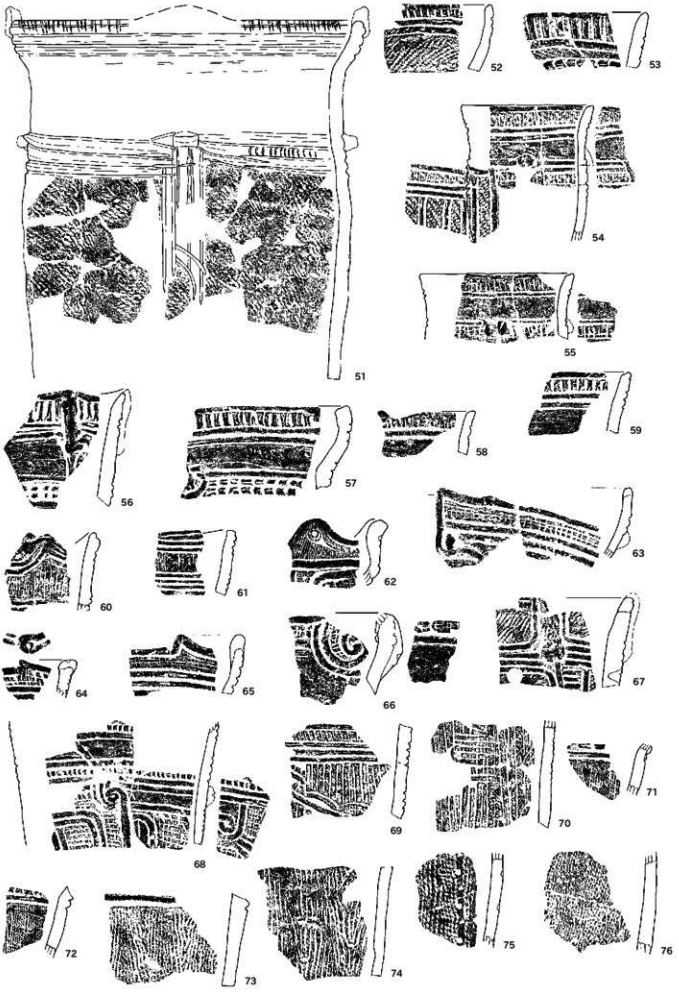
48

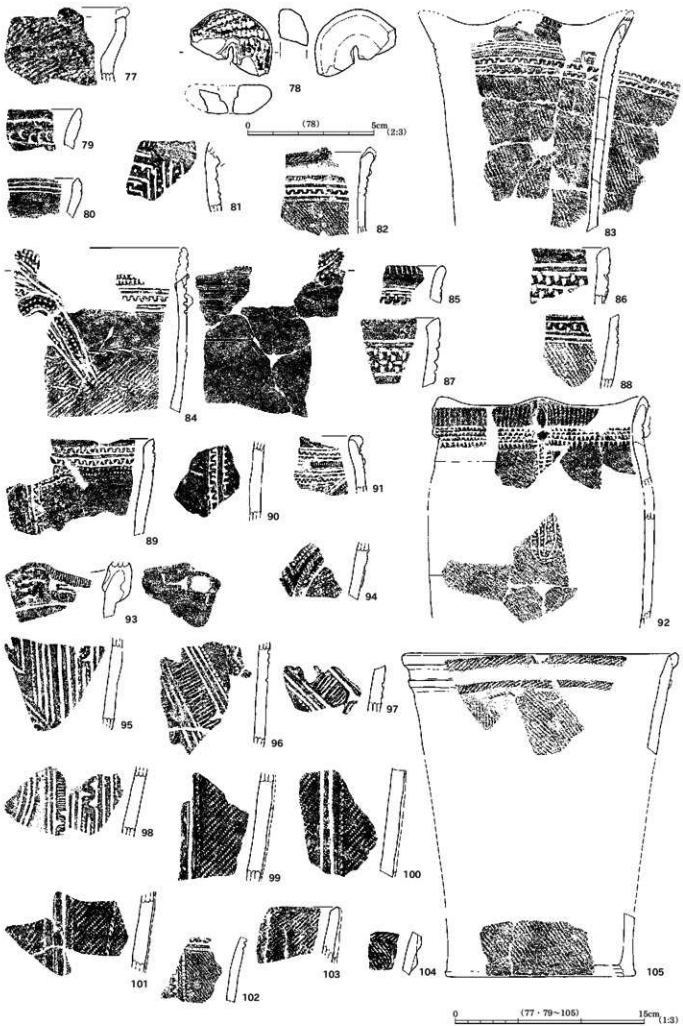
50

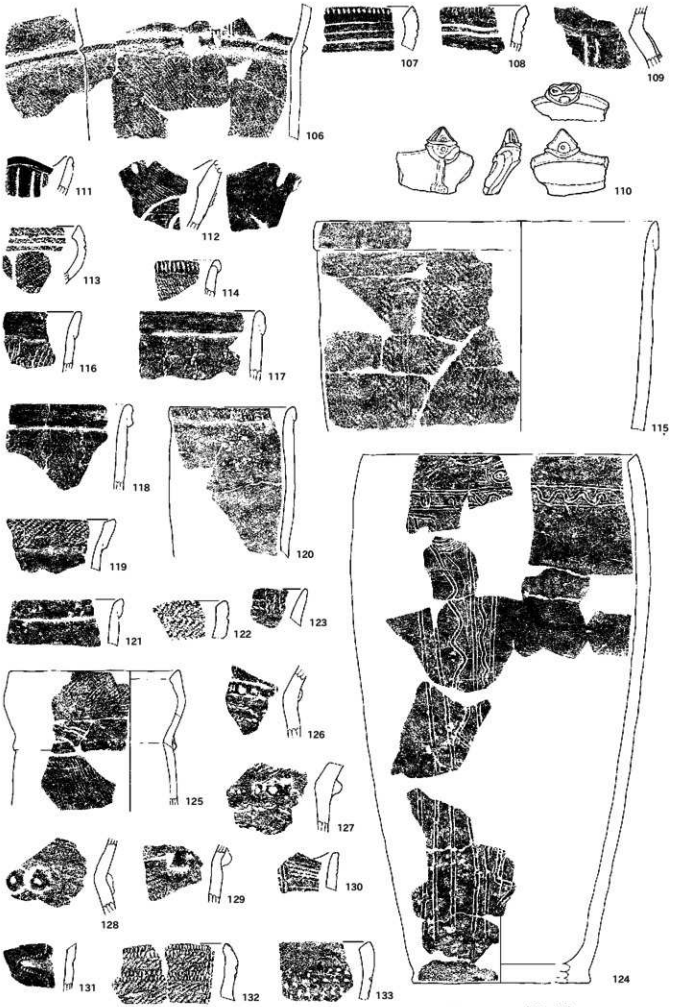
46

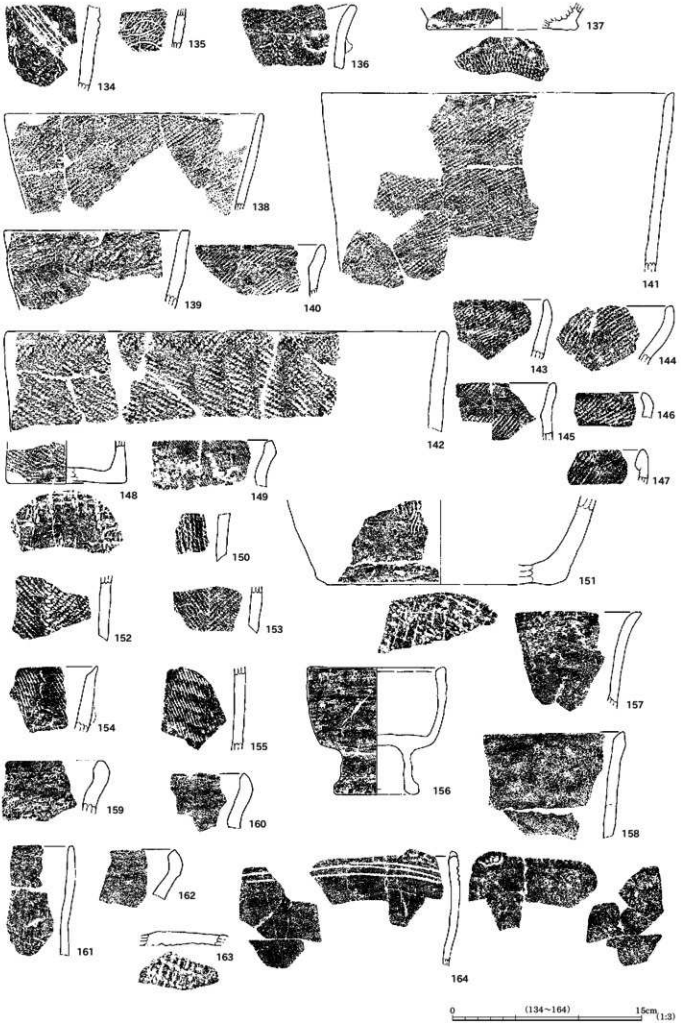
47

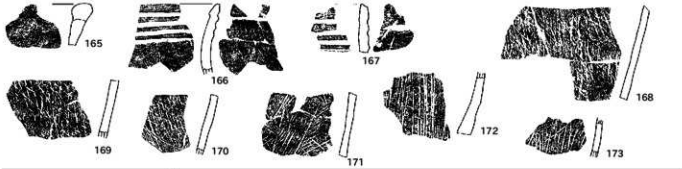
0　(36~50)　15cm (1:3)


51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
0
(51～76)
15cm
(1:3)

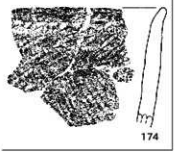

77
78
0 (78) 5cm (2:3)
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
0 (77・79~105) 15cm (1:3)


106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
0
(106～133)
15cm
(1:3)

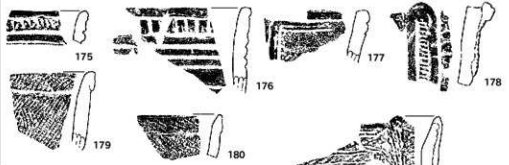

134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
0
(134~164)
15cm
(1:3)

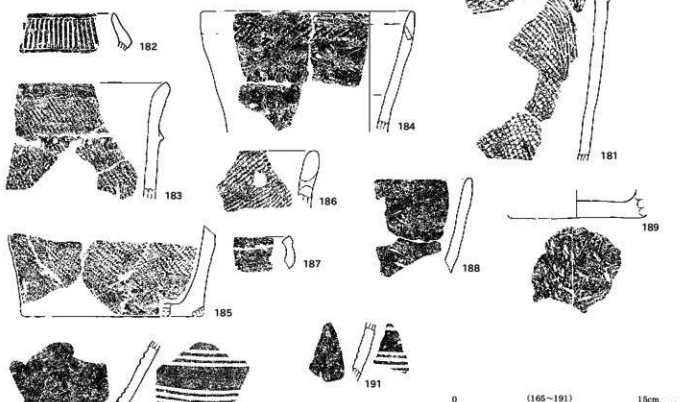


東区遺構出土
SD56（174）



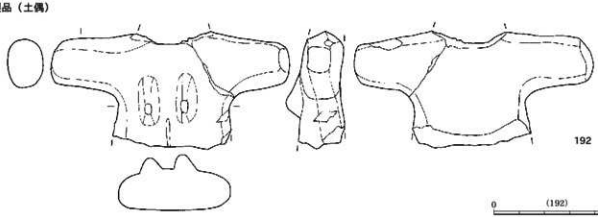
東区包含層出土（175～191）





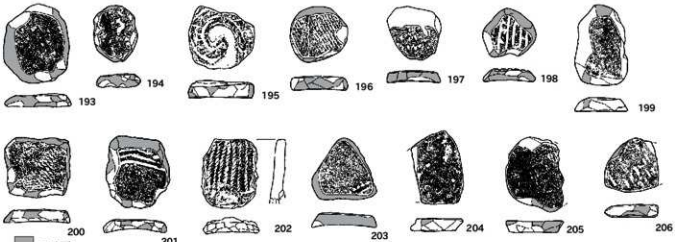
0　(165～191)　15cm (1:3)

土製品（土偶）



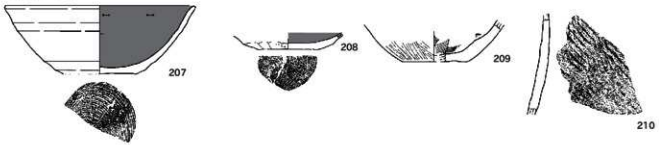
0　(192)　5cm (2:3)

土製品（土器片円盤）

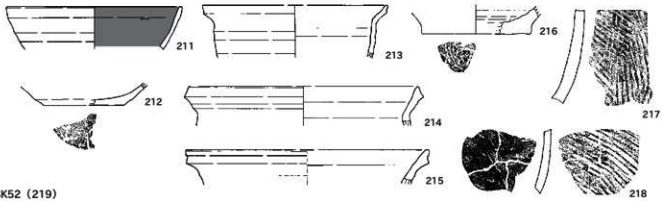


平安時代の土器（東区遺構出土）

SB2（207～210）

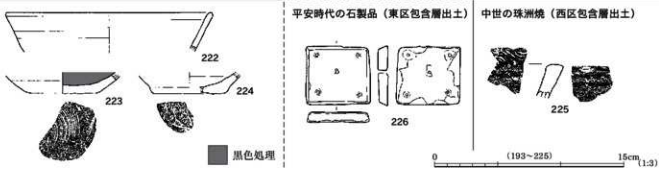


SI55（211～218）



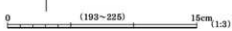
SK52（219）

平安時代の土器（東区包含層出土）

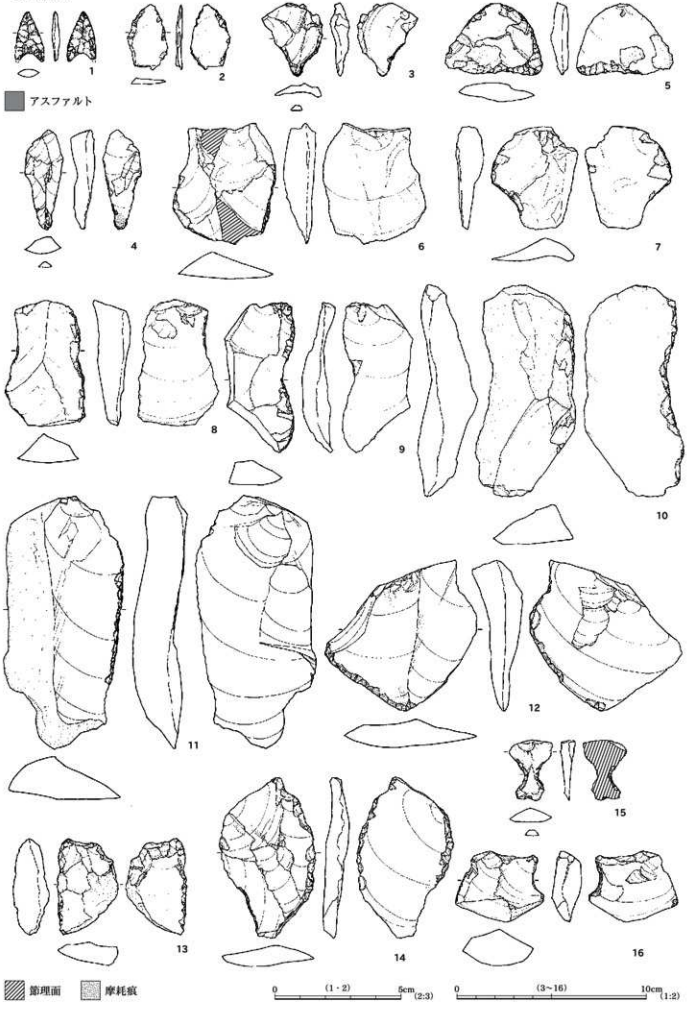


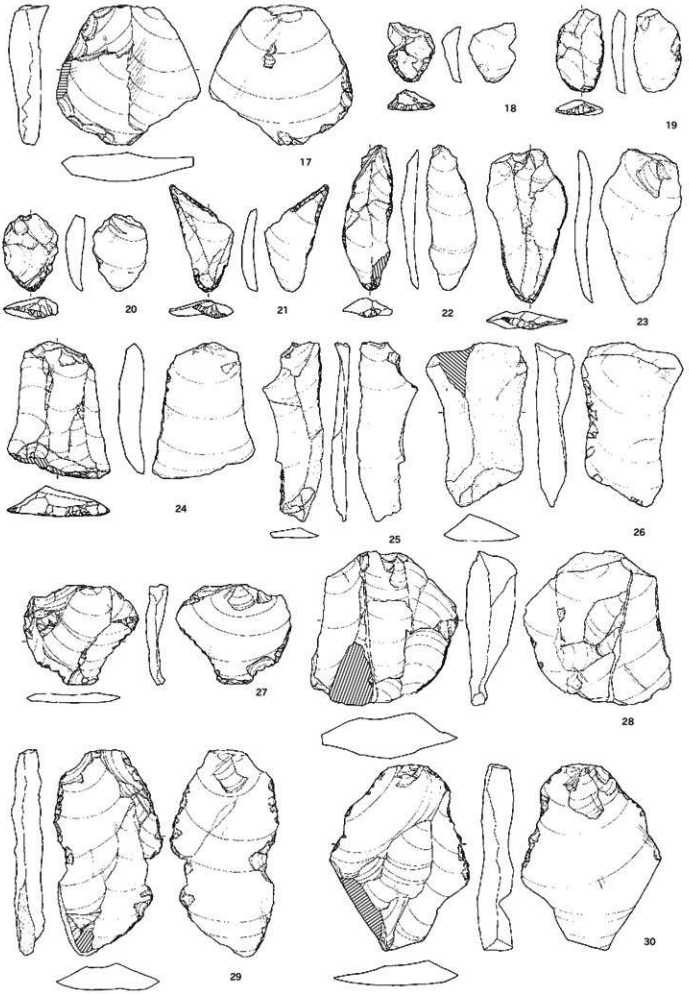
平安時代の石製品（東区包含層出土）

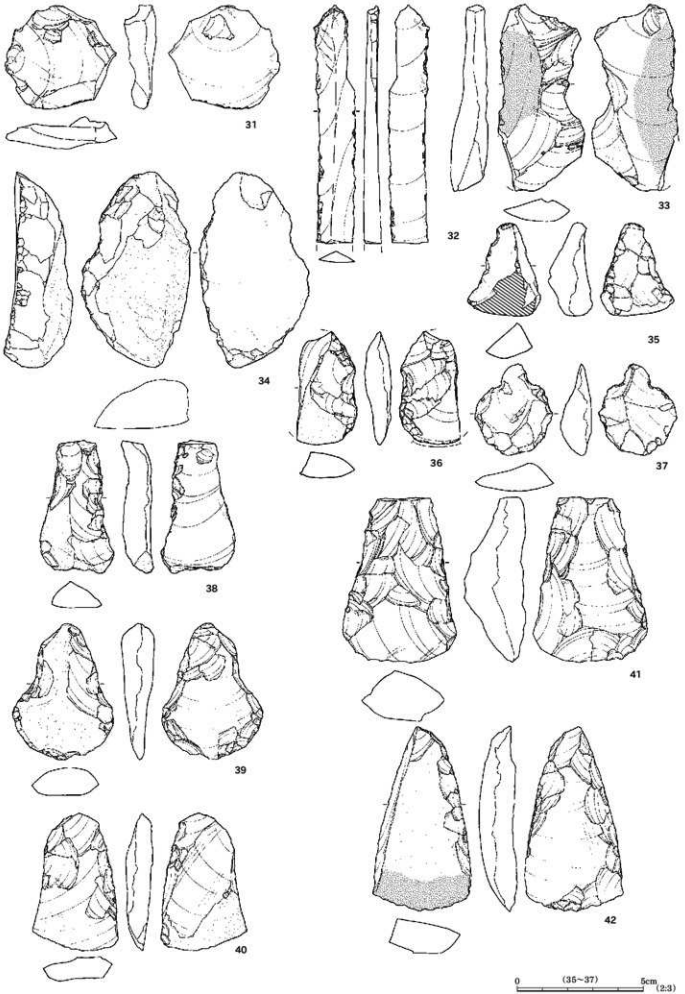
中世の珠洲焼（西区包含層出土）

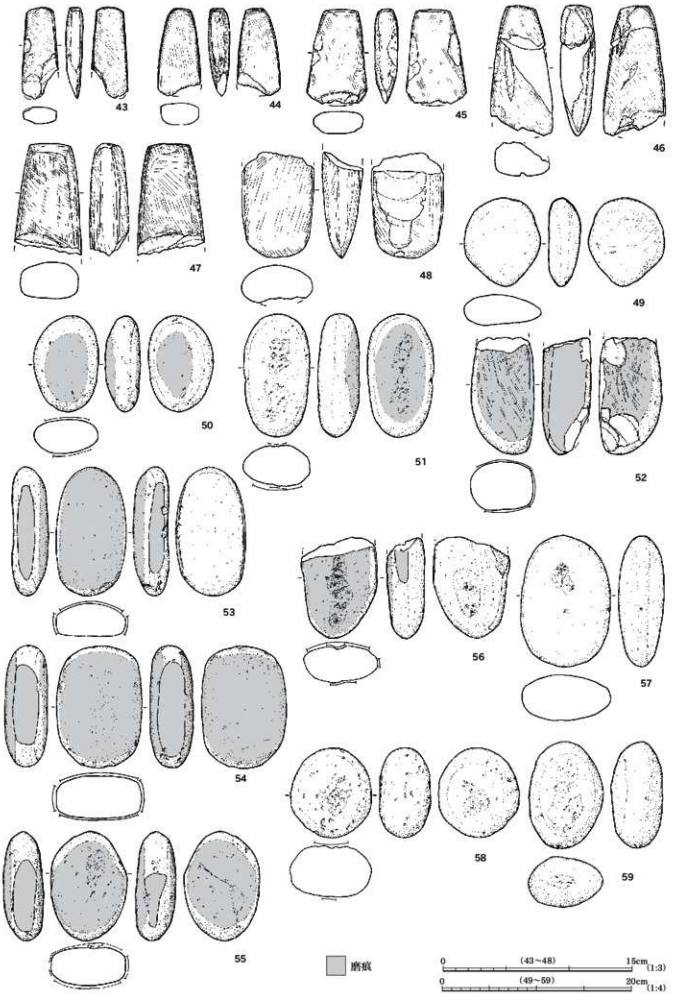


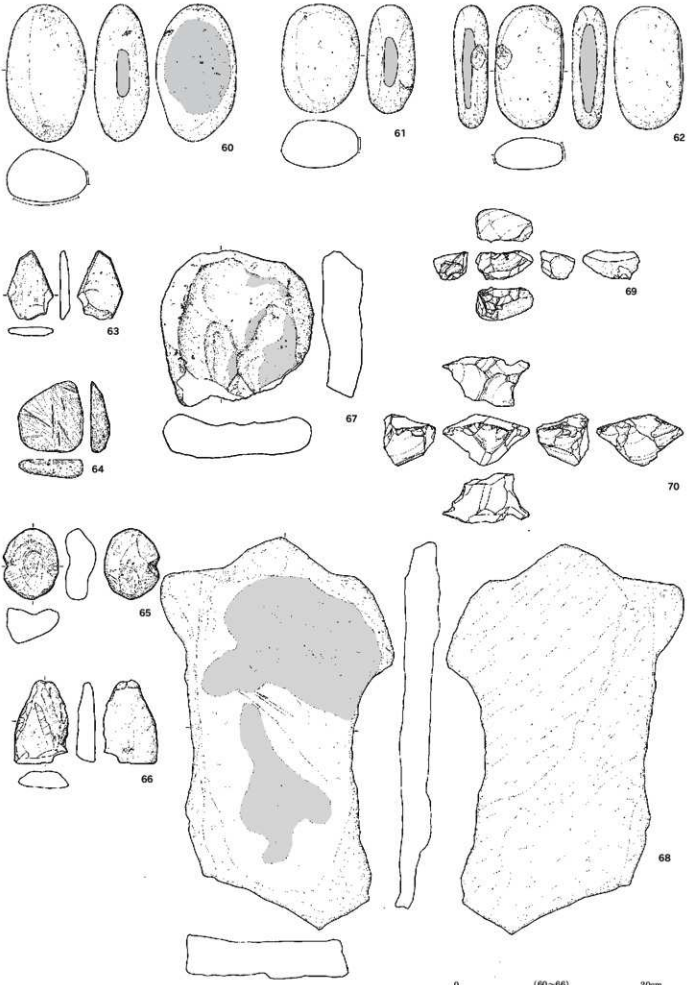
西区（上層）

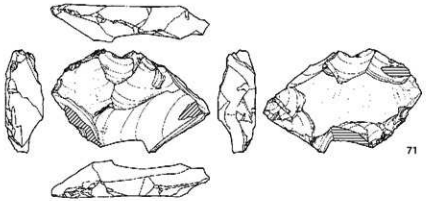

1
2
3
5
アスファルト
4
6
7
8
9
10
11
12
15
13
14
16
節理面
摩耗痕
0　(1・2)　5cm (2:3)
0　(3~16)　10cm (1:2)

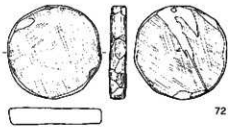

17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
節理面
0
(17~30)
10cm
(1:2)

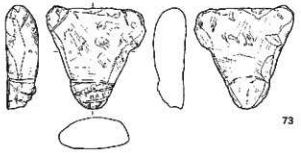

31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
摩耗痕
節理面
0 (31～34) 10cm (1:2)
0 (35～37) 5cm (2:3)
0 (38～42) 15cm (1:3)

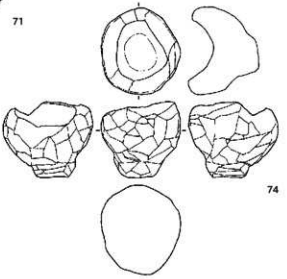

43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
磨痕
0　(43～48)　15cm　(1:3)
0　(49～59)　20cm　(1:4)


60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
磨痕・使用面
節理面
0 (69・70) 15cm (1:3)
0 (60～66) 20cm (1:4)
0 (67・68) 20cm (1:5)

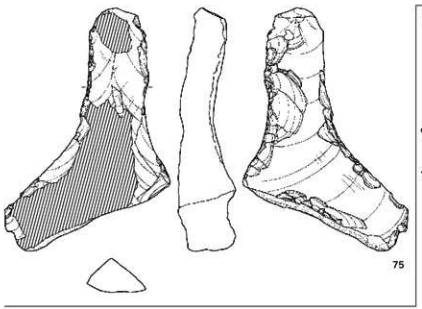

71

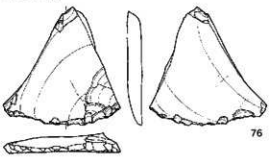

72

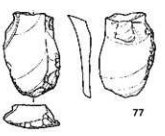

73

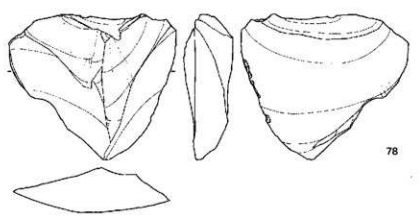

74

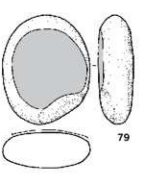
西区（下層）


75


76


77


78

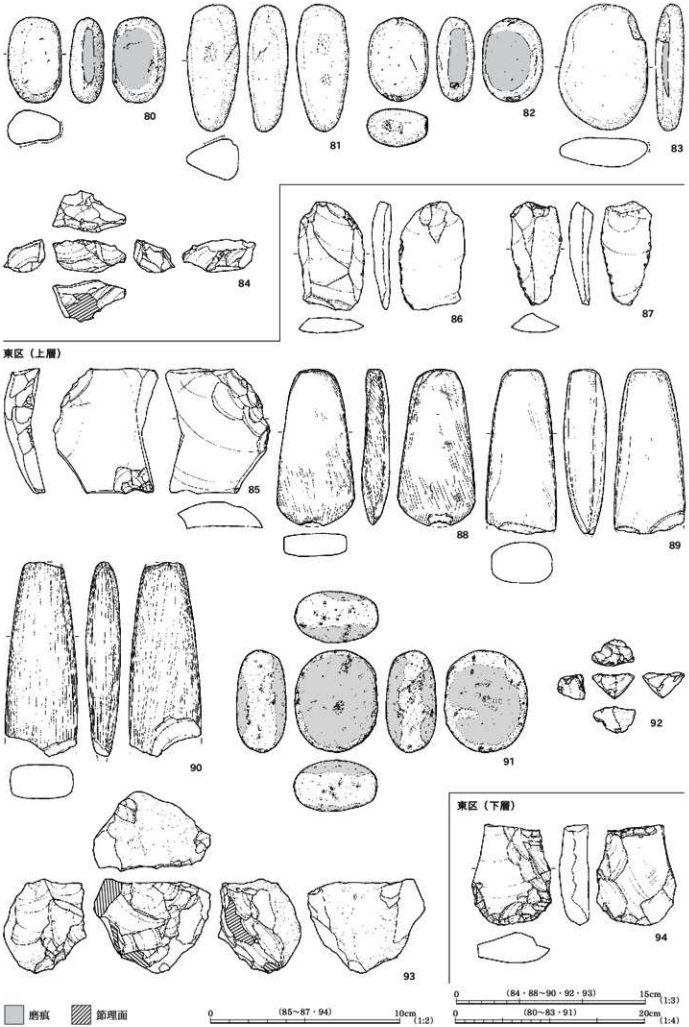

79

磨痕　節理面

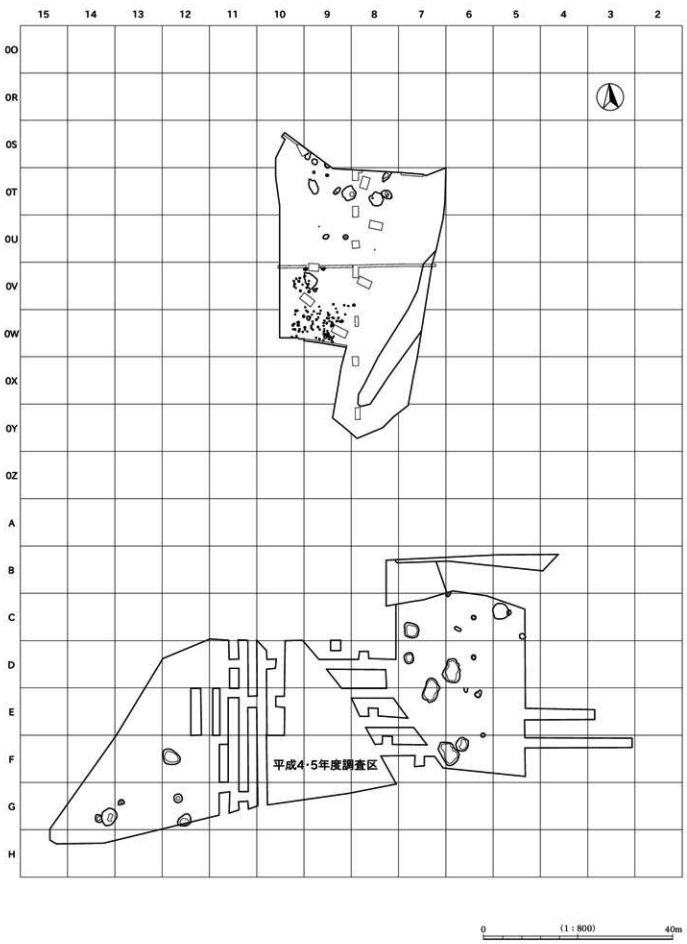
0　(72～78)　10cm　(1:2)

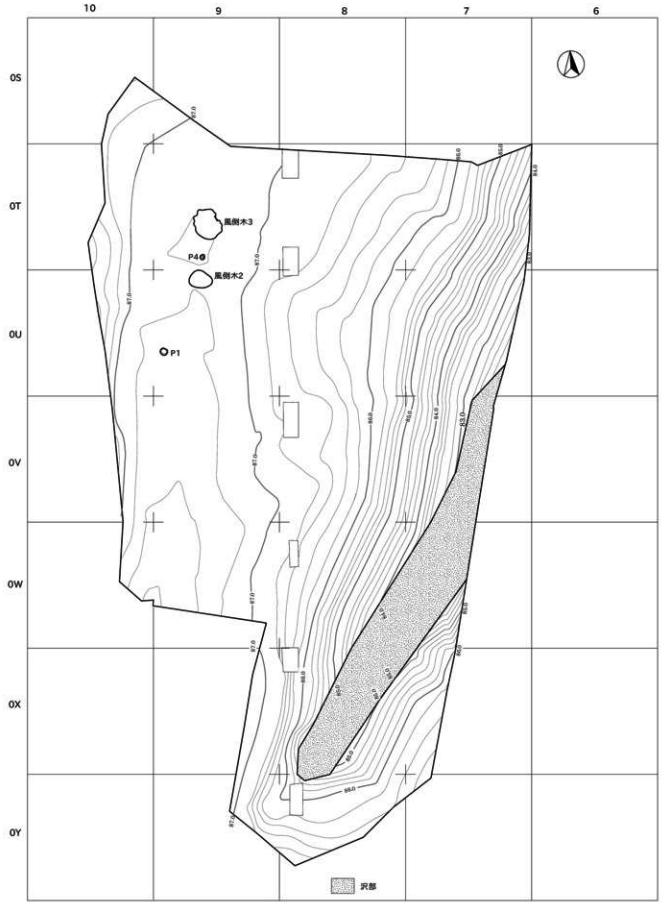
0　(71)　15cm　(1:3)

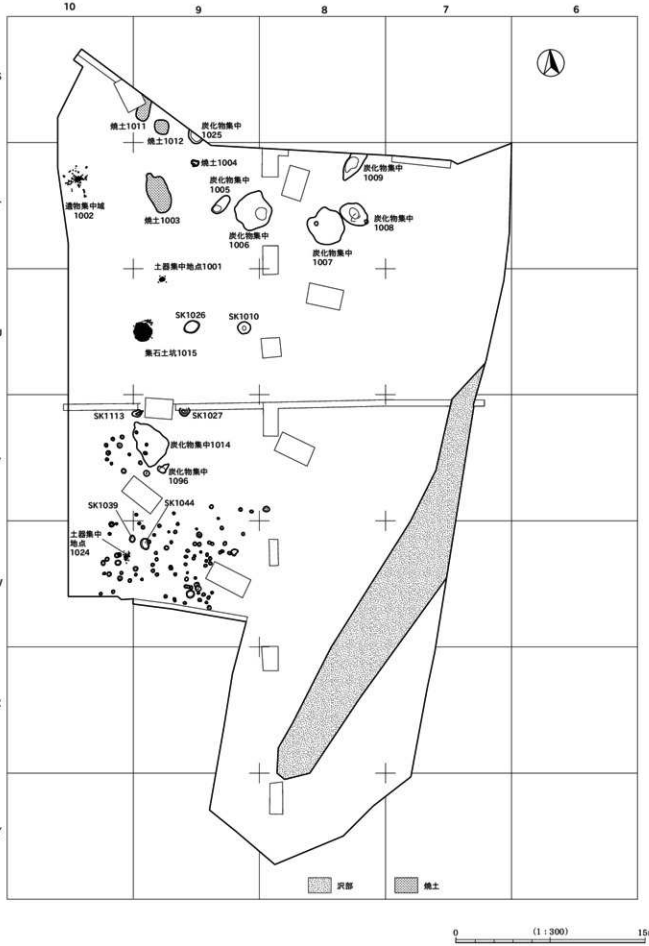
0　(77)　20cm　(1:4)

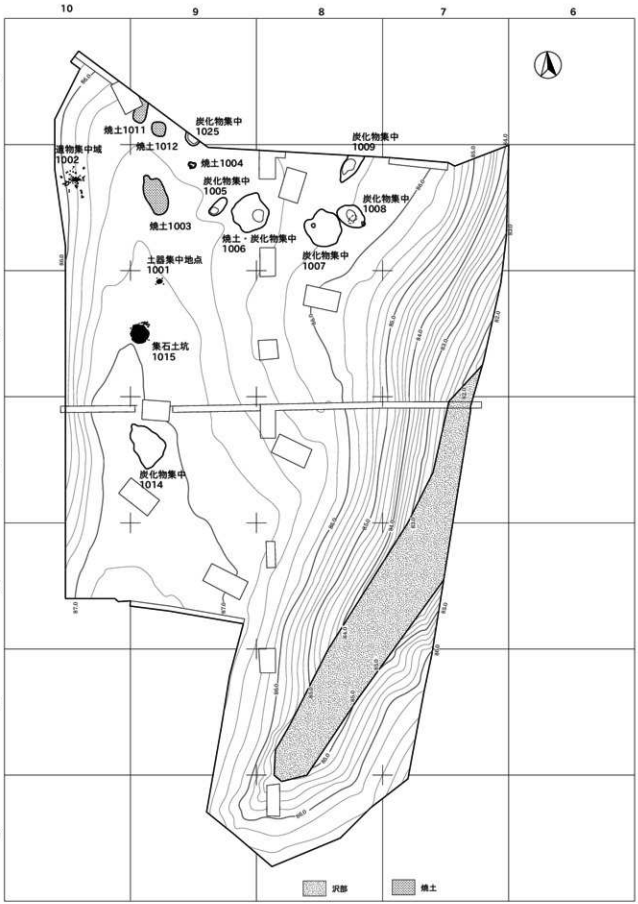

80
81
82
83
84
86
87
東区（上層）
85
88
89
90
91
92
東区（下層）
93
94
磨痕
節理面
0 (85~87・94) 10cm (1:2)
0 (84・88~90・92・93) 15cm (1:3)
0 (80~83・91) 20cm (1:4)

猿頭遺跡　遺構配置図

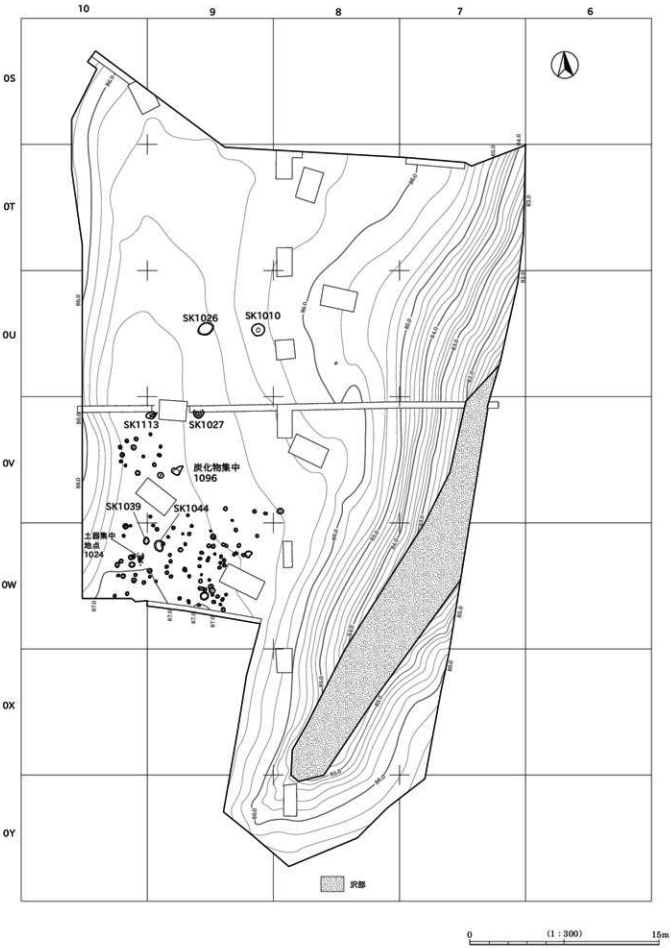

15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
0O
0R
0S
0T
0U
0V
0W
0X
0Y
0Z
A
B
C
D
E
F
G
H
平成4・5年度調査区
0
(1：800)
40m

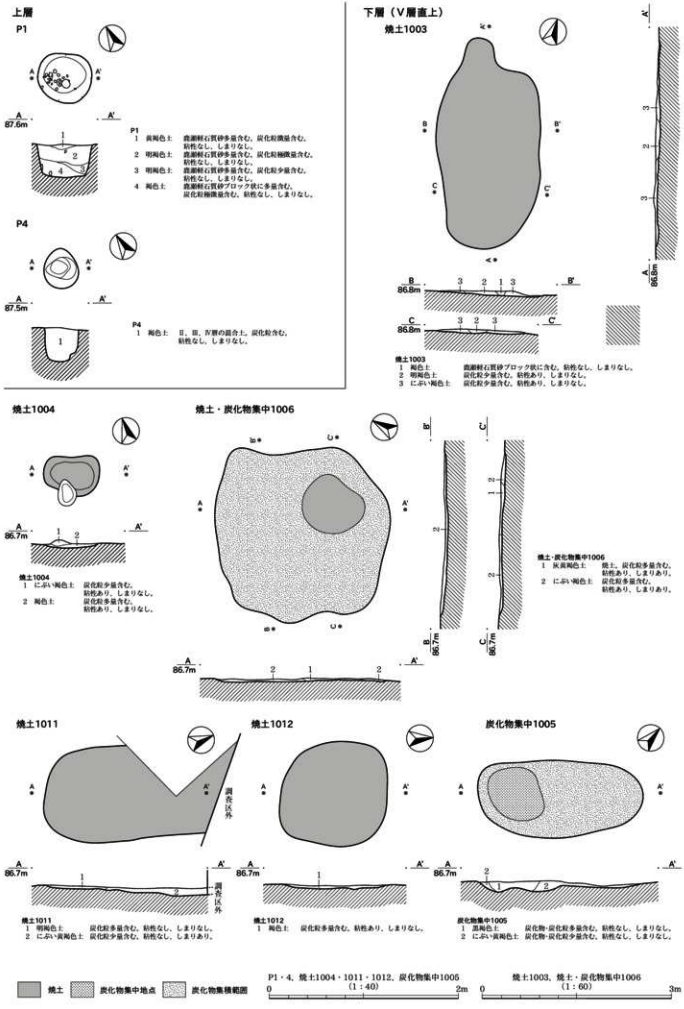

10
9
8
7
6
0S
0T
0U
0V
0W
0X
0Y
風倒木3
P4
風倒木2
P1
沢部
0
(1：300)
15m

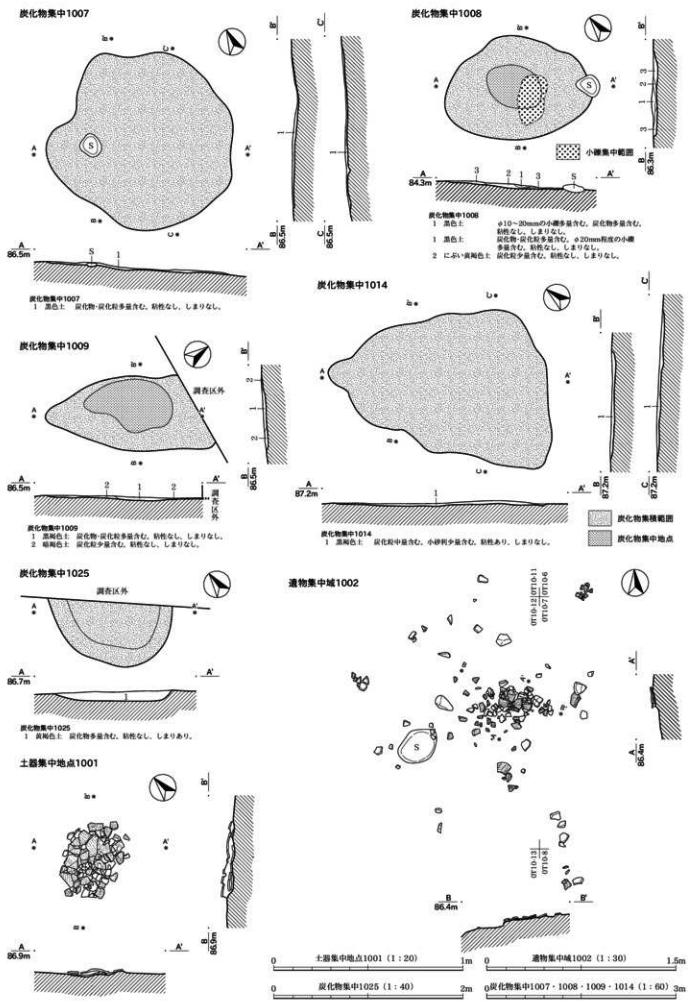

10
9
8
7
6
0S
0T
0U
0V
0W
0X
0Y
焼土1011
焼土1012
炭化物集中
1025
焼土1004
炭化物集中
1009
炭化物集中
1005
遺物集中域
1002
焼土1003
炭化物集中
1008
炭化物集中
1006
炭化物集中
1007
土器集中地点1001
SK1026
SK1010
集石土坑1015
SK1113
SK1027
炭化物集中1014
炭化物集中
1096
SK1039
SK1044
土器集中
地点
1024
沢部
焼土
0
(1：300)
15m


10
9
8
7
6
0S
0T
0U
0V
0W
0X
0Y
遺物集中域
1002
焼土1011
焼土1012
炭化物集中
1025
焼土1004
炭化物集中
1009
炭化物集中
1005
炭化物集中
1008
焼土1003
焼土・炭化物集中
1006
炭化物集中
1007
土器集中地点
1001
集石土坑
1015
炭化物集中
1014
沢部
焼土
0
(1：300)
15m

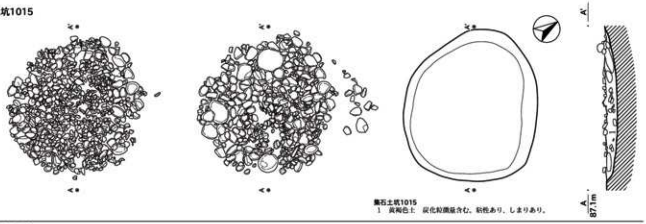
猿組遺跡　遺構配置図　下層（Ⅴ層）




上層
P1
A
A'
A
87.6m
A'
1
2
4
P1
1 黄褐色土　鹿瀬軽石質砂多量含む、炭化粒微量含む。
粘性なし、しまりなし。
2 明褐色土　鹿瀬軽石質砂多量含む、炭化粒極微量含む。
粘性なし、しまりなし。
3 明褐色土　鹿瀬軽石質砂多量含む、炭化粒少量含む。
粘性なし、しまりなし。
4 褐色土　鹿瀬軽石質砂ブロック状に多量含む。
炭化粒極微量含む。粘性なし、しまりなし。
P4
A
A'
A
87.5m
A'
1
P4
1 褐色土　Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層の混合土。炭化粒含む。
粘性なし、しまりなし。
下層（Ⅴ層直上）
焼土1003
A'
B
B'
C
C'
A
A'
3
2
3
A
86.8m
B
86.8m
3
2
1
3
B'
C
86.8m
3
2
3
C'
焼土1003
1 褐色土　鹿瀬軽石質砂ブロック状に含む。粘性なし、しまりなし。
2 明褐色土　炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。
3 にぶい褐色土　炭化粒少量含む。粘性あり、しまりなし。
焼土1004
A
A'
A
86.7m
1
2
A'
焼土1004
1 にぶい褐色土　炭化粒少量含む。
粘性あり、しまりなし。
2 褐色土　炭化粒多量含む。
粘性あり、しまりなし。
焼土・炭化物集中1006
B'
C'
A
A'
B
C
B'
C'
2
2
B
86.7m
C
86.7m
A
86.7m
2
1
2
A'
焼土・炭化物集中1006
1 灰黄褐色土　焼土、炭化粒多量含む。
粘性あり、しまりあり。
2 にぶい褐色土　炭化粒多量含む。
粘性あり、しまりあり。
焼土1011
A
A'
調査区外
A
86.7m
A'
1
2
調査区外
焼土1011
1 明褐色土　炭化粒多量含む。粘性なし、しまりなし。
2 にぶい黄褐色土　炭化粒少量含む。粘性なし、しまりあり。
焼土1012
A
A'
A
86.7m
A'
1
焼土1012
1 褐色土　炭化粒多量含む。粘性あり、しまりなし。
炭化物集中1005
A
A'
A
86.7m
2
1
2
A'
炭化物集中1005
1 黒褐色土　炭化物・炭化粒多量含む。粘性なし、しまりなし。
2 にぶい黄褐色土　炭化物・炭化粒少量含む。粘性なし、しまりなし。
焼土
炭化物集中地点
炭化物集積範囲
P1・4、焼土1004・1011・1012、炭化物集中1005
(1：40)
0
2m
焼土1003、焼土・炭化物集中1006
(1：60)
0
3m


炭化物集中1007
炭化物集中1007
1　黒色土　炭化物・炭化粒多量含む、粘性なし、しまりなし。
炭化物集中1008
炭化物集中1008
1　黒色土　φ10～30mmの小礫多量含む、炭化物多量含む、粘性なし、しまりなし。
1　黒色土　炭化物・炭化粒多量含む、φ20mm程度の小礫多量含む、粘性なし、しまりなし。
2　に ぶい・黄褐色土　炭化粒少量含む、粘性なし、しまりなし。
小礫集中範囲
炭化物集中1009
調査区外
炭化物集中1009
1　黒褐色土　炭化物・炭化粒多量含む、粘性なし、しまりなし。
2　暗褐色土　炭化粒少量含む、粘性なし、しまりなし。
炭化物集中1014
炭化物集中1014
1　黒褐色土　炭化粒中量含む、小砕利少量含む、粘性あり、しまりなし。
炭化物集積範囲
炭化物集中地点
炭化物集中1025
調査区外
炭化物集中1025
1　黄褐色土　炭化物多量含む、粘性なし、しまりあり。
遺物集中域1002
土器集中地点1001
土器集中地点1001（1：20）
遺物集中域1002（1：30）
炭化物集中1025（1：40）
炭化物集中1007・1008・1009・1014（1：60）

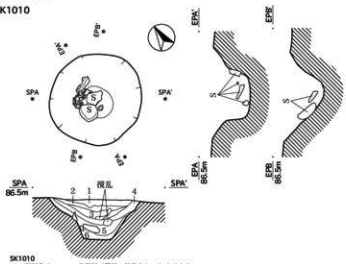
集石土坑1015



集石土坑1015
1　黄褐色土　炭化粒微量含む、粘性あり、しまりあり。

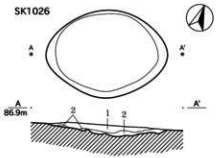
下層（Ⅴ層）

SK1010



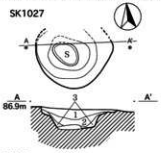
SK1010
1　明褐色土　鹿瀬軽石質砂、粘性なし、しまりあり。
2　黒褐色土　炭化粒少量含む、粘性ややあり、しまりややあり。
3　黒褐色土　炭化粒微量含む、粘性あり、しまりややあり。
4　暗褐色土　炭化粒少量含む、粘性ややあり、しまりあり。
5　にぶい黄褐色土　炭化粒少量含む、粘性なし、しまりあり。
6　にぶい黄褐色土　炭化粒少量含む、粘性ややあり、しまりあり。

SK1026



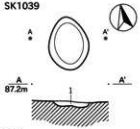
SK1026
1　黒褐色土　炭化物多量含む、粘性なし、しまりあり。
2　にぶい黄褐色土　粘性あり、しまりあり。

SK1027



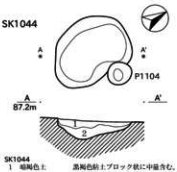
SK1027
1　黒褐色土　小砂利微量含む、粘性あり、しまりあり。
2　暗褐色土　小砂利微量含む、粘性あり、しまりあり。
3　にぶい黄褐色土　2層の土に地山土ブロック状に少量含む、粘性あり、しまりあり。

SK1039



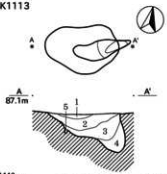
SK1039
1　黄褐色土　黒褐色土ブロック状に少量含む、粘性あり、しまりあり。

SK1044



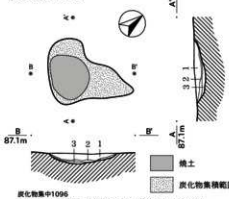
SK1044
1　暗褐色土　黒褐色粘土ブロック状に中量含む、小砂利少量含む、粘性あり、しまりあり。
2　にぶい黄褐色土　暗褐色土ブロック状に少量含む、小砂利少量含む、粘性あり、しまりあり。

SK1113



SK1113
1　明褐色土　鹿瀬軽石質砂、粘性なし、しまりあり。
2　黒褐色シルト土　1層土ブロック状に少量含む、炭中量含む、粘性あり、しまりなし。
3　にぶい黄褐色土　粘性ややあり、しまりなし。
4　にぶい黄褐色土　3層土ブロック状に少量含む、粘性あり、しまりあり。
5　黒褐色シルト　粘性あり、しまりなし。

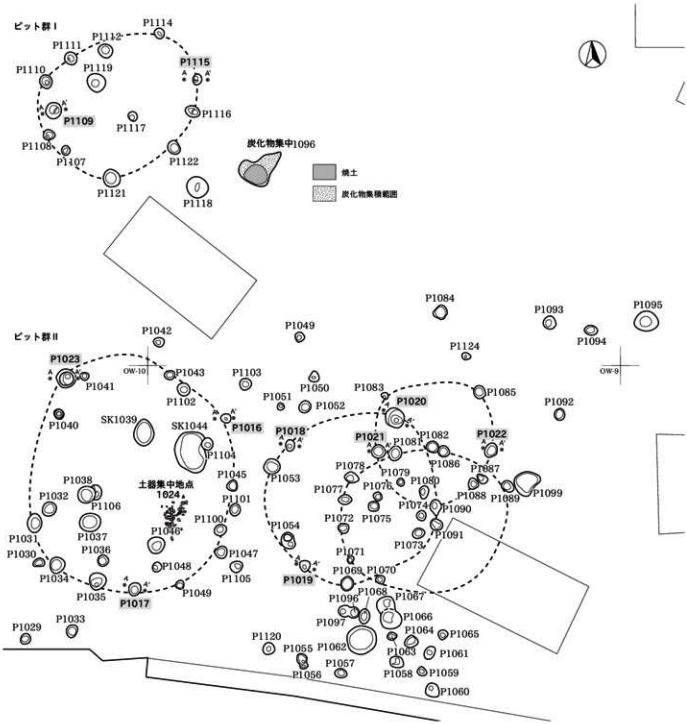
炭化物集中1096

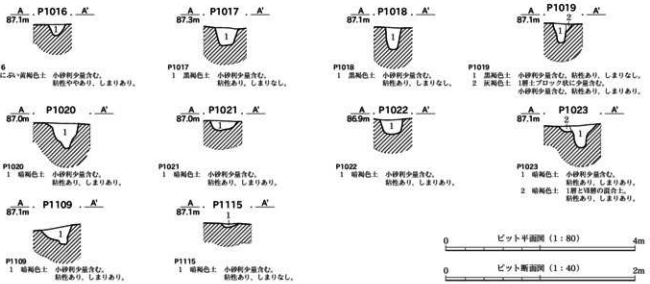


炭化物集中1096
1　にぶい黄褐色土　炭化粒多量含む、粘性あり、しまりなし。
2　にぶい黄褐色土　焼土・炭少量含む、粘性あり、しまりあり。
3　にぶい黄褐色土　焼土、炭少量含む、粘性あり、しまりなし。

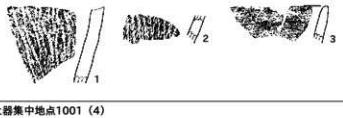
土器集中地点1024

土器集中地点1024（1：20）
その他の遺構（1：40）


ピット群 I
P1114
P1112
P1111
P1115
P1110
P1119
P1109
P1116
P1117
P1108
P1107
P1122
P1121
P1118
炭化物集中1096
焼土
炭化物集積範囲
ピット群 II
P1084
P1093
P1095
P1042
P1049
P1094
P1124
P1023
OW-10
P1043
P1103
P1050
P1083
P1085
OW-9
P1041
P1102
P1051
P1052
P1020
P1092
P1040
SK1039
SK1044
P1016
P1018
P1021
P1081
P1082
P1022
P1104
P1045
P1053
P1078
P1079
P1086
P1087
P1038
土器集中地点
1624
P1077
P1076
P1080
P1088
P1089
P1099
P1032
P1106
P1101
P1074
P1090
P1100
P1072
P1075
P1031
P1037
P1046
P1054
P1091
P1073
P1030
P1036
P1047
P1071
P1034
P1048
P1105
P1019
P1069
P1070
P1035
P1017
P1049
P1068
P1067
P1096
P1066
P1097
P1029
P1033
P1064
P1065
P1120
P1055
P1062
P1063
P1061
P1057
P1056
P1058
P1059
P1060


A 87.1m P1016 A'
1
P1016
1 にぶい黄褐色土 小砂利少量含む。
粘性ややあり、しまりあり。
A 87.3m P1017 A'
1
P1017
1 黒褐色土 小砂利少量含む。
粘性あり、しまりなし。
A 87.1m P1018 A'
1
P1018
1 黒褐色土 小砂利少量含む。
粘性あり、しまりなし。
A 87.1m P1019 A'
2
1
P1019
1 黒褐色土 小砂利少量含む。粘性あり、しまりなし。
2 灰褐色土 1層土ブロック状に少量含む。
小砂利少量含む。粘性あり、しまりあり。
A 87.0m P1020 A'
1
P1020
1 暗褐色土 小砂利少量含む。
粘性あり、しまりあり。
A 87.0m P1021 A'
1
P1021
1 暗褐色土 小砂利少量含む。
粘性あり、しまりあり。
A 86.9m P1022 A'
1
P1022
1 暗褐色土 小砂利少量含む。
粘性あり、しまりあり。
A 87.1m P1023 A'
2
1
P1023
1 暗褐色土 小砂利少量含む。
粘性あり、しまりあり。
2 暗褐色土 1層と特層の混合土。
粘性あり、しまりあり。
A 87.1m P1109 A'
1
P1109
1 暗褐色土 小砂利少量含む。
粘性あり、しまりあり。
A 87.1m P1115 A'
1
P1115
1 暗褐色土 小砂利少量含む。
粘性あり、しまりなし。
0 ピット平面図（1：80） 4m
0 ピット断面図（1：40） 2m

上層出土（1～3）



下層（Ⅳ層直下）遺構出土（4～9）

焼土・炭化物集中 1006（5）

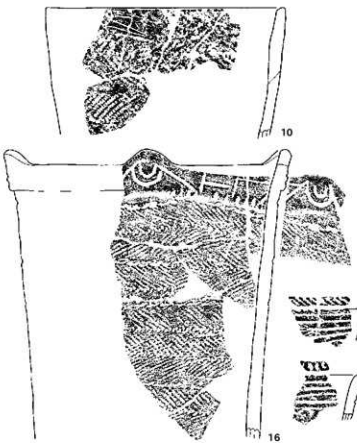
炭化物集中 1007（6）

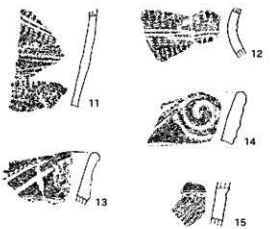
土器集中地点1001（4）

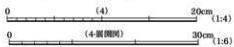
炭化物集中 1008（7）

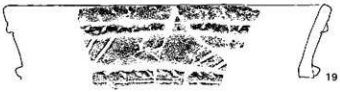
焼土 1025（8・9）

下層（Ⅳ層直下・Va層）出土（10～28）

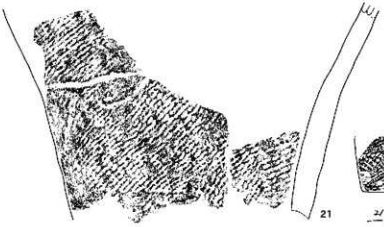







19

20

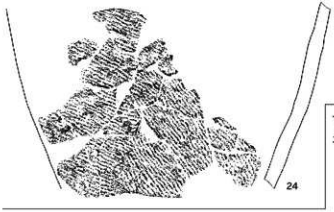

21

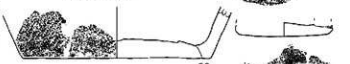
22

23

25

27


24


26

28

下層（V層）遺構出土（29～32）
土器集中 1024（29～32）

29

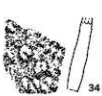
30

31

32

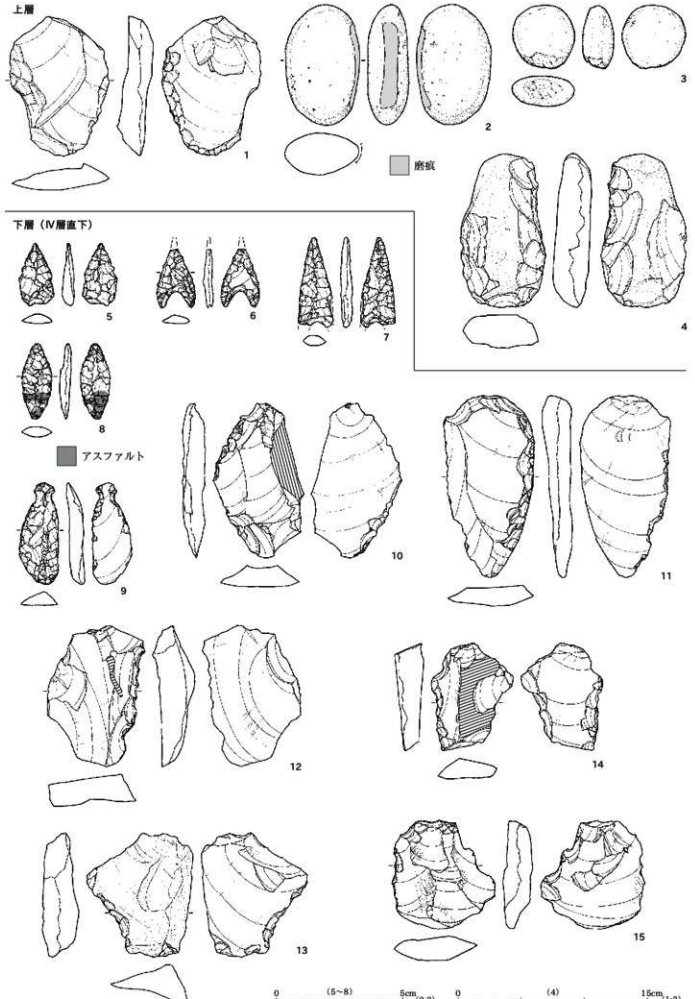
下層（V層）出土（33～34）

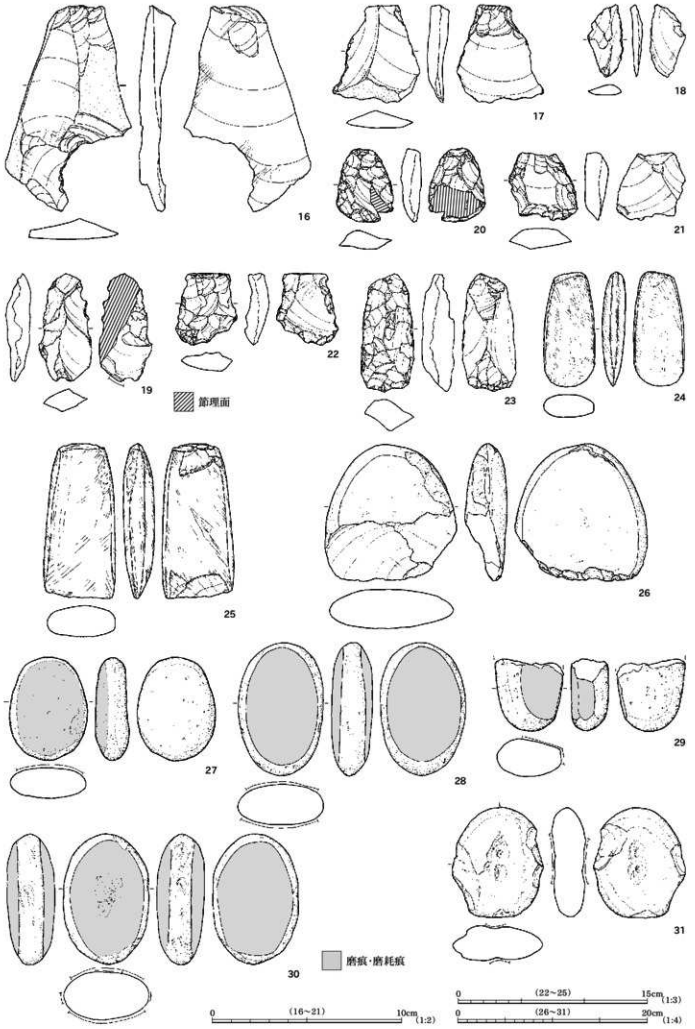
33

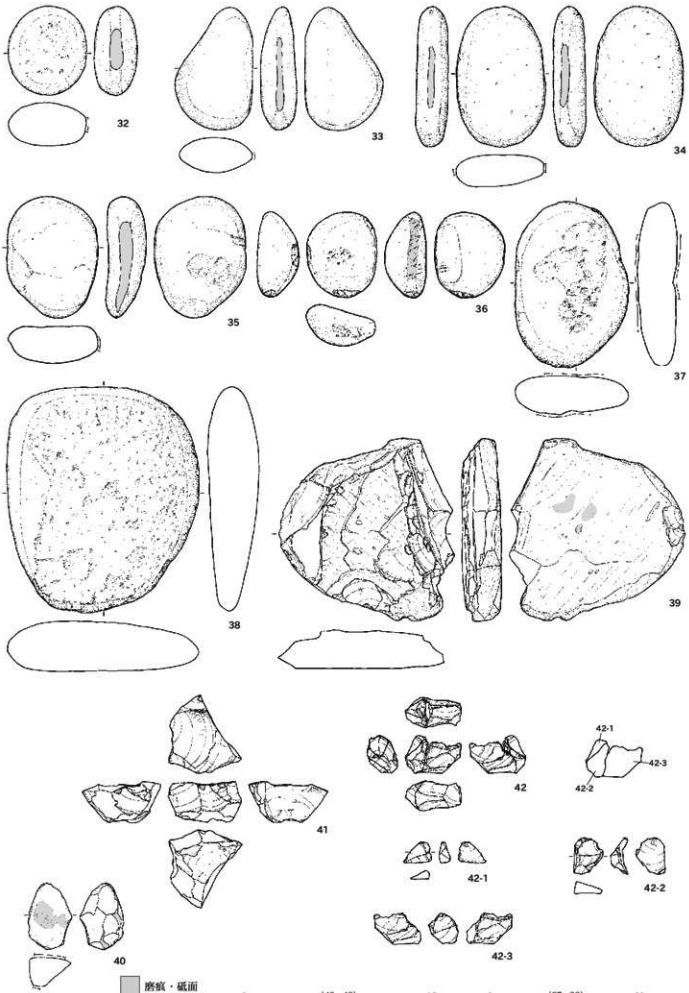

34

0　(30)　20cm (1:4)

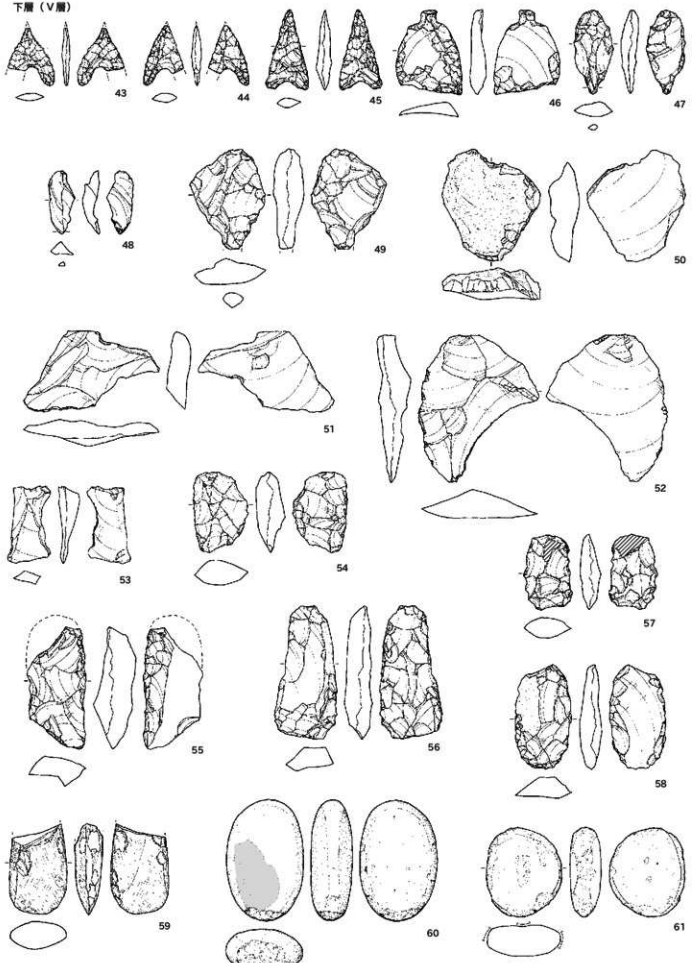
0　(19～29・31～34)　15cm (1:3)

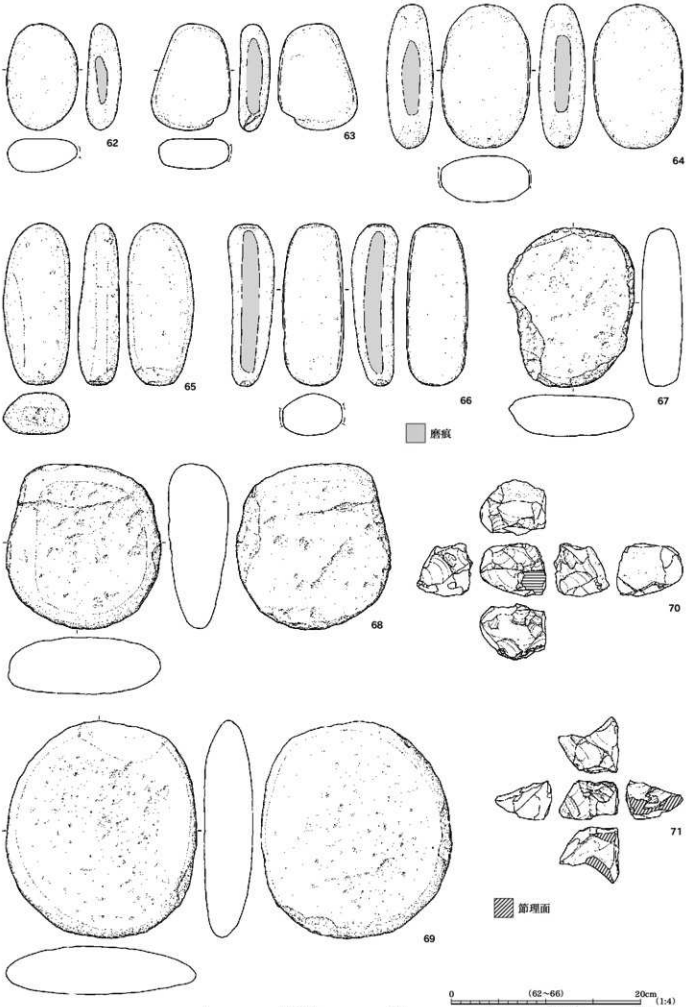

上層
1
2
3
磨痕
下層（Ⅳ層直下）
4
5
6
7
8
アスファルト
9
10
11
12
13
14
15
節理面
0 (5～8) 5cm (2:3)
0 (1・9～15) 10cm (1:2)
0 (4) 15cm (1:3)
0 (2・3) 20cm (1:4)

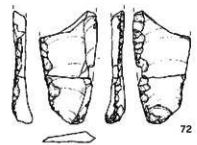

16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
節理面
磨痕・磨耗痕
0 (16~21) 10cm (1:2)
0 (22~25) 15cm (1:3)
0 (26~31) 20cm (1:4)

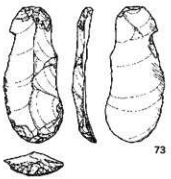

32
33
34
35
36
37
38
39
41
42
42-1
42-2
42-3
40
磨痕・破面
0 (40～42) 15cm (1:3)
0 (37・38) 20cm (1:5)
0 (32～37) 20cm (1:4)
0 (39) 40cm (1:10)

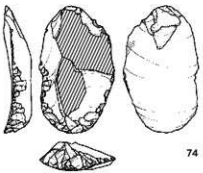
下層（Ⅴ層）

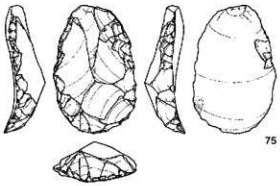

43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
節理面
磨痕
0 (43～45) 5cm (2:3)
0 (46～55) 15cm (1:3)
0 (56～59) 10cm (1:2)
0 (60・61) 20cm (1:4)

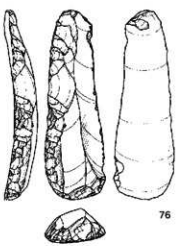

62
63
64
65
66
67
磨痕
68
70
71
節理面
0 (62～66) 20cm (1:4)
0 (67～69) 20cm (1:5)
0 (70・71) 15cm (1:3)

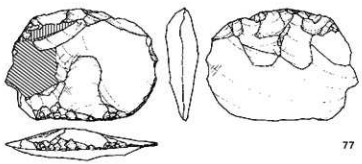

72

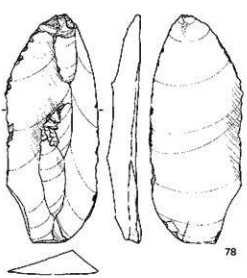

73

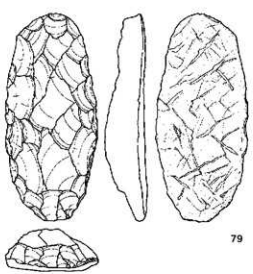

74


75


76


77


78


79

節理面

0　10cm　(1:2)

遺跡の位置と周辺の景観（国土交通省国土地理院　昭和51年9月26日撮影、空中写真）

大坂上道遺跡　遠景（西から）

大坂上道遺跡　西区上層完掘（東から）

西区上層出土土器（中期初頭～前葉）

SK15 完掘（東から）

SK15 遺物出土状況（東から）

OU21 基本層序（東から）

OY16 基本層序（北から）

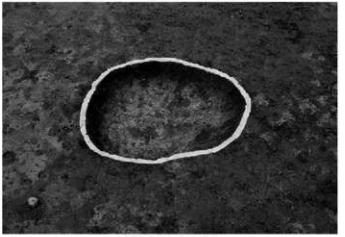
SK17 検出状況（西から）

SK22 完掘（西から）

SK23 断面（南から）

SK23 完掘（南から）

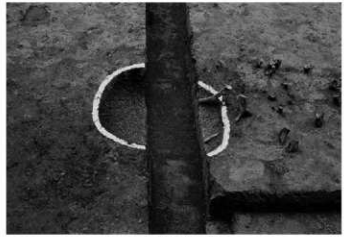
SK24 完掘（南から）


SK25 完掘（西から）

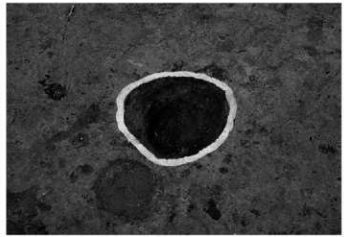
SK26 断面（西から）

SK26 完掘（南から）

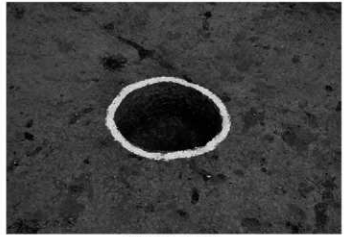
SK29 断面（東から）


SK29 完掘（南から）

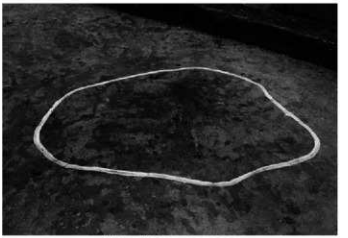
SK32 断面（南西から）

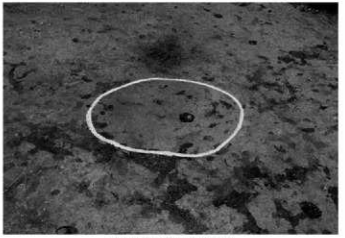

SK32 完掘（西から）

SK33 完掘（南から）


SK35 完掘（南から）

SK49 完掘（東から）


焼土 16 検出状況（南西から）


焼土 28 検出状況（南から）

焼土 28 断面（南から）

焼土 31 検出状況（南西から）

焼土 36 検出状況（南から）

SX18 断面（西から）

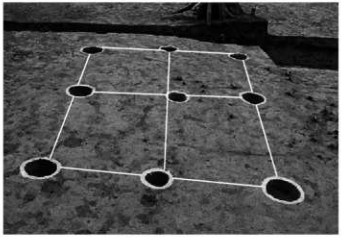
SX18 完掘（北から）

SX37 完掘（西から）

SX37 断面（北から）

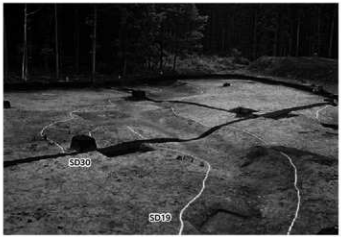
SX37 断面（東から）

SX37 遺物出土状況（西から）



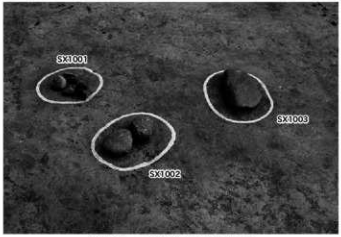
SB1 完掘（南から）

SD19 断面（西から）



SD19・30 完掘（南から）

下層遺物出土状況（北東から）



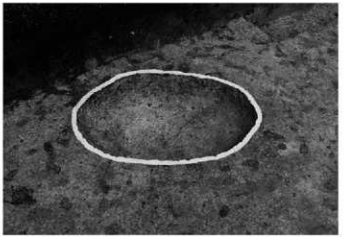
SX1001 ～ 1003 検出状況（北から）

大坂上道遺跡　東区上層完掘（西から）

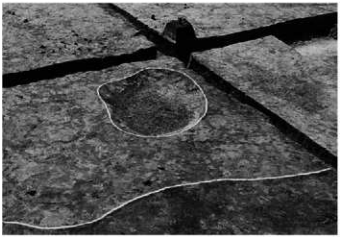
OX3基本層序（南から）

SK50断面（南から）

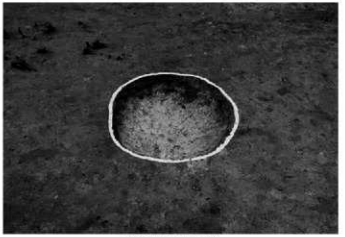
SK50完掘（東から）



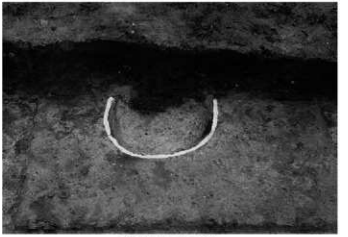
SK51完掘（南西から）



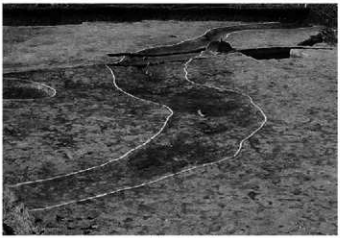
SK54完掘（南東から）

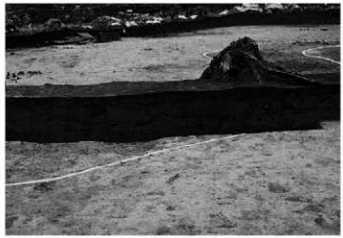


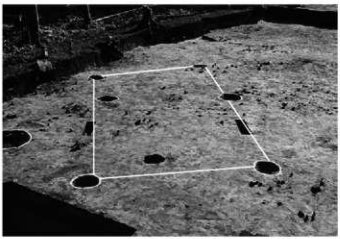
SK57完掘（北から）



SK60完掘（東から）


SD53 完掘（南から）


SD53 断面（北から）


SB2 完掘（北東から）

P61 断面（西から）

SI55 断面（北から）

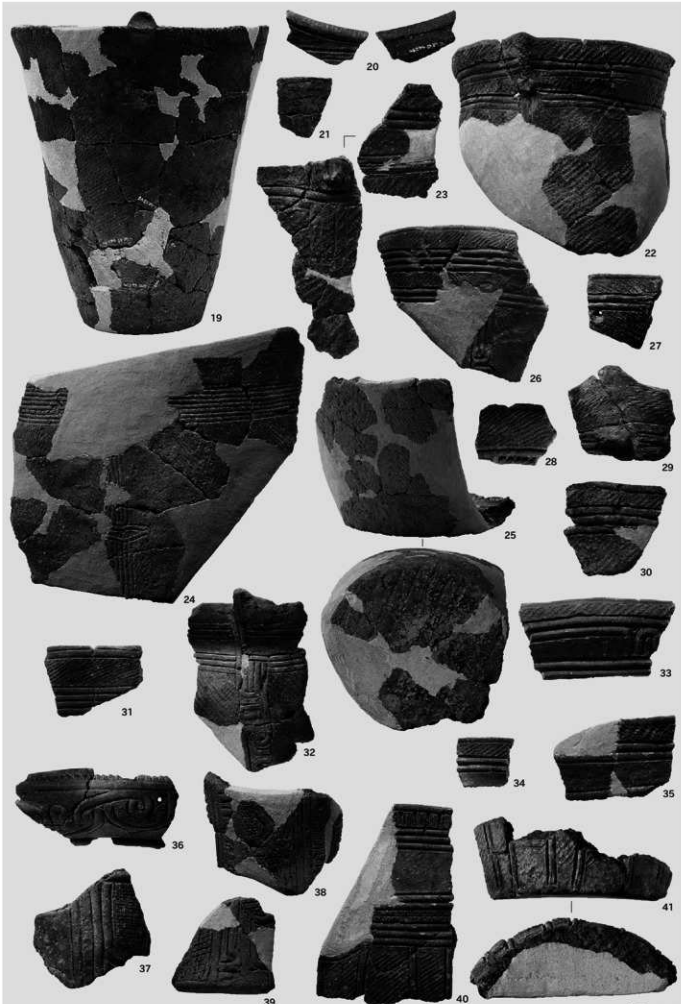
SI55 完掘（西から）

下層・集石 1004 検出状況（北東から）

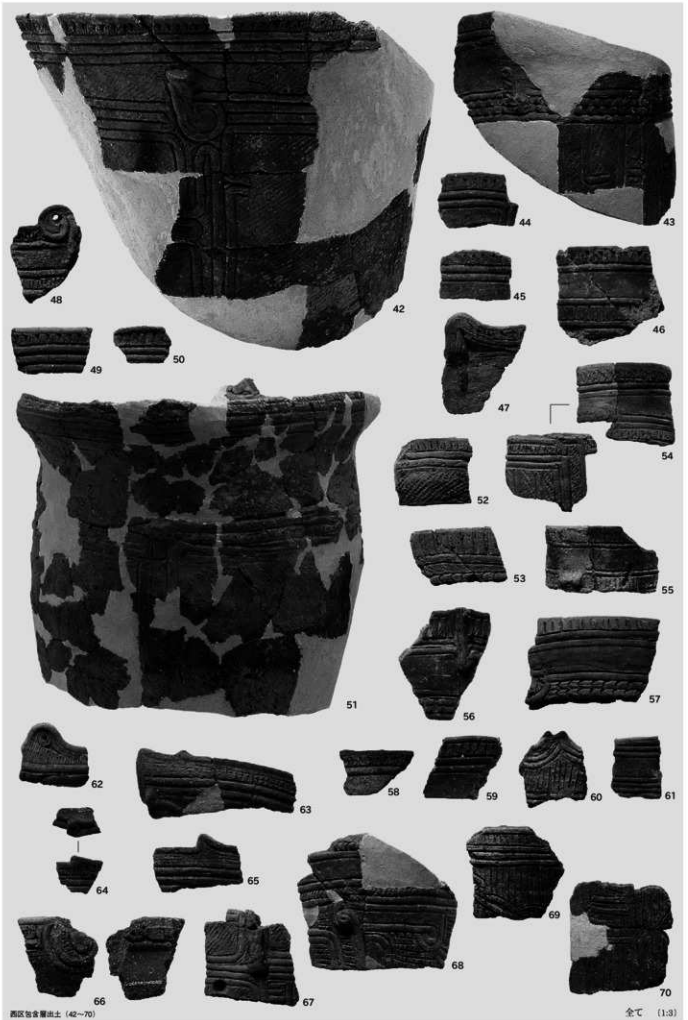
下層・集石 1004 断面（北西から）

西区遺構出土：SK15（1・2）・SK3（3）・SK25（4）・SK49（5・6）
SD19（7～14）・SD20（15）・SD30（16）・SX18（17・18）

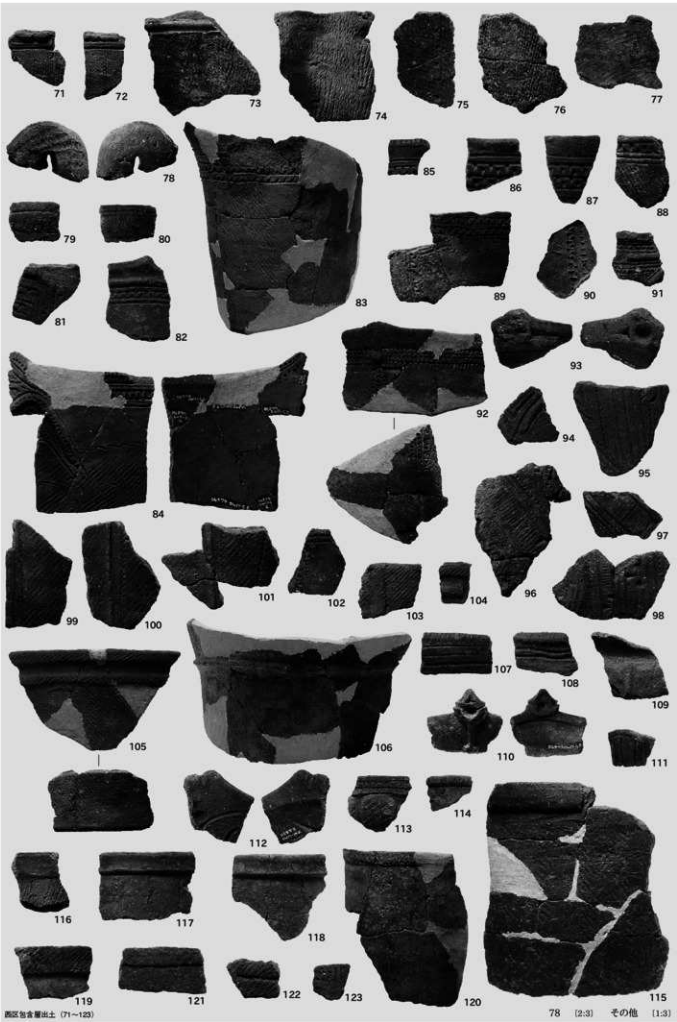
3～18　（1:3）
1・2　（1:4）



西区遺構出土:SX37(19~21)・西区包含層出土(22~41)　全て　(1:3)

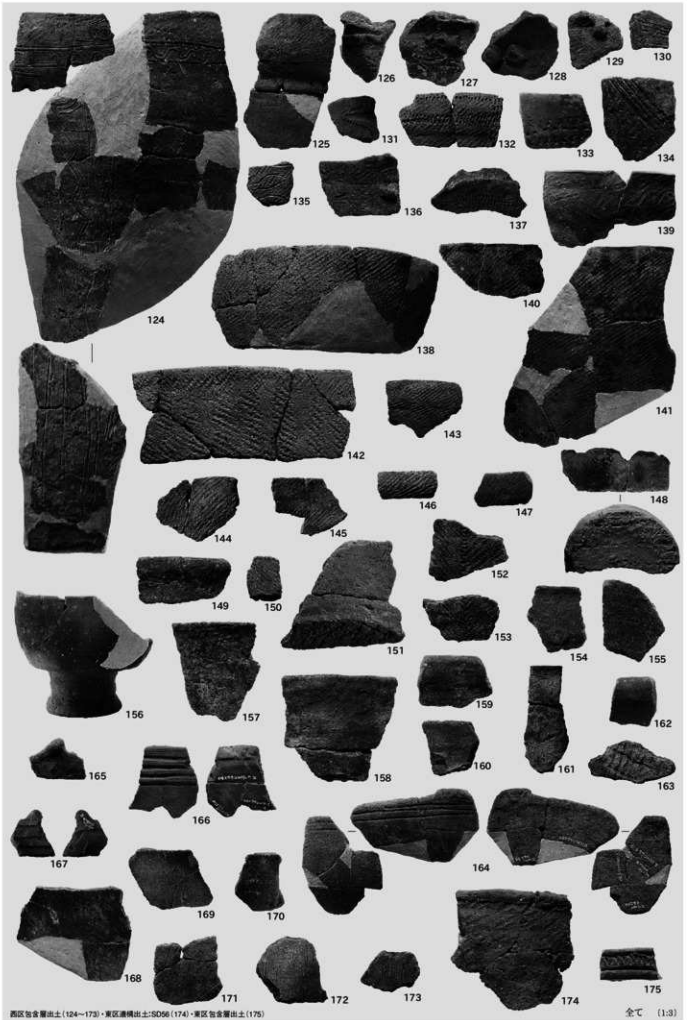


西区包含層出土（42～70）　　全て　（1:3）

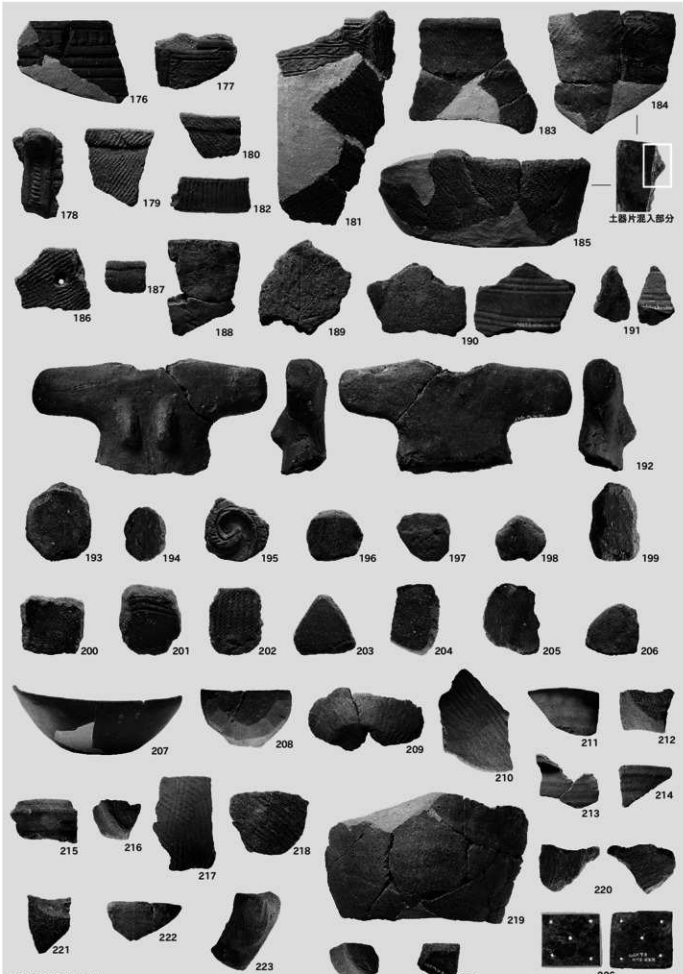


西区包含層出土（71～123）

78　(2:3)　その他　(1:3)



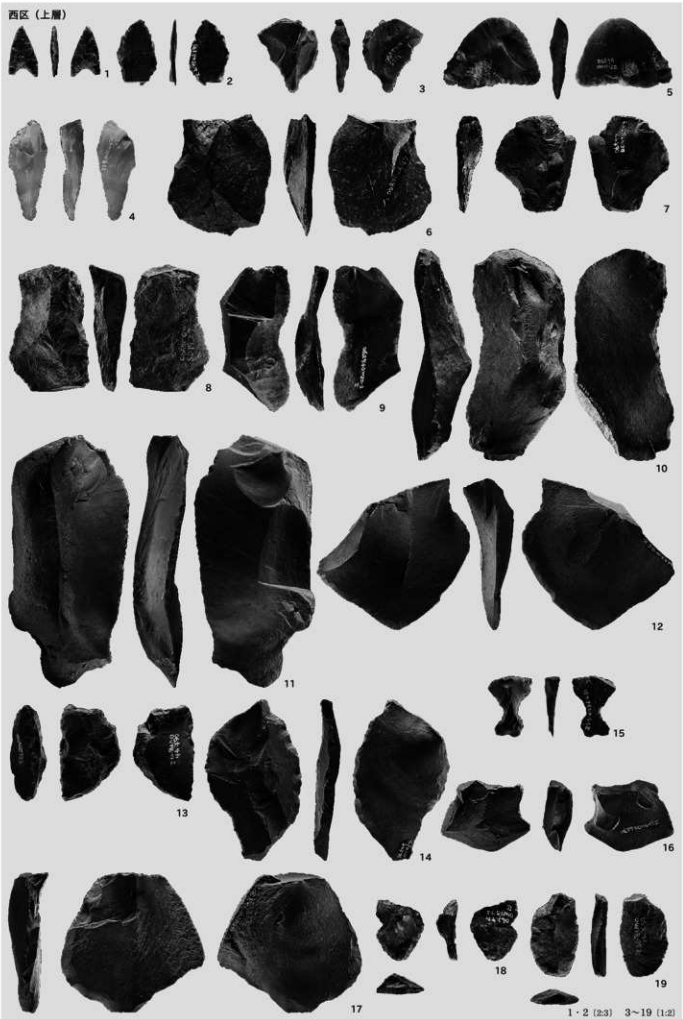
西区包含層出土（124～173）・東区遺構出土:SD56（174）・東区包含層出土（175）　　全て　（1:3）



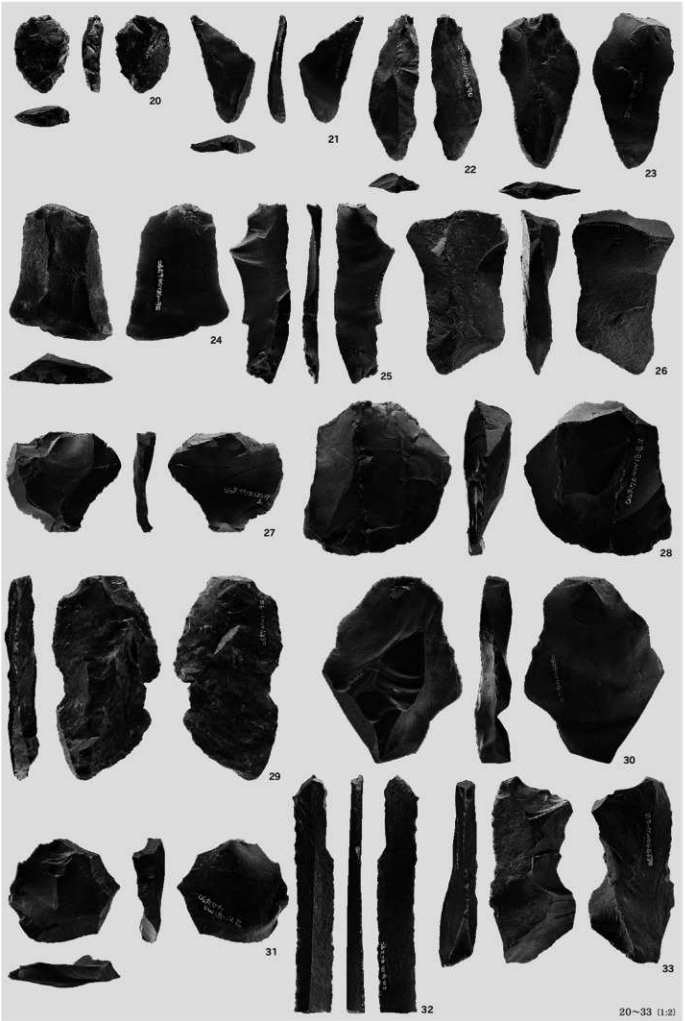
東区包含層出土（176～191）
土製品（192～206）
平安時代の土壙：SB2（207～210）・SI55（211～218）・SK52（219）・東区包含層出土（220～224）
平安時代の石製品：東区包含層出土（226）
中世の土師：酒区包含層出土（225）

192　[2:3]
226　[1:2]
その他　[1:3]

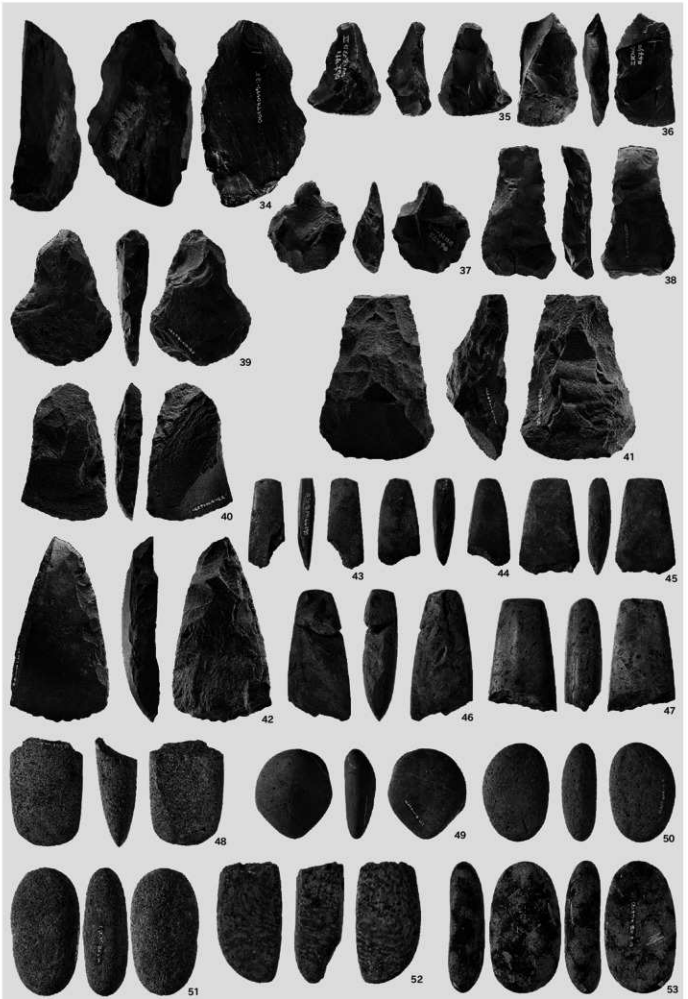
西区（上層）



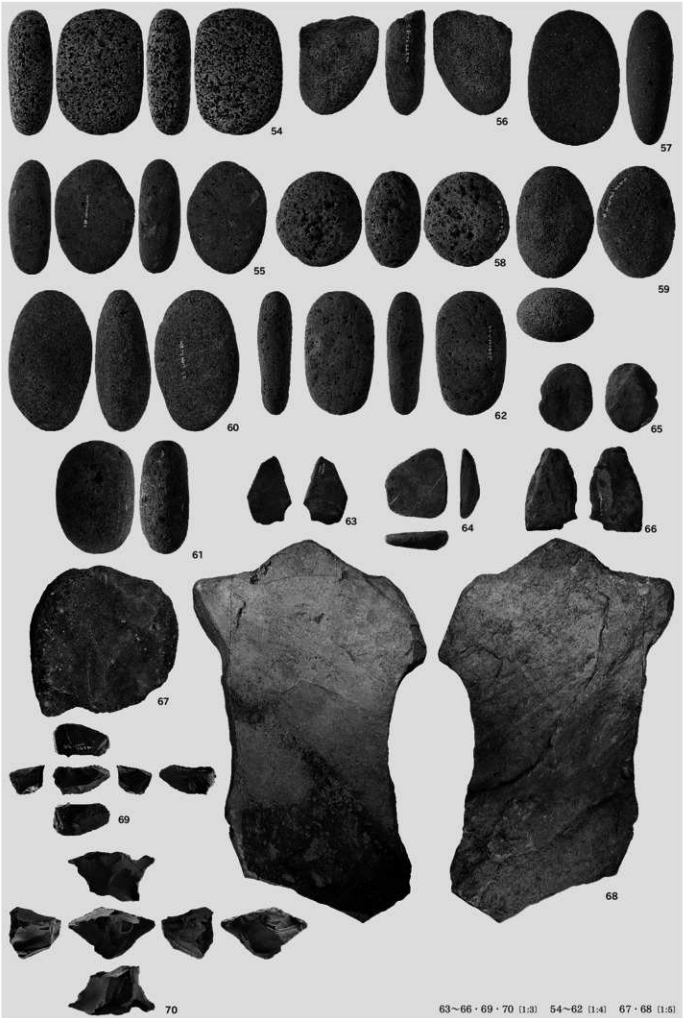
1・2（2:3）　3～19（1:2）



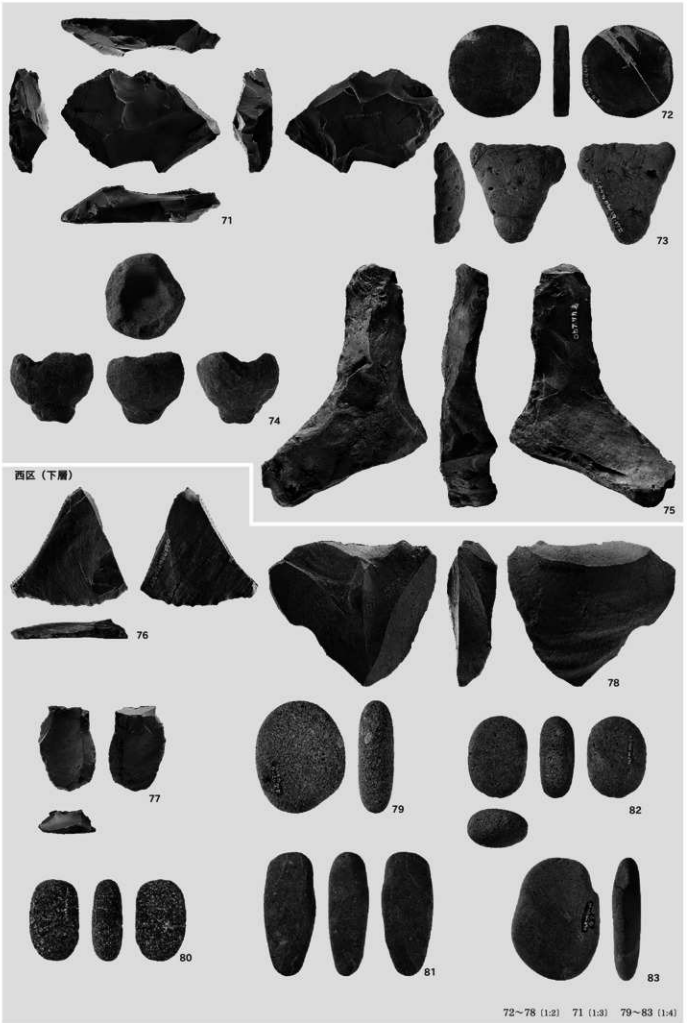
20～33 (1:2)



35～37（2:3）　34（1:2）　38～48（1:3）　49～53（1:4）



63～66・69・70 [1:3]　54～62 [1:4]　67・68 [1:5]



72～78（1:2）　71（1:3）　79～83（1:4）

84

東区（上層）

85

86

87

88

89

90

91

92

93

東区（下層）

94

85～87・94［1:2］　84・88～90・92・93［1:3］　91［1:4］

猿額遺跡　近景（南東から）

猿額遺跡　近景（西から）

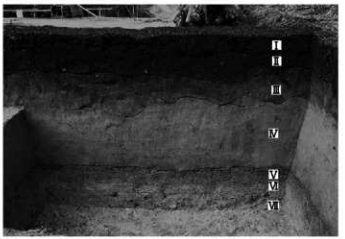
猿額遺跡　完掘

土器集中1001　出土状況（北西から）

下層（Ⅳ層直下）出土土器（前期末葉）

下層出土石器

下層出土旧石器



0T8 基本層序（東から）

0V8 基本層序（南から）

0S10 基本層序（南から）

P1 断面（南から）

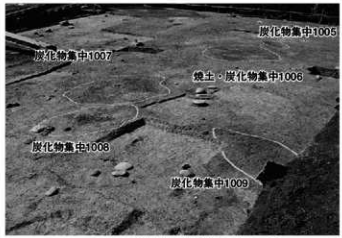
P1 出土状況（西から）

P1 完掘（北東から）

P4 断面（南西から）

P4 完掘（北から）

焼土 1003・1004 検出状況（東から）



0T8・9 焼土、炭化物集中検出状況（北東から）

焼土 1003 断面（北東から）

焼土 1004 断面（南から）

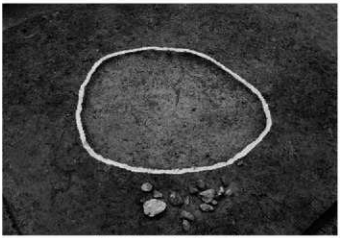
炭化物集中 1008 検出状況（北西から）

炭化物集中 1008 断面（東から）

遺物集中域 1002 検出状況（南東から）

遺物集中域 1002 土器出土状況（北西から）

集石土坑1015検出状況（南西から）


集石土坑1015完掘（北東から）

SK1010断面（南西から）

SK1010完掘（東から）

SK1026断面（南から）

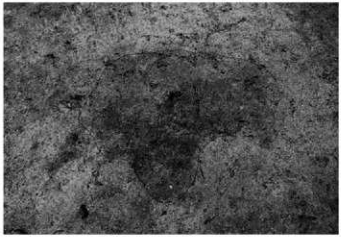
SK1026完掘（南から）

SK1027断面（南から）

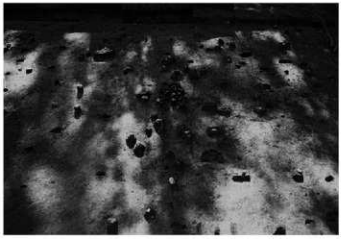
SK1027完掘（北から）

SK1044 断面（西から）

SK1044 完掘（西から）


炭化物集中 1096 検出状況（北東）

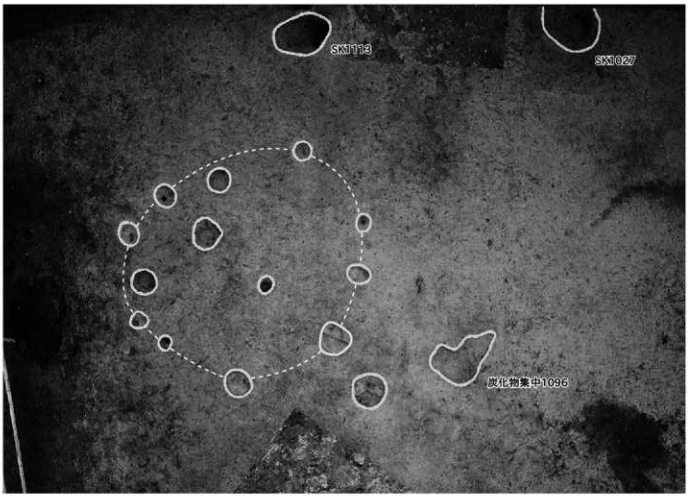
炭化物集中 1096 断面（北東）


0W9 遺物出土状況（北から）

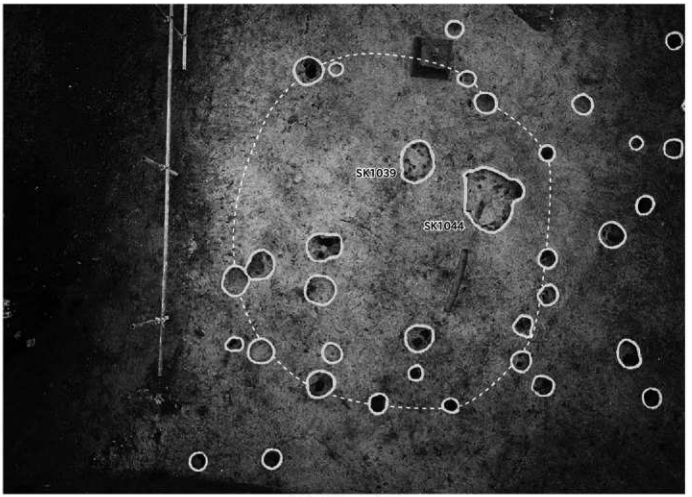
土器集中地点 1024 出土状況（西から）

P1016 断面（南から）

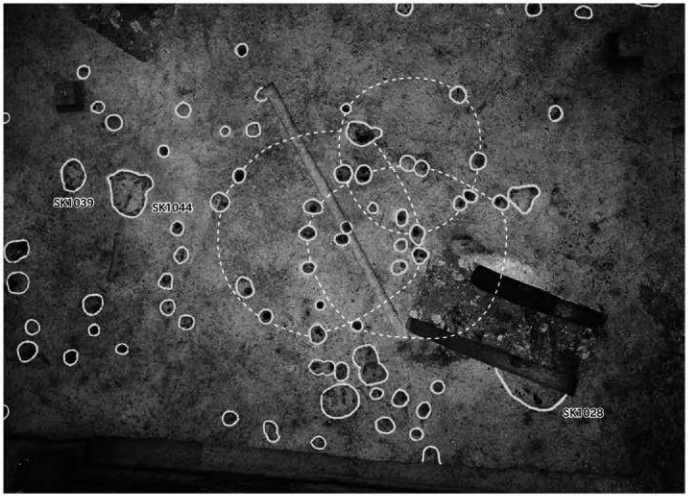
P1023 断面（南から）



0V9・10ピット群完掘



0W9・10ピット群完掘



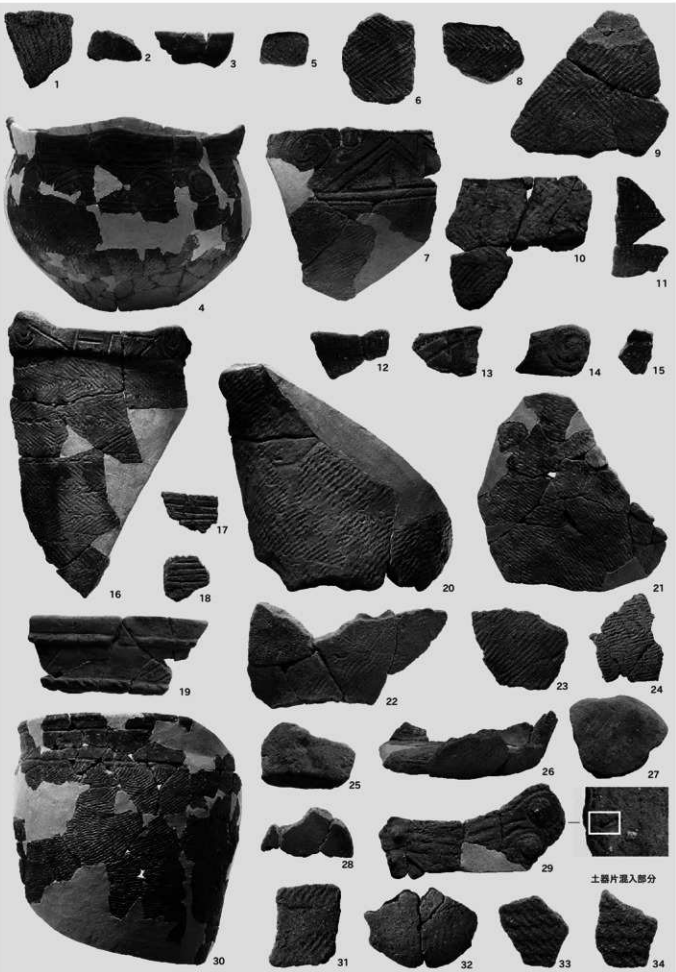
0W9 ピット群完掘

P1019 断面（南から）

P1020 断面（南西から）

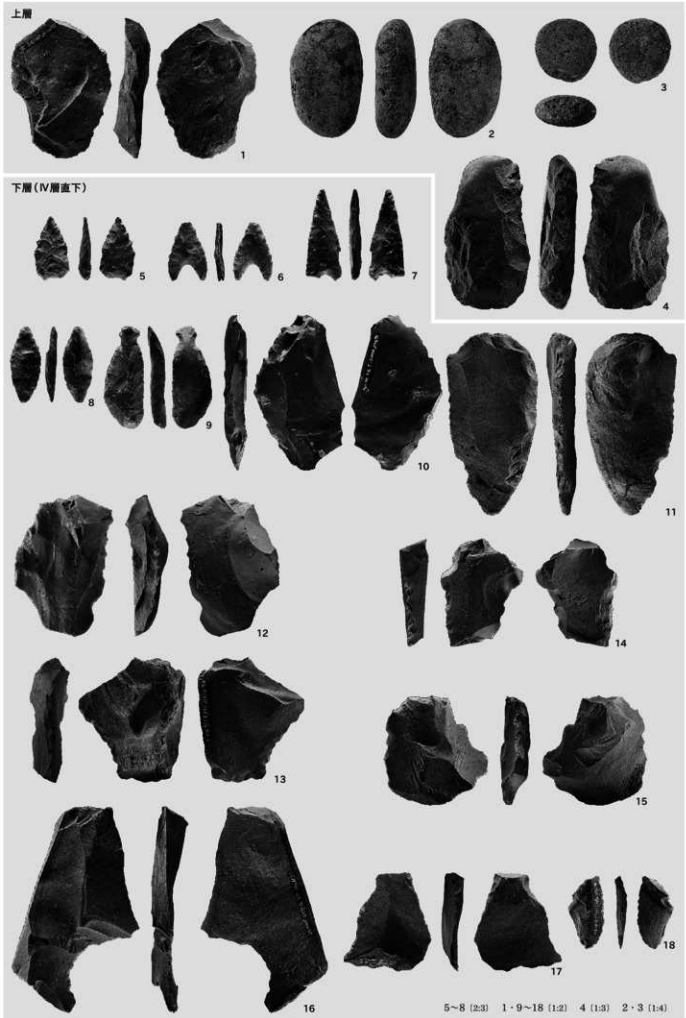
P1021 断面（南から）

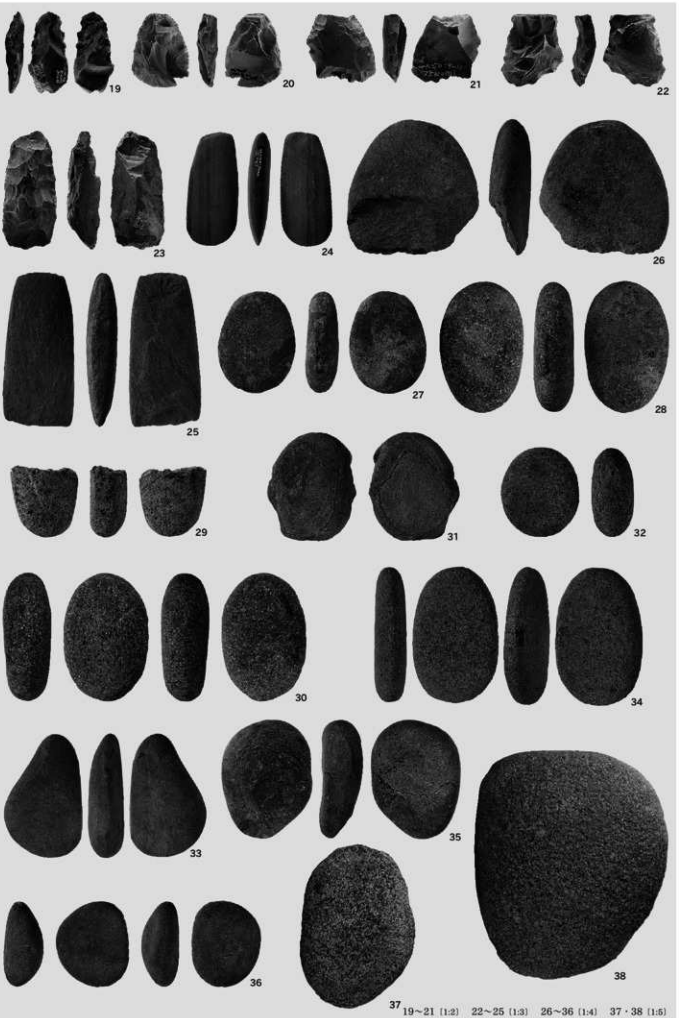
P1022 断面（南から）



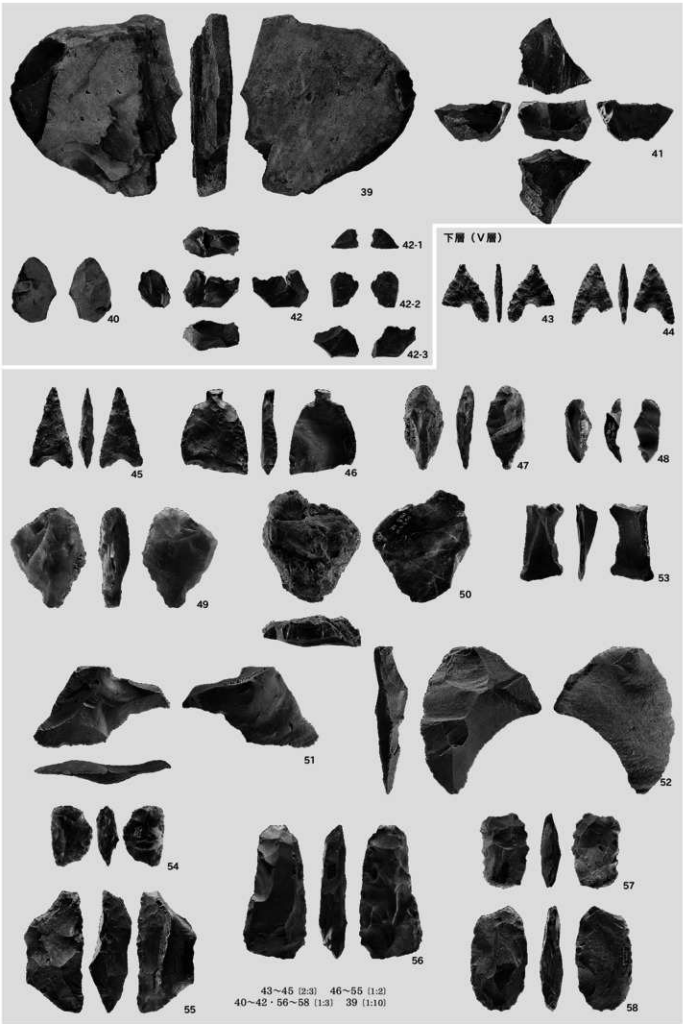
土層出土（1〜3）
下層（Ⅳ層直上）遺構出土土器集中地点1001（4）・焼土、炭化物集中1006（5）・炭化物集中1007（6）・炭化物集中1008（7）・炭化物集中1025（8・9）
下層（Ⅳ層直上〜Va層）出土（10〜28）
下層（Va層）遺構出土土器集中地点1024（29〜32）
下層（Va層）出土（33・34）

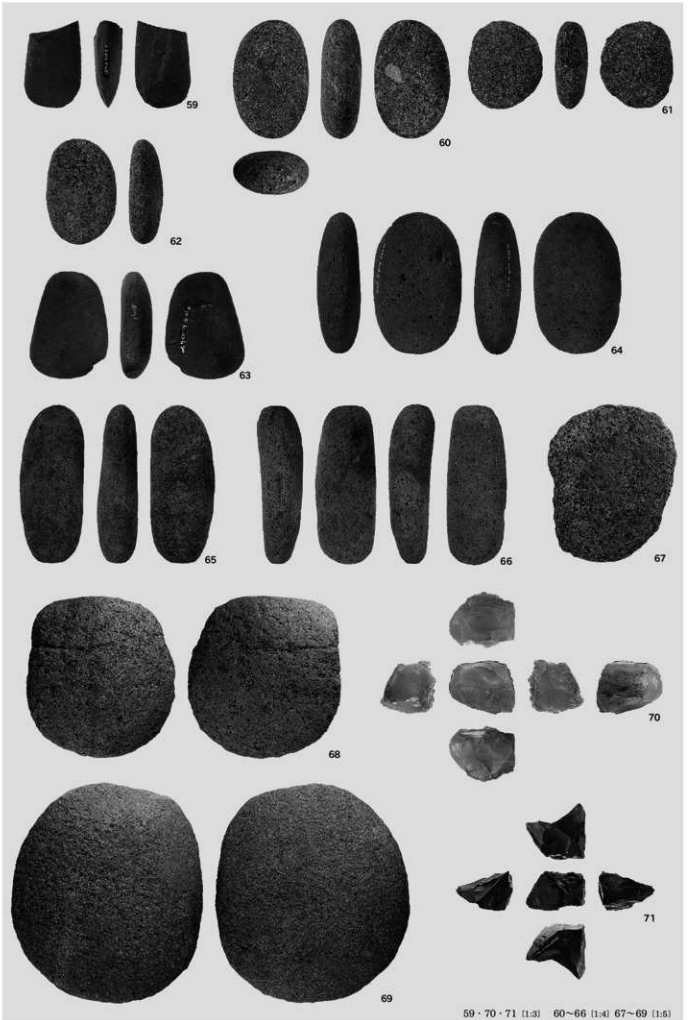
4・30以外　（1:3）
4・30　（1:4）


上層
1
2
3
下層（Ⅳ層直下）
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
5～8（2:3）　1・9～18（1:2）　4（1:3）　2・3（1:4）



19～21（1:2）　22～25（1:3）　26～36（1:4）　37・38（1:5）


39
41
42-1
42-2
42-3
40
42
下層（Ⅴ層）
43
44
45
46
47
48
49
50
53
51
52
54
57
56
55
58
43～45 (2:3)　46～55 (1:2)
40～42・56～58 (1:3)　39 (1:10)

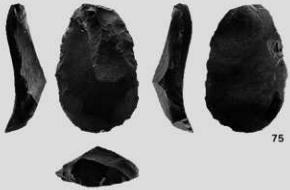


59・70・71 (1:3)　60～66 (1:4) 67～69 (1:5)

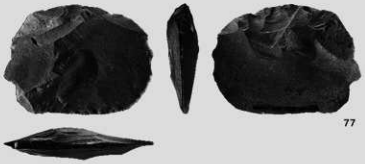
72

73

74


75

76


77

78

79

72～79 (1:2)

報告書抄録

ふりがな	おおさかうえみちいせき に・さるびたいいせき に
書名	大坂上道遺跡Ⅱ・猿額遺跡Ⅱ
副書名	一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第186集
編著者名	桐原雅史・斉藤準 村上章久・真壁鈴子（以上 株式会社 帆苅組） 千葉博俊・斉藤崇人・斉藤紀行（以上 パリノ・サーヴェイ株式会社） 鹿又喜隆（株式会社 加速器分析研究所）
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250（25）3981
発行年月日	西暦2008（平成20）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
大坂上道遺跡 おおさかうえみちいせき	新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字大坂上道西1827番地ほか にいがたけんひがしかんばらぐん あがまちおおあざにしあざおおさかうえみちにし	15385	33	37度40分46.864秒	139度25分47.377秒	20060427～20060811	上層2,378㎡ 下層705㎡	道路（一般国道49号揚川改良建設）
猿額遺跡 さるびたいいせき	新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字猿額中丸1849番地ほか にいがたけんひがしかんばらぐん あがまちおおあざにしあざさるびたいいせき	15385	36	37度40分46.849秒	139度25分47.024秒	20060821～20061130	上層1,680㎡ 下層1,680㎡	道路（一般国道49号揚川改良建設）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大坂上道遺跡	遺物散布地	縄文時代 平安時代	（上層） 西区；掘立柱建物1棟・竪穴状遺構1基・土坑13基・ピット2基・性格不明遺構1基・焼土3基 東区；掘立柱建物1棟・竪穴住居1軒・土坑6基 （下層） 西区；性格不明遺構3基 東区；集石1基	縄文中期初頭～前葉土器（深鉢） 縄文時代土製品（土偶・土器片円板） 石器（石鏃・石錐・不定形石器・箆状石器・打製石斧・磨製石斧・敲磨石類・石皿・砥石・石核・板状石器） 石製品（三角形岩板・不明石製品） 土師器・須恵器 平安時代石製品（石鈎：巡方） 中世珠洲焼き	平安時代の石製品（石鈎：巡方）は阿賀町で初出土。
猿額遺跡	遺物散布地	縄文時代	（上層） ピット2基 （下層：Ⅴ層直上） 焼土4基・焼土－炭化物集中1基・炭化物集中6基・集石土坑1基・土器集中地点1か所・遺物集中域1か所 （下層：Ⅴ層） 土坑6基・ピット98基・炭化物集中1基・土器集中地点1か所	旧石器（ナイフ形石器・掻器・削器・石斧等） 縄文前期前葉～末葉土器（深鉢） 石器（石鏃・石匙・石錐・不定形石器・箆状石器・磨製石斧・礫器・敲磨石類・石皿・台石・砥石・石核）	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第186集

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書Ⅱ

大坂上道遺跡Ⅱ・猿額遺跡Ⅱ

平成20年3月31日印刷
平成20年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市秋葉区金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986
URL　http://www.maibun.net

印刷・製本　長谷川印刷
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号
電話　025（233）0321

正誤表追加　2021年11月追加

頁	位置	誤	正
図版76	下から５段目	２０	２１
図版76	下から５段目	２１	２４
図版76	下から４段目	２２	２０
図版76	下から４段目	２３	２２
図版76	下から４段目	２４	２３

新潟県埋蔵文化財調査報告書第186集 大坂上遺遺跡・猿額遺跡正誤表

ページ	範囲	誤	正
例言	14	寺崎裕助	寺崎裕助
目次	E 石製品	34	35
目次	B グリッドの設定	48	49
目次	2 基本層序	50	49
挿図目次	第19図	49	50
図版目次	図版79	（Ⅳ層直下）	（Ⅳ層直下・Ⅴ層）
図版目次	図版81	猿額遺跡旧石器時代の石器	猿額遺跡旧石器時代の石器下層（Ⅳ層直下・Ⅴ層）
12	5行目	5つの山谷	5つの小谷
16	8行目	Ⅳ上層上面	Ⅳ層上面
16	30行目	P27（図版3・7・53）	P27（図版3・7）
19	14行目	石製品842点、	石製品841点、
19	15行目	石器689点、	石器687点
19	16行目	石器153点、	石器154点
19	23行目	「(3) 土器各説」	「3) 土器各説」
19	34行目	（以下底径とする）	（以下「底径」とする）
22	12行目	B1種（36～40）	B1種（36～39）
25	7行目	第1類（22～80）	第1類（22～76・79・80）
27	9行目	第Ⅰ群1類G種	第Ⅰ群1類F種
28	12行目	第5類（184～188）	第5類（184～186）
28	34行目	A類との類が多く、	A群との群が多く、
28	34行目	A類ではB種が多く、B・C・D類では	A群ではB種が多く、B・C・D群では
29	8行目	総数は842点で、	総数は841点で、
29	9行目	上層619点（西区567点、東区52点）、下層223点（西区122点、東区101点）	上層620点（西区567点、東区53点）、下層221点（西区120点、東区101点）

29 第2表 西区下層 誤

西区下層

	不定形石器	敲磨石類	石核	剥片類	合計
遺構内出土	0	1	0	7	8
遺構外出土	4	18	4	88	114
合 計	4	19	4	95	122

正

西区下層

	不定形石器	敲磨石類	石核	剥片類	合計
遺構内出土	0	1	0	7	8
遺構外出土	4	16	4	88	112
合 計	4	17	4	95	120

29 第2表 東区上層 誤

東区上層

	不定形石器	磨製石斧	敲磨石類	石核	未成品	剥片類	合計
遺構内出土	0	0	0	0	0	9	9
遺構外出土	4	4	1	6	1	27	43
合 計	4	4	1	6	1	36	52

正

東区上層

	不定形石器	磨製石斧	敲磨石類	石核	未成品	剥片類	合計
遺構内出土	0	0	0	0	0	9	9
遺構外出土	5	4	1	6	1	27	44
合 計	5	4	1	6	1	36	53

32	2行目	西区上層（図版23～28・	西区上層（図版23～29・
32	16～17行目	18～23	18～24
43	15行目	石皿	砥
44	21行目	寺崎	寺崎
51	14行目	1か所はⅤa層上面	1か所はⅤ層・Ⅴa層上面
63	7行目	計21点	計22点
71	脚注1）3行目	丸山遺跡	円山遺跡
73	大坂上遺遺跡 6	腰帯、石錘	腰帯石錘
74	8行目	江森正敏ほか 0000	江森正敏ほか 1950
74	8行目	『考古学雑誌』第36号	『考古学雑誌』第36巻
77	No.28・29・31	Ⅰ-1-A	Ⅰ-1-A1
77	No.37・38・39	改稿	Ⅰ-1-B1
79	No.112・113	Ⅰ-2-I	Ⅰ-2-I
80	No.133	改稿	Ⅰ-4
81	No.175	Ⅰ-4	Ⅰ-3
81	No.177	改稿	Ⅰ-1
84	No.16	Ⅱ-2-A	Ⅱ-2-C
図版22		土製品（土器片円盤）	土製品（土器片円板）